

# 中 尾 城 跡

—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅺ—

1989. 3

兵庫県教育委員会



丹波焼 擂鉢・德利・小壺、小瓶、備前焼 德利



丹波焼 壺・甕



調査前の全景



調査後の全景







三田市相野周辺と近畿自動車道



近畿自動車道と中尾城跡

## 序 文

兵庫県内において、昭和57年3月に『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』の調査報告書が刊行されて以来、中世城館の発掘調査も増えてきております。

近畿自動車道舞鶴線建設に先立ち、丹波地方の旧石器時代遺跡の調査に始まり、丹波と摂津においてそれぞれ中世山城の調査がなされました。

本書で報告する中尾城跡は、昭和56年分布調査において発見された山城ではありますが昭和61年の発掘調査において、丹波焼をはじめとする豊富な遺物が出土し、中世史像をよみがえらせるもので貴重なものとなりました。本書が、中世山城研究や中世土器研究に投ずる影響と今後の中世遺跡保存へ一つの示標となれば幸いです。

平成元年3月

兵庫県教育委員会

教育長 井野辰男

## 例 言

1. 本書は兵庫県三田市下相野字中尾に所在する中世山城、中尾城跡の発掘調査報告書である。日本道路公団近畿自動車道舞鶴線建設に伴い、昭和61年夏に兵庫県教育委員会が、発掘調査を実施した。なお、調査は社会教育・文化財課 埋蔵文化調査財係 岡崎正雄、山田清朝、山上雅弘が担当した。  
また、昭和62・63年度に兵庫県埋蔵文化財事務所にて整理事業を実施した。
2. 調査結果として中世山城、近世以降の炭燼1基と古代の土器群がある。なお、中世山城については全体の約4/5を発掘調査し、残りは路線外に保存されている。
3. 兵庫県教育委員会が近畿自動車道舞鶴線において調査をする2例目の中世山城であり、北垣聡一郎(兵庫県立兵庫工業高等学校)氏をはじめ、中世城郭研究者の方々には色々適切なご指導を戴きました。
4. 調査地区は、道路建設用STA. 52+20～STA. 53+20間とし、国土座標を求めG5 (X=-117.680, Y=75.460, H=T. P. 237.247m)を基準に調査を実施した。
5. 発掘作業は東海興業株式会社に委託し、また、航空測量については国際航業株式会社に委託し、作業の迅速かつ円滑化を企った。
6. 遺物の実測、清図は整理作業班で行い、遺物写真については森 昭氏に依頼した。なお、金属製品の保存処理については加古千恵子が兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
7. 遺物は中世以前の須恵器をA、中世土器をB、中世以後の土器をCとし、石製品をS、鉄製品をF、銅銭をMと分類し、数字にて個体色別を行っている。
8. 本書の執筆者及び執筆分担は以下の通りである。  
岡崎正雄 第1章, 第2章・1-4, 第4章, 第6章・1・3 (1・5), 第7章・1・5 (2)  
山田清朝 第3章, 第5章・1-7・10, 第6章・2 (1)・3 (3・4), 第7章・2・3  
山上雅弘 第1章, 第5章・8・9, 第6章・4, 第7章・4・5 (1)  
加古千恵子 第2章・5  
大下 明 第6章・2 (2)・3 (2)
9. 付載として、中近世の丹波焼について胎土分析を奈良教育大学 三辻利一教授、炭化種実の同定については笠原安夫・藤沢 浅両先生、炭化材の樹種同定については鳴倉巳三郎先生からそれぞれ玉稿を戴き、掲載させて戴いた。

また、石材の鑑定については神戸大学 後藤博彌教授に分析を依頼し、第6章第3節石材一覧表にまとめさせて戴いた。

10. なお、本書の編集は岡崎が行い、その責任がある。

11. 最後に、本書をまとめるに際し、多くの研究機関、各教育委員会ならび研究者、個人の方々のご指導・助言および協力を戴きました。ご芳名を記し、お礼と致します。

奈良国立文化財研究所、京都大学文学部考古学博物館、立命館大学、関西城郭研究会、日本中世城郭研究会、中世土器研究会、関西近世考古学研究会、愛知県陶磁資料館、日本あかりの博物館、兵庫県陶芸館、篠山町立歴史美術館、丹波古陶館、今田町陶の郷資料館、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会、広島県立埋蔵文化財センター、広島県立草戸千軒町遺跡調査研究所、財団法人愛媛県埋蔵文化財センター、愛媛県宮窪町教育委員会、三田市教育委員会、神戸市立博物館、兵庫県立歴史博物館、下相野地区、源 健男、八巻孝夫、村田修三、中井 均、前川 要、千田嘉博、三島正之、藤井善布、藤井尚夫、池田光男、池田誠、松岡 進、柴田龍司、斎藤慎一、藤井直正、川口宏海、藤本史子、小長谷正治、坪之内徹、小野正敏、松下正司、篠原芳秀、野口光比古、小清水啓子、伊藤 晃、宇垣匡雄、根木 修、井上喜久男、大槻 伸、市野弘之、石田陶春、二葉 滋、金箱正美、高嶋幸男、青木哲哉、高橋 学、東良 至、沢井 嘉、菱田哲郎、上川通夫、鈴木敏昭、工楽普通、喜谷美宣、森田 稔、西井逸男、藤村和雄、矢野哲男、村岡利雄、加藤 修 (順不同)

# 目 次

第1章 はじめに .....	1
第1節 近畿自動車道と中世山城の調査 .....	1
第2節 中世山城用語 .....	1
第3節 中尾城用語 .....	2
第2章 調査の経緯 .....	3
第1節 調査に至る経過 .....	3
第2節 調査の方法 .....	5
第3節 調査日誌 .....	8
第4節 整理作業 .....	11
第5節 保存処理作業 .....	12
第3章 遺跡の環境 .....	13
第1節 地理的環境 .....	13
第2節 歴史的環境 .....	13
第4章 土 層 .....	17
第5章 遺 構 .....	21
第1節 第1曲輪 .....	24
第2節 第2曲輪 .....	30
第3節 東第1腰曲輪 .....	36
第4節 東第2腰曲輪 .....	42
第5節 西腰曲輪 .....	43
第6節 堀切・土塁 .....	47
第7節 虎口 .....	50
第8節 周辺斜面 .....	50
第9節 炭 窯 .....	50

第10節 小 結 .....	52
<b>第6章 遺 物</b> .....	<b>53</b>
第1節 遺物の出土状況 .....	53
第2節 中世以前の遺物 .....	63
1. 須恵器 .....	63
2. 石 器 .....	64
第3節 中世の遺物 .....	65
1. 土 器 .....	65
2. 石製品 .....	92
3. 鉄製品 .....	103
4. 銅 銭 .....	116
5. 炭化遺物 .....	118
第4節 中世以後の遺物 .....	121
<b>第7章 まとめ</b> .....	<b>123</b>
第1節 丹波焼について .....	123
1. 中世丹波焼 .....	123
2. 器種と法量 .....	123
3. 編年 .....	124
4. 陶土、胎土 .....	128
5. 消費 .....	131
第2節 火打金について .....	136
1. 火打金について .....	136
2. 文献資料の検討 .....	136
3. 絵画資料の検討 .....	137
4. 考古資料の検討 .....	139
5. まとめ .....	150
第3節 中尾城跡の復原について .....	162
第4節 山城の構造について .....	168
1. 山城研究について .....	168
2. 中尾城跡の構造 .....	168
3. 城主について .....	171

4. 三田市内の城郭 .....	172
5. 兵庫県の山城発掘調査例 .....	176
6. 総括 .....	178
第5節 展望 .....	181
1. 中尾城跡の構築過程 .....	181
2. 山城研究へ .....	186

## 付 載

1. 中尾城跡出土中、近世陶器の胎土分析と産地推定 .....	1
2. 中尾城跡から出土した炭火種実の同定 .....	7
3. 中尾城跡から出土した植物炭化物の種類 .....	33

## 図 版 目 次

- 巻首図版 1 中尾城跡出土中世土器  
巻首図版 2 中尾城跡航空写真(1)  
巻首図版 3 中尾城跡航空写真(2)  
巻首図版 4 中尾城跡周辺の航空写真
- 図版 1 調査前の中尾城跡  
図版 2 調査後の中尾城跡  
図版 3 中尾城跡からの眺望  
図版 4 発掘調査風景  
図版 5 トレンチと土層  
図版 6 トレンチと遺物  
図版 7 曲輪全景  
図版 8 南土塁・堀切からの曲輪近景  
図版 9 北堀切からの曲輪近景  
図版10 第1曲輪 溝  
図版11 第1曲輪 土壌 1、2  
図版12 第1曲輪 各遺構と遺物  
図版13 第2曲輪 建物 3  
図版14 第2曲輪 土壌 1  
図版15 第2曲輪 建物 4 と溝  
図版16 虎口と礎石  
図版17 東第1腰曲輪検出状況  
図版18 東第1腰曲輪の遺構  
図版19 東第1腰曲輪 各土壌  
図版20 虎口と東第2腰曲輪  
図版21 西腰曲輪の遺構  
図版22 西腰曲輪 土壌 1(1)  
図版23 西腰曲輪 土壌 1(2)  
図版24 南堀切・土塁(1)  
図版25 南堀切・土塁(2)  
図版26 北堀切・土塁



- 図版27 第2曲輪・東第2腰曲輪の整地状況
- 図版28 炭窯(1)
- 図版29 炭窯(2)
- 図版30 中世土器の組成
- 図版31 丹波焼 壺(1)
- 図版32 丹波焼 壺(2)
- 図版33 丹波焼 壺(3)
- 図版34 丹波焼 壺(4)
- 図版35 丹波焼 甕(1)
- 図版36 丹波焼 甕(2)
- 図版37 丹波焼 甕(3)
- 図版38 丹波焼 甕(4)
- 図版39 丹波焼 甕(5)
- 図版40 丹波焼 德利・小瓶
- 図版41 備前焼 德利
- 図版42 丹波焼 小甕、備前焼 壺
- 図版43 丹波焼 播鉢(1)
- 図版44 丹波焼 播鉢(2)
- 図版45 丹波焼 播鉢(3)・捏鉢(1)
- 図版46 丹波焼 捏鉢(2)・播鉢(4)
- 図版47 丹波焼 手印(1)
- 図版48 丹波焼 手印(2)
- 図版49 瀬戸・美濃焼 天目茶碗
- 図版50 中国産磁器 皿・碗、瀬戸・美濃焼 皿
- 図版51 瀬戸・美濃焼 皿、石製品 石臼(茶磨)
- 図版52 石製品 石臼(粉挽き臼)
- 図版53 石製品 礎石・石敷・基石・砥石
- 図版54 中世以前・中世以後の遺物
- 図版55 銅銭
- 図版56 鉄製品 釘
- 図版57 鉄製品 鎌・鎌・火箸・燭止・火打金・鍋
- 図版58 炭化種実

## 挿 図 目 次

挿図 1	中尾城跡位置図	xi
挿図 2	近畿自道車道と文化財	3
挿図 3	調査位置図	4
挿図 4	調査地区割付図	6
挿図 5	確認調査トレンチと全面調査地区	7
挿図 6	鉄製品の減圧樹脂含浸	12
挿図 7	銅製品の減圧樹脂含浸	12
挿図 8	中尾城跡周辺の主要遺跡	14
挿図 9	中尾城跡立地三次元図	15
挿図 10	トレンチ設定図	17
挿図 11	2・4トレンチ土層柱状図	18
挿図 12	南地区確認調査トレンチ土層柱状図	19
挿図 13	中尾城跡の立地と字限	20
挿図 14	中尾城跡三次元図	21
挿図 15	調査前地形測量図(上)、調査後地形測量図(下)	22
挿図 16	中尾城跡横断面・縦断面	23
挿図 17	第1曲輪平面図	24
挿図 18	第1曲輪中世土器出土状況	25
挿図 19	第1曲輪鉄製品出土状況	26
挿図 20	第1曲輪溝遺物出土状況	26
挿図 21	第1曲輪土壌 1	27
挿図 22	第1曲輪土壌 2	28
挿図 23	第1曲輪土壌 3	29
挿図 24	第1曲輪土壌 3 出土鉄製品	29
挿図 25	第2曲輪平面図	30
挿図 26	第2曲輪中世土器出土状況	31
挿図 27	第2曲輪鉄製品出土状況	32
挿図 28	第2曲輪建物 3	32
挿図 29	第2曲輪土壌 1	33
挿図 30	第2曲輪建物 4	34

挿図31	第2曲輪土壌2	34
挿図32	第2曲輪建物4出土鉄製品	35
挿図33	虎口礎石出土状態	36
挿図34	東第1腰曲輪	37
挿図35	東第1腰曲輪遺構配置図	38
挿図36	東第1腰曲輪中世土器出土状況	39
挿図37	東第1腰曲輪鉄製品出土状況	40
挿図38	東第1腰曲輪土壌2	40
挿図39	東第1腰曲輪土壌6	40
挿図40	東第1腰曲輪土壌4	41
挿図41	東第1腰曲輪土壌5	41
挿図42	東第2腰曲輪	42
挿図43	西腰曲輪平面図	43
挿図44	西腰曲輪土壌3	43
挿図45	西腰曲輪中世土器出土状況	44
挿図46	西腰曲輪鉄製品出土状況	45
挿図47	西腰曲輪土壌1出土鉄製品	45
挿図48	西腰曲輪土壌1	46
挿図49	南土塁・堀切断面図	48
挿図50	北土塁断面図	49
挿図51	北側尾根続き土層断面	49
挿図52	虎口	50
挿図53	炭窯	51
挿図54	中世以前、中世以後の土器出土状況	53
挿図55	遺物のドットマップ	54
挿図56	石製品(石臼・茶磨)の出土状況	55
挿図57	丹波・備前焼 壺・小甕出土状況	56
挿図58	丹波焼 壺出土状況	57
挿図59	丹波焼 甕出土状況	58
挿図60	丹波焼 小瓶・小甕出土状況	59
挿図61	徳利・碗・皿類出土状況	60
挿図62	丹波焼 播鉢出土状況1	61
挿図63	丹波焼 播鉢出土状況2	62

挿図64	須惠器	64
挿図65	須惠器	64
挿図66	石罌	64
挿図67	中尾城跡出土土器 器種分類図	66
挿図68	丹波焼の分類模式図	67
挿図69	丹波焼 壺形態変化	68
挿図70	丹波焼 甕形態変化	69
挿図71	丹波焼 小甕形態変化	70
挿図72	丹波焼 播鉢形態変化	71
挿図73	丹波焼 壺	72
挿図74	手印	72
挿図75	丹波・備前焼 壺	78
挿図76	丹波焼 壺	79
挿図77	丹波焼 壺	80
挿図78	丹波・備前焼 壺	81
挿図79	丹波焼 甕	82
挿図80	丹波焼 甕	83
挿図81	丹波焼 甕	84
挿図82	丹波焼 壺・甕	85
挿図83	丹波・備前焼 小瓶・德利	86
挿図84	丹波焼, 瀬戸・美濃焼, 中国産磁器, 土師器 小甕・皿・天目茶碗・鍋他	87
挿図85	丹波焼 播鉢	88
挿図86	丹波焼 播鉢	89
挿図87	丹波焼 播鉢	90
挿図88	丹波焼 播鉢・捏鉢	91
挿図89	石白(1)	93
挿図90	石白(2)	94
挿図91	石白(3)	95
挿図92	石白(4)	98
挿図93	石白(5)	99
挿図94	石白(6)	100
挿図95	砥石	101
挿図96	礎石	101

挿図97	碁石	101
挿図98	鉄製品出土状況	103
挿図99	釘(1)	104
挿図100	釘(2)	106
挿図101	釘(3)	108
挿図102	鎌・火打金・鏝・火箸・燭止他	111
挿図103	鍋他	112
挿図104	かすがい形 (B類) 細部各称	114
挿図105	銅銭	117
挿図106	キセル	121
挿図107	中世以後の土器、土製品	122
挿図108	丹波焼集成図	129-130
挿図109	窯跡群と粘土採掘地	131
挿図110	丹波焼の消費地	132
挿図111	見近島城跡出土火打金	142
挿図112	火打金A類細分型式	144
挿図113	遺構配置図1 (溝・段)	164
挿図114	遺構配置図2 (土壇)	164
挿図115	遺構配置図3 (柱穴)	166
挿図116	中尾城跡建物遺構復原図	166
挿図117	釜屋城 (三田市貴志)	173
挿図118	三田市域の中世城館の分布	174
挿図119	大原城 (三田市川除)	175
挿図120	森本城 (三田市東本庄)	175
挿図121	東野上城 (三田市東野上)	176
挿図122	壘岡山城 (三田市壘本)	176
挿図123	第1曲輪斜面断面図	181
挿図124	東第1腰曲輪断面図	182
挿図125	中尾城築城過程 (縦断面)	184
挿図126	中尾城築城過程 (断面図)	185

挿図97	基石	101
挿図98	鉄製品出土状況	103
挿図99	釘(1)	104
挿図100	釘(2)	106
挿図101	釘(3)	108
挿図102	鎌・火打金・鋸・火箸・燭止他	111
挿図103	鍋他	112
挿図104	かすがい形 (B類) 細部各称	114
挿図105	銅銭	117
挿図106	キセル	121
挿図107	中世以後の土器、土製品	122
挿図108	丹波焼集成図	129・130
挿図109	窯跡群と粘土採掘地	131
挿図110	丹波焼の消費地	132
挿図111	見近島城跡出土火打金	142
挿図112	火打金A類細分型式	144
挿図113	遺構配置図1 (溝・段)	164
挿図114	遺構配置図2 (土塼)	164
挿図115	遺構配置図3 (柱穴)	166
挿図116	中尾城跡建物遺構復原図	166
挿図117	釜屋城 (三田市食志)	173
挿図118	三田市域の中世城館の分布	174
挿図119	大原城 (三田市川除)	175
挿図120	森本城 (三田市東本庄)	175
挿図121	東野上城 (三田市東野上)	176
挿図122	藍岡山城 (三田市藍本)	176
挿図123	第1曲輪斜断面図	181
挿図124	東第1腰曲輪断面図	182
挿図125	中尾城築城過程 (縦断面)	184
挿図126	中尾城築城過程 (断面図)	185

## 表 目 次

第 1 表	中世土器一覧表 .....	74・75
第 2 表	石臼一覧表 .....	96
第 3 表	石器石材一覧表 .....	102
第 4 表	鉄釘一覧表(1) .....	105
第 5 表	鉄釘一覧表(2) .....	107
第 6 表	鉄釘一覧表(3) .....	109
第 7 表	釘の法量 .....	110
第 8 表	銅銭の種類と顔度 .....	116
第 9 表	炭化米の法量 .....	119
第10表	炭化種実一覧表 .....	120
第11表	丹波焼器種形態表 .....	125
第12表	丹波焼 壺・甕法量表 .....	126
第13表	丹波焼 播鉢法量表 .....	127
第14表	丹波焼出土一覧表 .....	134
第15表	中世絵画資料にみる火打金 .....	138
第16表	火打金の大きさ .....	140
第17表	B類火打金の大きさ .....	141
第18表	B類火打金消長表 .....	142
第19表	A-a・b類の火打金の大きさ .....	145
第20表	A-c類の火打金の大きさ .....	146
第21表	A-d・e類の火打金の大きさ .....	146
第22表	火打金A-a類消長表 .....	147
第23表	火打金A-b類消長表 .....	147
第24表	火打金A-c類消長表 .....	148
第25表	火打金A-d類消長表 .....	149
第26表	火打金A-e類消長表 .....	149
第27表	古代・中世火打金出土遺跡一覧表 .....	154-158
第28表	兵庫県山城発掘調査一覧表 .....	178



挿図1 中尾城跡位置図



# 第1章 はじめに

## 第1節 近畿自動車道と中世山城の調査

近畿自動車道舞鶴線建設に伴い、数多くの遺跡が調査される中で、中世城館の調査が、氷上郡春日町河津館跡<sup>1)</sup>、多紀郡西紀町内場山城跡<sup>2)</sup>、丹南町初田館跡<sup>3)</sup>と本報告の三田市下相野中尾城跡がある。中世山城の調査としては、二例目であり、兵庫県下においても、全面調査を含めた大規模な中世山城の調査例が増加する傾向を認める。ここで、中世山城の調査の基準となる報告をめざす一方、基本的な用語も次節において呈示するものである。

## 第2節 中世山城用語

城郭に現在使われている用語の多くは、近世城郭で用いられた用語を中世城郭にも使用している場合が多く、必ずしも中世城郭の遺構の機能に則していない場合がある。さらに、中世城郭においてこれらの用語が使われたことは確実であるとはいえない。そして、城郭用語には類似するものや、境界の曖昧な用語が多い。そこで本報告で用いる城郭用語については機能に則して以下のように定義しておきたい。

**山城** 中世城郭では居館に対応する用語と言われている。しかし、低丘陵上に存在する城館とどのように線引きをするか、現在でも曖昧なところが多い。そこで今回は、確実に山岳に立地するもの他、曖昧なものでも、通称「〇〇山城」と呼ばれるもの、低くても、丘陵上に立地するものはすべて山城の範囲に含めて考えることにした。

山城の遺構については、「曲輪があることが必要条件、堰があることが十分条件である。」と村田修三が述べたように、曲輪とそれを防御する何らかの施設（堰・堀切の他、土塁・腰曲輪・明らかに防御された虎口など。）があるものを確実な山城遺構と考えたい。

**曲輪** 「城郭遺構で防御された削平地をさす。」と村田修三が定義している。城内で居住したり、活動するための空間である。山城で確実に曲輪と認めるには、前述のように防御施設によって守られているものをいうことにしたい。腰曲輪などの防御曲輪はそれ自身が防御施設の1種と考える。

**土塁** 土を盛って土手を作り、曲輪を取り巻いたり、出入口を塞ぐ遮蔽物を作っているもの、防塁・阻塞（堀と土塁、或いは土塁のみで防御障地を築いた遺構）を築いているものも含めて考える。

堀切 尾根を横断して掘り切り、進行を妨げる堰をさす。

腰曲輪 主となる曲輪（居住空間・貯蔵空間など防衛以外の目的で作られている曲輪）の斜面の1段下に設けられ、防衛を目的に作られた曲輪。周囲を取り巻くものは帯曲輪と呼ばれる。

虎口 城郭の出入り口、曲輪と曲輪の出入り口も含める。但し、曲輪内の通路までは含まないが出入り口に付属する施設は総て虎口と呼ぶこととする。

\*村田論文1984—「中世の城館」『講座・日本技術の社会史 第6巻 土木』日本評論社

### 第3節 中尾城用語

中尾城の各部の名称・及び郭遺構の範囲は次の様にする。

1. 中尾城は「中世城郭」で、平地から離れた丘陵に立地し、尾根上に設けられた2段の中心的な曲輪を土塁・堀切・腰曲輪で防衛している。このことから「山城」と考えられる。
2. 曲輪の名称は「第1曲輪」・「第2曲輪」・「東第1腰曲輪」・「東第2腰曲輪」・「西腰曲輪」・「北堀切」・「北土塁」・「南堀切」・「南土塁」・「虎口」とする。
3. 斜面は、第1曲輪両側を「第1曲輪東斜面」・「第1曲輪西斜面」、腰曲輪は例えば東第1腰曲輪では「東第1腰曲輪斜面」と呼ぶ。以下同様にそれぞれのの上側にある曲輪の名称を付して呼称する。但し斜面の全体を指す時は、「東斜面」・「西斜面」とする。
4. 土塁・堀切の範囲は、土塁を堀切側の旧地形（旧地表面まで）を除いた部分で土を盛った部分から、曲輪側の曲輪平面との境までを含めた範囲を呼ぶ。
5. 堀切は土塁との境から、城外の傾斜変換点までを呼ぶ。
6. 虎口は、東第2腰曲輪から第2曲輪へ登る通路の登り口から、第2曲輪の入口までをいう。但し、第2曲輪の入り口部分は北側に土塁状の遮蔽物があって、入り口を防衛する形になっている。従って、登り口から土塁状のもの、それに沿っている通路までを含めて「虎口」と呼ぶことにする。また、当然中尾城でも他に城内への出入り口・曲輪と曲輪との出入り口が存在したと考えられるが明らかにできるものは他に存在しないため、明確に呼称するのはこの部分に限定しておく。

#### 註

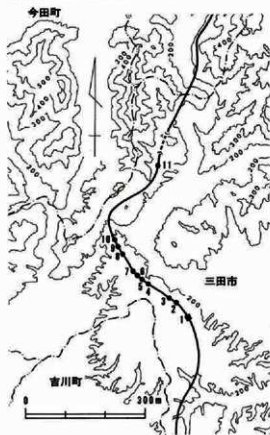
- 1) 轉老拓治他『河津館跡』兵庫県教育委員会 1987
- 2) 1985年 兵庫県教育委員会が発掘調査を実施。  
岡崎正雄「内場山城跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報一昭和60年度一』  
兵庫県教育委員会 1988
- 3) 1986年 兵庫県教育委員会が発掘調査を実施。

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経過

近畿自動車道舞鶴線（兵庫県美濃郡吉川町～京都府舞鶴市）建設にかかわり、日本道路公団大阪支社と兵庫県教育委員会との間に、吉川町から氷上都市島町間の埋蔵文化財の保存について協議が開始され、昭和54・55年には遺跡の周知徹底を企ため、計画路線において県教育委員会は踏査可能な範囲で分布調査を実施した。

三田市西相野～上内神間6.5km、路線センター枕No.27～89間では、昭和55年3月に分布調査を行った。樹木が繁茂し未踏査箇所もあるが、20地点で11箇所の遺跡を掘む。平安時代の相野須恵器窯跡群や山城跡などがある。



挿図2 近畿自動車道と文化財

なかでも、No.20地点とした三田市下相野字中尾の山林根上に曲輪（平担面）・土塁・堀切などの遺構を認め、中世丹波焼、瀬戸・美濃焼天目茶碗等遺物を採集した。ここで初めて、中世山城・中尾城跡と周知され、遺跡保存の対象となった。

分布調査結果をもとに、日本道路公団大阪支社と遺跡保存協議の結果、用地買収の遅れや共用開始時期が迫るなどから、基本的に路線変更が不可能な箇所については記録保存となった。三田地区では、昭和59年度、森ノ尾窯跡（3）から順次発掘調査を開始し、昭和60年度、高川古墳群（11）、木戸窯跡（2）、西谷池1・2号窯跡（5・6）、そして、遺物散布地の確認調査を行い、昭和61年度、寄合谷窯跡（4）、中池ノ内窯跡（7）、向上・古城1・2号窯跡（8）、中尾城跡（1）、古城1・5号窯跡（9）、最後に古城山1号窯跡（10）の調査で終る。

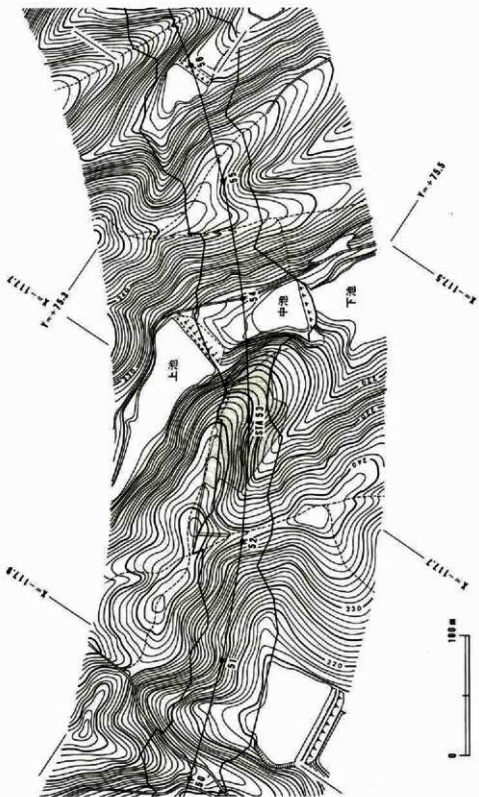


圖 3 圖 3 圖 3 圖 3

## 第2節 調査の方法

分布調査時に発見された中尾城跡は、山林尾根上の曲輪・土塁に中世丹波焼壺・甕9点、瀬戸・美濃焼天目茶碗2点、斜面及び谷底近くに丹波焼甕1点が採集されており、その採集範囲が広い。

中世山城に対する全城を対象とする調査は県下では珍しく、近畿自動車道舞鶴線では山城の2/5約16,000㎡を対象とした多紀郡西紀町内場山城跡がある。中尾城跡は内場山城跡と異って文献も無く、周知もされていなかった城跡で、調査範囲の限定は難しかった。兵庫県下の城館調査等の指導を賜っている北垣聰一郎氏には、現地にて指導を戴き、山城は尾根を堀切で切断した簡単な構造であるとの指摘を受け、とりあえず山城調査範囲を路線STA. 52+20～STA. 53+20の100m間とした(挿図3)。

中尾城跡は買収の遅れで、ようやく昭和61年春に立木伐採除去や用地境界明示などの諸条件を付滞し、6月から発掘調査を開始した。当初、面積4,900㎡を対象とし、地権者の立木伐採後、その除去作業から県教育委員会が、東海興業株式会社に発掘作業委託(1日作業員30～50人)し、調査を開始した。なお、路線外に曲輪が保存される部分もあるため、地権者(沢井 嘉氏)の協力も得て、山城全城を対象に国際航業株式会社に航空写真測量図化作業委託し、調査の迅速化・正確化を企むため山城の復原を行った。

### 調査の方法

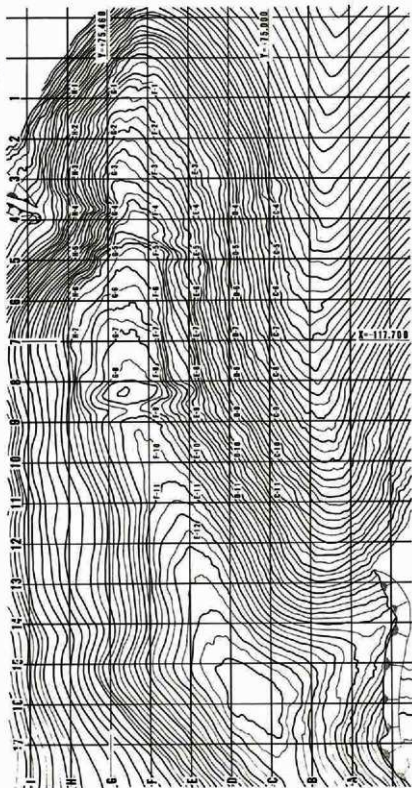
調査の範囲をSTA. 52+20～STA. 53+20に限定し調査を開始するが、山城の立地が尾根の頂上にないため、頂上附近については伐採後踏査を続け、1部残地として保存される地区もあるが、更に2m幅のトレンチをT字形に延べ80m設け、確認調査を実施した。結果、遺構・遺物が存在しないため、面積4,900㎡の範囲に限定して調査を実施する(挿図5)。

調査地区については、挿図4のように10×10mグリッドで分割し、各々アルファベットと数字で組合せ、例えばG5というように地区名を被せた。各地区の南西隅を名称とし、G7は国土座標X=-117,700, Y=+75,460に位置する。

ところで、分布調査時に遺物が多く散見されたことや表土腐植土層も浅いため、伐採後の除根については、慎重に配慮し、行った。そして、山城全城の土層を確認するため、2m幅のトレンチを南北83m、東西51mと55mの計3本設定し、それぞれで遺物・遺構を確認した。山城の遺構は土塁・堀切で尾根を切断し、曲輪を二段に設け、更に東西に腰曲輪を造り出す。谷部では近世の炭窯(D-4区)1基を調査している。また、F-3区のトレンチ調査を中心に、奈良時代の須恵器杯などを発見したため、少し北側に調査区を広げた。

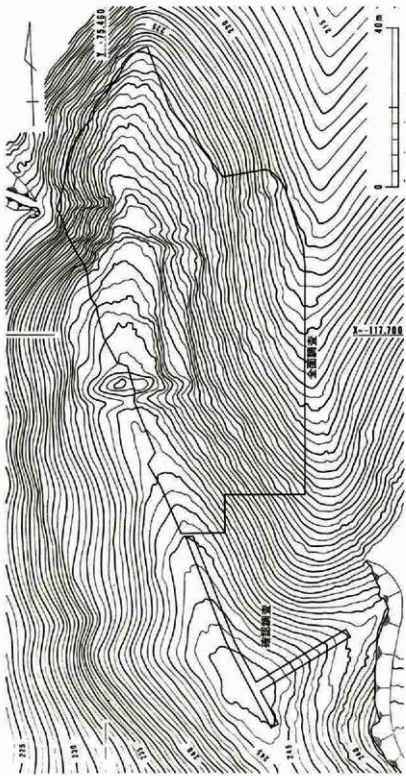
最後に、中尾城跡は曲輪・土塁・堀切という中世山城の各遺構と多くの中世土器を伴出し、

確 真 方 圖  
之 基 之



神圖 4 調查地區新竹圖





黒石高原トレンチと全通湖地区

遺物ドットマップ図を作製し、取り上げを行う。そして、写真測量及び細部測量後調査を終了したが、路線外に曲輪・土塁堀切の一部が保存されるのみで、調査地区は削平消滅してしまったが、路線外に保存される遺構は地権者沢井嘉氏の協力で、形状を残している。

#### 発掘調査の組織

事業主体 兵庫県教育委員会

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

調査体制 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係

調査員 主査 岡崎正雄・技術職員 山田清朝・技術職員 山上雅弘

調査補助員 奥野和宏、吉井秀夫・福勢千鶴子（京都大学）、三原慎吾（同志社大学）、水嶋正徳・足立倫子（関西大学）、畑 智幸（早稲田大学）、橋本智子、西本寿子

整理作業員 近藤昭子、上田和子、上田愛子、中前千里、廣瀬美鈴、山田ますえ、真狩智佐子、中沢さゆり、酒井和彦、橋本文子、久下富美子、佐竹米子、太治 恵、泉本しのぶ、上田幸江

発掘調査作業委託 東海興業株式会社

航空写真測量図化作業委託 国際航業株式会社

### 第3節 発掘調査日誌

6月2日から作業委託を開始するが、調査地区の確定に地権者との若干問題解決に時間を要し、更に路線用地境界明示など追加作業を日本道路公団が実施するなど、多少の準備期間が必要であった。また、地権者による立木伐採後の伐木除去作業に手間取り、ようやく6月25日に調査前の地形測量図化のためヘリコプターによる写真撮影を実施した。

6月26日(木) 早くも第1曲輪表土腐植土層から、丹波焼播鉢・壺・甕類が出土する。

6月28日(土) 午後雨のため作業は中止する。

6月30日(日) 梅雨空の下、表土層除去を継続する。

7月1日(火) 第1・2曲輪や東斜面から丹波焼や瀬戸・美濃焼の天目茶碗が出土する。

7月2日(水) 東斜面E8～E12や北堀切の北側での遺物多し。兵庫県開発公社担当官来踏。

7月3日(木) 調査地区の南に幅2mの確認調査トレンチをL字型に30mと60mの2本設ける。

7月4日(金) 本日で表土除去作業を終了する。G5区で炭窯1基を発見。国際航業によるスポット写真の再撮影を行う。

7月7日(月) 先週で表土・腐植土の除去を終え、旧表土以下の土層推積を掘むため、幅2mのトレンチを設定する（1～4T、挿図8）。第1・2曲輪に設けた1TにてF6区で、丹波焼、



瀬戸・美濃焼灰釉皿、中国産白磁皿、鉄製釘が纏まって出土した。4 Tでも丹波焼播鉢が纏まっている。

7月8日(火) 4 Tの丹波焼は溝出土である。第1曲輪の1 Tで銅銭が7枚出土、C2・C3区で奈良時代の須恵器が出土し、山城下層の遺構も検討する。航測の素図も仕上る。

7月9日(水) 本日より、第1曲輪の全面調査を始め、除根に難渋する。東第1腰曲輪でも遺構検出を始め、より東の斜面から弥生時代の石甌を採集する。

7月10日(木) 豪雨のため作業は中止。

7月11日(金) 第1曲輪、東第1腰曲輪の精査を行い、遺物出土状況の写真撮影を行う。

7月14日(月) 第1曲輪で溝、柱穴、土壌を検出し、土層際に土器を多く発見する。東第1腰曲輪の斜面崩落堆積が厚く、旧地形復原に手間取る。4時過、にわか雨にて作業中止する。

7月15日(火) 第1曲輪、溝の続きに丹波焼が多く出土、他地区の表土剥ぎを行い、それぞれ溝、柱穴、焼土を検出する。また、東第1腰曲輪の基底部を掘る。

7月15日(火) 第1・2曲輪で引き続き、表土層を剥ぎ、それぞれ溝、柱穴、焼土を検出する。また、東第1腰曲輪の基底を掘る。

7月17日(水) ヘルトコンベアーの移動。第1・2曲輪、東第2腰曲輪の北土層下の基底部を検出し、南土層・堀切の精査を続ける。

7月18日(木) 第1・2曲輪間の段部分の土層図を作製し、各地区の遺物ドットマップを継続する。根株除去に手間取る。

7月21日(日)・22日(火) 集中豪雨にて、室内で出土遺物整理作業を行う。

7月23日(水) ようやく雨が止む。第2曲輪で遺物の集中をみる。西腰曲輪斜面及び北堀切も精査を開始する。なお、第1・2曲輪写真撮影。

7月24日(木) 西腰曲輪、北堀切からも丹波焼、鉄製品が出土する。土層図を作製する。京都大学五十川、養田助手見学。

7月25日(金) 第1・2曲輪の遺物ドットマップを完成させる。土層図を作製し、腰曲輪の削平と盛土の関係について検討を行う。

7月26日(土) 西腰曲輪周辺の遺物ドットマップを行い、北調査区を壊る。

7月28日(月) 非常に暑い一日で、しかも作業員が少くなり、斜面の掘削の速度が落ちる。南堀切の検討と第1・2曲輪の地形測量を行う。

7月29日(火) 第1曲輪の遺構再精査を開始し、平板にて遺構図を作製する。第2曲輪の土層図の完成をまって畦を除去する。遺物多し。また、北堀切の土層図完成。

7月30日(水) 作業員少く、第1・2曲輪及び腰曲輪の遺構精査を行い、各遺構を掘る。北調査区にて須恵器杯3点出土。財団法人辰馬考古資料館長 高井悌三郎先生見学。午後、国際航業と日本道路公団三田工事事務所と三者で立会い、航空測量の補測量調査を行う。

7月31日(木) 山城下の中池の埋立てにより、駐車場と進入道路及び階段の整備を行う。第1曲輪は溝1の調査が終わり、柱穴としている遺構群の性格を検討する。第2曲輪は遺物のドットマップを続け、東の段の焼土他の遺構を検討する。

8月1日(金) 第1曲輪で土壌1を検出し、西腰曲輪の地形測量(コンター図)を行う。第1・2曲輪遺物ドットマップを継続する。

8月4日(日) 本日から岡崎、山上両名と補助員のスタッフに加え山田が加わり、体制を整える。また、作業も新しい体制を整え、後半に挑む。東第1曲輪の壁溝を掘る。第1曲輪は溝、土壌の土層図及び遺物出土状況図を作製。

8月5日(火) 第1・2曲輪の東半の遺構を精査する。番列等施設は検出できず。東第1腰曲輪で土壌、溝を掘る。第1・2曲輪の段の精査を行い虎口を掘る。

8月6日(水) 東第1腰曲輪の土壌1～5を掘り、備前焼徳利を発見。

8月7日(木) 東第1腰曲輪で土壌の土層図の作製と遺物を実測後取り上げを行う。

8月8日(金) 東第1腰曲輪では土壌を掘り、第2曲輪では土壌1、建物1を掘る。西腰曲輪でも土壌1・2を掘削する。

8月11日(日) 第2曲輪、東西の腰曲輪を中心に遺構精査及び実測を行う。西腰曲輪土壌1について、土層を検討するに丹波焼大甕、石臼などと炭化種実が多く出土し、廃棄の状況が推測できる。

8月12日(火) 昨日の続きで、各遺構について検討を加える。東腰曲輪について盛土を断割り、土層推積を確認する。西腰曲輪土壌1は遺物が多く、特に炭化米が多く、精査に時間を要する。本日に盆休みとなるため、シートにて養生し、日本道路公団の工事用道路も午後4時にて通行止めとなるため、早目に作業を終了する。

8月18日(日) 盆明けにて西腰曲輪土壌1の精査、実測から作業を開始する。東第1・2腰曲輪間の畦除去と第2曲輪下段の断割りを行う。木曜日予定の空測まで頑張る。

8月19日(火) 昨日から始めた東斜面の清掃とベルトコンベアーの撤去移動を併行させ、掘削を点検する。他の曲輪は遺構細部の実測を継続する。

8月20日(水) 夕方までかかり、なんとか清掃を完了させる。

8月21日(木) 曇、午前中ヘリコプターによる空中写真測量を行い、午後、撮影用機を移動させながら遺構写真を補助的に撮影する。又、堀切と炭窯の写真撮影も行う。

8月22日(金) 南北の土塁の積み方を観察するため、断割りを行う。地山と旧表土が明確で版築状の盛土整地の状況がわかる。炭窯の細部実測。

8月23日(土) 土塁の写真と実測を完了させ、第1曲輪で当初柱穴23としていたものが、地区境界線まで延び、土壌3となる。遺物が多く、実測・精査を繰り返す。炭窯の実測。また、国際航業と連絡をとり、写真の仕上りを確認する。

8月25日(月) 第2曲輪と東隈曲輪の断割りを行い、削平と盛土の状況を把握する。第1曲輪では溝などの細部実測を行い、最後の詰を行う。

8月26日(火) 土塁他の断割り作業を完了する。細部の図化作業を続ける。北垣先生と関西城郭研究会 源氏来跡し見学される。

8月27日(水) 曇一時雨と天候が悪いが、午前11時から現地説明会を行う。下相野地区の協力を得て、下相野公民館において遺跡調査の概要説明と遺物見学を行い、引き続きマイクロバスの送迎にて現地見学会を行う。参加者は県外からの見学者も含め110名を超した。午後2時過ぎ、終了。

8月28日(木) 第1曲輪土壌3の再々精査と虎口の礎石取り上げ及び、炭窯の細部調査などを行い、発掘調査を完了させる。

8月29日(金) 午後、東海興業株式会社、日本道路公団三田工事事務所とそれぞれ、調査地区の管理引継を行い、中尾城跡発掘作業委託事業の現地での作業を終了した。

## 第4節 整理作業

昭和61年夏の発掘調査において中尾城跡から出土した遺物（遺物整理箱64箱の土器・石器と金属器多数）について、昭和62・63年度に兵庫県教育委員会は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町）において整理作業を実施した。

整理作業は水洗→ネーミング→接合・復原→実測→拓本→写真→トレース→レイアウトの各工程を経て原稿執筆→印刷→報告書刊行となる。水洗は昭和61年の現場事務所で済ませ、一部接合を現地説明会用に行ったものを除き、ネーミング作業から実施した。

写真については写真家森 昭氏に200カット分を委託し実施した。

遺構図の整理も併せ、中尾城跡整理班にて報告書刊行に至る。

### 整理作業の組織

事業主体 兵庫県教育委員会

整理作業主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

整理作業体制 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係・(整理担当)

### 整理作業班

調査員 主査 岡崎正雄・技術職員 山田清朝・技術職員 山上雅弘（但し、昭和62年10月から財団法人大阪府埋蔵文化財協会へ出向）

補助員 高島知恵子、出田恵子、松本 陸、小川（栗山）美奈、下釜豊美、早川亜紀子、和田寿佐子、平林育子、吉田主子

## 第5節 保存処理作業

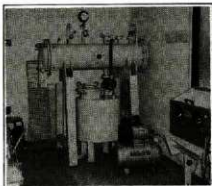
保存処理を必要とする本遺跡出土の金属製品は225点あり、そのうち釘・工具類等の鉄製品が190点、煙管・錢貨等の銅製品が35点含まれる。こうした出土金属製品は保存処理を施さずに放置すると錆が進行してもとの形状を損い、ついにはバラバラになって復元不可能となる。そのため、金属製品の処理台帳を作成して保存処理計画をたてて実施した。保存処理には、乾燥期間も含めて7ヶ月を要した。以下、鉄製品・銅製品の保存処理工程を示す。

### 鉄製品の保存処理

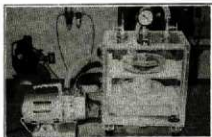
- ① 保存処理作業前の形状観察記録、写真撮影を行い、処理台帳を作成する。
- ② 脱塩処理——泥を落した後遺物内の塩化物を取り除くために、水酸化リチウムの0.2%アルコール溶液（エタノール、メタノール、イソプロパノールの混合液）に含浸、3ヶ月後引き上げ、メタノールで洗浄したのち乾燥保管する。
- ③ X線透過撮影を行い、内部構造を調べる。（奈良国立文化財研究所に依頼した。）
- ④ 脱塩処理後、遺物が脆弱なため非水系のアクリル樹脂（商品名：バラロイドB72）10%トルエン溶液内で減圧含浸して仮強化を行う。
- ⑤ 小型グラインダーにて錆の部分进行を削り落す。釘頭の細かな部分は噴射加工機にてアルミの微細粒を高压で吹きつけ、頭巻の状態がわかるようにする。
- ⑥ 排水系のアクリル樹脂（商品名：バラロイドNAD10）内で鉄器を減圧含浸する。
- ⑦ 常温乾燥ののち、熱風恒温乾燥機内に入れ70℃で1週間強制乾燥させる。
- ⑧ ⑥と⑦を4回繰り返した後に折損部を $\alpha$ -シアノアクリレート系接着剤（ボンドアロンアルファ）にて接着し、欠損部分はエポキシ系補填剤（ボンドオール）にて補填する。
- ⑨ 遺物をシリカゲルと共に密閉保管する。

### 銅製品の保存処理

- ① 処理台帳を作成する。
- ② 脱塩処理——ベンゾトリアゾールの0.3%メチルアルコール溶液内にて1時間減圧含浸する。
- ③ X線透過撮影を行う。
- ④ バラロイドB72の5%トルエン溶液で減圧含浸する。
- ⑤ 1日常温乾燥後、乾燥機内で1週間強制乾燥する。
- ⑥ バラロイドB72の10%トルエン溶液で減圧含浸する。
- ⑦ ⑤ののち、噴射加工機にてアルミの微細粒を高压で吹きつけたり、メス等を使用して錆を落とす。
- ⑧ ⑥と⑦を3回繰り返したのち、シリカゲルと共に密閉保管する。



挿図6 鉄製品の減圧樹脂含浸



挿図7 銅製品の減圧樹脂含浸

## 第3章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

中尾城跡は、三田市下相野字中尾に所在する。三田市の西部にあたり吉川町と接する地区である。当地区の北約3.5kmには摂津と丹波との旧国境をなす三本峠があり、この峠の丹波側に立杭焼で有名な多紀郡今田町立杭が所在する。また、当地区の東側約2kmには丹波焼に用いられた粘土の採掘地である四辻がある。

当遺跡は武庫川の支流をなす相野川右岸の丘陵上に立地する。相野川の兩岸は、上・中・下7面からなる河岸段丘を形成し、その背後に中尾城跡が立地する丘陵がある。この丘陵は、中新世に形成された神戸層群から構成されている<sup>1)</sup>。標高は、200mから250mである。そして中尾城跡はこの丘陵を構成するひとつの小尾根上に立地する。

また、相野川上流の西相野とその北側の藍本庄との境は、相野川と武庫川との谷中分水界をなしている<sup>2)</sup>。

### 第2節 歴史的環境

三田市域では、ここ10年数年来の北摂ニュータウンの建設・武庫川の河川改修・青野ダムの建設・三田盆地の圃場整備などともない、三田盆地及びその周辺の丘陵地において埋蔵文化財の調査がさかんにおこなわれ、当地域の歴史的環境が明らかとなりつつある。

中尾城跡の位置する相野川流域および周辺の丘陵地帯の歴史については、以前はほとんど明らかとなっていなかった。しかしここ数年来圃場整備事業が及ぶにつれ、特に相野川流域の段丘部において遺跡の状況が明らかとなりつつある。また丘陵地についても、今回の中尾城跡の調査をはじめとした近畿自動車道建設に伴う発掘調査において実体が明らかになりつつある。

以下、中尾城跡との関係上、歴史時代以降を中心に当地域の歴史的環境について概観してみたい。なおここで対象とする範囲は、相野川が武庫川と合流する広野以北の相野川流域を中心とした地域に限定したい。また、中尾城跡が立地する丘陵の西側、つまり吉川町側については、現在のところ遺跡の存在は明らかとなっていない<sup>3)</sup>ため、ほぼ三田市域に対象が限られる。

古代以前 まず、中尾城跡の南東約1.3kmの、中尾城跡と一連の丘陵上に立地する溝口遺跡



1. 中尾城跡 2. 溝口城（溝口遺跡） 3. 貝谷遺跡 4. 内神古墳群 5. 上相野散布地  
 6. 高川古墳群 7. 三本峠宮窟 8. 三本峠北窟 9. 大川瀬地区内遺跡 10. 藍本庄遺跡  
 A. 相野須恵器窟群 B. 丹波宮窟群

挿図1 中尾城跡周辺の主要遺跡



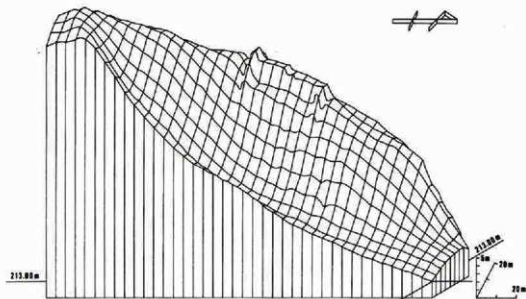
において、赤チャートを主に利用したナイフ形石器を中心とする旧石器が調査によって多く出土している。しかし、続く縄文時代から弥生時代中期については、溝口遺跡(2)<sup>6)</sup>において縄文時代早期と考えられるサヌカイト製の石鏃がみついている以外は、全く不明である。

弥生時代中期においても、藍本庄遺跡(0)<sup>7)</sup>において弥生時代中期の土器とそれにとりまなうサヌカイト片が確認されているだけである。

古墳時代後期になると、相野川と武庫川の合流地点の右岸丘陵部に、内神古墳群(4)が形成されるようになる。また、内神古墳群の北側の小規模な谷底平野に立地する貝谷遺跡(3)<sup>8)</sup>では、この古墳群と密接な関係にあると考えられるほぼ同期の掘立柱建物跡などが明らかとなっている。さらに、藍庄においても、ほぼ同時期の高川古墳群(6)<sup>9)</sup>が形成される。いずれの古墳群とも主体部は横穴式石室である。

古代 律令制に基づき摂津国有馬郡に編入される。しかし、当代の遺跡については明らかとなっていない。

中世 この時代になると、『荘園分布図』によると、藍本庄を中心とした当地域は興福寺領の藍荘に組み込まれている。これと平行して、相野川の両岸において須恵器の生産が始まる。(相野須恵器窯群-A) 特に、右岸の丘陵地の窯跡については、中尾城跡と一連の近畿自動車道関連の調査において約10数基が明らかとなってきている。製品としては、杯・碗・双耳壺・杯蓋・皿・羽釜などの器種があり、なかでも底部寛おこしの碗が特徴的である。ただし、瓦は焼かれていない。



挿図9 中尾城跡立地三次元図

相野須恵器窯群の操業はおよそ11世紀初頭で途絶えるようである。したがって丹波焼への直接の系譜を辿ることはできない。初期の丹波焼の窯としては、その後、三本峠の北側斜面において三本峠北窯(8)・三本峠西窯(7)の両窯<sup>8)</sup>が調査によりその一部が明らかとなっている。いづれも鎌倉時代初頭である。ただし、これに継続する窯跡は現在のところ発掘調査では確認されていない。なお、近世の丹波焼窯については、中尾城跡周辺の下相野・相野荘園・上相野においても確認されている。

この丹波焼の消費遺跡としては、高川古墳群近世墓・溝口遺跡が明らかとなっている。最後に、中尾城跡の歴史的位置付けを行う上で欠かすことのできない山城については、後章で詳述する予定である。

#### 註

- 1) 青木哲也「遺跡の立地と堆積—遺跡周辺の地形—」『兵庫県三田市 溝口遺跡—北摂工業地区—』住宅・都市整備公団，財団法人 古代学協会 1986
- 2) 1) に同じ
- 3) 吉川町教育委員会畠中 剛氏の御教授による。
- 4) 南 博史・山下秀樹，鈴木忠司他『兵庫県三田市 溝口遺跡—北摂工業地区—』住宅・都市整備公団，財団法人 古代学協会 1986
- 5) 三田市教育委員会高島信之・山崎敏昭氏の御教授による。
- 6) 畠中 剛「相野川下地区遺跡(第2次調査)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和59年度—』兵庫県教育委員会 1987
- 7) 中川 渉「高川古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和60年度—』兵庫県教育委員会 1988
- 8) 大村敬通「三本峠北窯調査報告書(遺物写真編)」兵庫県教育委員会 1980

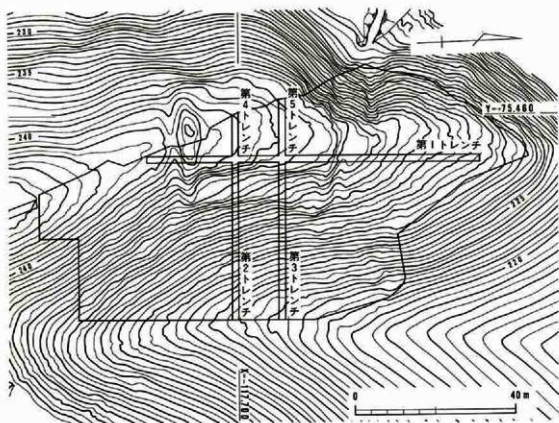
最後に、当地区の遺跡全般について、三田市教育委員会高島信之・山崎敏昭両氏より多大な御教授をいただいたことを記しておく。



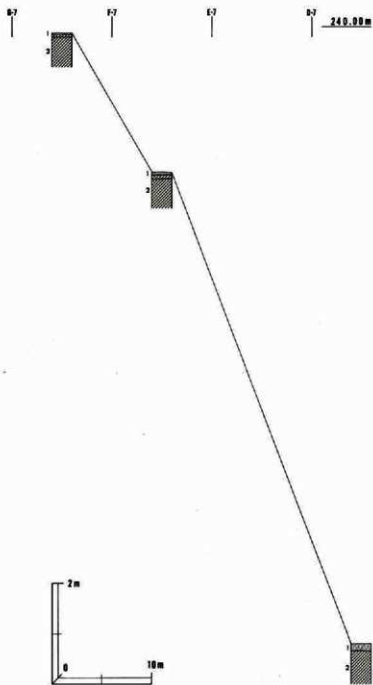
## 第4章 土層

全面調査地区における土層堆積状況を把握するために、表土腐植土層を除去後、2m幅のトレンチを南北1本（Fライン）、東西2本（6・7ライン）設定し、調査を進めた。それぞれのトレンチ名は分割して挿図10の通り1～5トレンチである。7ラインの2・4トレンチは標高224～240mの比高約16mであるが、土層柱状模式図（挿図11）では、予定のトレンチより短くとり、G7より東4m～D7より東6mで比高約12mで、連続した土層図から3点のみ抽出した測定の柱状図である。基本的には尾根上に立地するため堆積土がなく、旧表土層は第1曲輪で3～5cm、東第1腰曲輪で6cm、斜面下でも16cm、第2層黄褐色土は第1曲輪で5cm、東第1腰曲輪で8cm、斜面下では人工的な土壌の動きもほとんどみられず地山となる。

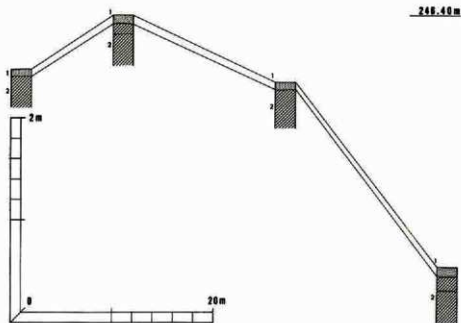
各曲輪単位、特に東腰曲輪への第1、2曲輪の東施設から廃城後の土の動きが強く、堆積も厚く、また土量崩れ、堀切へ土が埋まるなど土層を観察するが、それぞれについては第5章



挿図10 トレンチ設定図



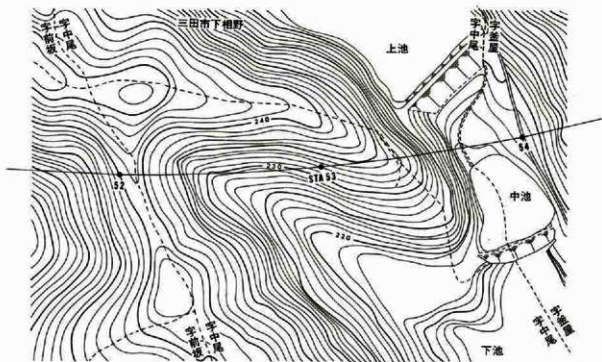
挿図11 2・4 トレンチ土層柱状図



挿図12 南地区確認調査トレンチ土層柱状図

遺構で詳述することになる。

調査区南の尾根頂部標高246.40m付近は、三田市街への眺望も開け、中尾城跡関係の諸施設も考えうる場所であるとともに、周辺で弥生時代や奈良時代の遺物の採集をしたために、トレンチを設けて確認調査を行った(挿図5)。挿図12はT字形に設けたトレンチのうち、南北トレンチ約50m分の中で44m分で4測点を採用した土層柱状図である。トレンチ内での比高差は約2.4mあるが、表土層8~10cmで直ぐ地山となり、少し深掘りするも遺物および遺構は認められなかった。また、東西トレンチで東へ延びる尾根筋でも同様であり、南については調査を終えることにした。



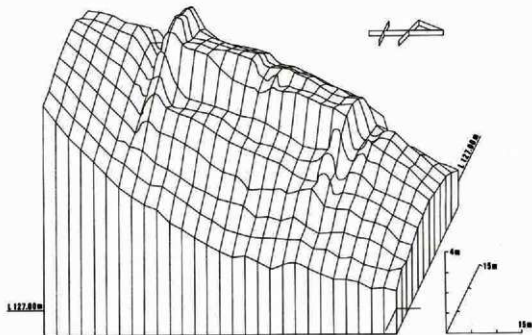
挿図13 中尾城の立地と字界

## 第5章 遺構

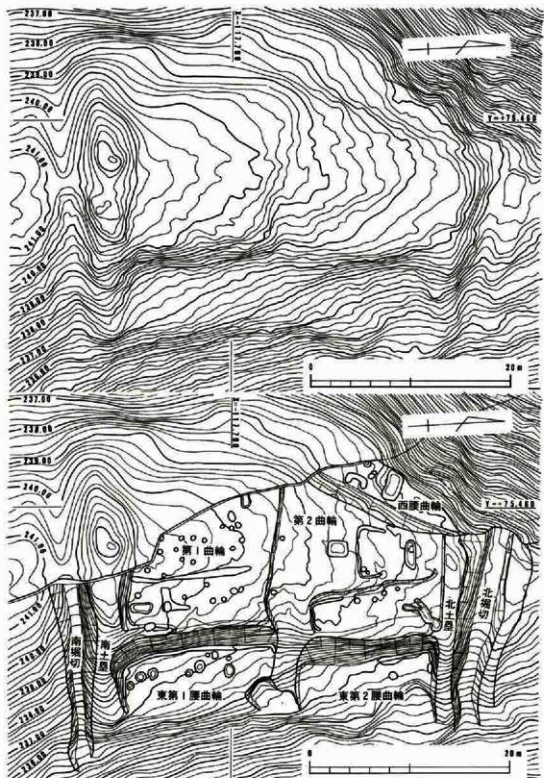
今回の調査で明らかとなった遺構は、山城（中尾城跡）と近世の炭焼窯跡である。

まず、中尾城跡は南北に派生する尾根上に立地する（挿図13）。標高は235mから242mに位置し、北側の谷部との比高は第1曲輪で約24mである。中尾城跡は、南側と北側を堀切・土塁で区切られ、その空間内に曲輪が階段状に築かれている（挿図14）。この南北にある堀切・土塁を含めた中尾城跡の面積は、地形測量の成果によると（調査区外も含めて）約1250㎡である。このうち調査を実施したのは、約3/4にあたる約930㎡についてである。調査で明らかとなった曲輪は5つである（挿図15・16）。まず、尾根稜線上に南側から第1曲輪・第2曲輪が、そしてこの東西に東腰曲輪・西腰曲輪が配置されている。さらに、東腰曲輪は東第1腰曲輪と東第2腰曲輪にわけられ、それぞれ第1曲輪と第2曲輪に対応している。第1節以下で各曲輪ごとにその内容を報告していくことにする。

次に、炭焼窯跡は、中尾城跡の北東部の尾根裾に近い斜面に立地する。天井部が崩落していた以外は、比較的残りがよく、煙道部・焼成部・燃焼部・灰原を検出した。



挿図14 中尾城跡三次元図



挿図15 調査前地形測量図(上)、調査後地形測量図(下)

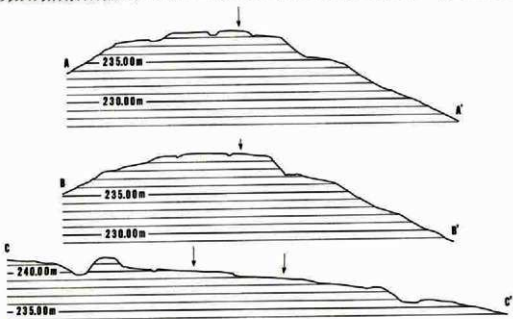
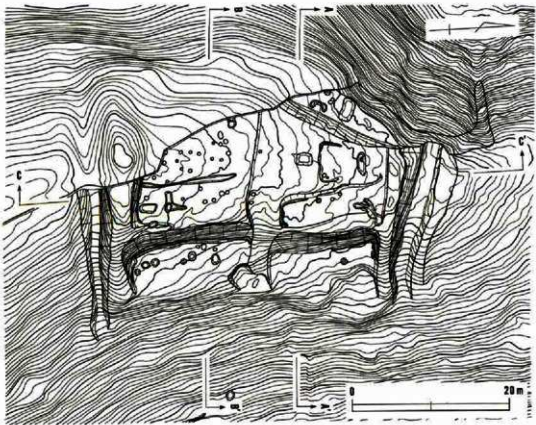
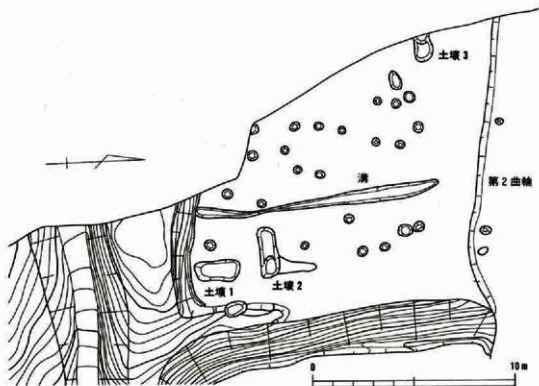


插图16 中尾城跡横断面・縦断面



挿図17 第1曲輪平面図

## 第1節 第1曲輪（挿図17）

南側を南土塁、北側を第2曲輪に、東側を東第1腰曲輪に画された、中尾城跡の中で最も高所に位置する曲輪である。この曲輪の標高は中央部で240.0mである。南側の尾根稜線部はカットされ、西側・東側・北側は盛土がなされて造られた平坦地である。調査範囲は一部限られ、その範囲は全体の約3/4である。曲輪の平面形は、調査範囲外については地形測量図から判断すると、ほぼ方形に近いものと推定される。南北長については確実におさえることができ、尾根稜線部で13.5mである。当曲輪の面積は、調査範囲外の推定部分も含めて約220㎡におよび、中尾城跡の曲輪の中で最も広い面積である。

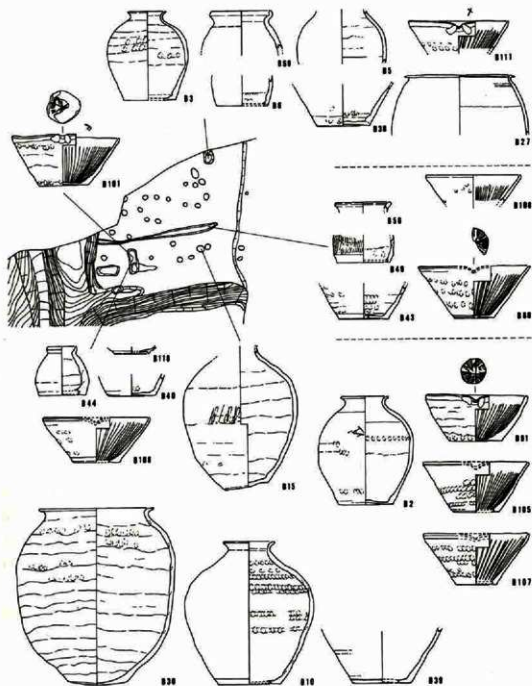
第1曲輪は、曲輪内のほぼ中央よりやや東側を南北にのびる溝により、大きく二つの区画に分かれている。そしてこの区画内で、土壇・柱穴を検出した。以下、主な遺構について報告していく。

**溝** 前述したように、第1曲輪を東西に2分し、南北にはしる溝である。南土塁との変換部からはほぼ直線的にのび、第2曲輪との境をなす段差の約2.0m手前まで達している。検出した長

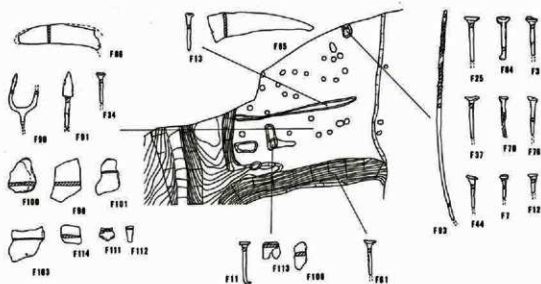


さは、12.0mである。幅20cmから75cmに対して、深さが約10cmと大変浅い溝で、断面は逆台形をなす。

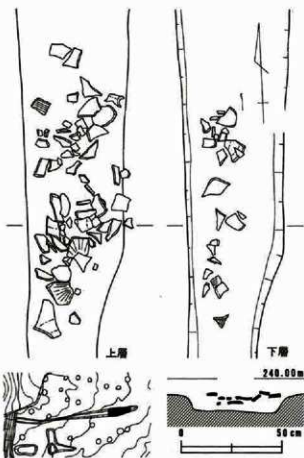
この溝からは多くの遺物が出土した（挿図18-19）。遺物の出土は、大きく2層に分けること



挿図18 第1曲輪中世土器出土状況



挿図19 第1曲輪鉄製品出土状況

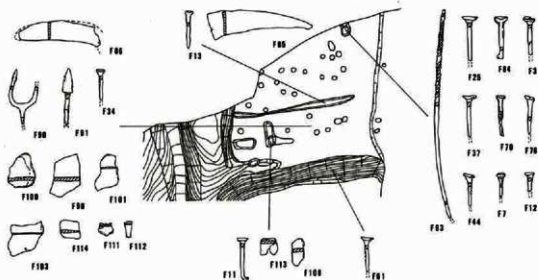


挿図20 第1曲輪溝遺物出土状況

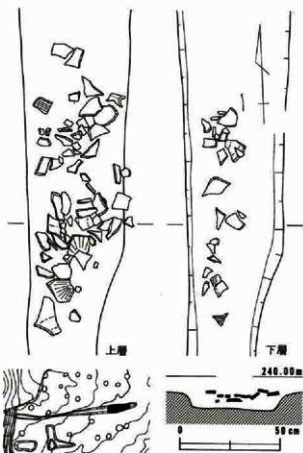
が出来る。溝の底に密着しての出土は少なく、多くは中・上層からの出土である。平面的には、溝の北側の一部に集中して出土が認められた(挿図20)。主な出土遺物は、丹波焼(摺鉢等)・鉄製品(鎌・釘)などである。

**周溝** 南土壘との変換部においてそのラインと平行して走る溝である。地山を掘り込んでつくられている。南東部においてわずかにコーナを形成している。幅15cm、深さ15cmを測り、断面はU字形である。埋土中には、炭・焼土が多く含まれていた。特に板材の炭化したものが多く認められ、板塀用の溝(壁溝)と考えられる。

**土壇1 (挿図21)** 第1曲輪の東南隅に位置する。平面形は、やや変形な長方形をなし、主軸方向を南北方向にとる。主軸ライン上で2.1m、その直交方向で0.9mを測る。断面は逆台形をな



挿図19 第1曲輪鉄製品出土状況

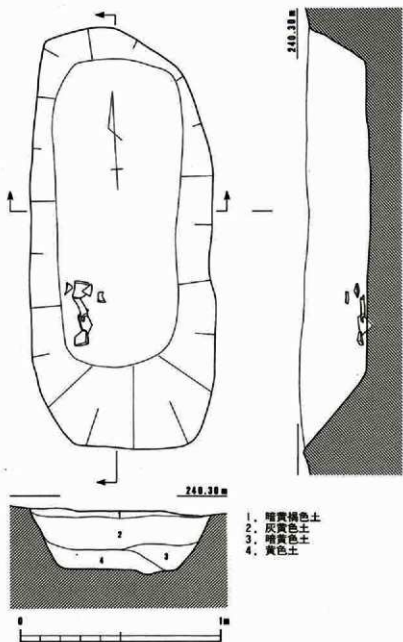


挿図20 第1曲輪溝遺物出土状況

が出来る。溝の底に密着しての出土は少なく、多くは中・上層からの出土である。平面的には、溝の北側の一部に集中して出土が認められた(挿図20)。主な出土遺物は、丹波焼(播鉢等)・鉄製品(鎌・釘)などである。

**周溝** 南土塁との変換部においてそのラインと平行して走る溝である。地山を掘り込んでつくられている。南東部においてわずかにコーナを形成している。幅15cm、深さ15cmを測り、断面はU字形である。埋土中には、炭・焼土が多く含まれていた。特に板材の炭化したものが多く認められ、板敷用の溝(壁溝)と考えられる。

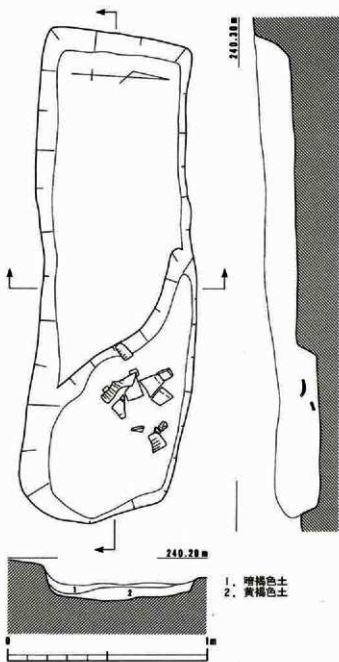
**土壌1 (挿図21)** 第1曲輪の東南隅に位置する。平面形は、やや変形な長方形をなし、主軸方向を南北方向にとる。主軸ライン上で2.1m、その直交方向で0.9mを測る。断面は逆台形をな



挿図21 第1曲輪土壌1

し、深さは中央部で検出面から30cmである。遺物は、南西隅でかたまってお土が認められたが、丹波焼数片とわずかである。いずれも埋土下層（第4層—挿図21）からの出土である。

**土壌2** 土壌1の北側に位置する。主軸方向は土壌1とは約90°違え、東西方向を指向する。平面形は土壌1同様長方形である。主軸ライン上で2.4m、その直交方向で78cmである。断面は逆台形をなし、深さは中央部で検出面から20cmである。底部のレベルは一定しているが、東側



挿図22 第1曲輪土壌2

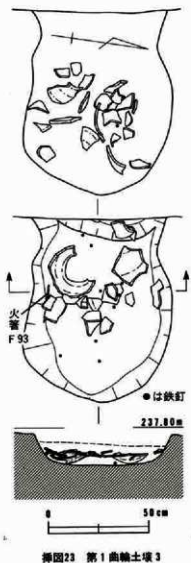
で約10cm落ち込んでいる。土壌2では、土壌1よりは多くの遺物の出土が認められた。主な出土遺物は、丹波焼（播鉢・小瓶・壺）・鉄製品（釘・鉄片）などである。これらの多くは、埋土中層（第1層一挿図22）からの出土である。

土壌3（挿図23）遺構の一部は調査区外にあたり、全体を明らかにすることはできなかった。検出部分から推定すると、平面形は楕円ないし長方形を呈するものと推定される。調査区境界ライン上の南北方向で幅70cmを測る。断面は南北方向で逆台形をなし、深さは検出面から15cmと比較的浅めであるが、調査区境界ライン付近で一段（約15cm）落ち込んでいる。

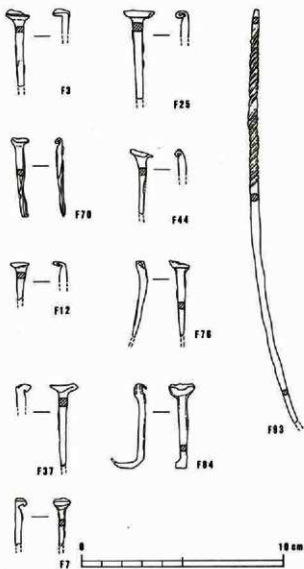
当遺構からは比較的多くの遺物が出土しており、層的に大きく2層にわけることができる。主な遺物として、丹波焼（壺・甕・播鉢）・鉄製品（釘・火箸）などが出土している（挿図24）。

柱穴 24個の柱穴を検出した。溝を挟んだ東西両側で検出した。これらの柱穴は、第1曲輪に想定される建物1と建物2を構成するものである。検出面からの深さはわずか5cmと大変浅いものである。

この柱穴は、一般的な掘建柱建物に伴う柱穴というより、礎石を伴うものであったと考えられる。ただし礎石自体は第1曲輪においては、1石も残っていなかった。どの柱穴も径は30～50cmに集中している。しかし、これらの柱穴については、規則的に並ぶものは明確に認められず、



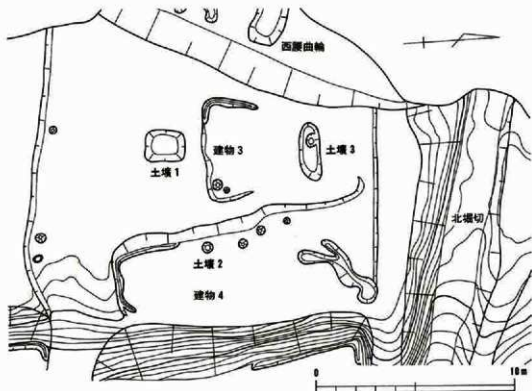
挿図23 第1曲輪土壇3



挿図24 第1曲輪土壇3出土鉄製品

建物の規模などを復原することは困難である。

なおこれらの柱穴のいくつかからは遺物が出土しているが、いずれも小片である。



挿図25 第2曲輪平面図

## 第2節 第2曲輪 (挿図25)

第1曲輪の北側に位置する。第1曲輪よりは約30cmの段差をなして1段低く造られた平坦部である。当曲輪の大半は尾根をカットして造られているが、西側・東側・北側については若干の盛土がなされている。また、北側は北堀切により、西側は西腰曲輪に、東側は東第2腰曲輪によって画されている。平面形は、北側を短辺とした台形をなし、北辺は10.0m、南辺は14.5m(検出長—推定全長は15.5m)、南北長は17.0mを測る。面積は未調査部を含めて約215㎡である。標高は中央部で238.6mである。第2曲輪については、南西隅の極一部を除いてほぼ全体を明らかにすることができた。

第2曲輪は、西側の土壌1・土壌2・建物3からなる平坦部と、東側の建物4のある一段低くなった平坦部との大きく2つの空間からなり、柱穴・土壌・建物跡などの遺構を検出した。以下主な遺構について報告していきたい。

**建物3 (挿図28)** 第2曲輪のほぼ中央のやや西よりに位置する。この遺構は、北側に閉

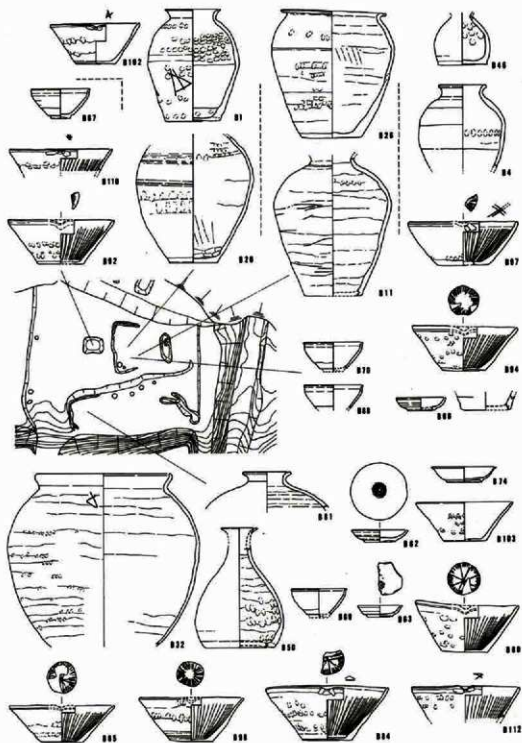
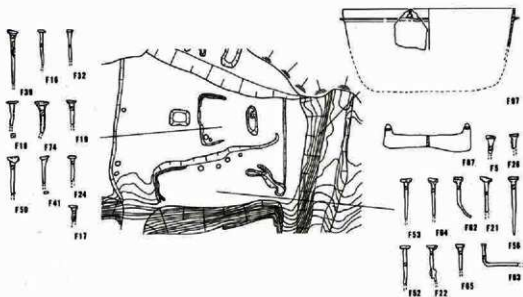


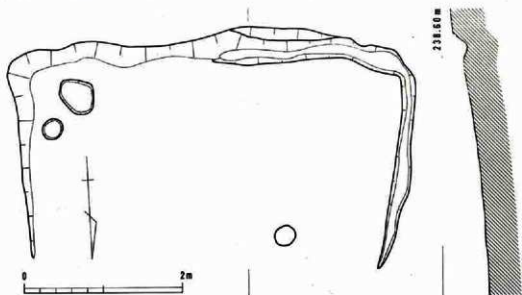
插图20 第2曲輪中世土器出土状況



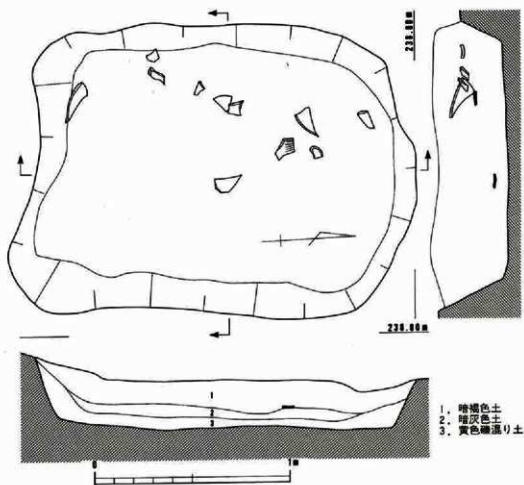


挿図27 第2曲輪鉄製品出土状況

いたコの字形に周溝あるいは段差がめぐるものである。その規模は南辺5.1m(最大)、東辺2.7m、西辺2.5mで、面積は約14㎡である。このうち溝は南辺の西半分から西辺にかけて通っている。本来は全周していたものと考えられる。幅約18cmで、断面U字形をなし、深さは約10cmである。また、段差は最大で25cmである。



挿図28 第2曲輪建物3

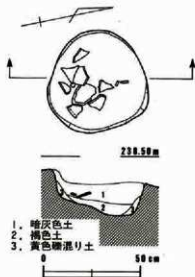
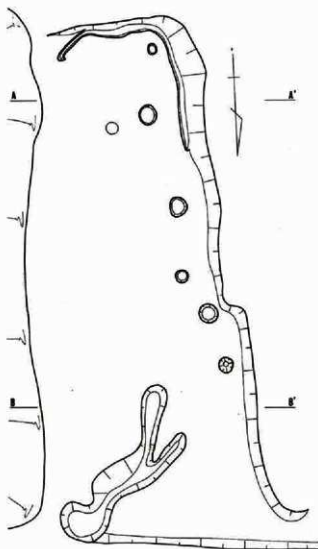


挿図29 第2曲輪土壌1

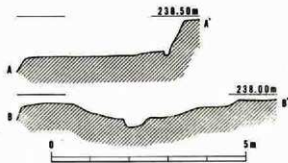
この建物跡北西部においては、焼土塊が認められた。径約25cmほどのものである。

この溝及び平坦部からも多くの遺物が出土している。特に西辺の溝内から集中して出土したが、覆土内出土の遺物も合わせると、建物3の範囲内で平均して出土している。主な出土遺物は、丹波焼（壺・甕・搦鉢・捏鉢・徳利）、瀬戸・美濃焼（天目茶碗）、鉄製品（釘）である。これらの遺物構成から、この建物跡は建物4同様、日常的な場として機能していたものと考えられる。

土壌1（挿図29） 建物3の南側に位置する。主軸方向は建物3とほぼ同じで、主軸ライン（南北）上で1.95m、その直交方向で1.45mを測る。平面形は方形に近い長方形である。断面は逆台形をなし、深さは中央部で検出面から約40cmである。底部は平坦になっている。埋土は1～3（挿図29）の3層からなる。遺物の出土量は多くはないが、埋土中層から上層にかけて、



挿図31 第2曲輪土壌2



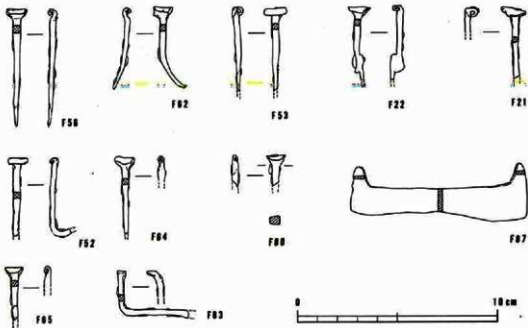
挿図30 第2曲輪建物4

丹波焼（播鉢）、瀬戸・美濃焼（天目茶碗）が出土している。

建物3の主軸ラインと、当土壌の主軸ラインとがほぼ一致し、比較的近接することから、両者はより有機的な関係があったものと考えられる。

**土壌3** 建物3の北側に位置する。土壌1とは主軸方向を約90°違い、主軸ライン上（東西）で2.4m、その直交方向で1.1mを測る。平面形は楕円形気味の長方形である。断面は、皿状を呈し、検出面からの深さは中央部で約10cmとわずかである。当土壌に確実に伴う遺物は確認できなかった。

**建物4**（挿図30） 第2曲輪の東側に位置し、ほぼ長方形を呈す



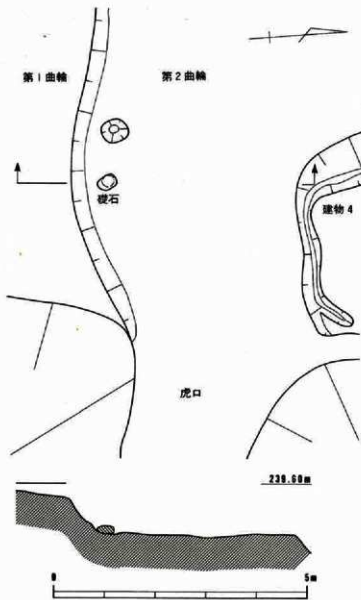
挿図32 第2曲輪建物4出土鉄製品

る一段低くなった平坦部である。段差は第2曲輪全体に北側の盛土部分が削平されているため、北側ほど減少傾向にあるが、最大で90cmである。平面形は、ほぼ長方形をなすが、北側ほど若干広がり気味である。南北長約12.5m、南辺2.5m、北辺5.0mを測る。面積は平坦部のみで約55㎡である。当平坦部内では、周溝・柱穴・土壌を検出した。

まず、平坦部の南西隅を中心とした傾斜変換部には、変換ラインに平行して鍵形に周溝がめぐっている。この周溝は、幅約15cm、深さ10cmで断面U字形を呈する小規模なものである。溝内には多量の炭・焼土が確認された。このことから、先述した第1曲輪の周溝及び後述する東第1腰曲輪・東第2腰曲輪で検出した周溝と同様の機能をなしていたものと考えられる。この平坦部は建物跡と考えられるが、柱穴を6個検出しただけである。いずれも西側の段差部分に、そのラインとはほぼ平行する傾向が認められるが、その規模等の復原は困難である。径約25～40cmで、深さは10cm未満と浅いものである。

また土壌2（挿図31）は、建物4に属すると考えられるもので、径50cm、深さ20cmを測り、遺物も比較的まとまって出土している。特に中層から集中して出土している。

また当平坦部においては、南部中央で径約20cmの円形の焼土塊が認められた。さらに、遺物についても丹波焼の各器種（壺・甕・播鉢・捏鉢・德利）がセットで出土しているのをはじめとして、瀬戸・美濃焼（天目茶碗）・中国磁器・石臼・火打金・釘などと多種にわたる。（挿図26・27・32）これらの遺物は日常的な様相を示すものである。このことから、建物4は、日常



挿図33 虎口礎石出土状態

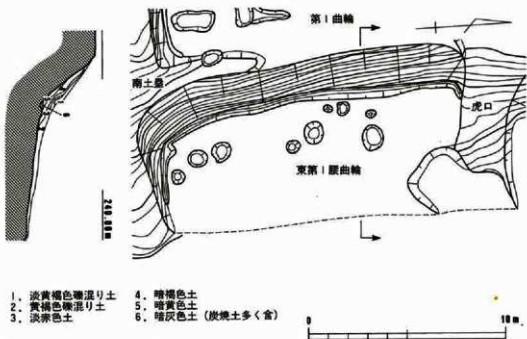
の場として機能していたものと考えられる。

**礎石 (挿図33) 第2曲輪**  
 の南東部、東第1腰曲輪と第2腰曲輪との中間部からスロープを上った位置で、27.5×37cmほどの石を確認した。この石は、若干偏平気味となっており、礎石として使用されたものと考えられる。この礎石が確認された地点は、周囲より若干掘りくぼめられており、原位置を保っているものと考えられる。したがって、この位置は東腰曲輪からのあがり口、つまり第1・第2曲輪への入口(虎口)にあたることから、この石は門柱の礎石として使用されたものとも想定される。

またこの礎石の西側約60cmの地点で柱穴を検出したが、礎石との関係の有無あるいはその内容などについては、明らかにしない。

### 第3節 東第1腰曲輪 (挿図34・35)

第1曲輪東斜面をカットし、その土を谷側(東側)に盛って造成した平坦部である。第1曲輪の東側に位置し、南側は南土塁により画されている。標高は中央部で237.0mで、第1曲輪との比高は第1曲輪の東端と東第1腰曲輪の西端で2.4mである。平坦部は東西5.0m、南北15.0m



挿図34 東第1腰曲輪

の長方形を呈し、面積は約90㎡である。

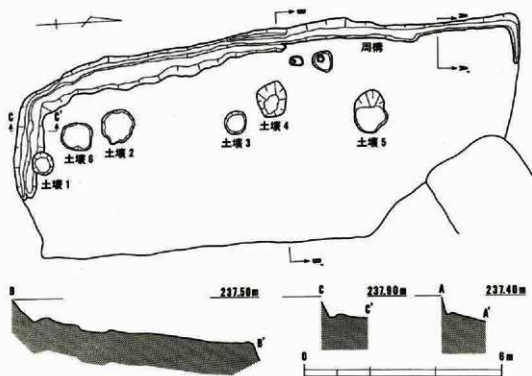
当曲輪の西側斜面および南土塁との変換部にもコの字形に周溝が巡らされている。この周溝に囲まれた平坦部において土壌6基、柱穴状の落ち込み3穴を検出した。なお、これらの遺構群は、平坦部でも西側に偏在する傾向にある。

当曲輪からの出土遺物は、各遺構からも少なからず出土しているが、包含層出土のものが量的に目立つ。主遺物として、丹波焼(壺・甕・播鉢)・石臼・鉄製品(釘・火打金・燻止)などが出土している。(挿図36・37)ただし、これらの遺物の平面上の出土位置は、土壌が集中する部分に相当することから、包含層出土遺物の多くは遺構に伴うものと考えられる。

以下、各遺構について説明していく。

**周溝** 幅約20～40cm、深さ15cmの断面U字形を呈する小規模な溝である。第1曲輪及び第2曲輪建物4の周溝同様、炭化した板材が認められた。これらの周溝と同様の機能をもつ溝と考えられる。また、この溝に平行して平坦部側にわずか10cm程の地山成形による土手状高まりが認められた。幅は約30cmである。この土手状の高まりも、前述した周溝溝の機能に伴うものと考えられる。

**土壌1** 当曲輪の最も南側に位置する。南北62cm、東西70cmを測り、円形に近い平面形である。深さは中央部で検出面から約22cmで、断面逆台形を呈する。当土壌からは、遺物の出土は



挿図35 東第1要曲輪遺構配置図

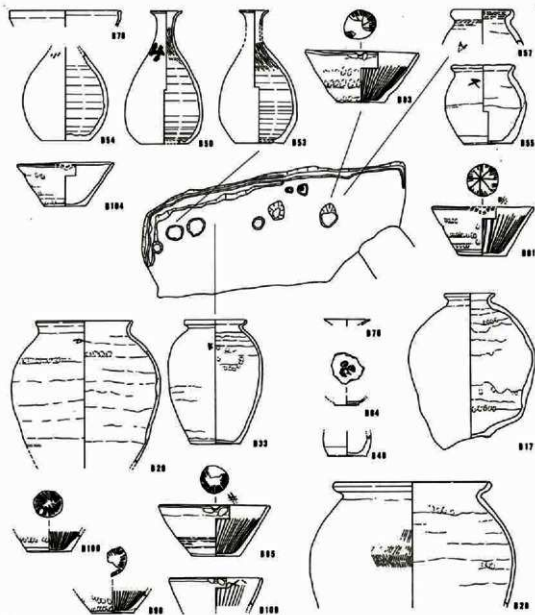
認められなかった。

**土壌2** (挿図38) 土壌6の北隣に位置する。南北・東西とも1mを測り、平面形は不整形気味な方形である。深さは中央部で検出面から約25cmで、断面逆台形をなす。底部のレベルは一定しておらず、起伏が目立つ。埋土上層(第1～3層—挿図38)から比較的多くの丹波焼片と、層位は不明であるが釘3本が出土している。

**土壌3** 土壌4の南隣に位置する。径約67cmのほぼ円形を呈する。中央部で深さは検出面から約10cmと浅く、断面逆台形を呈する。当土壌からは、遺物の出土は認められなかった。

**土壌4** (挿図40) 土壌3の北隣に位置する。南北0.8m、東西1.0mで平面形は不整形な長方形である。深さは、中央部での検出面から約20cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土上層(1層—挿図40)から丹波焼片が数点出土している。

**土壌5** (挿図41) 当曲輪のなかで最も北側に位置する土壌である。南北0.9m、東西1.25mと平面形は楕円形気味の方形である。深さは中央部で検出面から約25cmを測り、断面逆台形をなす。当土壌は土層断面の観察によると、3・4層と1・2層との間に明確な不連続面が認められる。これは、当土壌の埋没過程で一層掘り返された後、1・2層が埋められたものと考え



押図36 東第1腰曲輪中世土器出土状況

られる。

当土層からは丹波焼（摺鉢・小瓶）が数点出土している。いずれも中・上層（1・2層—押図41）からの出土である。

土層6（押図39） 土層1と土層2の中間に位置する。南北0.8m、東西0.9mを測り、平面隅丸長方形を呈する土層である。深さは中央部で検出面から20cmを測り、断面逆台形をなす。当



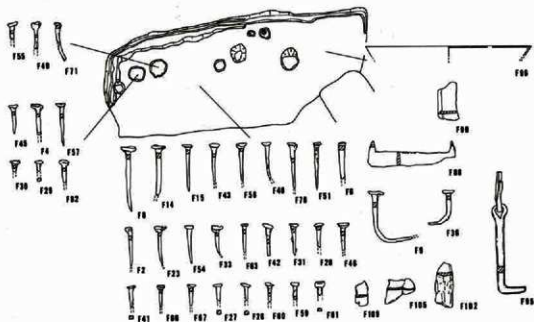


插图37 东第1层曲輪鉄製品出土状况

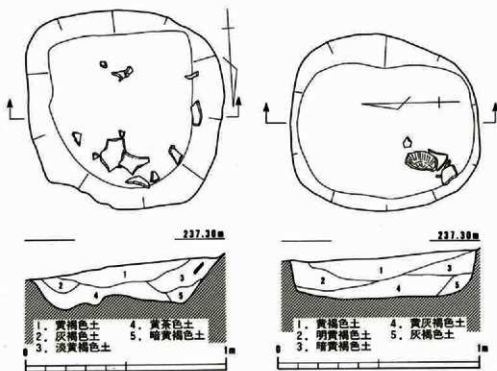
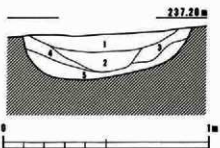
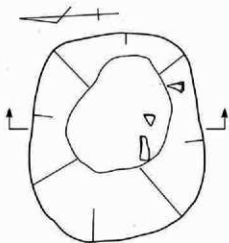


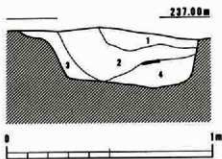
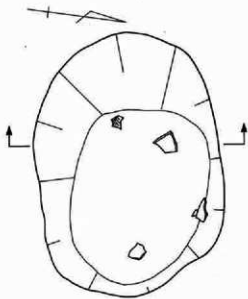
插图38 东第1层曲輪土境 2

插图39 东第1层曲輪土境 6



1. 黄褐色土      3. 暗黄黑灰色土  
2. 淡黄黑灰色土      4. 暗灰褐色土

挿図40 東第1腰曲輪土境4



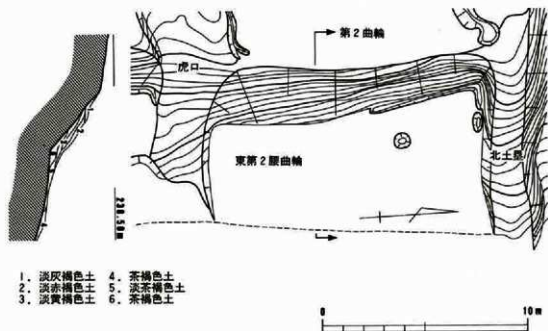
1. 暗黄灰色土      3. 暗黄褐色土  
2. 暗灰褐色土      4. 黄褐色土

挿図41 東第1腰曲輪土境5

遺構からは、埋土上層（1層一挿図39）から丹波焼（播鉢・備前焼（德利）と釘7本が出土している。

柱穴 3カ所で検出しているが、いずれも検出面からの深さ数cmと浅いもので、その性格を明確にすることはできない。また、遺物の出土は皆無であった。

小結 当曲輪は、円形ないし方形の比較的小型の土境群からなる。これらの土境群及びそれらの覆土からは、丹波焼（壺・甕・播鉢・捏鉢・德利）、瀬戸・美濃焼（皿）、土師器（皿・鍋）、鉄製品（火打金・釘・漏り止め・鉄片など）、石臼など、多種にわたる遺物が多く出土している。これらの遺物の組み合わせは、日常的な生活の場を想定させるものであり、当曲輪は何らかの建物を伴う居住空間であったと考えられる。



挿図42 東第2腰曲輪

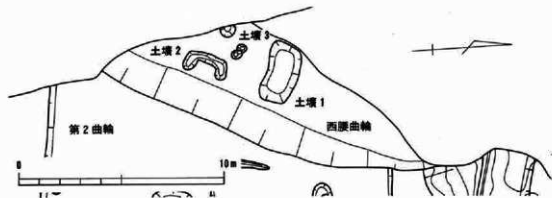
#### 第4節 東第2腰曲輪（挿図42）

東第1腰曲輪同様、第2曲輪東斜面をカットしその土を谷側に盛土して造成した平坦部である。第2曲輪の東、第1曲輪の北、北堀切の南に位置する。標高は中央部で234.8mで、第2曲輪建物4・東第1腰曲輪との比高は、それぞれ2.4m、0.6mである。平坦部は南北13m、東西5mの長方形を呈し、面積は約75㎡である。当曲輪の北東部は大きく抉られたかたちになっているが、築城時のものなのか、後世に形成されたものなのかは判断できない。当曲輪においても、北西部コーナーを中心に斜面との変換部で周溝を検出した。遺構としては、柱穴状のものを一つ検出したにとどまる。

また、遺物の出土についても、他の曲輪と比べると極端に少なく、丹波焼数個体（壺・小壺・播鉢）が出土したにとどまる。

**周溝** 検出した周溝は、当曲輪の北西隅を中心に南北約5m、東西1mと限られるが、当初は第1曲輪の周溝同様コの字状に巡っていたものと考えられる。

幅約40cm、深さ15cmを測り、断面U字形を呈する。また、周溝に囲まれた内側には幅約20cmにわたって若干の高まりが認められたが、その高さは数cm程度である。埋土中には、東第1腰曲輪の周溝同様焼土及び炭化物が多量に含まれていた。他の曲輪で検出した周溝と同様の機能



挿図43 西腰曲輪平面図

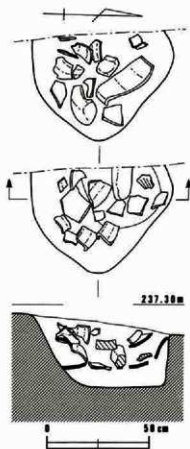
をなしていたものと考えられる。

**柱穴** 当遺構については、検出面からの深さもわずか数cmにすぎず、遺物も出土しなかった。このため、柱穴であるのかの是非も含めてその性格については明らかにできない。

## 第5節 西腰曲輪（挿図43）

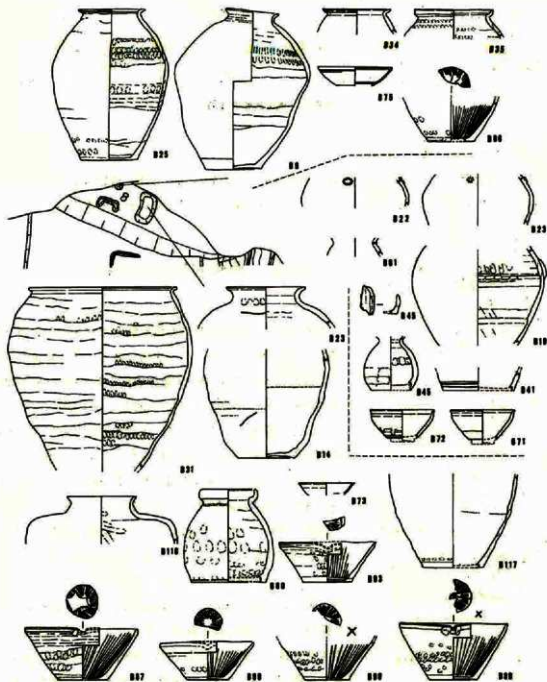
西腰曲輪は、第2曲輪の西側斜面をカットし、谷側（西側）に土を盛って造成した平坦部である。第2曲輪の西側との比高は約0.8~1.0mと、東腰曲輪と第1曲輪・第2曲輪との比高に比べて段差は少ない。標高は中央部で237.0mである。この曲輪の一部（南側）は調査区外に当たり、全体を明らかにすることはできなかった。しかし、地形測量の結果、さらに第1曲輪の西側にまで広がるものと推定される。そして東腰曲輪同様、二段になるものと考えられる。

調査で明らかとなった曲輪は、他の曲輪に比較して変則的な平面形をなしている。これは、地形の影響を受けていることと、西側斜面が全体的に崩落していることによるものと考えられる。面積は、調査範囲内で約37.5㎡を測り、曲輪のなかでは最も狭い面積である。また、第1曲輪の西側までの推定範囲を含めた全体の推定面積は約150㎡である。当曲輪においては、土壌をはじめとした遺構を数基検出した。以下、主な遺構について説明していく。

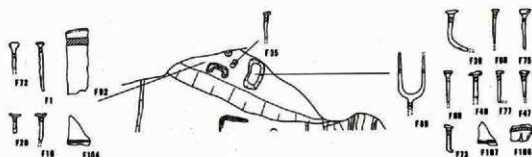


挿図44 西腰曲輪土壌3

土壌3 (挿図44) 土壌1の南側に位置する。当土壌は西半分が調査区外にあたるため、全体を明らかにすることはできなかった。平面形はほぼ円形を呈するものと推定される。調査区境界ライン上の断面において幅約65cmを測り、断面形は緩やかなU字形をなし、深さは中央部



挿図44 西原曲輪中世土器出土状況



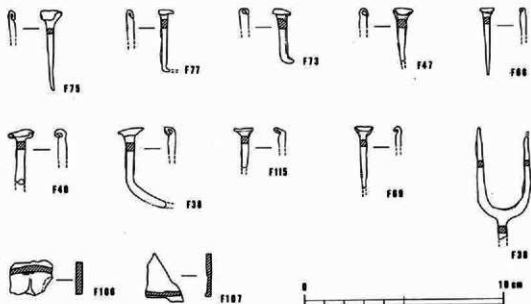
挿図46 西腰曲輪鉄製品出土状況

で検出面から30cmである。

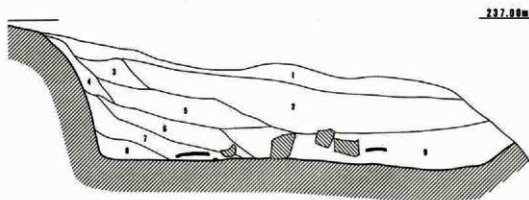
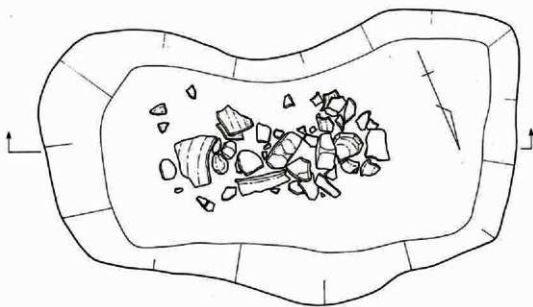
土壌内からは丹波焼(壺・甕)・石臼片などの遺物が比較的多く出土した。(挿図44) これらの遺物は大きく2層に分けることができる。

土壌1(挿図48) 検出した西腰曲輪のほぼ中央に位置する。西側の肩部の一部が崩落しているものの、中尾城跡で検出した土壌のなかで最も大型のものである。主軸を第2曲輪との段差のラインとほぼ直交する方向にとる。主軸方向で2.9m、その直交方向で1.5mを測り、平面形は不整形な長方形である。断面は逆台形をなし、東側肩部からの深さは主軸ライン上で約75cmである。

土壌内は、1~9層(挿図48)の流入土により埋没しており、下層からは土壌底に密着するように丹波焼(大甕・壺・小瓶・播鉢)、瀬戸・美濃焼(天目茶碗)、鉄製品、石臼をはじめとし



挿図47 西腰曲輪土壌1出土鉄製品



- |         |          |           |
|---------|----------|-----------|
| 1. 褐灰色土 | 4. 明黄褐色土 | 7. にぶい橙色土 |
| 2. 黄橙色土 | 5. 黄褐色土  | 8. 暗褐色土   |
| 3. 淡黄色土 | 6. 橙色土   | 9. 褐色土    |



図48 西原曲輪土壌 1

た多くの遺物（挿図45）とともに、米・麦・そばなどの多量の種子が出土した。特に、丹波焼大甕の存在、および多量の炭化物の出土から、当初はある種の貯蔵機能を有していたものと考えられる。特に、土壌の深さが復原される大甕の器高を上回ることから、当土壌に大甕が据えられていたものと考えられる。また、出土した石臼・丹波焼大甕は、数片に破壊されての出土状況から、石臼については中尾城廃絶時に当土壌内に放り込まれたものと推定され、大甕につ

いてはその際に破壊されたものと考えられる。

その他 土壇1と土壇3に囲まれた範囲内で土壇・柱穴を数基検出した。しかし、これらの遺構は小規模であることに加えて遺物の出土もわずかであった。このため、これらの遺構については、性格・機能を明らかにすることはできない。

## 第6節 堀切・土塁

南北に派生する尾根を直交方向に堀切を掘削し、その掘削土を盛り上げて土塁を築き、両者はセットとなっている。堀切・土塁は南と北の2カ所（南堀切・土塁、北堀切・土塁）に構築され、中尾城跡の南と北の境をなしている。

南堀切・土塁（挿図49） 調査した範囲は、東側の約1/2に限られる。検出した長さは17.5mで、西側未調査地を含めた推定全長は約32.5m。堀切は断面逆台形をなし、南側肩部のレベルでの幅3.3m、底部の幅1.5mを測り、南側肩部からの深さは1mである。堀切底部のレベルは一定ではなく山形をなし、調査区西端を頂点に東側ほど低くなっている。調査区西端と東側端部での底部の比高は約5mである。

土塁の上部は後世の削平を受けており不整形な台形をなすが、本来の断面形は蒲鉾形をなしていたものと推定される。第1曲輪との変換部のレベルにおける土塁の幅は4.3mである。調査区西端における第1曲輪と土塁上端部との比高は1.1mで、堀切底部と土塁上端部との比高は2mに及ぶ。

土塁の断ち割り調査による断面観察の結果によると、土塁構築方法がある程度復原できる。それによると、土を盛り上げ水平に突き固めさらに土を盛りあげ水平に突き固める手順を数回（少なくとも4回以上）繰り返す、土塁が築かれている。

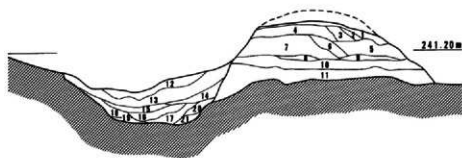
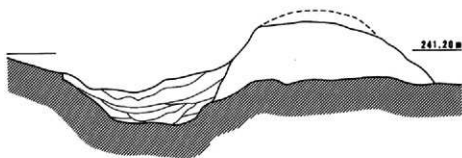
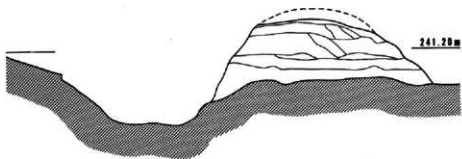
南堀切・土塁からの出土遺物はわずかである。主な遺物として、堀切東側の土塁との変換部付近から鉄飯が1点出土している。

北堀切・土塁（挿図50・51） 南堀切・土塁とは対象的に、ほぼ全体を検出できたが、全体的に残存状況はよくない。特に、土塁は著しく削平を受けている。また、西側においては、西原曲輪同様堀切・土塁とも崩落している。検出した全長は19.0mである。

堀切は、南堀切と同じく断面逆台形をなし、尾根稜線部において、堀切北側肩部のレベルでの幅2.8m、底部での幅2.2mを測る。また、北側肩部と堀切底との比高は0.4mである。堀切底部のレベルは一定ではなく、緩やかな山形をなし、尾根稜線部と東端部の比高は3.1mである。

土塁についても削平を受けているため高まりはわずかで、第2曲輪との比高はわずか10cmである。尾根稜線部における堀切底部と土塁上端部との比高は約2mである。北土塁についても、

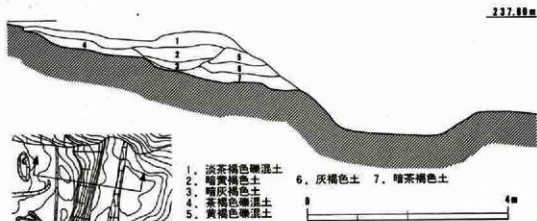




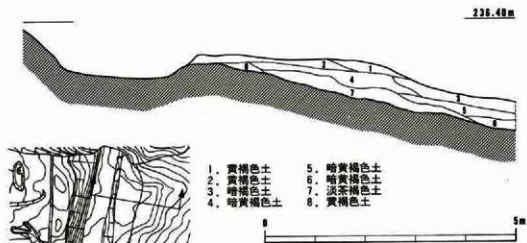
- |         |             |              |
|---------|-------------|--------------|
| 1. 暗褐色土 | 7. 淡赤黄色土    | 15. 礫混り暗黄褐色土 |
| 2. 黄色土  | 8. 暗黄色土     | 16. 礫混り暗茶褐色土 |
| 3. 暗黄色土 | 9. 暗黄色土     | 17. 礫混り暗茶褐色土 |
| 4. 黄色土  | 10. 暗黄褐色土   | 18. 礫混り茶褐色土  |
| 5. 淡黄色土 | 11. 礫混り淡赤色土 | 19. 暗灰褐色土    |
| 6. 暗黄色土 | 12. 暗灰褐色土   | 20. 礫混り暗黄褐色土 |
|         | 13. 黄褐色土    | 21. 黄褐色土     |
|         | 14. 黄褐色土    |              |



挿図49 南堀切・土層断面図



挿図50 北土壘断面図



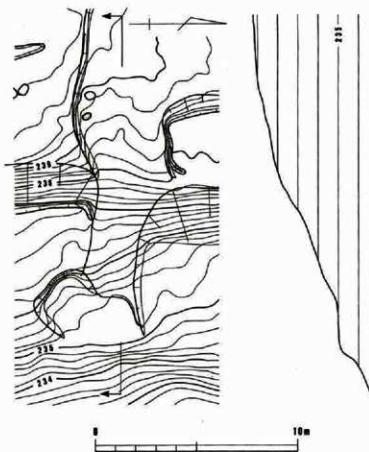
挿図51 北側尾根続き土層断面

南土壘と同様断ち割り調査を行った結果、南土壘断面での観察と同じく数回にわたって土を盛り上げ水平に突き固める工程を繰り返していった状況を観察することができた。

北堀切・土壘からの出土遺物は、南側よりはまとまって出土している。まず、土壘上で丹波焼(壺)が出土しているのをはじめとして、堀切内からは丹波焼(德利・壺・甕)・備前焼(壺)が出土している。さらに堀切南側斜面からは第2曲輪からの流れ込みと考えられる鉄鍋片が出土している。

## 第7節 虎口(挿図52)

東第1腰曲輪と第2腰曲輪との間約2.5~3.0mがスロープをなしている。傾斜角は約20°である。そして、スロープの下部は、東第1腰曲輪が北東方向から斜交する方向に挟られている。このスロープ上では、遺構・遺物とも確認できなかったが、第2曲輪ないし第1曲輪への入口つまり虎口と考えられる。このことについては、第7章において検討したい。



挿図52 虎口

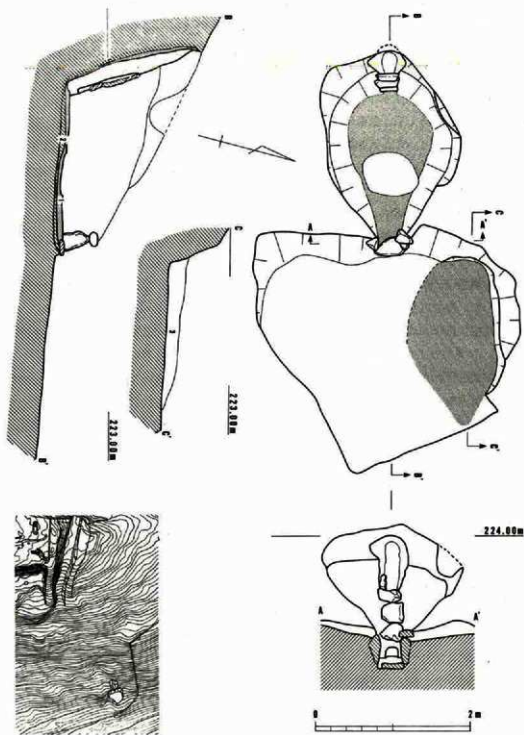
## 第8節 周辺斜面

中尾城の周辺斜面は東斜面がやや緩傾斜で、西斜面は急傾斜である。西斜面は崩壊した部分もあり遺構は何ら検出されなかった。また、遺物もほとんど出土していない。

東斜面では、中尾城から捨てられた遺物や、近・現代の人為的な痕跡が認められた。作業場として斜面中腹に削られた段・炭を多量に含む土壌・山道・そして炭窯1基を検出した。

炭窯谷の底に近い場所に立地し、窯に風の通りが良い場所を選んでいる。中腹の段などは適当な大きさに木を切るための作業場とも考えられる。

## 第9節 炭窯(挿図53)



神園53 炭窯

東斜面の下端で炭窯1基を検出した。現状は調査前から窪地として観察できた。炭窯は斜面を穴蔵状に削りだし、谷方向に向かって開口していた。上に天井を構築しドーム状の構造にして利用したと思われる。平面形は全体にイチジク形を呈し、入口部分付近がやや尖りぎみになっている。大きさは長さ2.6m(煙道を含む)、幅1.7m、壁の高さ(残存部分)1.6mである。窯床面の縦は1.6m、横は1.6mである。入口の幅は小さく0.3mしかない。窯の最奥部には煙道が設けられていた。そして、壁面に人頭大の石を張りつけ、上に土を壁に塗り込めて熱に耐えられるよう工夫されていた。天井部分の壁土と思われる焼土が窯内の埋土と共に大量に落下していた。これらの壁土は一方の表面が赤化していたが、天井を保つため、藁などのスサを入れていた。

さらに、窯内部についてもかなり焼けて壁や床は焼き締まっています。しかし窯内部はタール状のものが付着して黒く変色し、床部分が特に黒く数cmの厚さで溜っていた。窯の入口部分は平石を上下左右に配して崩れないようにしていた。煙道入口の大きさは幅0.2mである。

煙道の構造は、前面に横長の平たい石を張りつけ、壁と同じ様にその上に土を塗り込め構築されていた。煙の取り入れ口は最も下の床面部分からで、入口にはやはり石を張りつけていた。煙道は垂直に設けられ窯背面を垂直に登り、さらに煙突などを取りつけ煙を排出したと考えられる。

炭窯の焼成口から外側には横3.1m、縦2.7mの平坦な作業場が拵えられていた。この平面の北端部分に炭・焼土が多く検出された。この炭窯構築以前に使用されていた、窯の可能性もある。

天井が窯内部に崩れて落ち込んでいたことは前述したが、この中に瓦(押図107参照)などの遺物を伴っていた。しかし、炭は検出されておらず、炭窯は炭焼中に落下したのではなく、使用後に自然崩壊したものと考えられる。

## 第10節 小結

今回の調査で検出したのは、中尾城跡と炭窯跡である。

中尾城跡は、南北に派生する尾根を直交するように南側と北側に築かれた土塁・堀切に囲まれたなかに、第1曲輪・第2曲輪・東第1腰曲輪・東第2腰曲輪・西腰曲輪の5つの曲輪からなる、比較的コンパクトにまとまった山城である。また、各曲輪内においては、溝・土壇・柱穴などの遺構が検出された。遺構内およびその各曲輪の覆土からは山城としてはめずらしく多量の遺物が出土した。

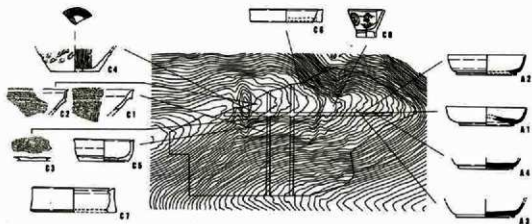
## 第6章 遺物

### 第1節 遺物の出土状況

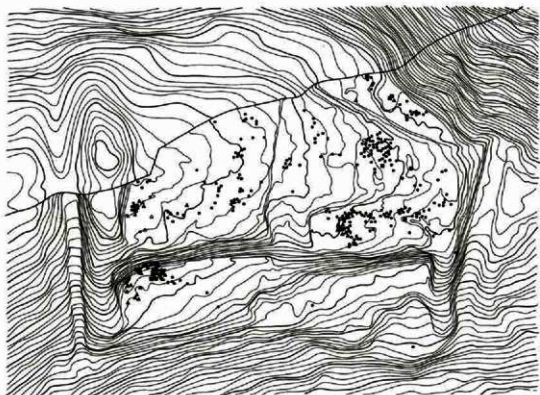
中尾城跡から出土した遺物は、1. 中世以前、2. 中世、3. 中世以後に分れる。1. 中世以前は弥生時代の石鏃と古墳時代・奈良時代の須恵器があるが、遺構が伴わない。2. 中世は山城の遺構に共伴するもので、中世土器（丹波焼、備前焼、瀬戸・美濃焼、中国産白磁・青花、土師器）、石器（石臼、茶磨・茶臼、砥石、基石）、鉄製品（釘、火打金、鏃、鏃など）と銅銭がある。3. 中世以後は炭窯と山城の土層に近世土器（丹波焼、染付陶磁器）、瓦と金属製品（キセル）がある。出土量は整理箱で64箱分の土器等があったが、中世土器がほとんどで、個体復原できる土器が多く、出来る限り図化した117点である。

1. 中世以前、3. 中世以後の土器については挿図50で出土状況を示す通りで、奈良時代の須恵器杯は調査区北の確認トレンチに集中しており、尾根鞍部の使用が考えられるが、遺構は不明である。また、近世の土器は斜面下の炭窯の遺物を除くと、丹波焼播鉢と播鉢を生産した下相野釜屋窯で使用された窯道具・匣と万古焼の猪口が山城の上層に出土する。下相野釜屋窯は中尾城跡の尾根を下ると直ぐで、江戸時代後期の頃、炭焼きと丹波焼窯焼きの人々の道筋となっていたようである。

2. 中世の遺物については、出土位置と所属する曲輪や遺構を復原するために、出来る限り



挿図54 中世以前・中世以後の土器出土状況



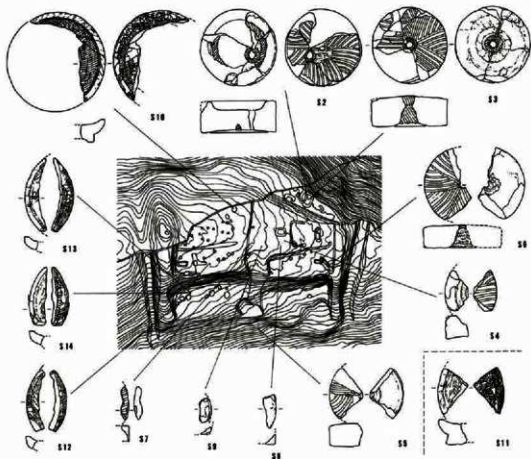
押図55 遺物のドットマップ ●土器 ▲鉄製品  
■石製品 △銅銭

遺物のドットマップを平板測量によって実施した。ドットマップは水平分布と垂直分布を示すが、本遺跡では垂直分布については、遺跡尾根上に立地するため、ほとんど堆積土がなく、表土（腐植土）及び黄褐色土の10cm内外の土層中にあるため効力を認められないので、ここでは水平分布のみ扱う。ただ、遺構内の遺物出土状況については個別に示されている。

遺物ドットマップの対象とした遺物は、●土器、▲鉄製品、■石製品、△銅銭であるが、炭及び炭化種実も補足的に取扱った。

ドットマップ押図55は山城の曲輪を対象としたもので、南北の土塁・堀切部分は含まれていない。また、遺構単位のドットを除いており、曲輪間の遺物出土状況を示すに限っている。土器は東第2腰曲輪を除けば、各曲輪の遺構の分布状況と一致する。鉄製品も同様の集中した分布を示す。石製品は押図56に石臼と茶磨の出土状況が示されている通り、各々の分布に偏りがある。使用空間の違いを示していると考えられる。銅銭は第1曲輪に集中しており、蓄銭を物色された状況を示している。

中世土器、特に丹波焼については1個体が大きく、出土状況からも中世山城破却後、戦勝軍の行為（戦利品の物色、打ち毀し等）が想定され、また曲輪間を越えて接合関係を持つ土器が



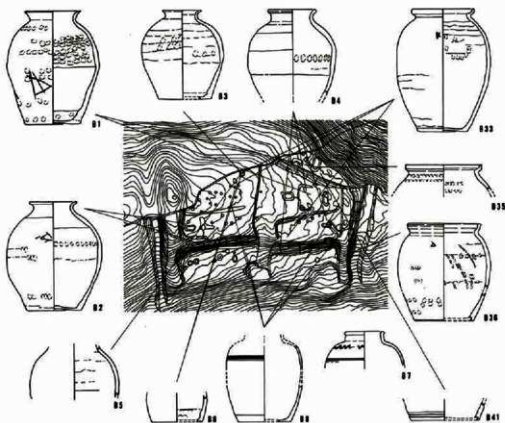
押図56 石製品（石臼・茶壺）の出土状況

ある。そして、隣接する曲輪において出土状況が重複する個体については判別しにくいものがあり、遺構の説明では曲輪単位の土器は一応の分類をしておいたが、改めて接合関係を示す意味で、以下押図57～63にて、器形毎にまとめて分布状況を示す。

器種・器形分類については、次節で詳述するが、丹波焼・備前焼の壺（押図57）、丹波焼壺（押図58）、丹波焼甕（押図59）、丹波焼・備前焼德利、瀬戸・美濃焼皿・天目茶碗、中国産白磁・青花の皿と土師器鉢・小皿（押図61）、丹波焼小瓶・小甕（押図60）、丹波焼播鉢・控鉢（押図62・63）についての分布状況である。

丹波焼、備前焼の壺・小甕の出土状況について押図57・58の通りである。備前焼壺B7・B8は、いずれも北堀切に破片があり、B8は第1・2曲輪と接合関係を有する。丹波焼壺で曲輪間の接合関係を有するものはB1、B2、B4、B10、B11、B12、B21、B33、B116がある。接合関係は ①第1曲輪と東斜面（B2）、②第1曲輪と第2曲輪建物4（B10）、③第2





挿図57 丹波・備前焼 壺・小甕出土状況

曲輪建物3と建物4 (B4)、④第2曲輪建物と西腰曲輪土壇1 (B1、B11)、⑤第2曲輪建物4と東第1腰曲輪、⑥第2曲輪と北堀切 (B12)、⑦西腰曲輪土壇1と北土塁、堀切 (B116) などがある。

整理すると、B1は第2曲輪建物3と(西腰曲輪土壇1)、B2は第1曲輪土壇1、B4は第2曲輪建物3と(建物4)、B21は東第2腰曲輪、B33は第1曲輪土壇3と(第2曲輪建物4)、B116は西腰曲輪土壇1に所属する。

曲輪別によると第一曲輪では土壇1 (B2)、土壇3 (B3・B6・B33)、第2曲輪では建物3 (B1・B4・B11・B20)、建物4 (B10・B12・B17)、西腰曲輪では土壇1 (B9・B19・B116) に所属する。つまり、第1曲輪・第2曲輪・西腰曲輪の各曲輪にある。

丹波焼甕は裏と大甕に分類できるが、曲輪間の接合関係を有するものは第1曲輪と第2曲輪 (B30)、第2曲輪と西腰曲輪 (B31)、第2曲輪と東第2腰曲輪 (B26) がある。いずれも、所属を想定することができ、B27・B30は第2曲輪建物4、B31は西腰曲輪土壇1となる。整

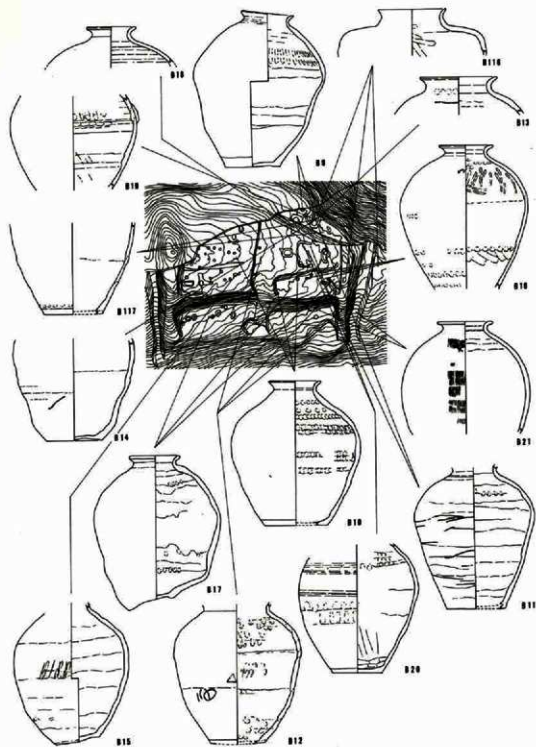
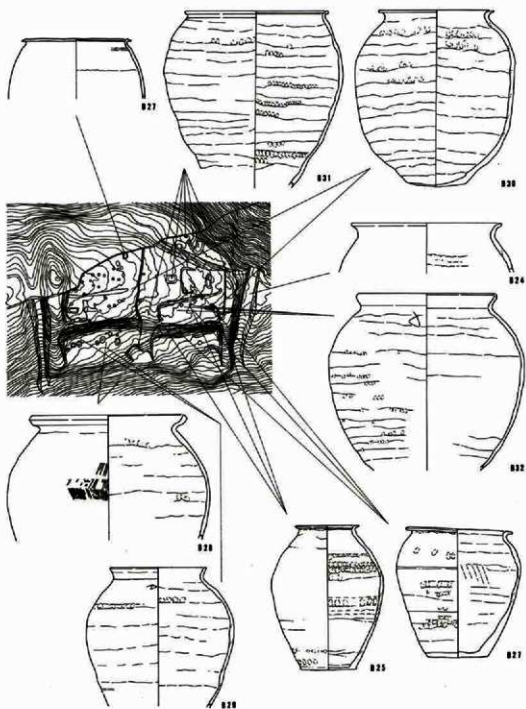
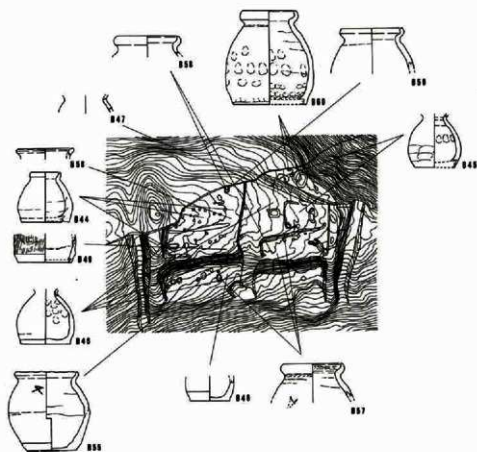


插图58 丹波焼 甕出土状况



神岡58 丹波桃 壺出土状況



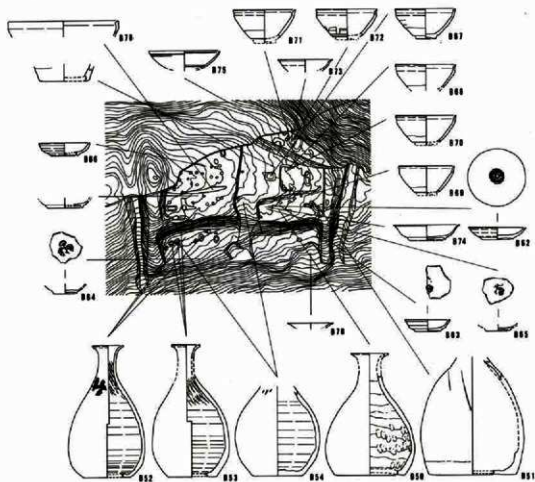
挿図80 丹波焼 小瓶・小甕出土状況

理すると甕類は、第1曲輪では土壌3 (B27)、第2曲輪では建物3 (B26)、建物4 (B25・B30、大甕B32)、西腰曲輪では土壌1 (大甕B31)、東第1腰曲輪ではB28・B29となる。ほぼ曲輪毎に甕が座っている。

丹波焼の小瓶・小甕といった小物についての出土状況を見ると、曲輪間の接合関係が著しい。第1曲輪と第2曲輪 (B46、B58)、第2曲輪と西腰曲輪 (B45)、第2曲輪と東第1腰曲輪 (B57) 間での動きがある。整理すると、小瓶では第1曲輪 (B44、B46、B49、B56)、第2曲輪では建物3 (B45)、東第1腰曲輪では (B48) となる。小甕では第1曲輪では土壌3 (B58、B59)、第2曲輪では建物4 (B57)、西腰曲輪では土壌1 (B60)、東第1腰曲輪ではB55となる。

小瓶は第1曲輪に4点と多いが、第2曲輪、東第1腰曲輪にもあり、小甕にいたっては第1、2曲輪東第1腰曲輪、西腰曲輪にそれぞれ出土している。

供膳具を中心とした小物の出土状況については、曲輪間の接合関係を示すものは、第2曲輪

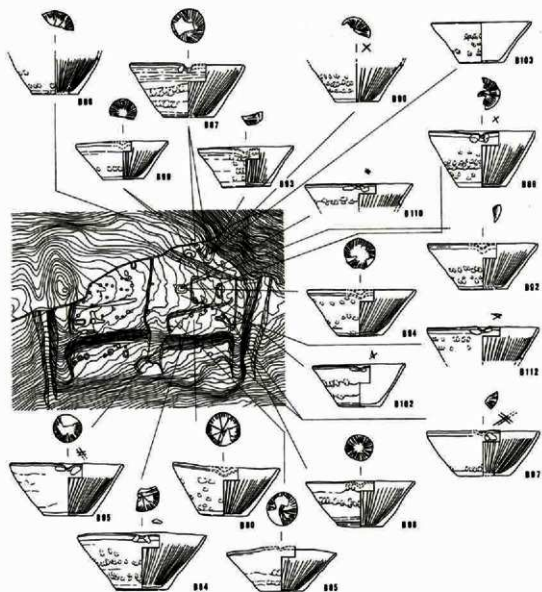


挿図81 徳利・碗・皿類出土状況

虎口と東第1腰曲輪の備前焼徳利B54のみであり、曲輪内での接合関係を示すものも距離が短く、東第1腰曲輪の備前焼徳利があるのみで、多くは出土地点、出土遺構がまとまっている。

器形毎に述べると徳利は第2曲輪建物4で備前焼のB51と丹波焼のB50があり、東第1腰曲輪では備前焼のB52～54、3本がまとまる。食器としての皿は、第1曲輪では瀬戸・美濃焼灰釉皿B66、第2曲輪では建物4で瀬戸・美濃焼灰釉皿B62、B63、B65と中国産白磁皿B73・青花碗B75、また、東第2腰曲輪では灯明皿として使用されたものか土師器小皿B76がある。瀬戸・美濃焼の天目茶碗は、第2曲輪では土壌1(B67)、建物3(B68・B70)、建物4(B69)、そして、西腰曲輪ではB71、B72の2点がある。また、土師器鍋小片が、第1曲輪から出土している(B78)。

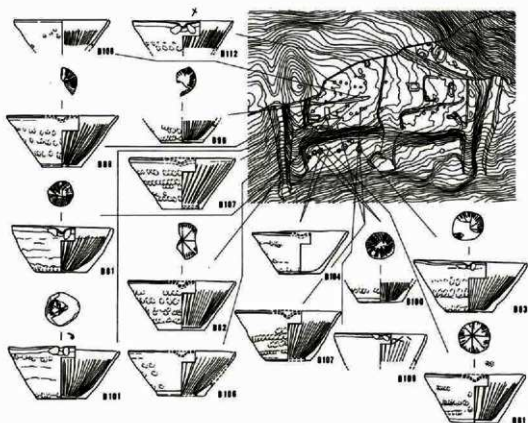
中世土器の約3割を占める鉢(擂鉢、控鉢)の出土状況で曲輪間の接合関係を有するのは、



挿図82 丹波焼 摺鉢出土状況1

第1曲輪と東第1腰曲輪土壌5 (B107)、第2曲輪と東第2腰曲輪 (B97)、第2曲輪と西腰曲輪 (B89) との3例を除くと曲輪内の近接した出土状況を示しており、出土遺構の特定もできる。

曲輪別の出土状況を示すと、第1曲輪では溝は5点 (B81・B88・B96・B101・B108)、土壌1 (B106)、土壌2 (B82)、柱穴 (B109) と土壌3 (B112) では各1点、併せて9点出土している。第2曲輪では建物3は2点 (B98・B102)、土壌1は4点 (B92・B94・B110・B



挿図63 丹波焼 播鉢出土状況 2

112)、建物4は6点(B80・B84・B85・B95・B97・B98)となり、併せて12点が出土している。西腰曲輪では土壌1は5点(B87・B90・B93・B99・B103)と土壌3(B86)で併せて6点出土している。東第1腰曲輪では、土壌6(B100)、土壌2(B104)、溝(B81)の各1点と土壌5(B83・B105)の2点と併せて5点出土している。すなわち、鉢類は第1曲輪9点、第2曲輪12点、西腰曲輪6点、東第1腰曲輪5点の鉢が出土し、中でも捏鉢は第2曲輪建物3、西腰曲輪土壌1、東第1腰曲輪土壌1で1点ずつ出土している。

ここで、出土状況を曲輪別器形別にまとめると、第1曲輪22点(壺4、甕1、小瓶4、小甕2、皿1、鍋1、播鉢9)、第2曲輪34点(壺7、甕3、小瓶1、小甕1、德利2、皿4、天目茶碗4、播鉢11、捏鉢1)、西腰曲輪15点(壺3、甕1、小甕1、皿2、天目茶碗2、播鉢5、捏鉢1)、東第1曲輪14点(甕3、小瓶1、小甕1、德利3、皿1、播鉢4、捏鉢1)と東第2腰曲輪1点(皿1)となり、德利や天目茶碗は偏在する傾向もあるが、未調査分(第1曲輪、西腰曲輪)を加味すると、概ね第2曲輪と西腰曲輪に遺物の出土頻度が高い。



## 第2節 中世以前の遺物

### 1. 須恵器 (挿図64・65)

中尾城堀切の北約30~35mの根根上で数片まとまって出土した(挿図64)のをはじめとして、東第1腰曲輪などで出土している。いずれもトレンチ調査および全面調査の際の表土掘削中に出土したもので、遺構に伴うものはない。器種としては杯Bに分類されるものが大半で、他に甕の破片等も出土している。以下、主な土器について説明していく。

A1は、F-3区からE-4区にかけて出土した杯である。全体的に歪みが著しい。やや厚底部から斜上方に体部がほぼ直線的にのび、口縁部を薄くおさめている。高台は、断面方形のしっかりしたもので、底部から体部への変換部より内側に付き、外端部で接地している。残存率は約1/8以下で、口径15.8cm、高台径10.6cm、器高3.7cmと復原される。径高指数は23である。

A2は、F-3地区より出土した杯Bである。高台から口縁部にかけてわずかに残存するのみである。口径15.0cm、高台径11.9cm、器高4.0cmと復原される。径高指数は26である。体部は斜上方にほぼ直線的にのび、口縁部は薄くおさめられている。高台は、断面方形のしっかりしたもので、A1と同じく底部から体部への変換部よりやや内側に付けられている。

A3は、G-3区からの出土で、底部のみの残存である。高台径は11.1cmである。高台は、底部から体部への変換部よりやや内側に付き、外端部で接地している。

A4は、G-2区からの出土で、A3とほぼ同様な残存状況である。高台径は10.7cmで、全面で接地している。高台の付き方もA3同様である。

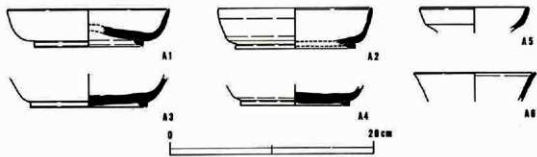
A5は、東第1腰曲輪表土層からの出土である。口縁部のみの残存である。口径は10.6cmと復原される。口縁部下約1.5cmの箇所屈曲が認められ、以下の外面は横方向のへら削りにより仕上げられている。器種については、小片のため明確ではないが、杯と考えられる。

A6はG-5区より出土している。口縁部のみの残存で、復原された口径は11.9cmである。口縁部は下方から斜上方にほぼ直線上にのび、端部をわずかに外反させ薄くおさめている。内外面に釉が付着している。長頸壺の口縁部と考えられる。

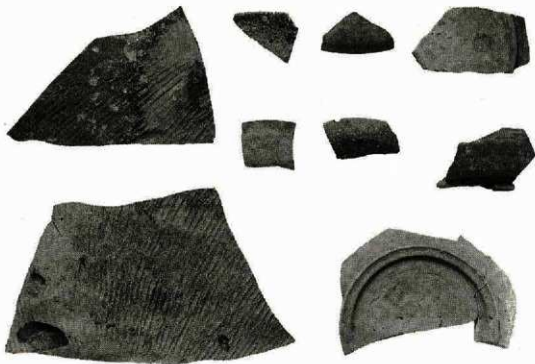
この他、東第1腰曲輪からも大甕の胴部の破片が2片出土している(挿図65)。外面は右上がり方向の叩き成形後、横方向のカキ目が施されている。内面は、同心円文を横ナデにより消されている。

A1からA6については、その形態的特徴から、奈良時代後半と考えられる。また、東第1腰曲輪出土の土器については、古墳時代と考えられる。ただし、これらの須恵器は遺構に伴うものではなく、その性格については不明である。





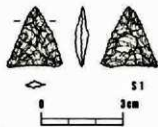
挿図挿図04 須恵器



挿図05 須恵器

## 2. 石器

長さ2cmを超える大型の凹基無茎式石鏃である。両面とも丁寧な調整加工を施す。図右面の中央には、一次剝離面が残る。大きさと風化度から弥生時代の所産と考えられるが、土器などは伴出せず、単独出土である。サヌカイト製。長さ2.2cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ1.2g。



挿図06 石鏃

### 第3節 中世の遺物

中世の遺物として、中尾城跡の遺構に伴う土器が整理箱で64箱出土しており、丹波焼、備前焼、瀬戸・美濃焼、中国産白磁・青花と土師器がある。石製品は石臼、茶磨(茶臼)、砥石、基石と礎石がある。また、210点余の金属製品があるが、90%以上を釘が占め、鐵、鍋、鎌、火打金の鉄製品と中国銅銭(宋・明銭)がある。そして、炭化種実と炭化材が数多く出土し、山城としては豊富な遺物がある。

#### 1. 土器

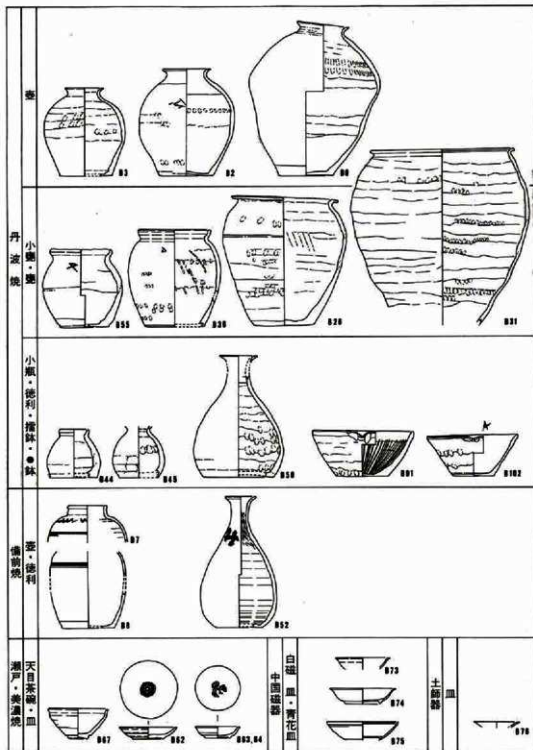
本書では、山城に伴う土器を中世土器と呼ぶことにする。中世土器は陶器(丹波焼、備前焼、瀬戸・美濃焼)、磁器(中国産白磁・青花)と土師器に分類される(挿図67)。出土遺物は多くが復原でき、主要なものは図化し、117点を掲載した。播鉢は片口部の手印などから個体色別し、図化に至っていないものなど若干個体の変動があるが、117点を総数と定めると、陶器が110点、磁器が3点、土師器が4点となり、陶器が94%を占め、土師器の割合が極端に少ない<sup>1)</sup>。陶器のうち、丹波焼91点(77.7%)、備前焼7点(6.0%)、瀬戸・美濃焼12点(10.3%)に分類され、地元産の丹波焼が圧倒的な消費割合を占めるのは自然である。また、生産地別に考えると地元産(丹波焼、土師器)が95点、81.2%を占め、他の日本産(備前焼、瀬戸・美濃焼)が19点、16.2%、そして外国産(中国産白磁・青花)が3点、2.6%となり、中世陶器生産地近くの中世城館での占有は、あまりにも土師器の出土点数が少ないことを除けば同じ傾向を示している<sup>2)</sup>。また、福井県一乗谷遺跡例などと比較すると、他の日本産と外国産との占有率が逆転している<sup>3)</sup>。

つぎに、器種形態により中世土器は、壺、甕、小甕、德利、小瓶、皿、碗、鍋、播鉢、捏鉢に分類される<sup>4)</sup>。中世土器の中で、中世陶器、壺・甕・鉢のセットが窯業生産を確立させることから、その組成をみると、壺32点(丹波焼29点、備前焼3点)27.3%、甕・小甕19点(丹波焼)16.2%、鉢35点(丹波焼)29.9%となる。丹波焼の生産地をひかえた消費形態で96.5%を丹波焼が占る。そして、德利+小瓶が11点(5+6)9.4%、皿+碗が16点(9+7)13.7%、その他として鍋と竈道具のみがある。德利は備前焼4点、丹波焼1点と小瓶は丹波焼の6点のみである。皿は瀬戸・美濃焼6点と中国産白磁2・青花1点、そして土師器1点がある。碗は瀬戸・美濃焼の天目茶碗6点がある。

丹波焼は小甕、小瓶、德利と器種のバラエティーを生み出す時期にあたり、皿、天目茶碗は瀬戸・美濃焼と中国産白磁が中心である。

#### 丹波焼

丹波焼<sup>5)</sup>91点については、壺、甕類(甕、小甕)、德利、小瓶、鉢類(播鉢、捏鉢)とくに分



挿圖07 中尾城跡出土土器 器種分類圖

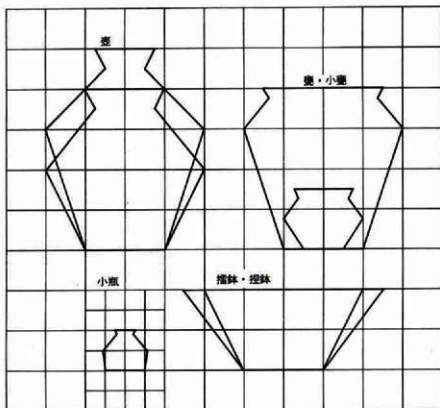
類する。壺29点 (31.8%)、甕類19点 (16.2%) (甕13点 (14.2%)、小甕6点 (6.5%)、徳利1点 (1.0%)、小瓶6点 (6.5%)、鉢類35点 (29.9%) (播鉢32点 (35.1%)、捏鉢3点 (3.3%))、匣1点 (1.0%) となる。

ここで、丹波焼の分類模式図 (挿図68) にみる丹波焼は、貯蔵具としての壺、甕 (小瓶)、調理具としての鉢、供膳具としての小瓶、徳利があるので口径が最大胴径に対して35~50%、高さ/底径が1.5~2.0のものを壺とし、口径が最大胴径に対して60%以上、高さ/底径が1.5~3.0のものを甕とする (但し、二重口のB25は甕とする)。小甕としたものは、高さ/底径が1.5位であるが、口径が最大径に対して60%以上のもので、小壺とは呼ばない。鉢は、口径が底径の2~2.5倍、高さは底径とは同じであるものを鉢と呼ぶ。なお、一本引きの卸目のあるものを播鉢、卸目の無いものを東播系の鉢という捏鉢とする。出土炭化種実などからも、使用対象などを復原できる調理具である。他に、小瓶や徳利がある。

つづいて、器種毎の説明を行う。

**壺** (図版31~34、挿図73・75~78)

丹波焼壺の特徴は、渾美系とも思える壺の口造りを踏襲しているかのごとく、肩部から口頸



挿図68 丹波焼の分類模式図



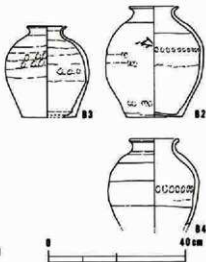
挿図99 丹波焼 壺形態変化

部へ変化する箇所に段を設け、底部からの紐造り整形の繰り返すから、轆轤にて口造りする接合部との処理を行うことであり、平安時代の菊花文三耳壺<sup>27)</sup>では、この部分に花卉を繞らしている。中世を通じて、この段のなごりの特徴とする。また、成形の基本は三段造りであるが、器高中央でくびれ、底から一段、二段と直線的で、算盤玉形となるものから、三段造りが顕著となり、そして三段目がより丸く成形される轆轤技術の進歩がみられ、最後には、紐造り轆轤成形でも、器形が丸く仕上げる壺を生み出す。

完形に復原しえる壺は6/30点であるが、B1を除けば、口径/胴径は0.37~0.49となり、器高/底径が2.0以下の壺Iと2.5以上の壺IIに分かれる。そして、口径/器高は0.4~0.66と0.3に分かれる。つまり、壺IはB1~B6、壺IIはB9~B22、B116と底部片のB37~B43、B117に分類する。

B1は算盤玉形の器形をとり、口縁をやや直立気味に肥厚しながら外開きし、胴部にヘラ描きで多面に「の」「本」「森」などが刻まれており、より古相を示す。

B2、B3、B4はB1に比らべ安定した器形を整え、丸胴をなし、口造りによる変化を認め、轆轤による外反の口造りと更に端部を丸くまとめる後出の要素を認める。つまり、壺IではB1→B2・B3→B4と新しくなる。B9はやや内傾気味に直立する口頸部の上半を外反させたもので紐造り三段成形のため、不安定な器形である。B10は、B9の口造りを踏襲しながら頸がやや長く、肥厚することなく反り口となり、器形も安定した形態をとる。B17は、頸が短くなり、口縁端が丸くまとまる。焼成時の炎の力で歪みがみられる。B21は、轆轤技術が上がり、球形に近い丸胴で、肩の付け根から屈折して大きく外反する口造りで



ある。胴部は猫掻き手の手法を用いて調整を行い、「×」の手印とともに室町中期以降のものである。

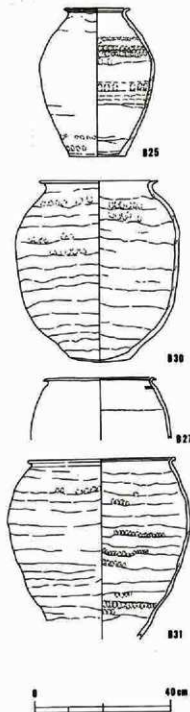
壺ⅡはB9→B10→B17→B21と新しくなり、壺Ⅰと壺Ⅱとの関係は、壺ⅠB1は壺ⅡB9より先行し、壺ⅡB17は壺ⅠB4と併行するが、壺ⅠB2・B3はB4より先行すると考えるが、壺ⅡB17と併行する時期と位置づける。また、B37は壺んだ底で焼台や窯床が付着したもので、B17同様使用されている壺がある。

壺 (B24~B36) (図版35~39、挿図79~82)

完形に復原するものは5/13点あり、口径/胴径はB25を除けば、0.63~0.80である。

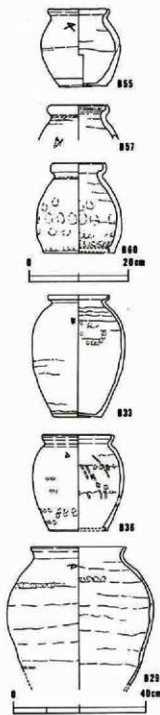
13~14世紀代とされる多紀郡篠山町安養寺中世墓地出土の壺<sup>4)</sup>は、「つよく外反する口縁部の内側に凹線をもつ、いわゆる二重口のタイプ」で丹波独特の口造りで胴部二面に

「の」の字の篋掻きと窯印がある。この壺の系譜を引くB25は「細身のタイプの壺」で口径/胴径は0.51と壺の範中となり、B27は「大きく外方に屈折させた口縁、肩の張りを失って緩やかなカーブをえがく胴部」となり、B31は口縁端部が丸くまとなり、後出なものである。壺は機能分化し、また備前



挿図78 丹波焼 壺形態変化

焼の影響を受け大甕を生み出す。B28は室町時代中期とされる大甕に近いもので内湾する幅広い口縁をもった大甕で、器面を猫掻き手の手法で調整している。B32はより口造りが輪軸を容易



挿図71 丹波焼 小甕他形態変化

に用いた手法で行い、大形化する。備前の大甕と対向するかの  
 ような製品である。この口造りは近世の大甕に踏襲される。肩  
 部が上がる傾向をもち、底が安定した形の甕もあり、B26は後  
 出的である。B29は室町時代前期の外反する口頸部で口縁は内  
 面に凹線を有する二重口の系統から新しく生みだされたタイプ  
 であろう。また、口縁が受け口となる。B33～B36の甕がある。  
 B33は、口造りがナデを利用して受け口を造り、肩部に「×」  
 の手印がある。B36は、口造りが轆轤で上手に扱うことにより、  
 強いナデで口造りをし体部も丸く造り出される甕である。B29  
 は大形であるが、口造りが轆轤で外反し、肩部に「△」の手印  
 がみられる。

#### 小甕 (図版42、挿図84)

小甕とする中に、本来小壺とされた土器があるが、本書では  
 口径と胴径の比率より小甕と呼ぶことにする。口造りが特徴的  
 であくまで紐造りで轆轤で口造りをするが、頸部のしぼり痕が  
 顕著である。完形に復原するものは2/6点、口径/胴径は0.58、  
 0.75で高い。

B55は受け口の口造りが比較的薄く、均一な厚さを出せない  
 もので、器形が算盤玉形に近くより古相を示し、B60の受け口  
 は厚く轆轤で口造りされ、器形よりも底近くに最大径を取り安  
 定した形状へ変化する。受け口の口縁は甕B33や轆轤技術が進  
 歩し、ナデが強く施され、より球形に近い形態を取り安定した  
 甕B36がある。各々肩部に「×」の手印をもっている。

#### 小瓶 (図版40、挿図83)

紐造りで、内面にユビオサエが顕著なもので、口縁が判る土  
 器はB44のみで、猫掻きと呼ばれる櫛状工具により下から上へ  
 の調整はB49に著しいが、B44、B45にも観察され、猫掻きの  
 ナデ消されている。器形は底径と高さかほぼ等しく、口径は  
 器高や底径の1/2に近い。

#### 徳利 (図版40、挿図83)

丹波焼の徳利はB50の1点のみで、紐造りであるため、器壁  
 も厚く大きい。備前焼にみられる外面の削り調整はなく、ヨコ  
 ナデで調整する。内面には、粘土の巻き上げと、ユビオサエが

顕著に残る。

#### 匣 (挿図84)

B61は胎土などから丹波焼で焼成時に使用する窯道具と考えられる。近世以降のものと胎土他が異なる。

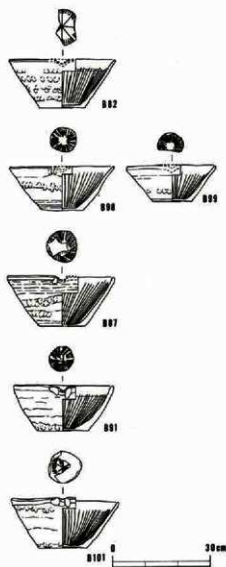
#### 播鉢 (図版43~46、挿図85~88)

丹波焼の播鉢は一本引の卸目をもつことを中世の特徴で、後に備前焼の播鉢の影響を受け櫛目となる。古相の播鉢は、稲荷山窯焼成の口縁が内湾、内傾するもので卸目は、おそらく第1に十字に割り付けがされ、更に中心から放射状に均等に割り付けがされるように一本引を行う。片口は親指で押え、造り出され、片口内面には大きく、笥で手印がえがかれている。整形はやはり紐造り三段造りで、何れも2段目についてはユヒオサエをそのままのこし、ナデで仕上げる。重ね焼き焼成である。

中尾城出土の播鉢は、卸目の一本引きの方法で5タイプに分類できる。

1. 4本により8分割に割り付けた後、中心から小分割単位の方角にて一本引きをする(B80~84)。ただ、5本による10分割もある(B85)。口縁端部の造りに強い凹線気味のナデを施すB84などに差がある。

2. 中央の割り付けが本来の求心的なものではなく、形骸化していくようで、中央からずれる。1. でみられた分割に似た割り付けで、中央の余白が



挿図72 丹波焼 播鉢形態変化

なく、分割一本引きを行う(B88~B93)。

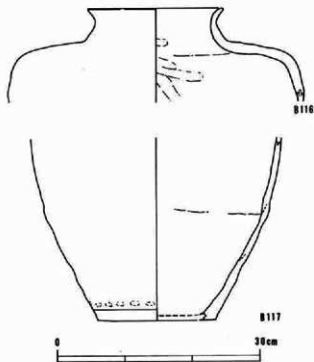
3. 中央の割り付けが無くなり、空白とし、1・2のように8分割に近い方法で、分割一本引きをし、転回し、求心的である。空白の広いものB94~B97と空白の狭いものB98~B100に細分できる。B99は2)のB93と同じく法量の小さいものである。

4. 3. のように求心的に転回する分割一本引に、形骸化した十字の割り付けがみられる。

5. 中央の割り付けが、側面の卸目につながらなくて、文様化したもの

また、口縁形態により4タイプに分類できる。a. 外開きで、直線的に口唇へと引きあげら



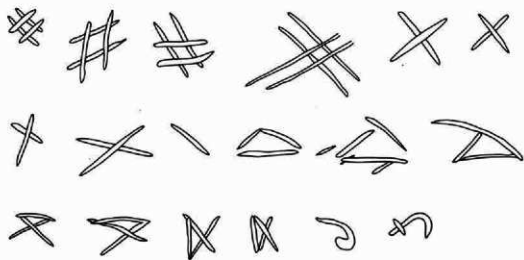


挿図73 丹波焼 壺

新しくなると考える。また、片口内面右に手印が多くの個体で観察される。

挿録 (図版45・46、挿図88)

B102～B104の3点で、外開きで直線的な口唇の面取りを施した、断面三角形を呈し、古相



挿図74 手印

れ、端が古相の断面三角形気味に造り出される(B80～B83)。B82は口唇に沈線が引かれている。b、口唇をナデで、押えることによりその下が肥厚し、断面三角形を呈する。c、口唇外端を指で凹線気味に強くナデ、かつ内傾気味である(B87、B87、B101)。d、器壁が厚く口唇外端を凹線にナデ、底からの造りが内湾気味である(B91)。

ここで、卸目と口縁形態と組み合わせると、1 a (B80)、2 a (B92)、2 b (B89)、3 a 広 (B94)、3 a 狭 (B98)、4 c (B87)、4 d (91)、5 (B101) などに分かれる。1 a→2 a、3 a 広→3 a 狭と新しくなり、2 a→2 b→4 c→4 dと

を示すもので、内面は平滑に使用され、磨滅している。また、片口内面に「×」の手印がある。

これまで、丹波焼の出土量が少いため、鉢類の検討が遅れていたが、本資料により、使用用途による播鉢と捏鉢の共存が考えられ、卸目の有無による前後関係は単純には決められない。

#### 手印 (図版47、48、挿図74)

壺B1にみられる古相の篋描きは、三樹文の糸譜の三角文「卩」で、形が小さくなり、陶工集団の記号とでもいえる手印「△」「△」「△」に変化する。同じくB1でみられる「の」の字の篋描きも古相のものである。稲荷山窯産とされる宝塚市堂坂出土の播鉢にある「又」の手印は大きい、中尾城跡出土のものは小さく「又」「又」に変化する。同様に「×」も「×」へ小さく記号化する。

器種毎に分類すると、壺は「卩」「の」「△」「×」「×」「△」「△」「や」、甕は「△」「×」、小甕は「又」「×」、播鉢は最も多く、「×」「△」「×」「井」「×」「つ」「メ」「×」「又」「又」「△」、捏鉢は「×」がある。そして、壺には細い沈線による文様がみとめられるB11～B15がある。陶工個人または集団の多さを手印のバラエティーが示しているとすれば、播鉢にあらわれたバリエーションが壺や甕にも存在していると思われる。播鉢の出土点数が他の器種と比べて多く、いままでの丹波焼のイメージを一掃するものであった。

#### 備前焼 (図版41・42、挿図75、83)

三本の櫛歯で描く、肩部の波状文と平行線を特徴とし、玉縁口縁の櫛目文壺B7・B8の2点と、肩部に円板貼付するB23と徳利4点B51～B54が備前焼で、丹波の中世城館でもよく出土する播鉢や甕はない。

徳利はB51とB52～B54の2タイプがあり、B51は紐造りを行い器壁が厚いもので底部はタテナデを施す。肩部に2本沈線により割り付けられた線画がある。火を受けさせている。B52～B54は轆轤水挽き成形により薄く仕上げられ、底部から胴部にかけて左下から右上へ細い削りで、より薄く調整されている。頸はしばって細く整形している。B52は櫛目による手印がみえる。

伊藤 晃氏の編年作業の追認と、瀬戸・美濃焼の共伴関係から16世紀第3四半期に徳利B52～B54を位置づける<sup>9)</sup>。

#### 瀬戸・美濃焼 (図版49～51、挿図84)

瀬戸・美濃焼とするものは、皿5点と天目茶碗6点がある<sup>10)</sup>。皿は3分類できる。①B62は口径11.5cm、高2.5cm、底内面に16弁菊花押印文様が施され、全面に灰釉がかけられており、重ね焼きのためか高台畳付きの部分の釉が剥れている。底には輪トチンの痕跡がある。②B63～B65は3客が組物で、口径8.5cm、高2.2cm、底内面に双葉をもつ一輪菊花押印文様が施され、全面に灰釉をかけているが、二次的な熱を受け、釉が剥落した箇所を観察すると、底部は回転ケズリが施され、口縁は強いナデによりケズリ気味に外反している。③口径10cm弱の小皿で、全

第1表 中世土器一覽表

番号	器種	出土地区・遺構	法					量				特 徴			分類	備考		
			口径cm	器高cm	底径cm	最大径cm	残存率	厚さmm	口径/器高	口径/底径	口径/器高	口径/底径	手印	底縁			その他	
B1	壺	第2曲輪、西腰曲輪	16.0	33.5	16.8	27.9	1/2	11~22	0.57	0.48	0.95	1.99	○			丹波	○	
B2	壺	第1曲輪	15.9	21.8	15.3	28.3	1/2	9~16	0.49	0.64	0.91	1.43	○			丹波		
B3	壺	第1曲輪土壇3	10.9	26.3	14.9	24.2	1/2	7~18	0.45	0.41	0.73	1.77				丹波		
B4	壺	第2曲輪	13.2	—	—	26.0	3/4	10~	0.51	—	—	—				丹波	○	
B5	壺	第1曲輪土壇3	—	—	—	—	1/6	9~10	—	—	—	—				丹波		
B6	壺	第1曲輪土壇3	—	—	15.0	18.0	1/6	10~14	—	—	—	—				丹波		
B7	壺	北堀切	10.4	—	—	—	1/3	0.5~10	—	—	—	—			横波状文注線	備前		
B8	壺	北堀切、東第2腰曲輪	—	—	15.4	—	1/6	6.5~10	—	—	—	—			比線	備前	○	
B9	壺	西腰曲輪	14.9	45.8	16.5	39.1	2/3	7~21	0.38	0.33	0.90	2.78				丹波		
B10	壺	第1曲輪、第2曲輪土壇2	14.0	42.0	166	37.8	1/2	7~14	0.37	0.33	0.85	2.55				丹波	○	
B11	壺	第1曲輪、第2曲輪	—	—	—	35.7	2/3	10~15	—	—	—	—			へろ瓦線	丹波	○	
B12	壺	北堀切、土壇	16.2	—	—	37.2	1/2	7~18	0.44	—	—	—	○			丹波	○	
B13	壺	西腰曲輪土壇1	22.0	—	—	—	1/6	10~16	—	—	—	—			へろ瓦線	丹波		
B14	壺	西腰曲輪土壇1	—	—	16.2	—	1/3	7~18	—	—	—	—			へろ瓦線	丹波		
B15	壺	第1曲輪	—	—	13.1	34.1	1/2	—17	—	—	—	—			へろ瓦線	丹波		
B16	壺	第2曲輪	15.3	—	—	37.8	5/6	8~	0.40	—	—	—	○			丹波		
B17	壺	第2曲輪	14.1	45.4	13.6	37.5	1/2	9~18	0.38	0.31	1.04	1.04			横波み	丹波	○	
B18	壺	第2曲輪	13.9	—	—	—	1/6	10~14	—	—	—	—				丹波		
B19	壺	西腰曲輪土壇1	—	—	—	37.4	1/6	9~15	—	—	—	—				丹波		
B20	壺	第2曲輪建物1 東第1腰曲輪	—	—	14.9	35.5	2/3	9~12	—	—	—	—				丹波	○	
B21	壺	第1曲輪、第2曲輪	14.7	—	—	28.0	1/3	11~	0.39	—	—	—	○	○		丹波	○	
B22	壺	第2曲輪西斜面	—	—	—	—	1/6	9~	—	—	—	—			粘土貼付	丹波		
B23	壺	第2曲輪西斜面	—	—	—	—	1/8	8~10	—	—	—	—			粘土貼付	備前		
B24	壺	北堀切	43.6	—	—	—	1/6	11~16	—	—	—	—				丹波		
B25	壺	西腰曲輪土壇3	17.0	42.5	16.6	33.5	2/3	7~18	0.31	0.40	1.02	2.56				丹波	○	
B26	壺	第2曲輪建物1	29.5	37.6	17.8	37.0	2/3	8.5~	0.80	0.78	1.66	2.11				丹波		
B27	壺	第1曲輪土壇3	30.2	—	—	—	1/3	7~	—	—	—	—				丹波		
B28	壺	東第1腰曲輪	44.8	—	—	67.0	1/6	10~	0.67	—	—	—		○		丹波	○	
B29	壺	第1曲輪、東第1腰曲輪	28.1	—	—	44.3	5/6	7~	0.5	—	—	—	○			丹波	○	
B30	壺	第1曲輪、第2曲輪	34.1	52.4	17.0	48.0	2/3	11~20	0.71	0.65	1.91	2.93				丹波	○	
B31	壺	第1曲輪、第2曲輪	55.6	—	—	70.8	5/6	10~	0.79	—	—	—				丹波	○	
B32	壺	第2曲輪、北堀切	94.0	—	—	77.8	5/6	10~	0.69	—	—	—	○			丹波	○	
B33	壺	第1曲輪、第2曲輪	17.7	36.2	14.7	26.8	2/3	8~12	0.66	0.49	1.20	2.45				丹波	○	
B34	壺	西腰曲輪土壇1	18.6	—	—	—	1/6	10~12	—	—	—	—			口縁	丹波		
B35	壺	西腰曲輪土壇1	21.7	—	—	—	1/6	10~	—	—	—	—			口縁	丹波		
B36	壺	北堀切	20.4	28.1	17.1	27.0	2/3	9~16	0.76	0.73	1.49	1.64	○			丹波		
B37	壺	第2曲輪土壇2	—	—	15.5	—	1/6	8~16	—	—	—	—			底	丹波		
B38	壺	第1曲輪土壇3	—	—	15.6	—	1/6	7~20	—	—	—	—			底	丹波		
B39	壺	第1曲輪、第2曲輪	—	—	17.0	—	1/3	9~17	—	—	—	—			底	丹波		
B40	壺	第1曲輪、東第1腰輪	—	—	14.0	—	1/6	5~14	—	—	—	—			底	丹波	○	
B41	壺	西腰曲輪	—	—	20.1	—	1/6	10~14	—	—	—	—			底	丹波		
B42	壺	第1曲輪	—	—	18.5	—	1/6	10~21	—	—	—	—			底	丹波		
B43	壺	東第1腰曲輪	—	—	14.8	—	1/6	—17	—	—	—	—			底	丹波		
B44	小瓶	第1曲輪	4.7	9.3	9.3	10.6	1/2	—18	0.44	0.50	0.50	1.00	○			丹波		
B45	小瓶	西腰曲輪	—	(10.4)	(7.9)	10.2	2/3	8~10	—	—	—	—	○			丹波	○	
B46	小瓶	第2曲輪	(4.5)	(10.1)	9.8	11.2	1/2	—10	—	—	—	—				丹波		
B47	(小瓶)	第2曲輪	—	—	—	—	1/6	11~	—	—	—	—			底	丹波		
B48	小瓶	東第1腰曲輪	—	—	7.8	9.5	1/3	6~12	—	—	—	—			底	丹波		
B49	小瓶	第1曲輪	—	—	10.7	12.0	1/6	5~10	—	—	—	—		○	底	丹波		
B50	德利	第2曲輪	(7.0)	(14.0)	(14.0)	(17.0)	5/6	—11	—	—	—	—				丹波		
B51	德利	第2曲輪、北堀切	—	—	16.9	—	1/2	10~17	—	—	—	—	○			備前	○	
B52	德利	東第1腰曲輪	5.9	25.8	9.1	15.2	2/3	5~9	—	—	—	—	○			備前		
B53	德利	東第1腰曲輪	5.4	25.8	9.6	15.3	2/3	4~13	—	—	—	—				備前		
B54	德利	第1曲輪、第2曲輪 東第1曲輪	—	(17.4)	(9.4)	(16.8)	1/3	—	—	—	—	—	○			備前	○	
B55	小瓶	東第1腰曲輪	11.9	15.4	9.8	15.8	1/2	11~16	0.75	0.77	1.21	1.57	○	○		丹波		
B56	小瓶?	北堀切、東第1曲輪	10.4	—	—	—	1/6	9~	—	—	—	—			口縁	丹波	○	
B57	小瓶	東第1腰曲輪	11.2	—	—	—	1/6	11~	—	—	—	—	○			丹波		
B58	小瓶	第1曲輪土壇3 第2曲輪	11.7	—	—	—	1/6	6~10	—	—	—	—			口縁	丹波	○	
B59	小瓶	第1曲輪土壇3	10.6	—	—	—	1/3	9~11	—	—	—	—				丹波		
B60	小瓶	西腰曲輪	10.0	17.1	14.2	17.2	1/3	8~13	0.58	0.58	0.70	1.20				丹波		
B61	埴	西腰曲輪	—	—	—	—	1/6	5~8	—	—	—	—				丹波		
B62	皿	第2曲輪	11.5	2.5	5.8	—	1/1	4~9	—	4.6	1.98	0.43				横波、瓦線		

番号	器種	出土地区・遺跡	法 量							特 徴			分類	発掘 年次関係			
			口径cm	器高cm	底径cm	最大径cm	残存率	容リml	口徑/胴径	口径/器高	口径/底径	器高/底径			手印	施銘	その他
B63	皿	第2曲輪	8.5	2.3	4.8		1/2	4~6		3.69	1.77	0.48			肌スタンプ	瀬戸・美濃	
B64	皿	東第1曲輪	—	—	4.6		1/3	3~5		—	—	—			肌スタンプ	瀬戸・美濃	
B65	皿	東第2曲輪	—	—	4.6		1/3	4		—	—	—			肌スタンプ	瀬戸・美濃	
B66	皿	第1曲輪、第2曲輪 東第2曲輪	9.8	2.6	5.3		5/6	3~8		3.76	1.85	0.49				瀬戸・美濃	◎
B67	天目茶碗	第2曲輪	11.7	6.0	3.8		1/3	4~11		1.95	3.08	1.58				瀬戸・美濃	
B68	天目茶碗	第2曲輪	11.8				1/3	3~		—	—	—				瀬戸・美濃	
B69	天目茶碗	第2曲輪	11.0				1/3	4~		—	—	—				瀬戸・美濃	
B70	天目茶碗	第2曲輪	11.8				1/3	4~6		—	—	—				瀬戸・美濃	
B71	天目茶碗	西段曲輪	12.2				1/3	4~		—	—	—				瀬戸・美濃	
B72	天目茶碗	第1曲輪、西段曲輪	12.1				1/3	3~6		—	—	—				瀬戸・美濃	○
B73	皿	西段曲輪					1/6									中国白磁	
B74	皿	第2曲輪	10.8	3.1	6.8		1/3	2~4		3.48	1.9	0.46				中国白磁	
B75	碗	西段曲輪	14.0				1/6	3~		—	—	—				中国青花	
B76	皿	東第1段曲輪	9.0				1/6	4~		—	—	—			口縁	土師器	
B77	鉢	第2曲輪													割クナキ	土師器	
B78	鉢		21.5				1/6	4~7		—	—	—			口縁	土師器	
B79	鉢	東第1段曲輪	21.4					4~7							口縁	土師器	
B80	椀鉢	第2曲輪	30.5	15.8	13.6		2/3	11~17		1.93	2.25	1.16				丹波	
B81	椀鉢	東第1段曲輪	29.3	14.6	14.2		2/3	10~17		2.01	2.06	1.03	○			丹波	
B82	椀鉢	第1曲輪、土壇1	31.5	14.6	13.9		2/3	9~16		2.16	2.27	1.05				丹波	
B83	椀鉢	東第1段曲輪	32.8	15.4	14.2		1/2	10~20		2.12	2.31	1.09				丹波	
B84	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪	26.4	16.3	15.0		2/3	8~20		2.23	2.43	1.09	○			丹波	○
B85	椀鉢	第2曲輪	31.8	11.2	12.6		1/3	7~16		2.84	3.52	0.89				丹波	
B86	椀鉢	西段曲輪			15.3		5/6	~19								丹波	
B87	椀鉢	西段曲輪	32.4	14.8	14.5		1/2	9~16		2.19	2.23	1.02				丹波	
B88	椀鉢	第1曲輪	32.7	15.5	11.6		1/3	9~14		2.11	2.62	1.34				丹波	
B89	椀鉢	第2曲輪、西段曲輪	30.4	16.2	13.3		1/2	9~17		1.88	2.29	1.22	○			丹波	○
B90	椀鉢	西段曲輪			12.3		1/6	~15		—	—	—	○			丹波	
B91	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪	29.4	14.0	15.5		5/6	12~28		2.10	1.90	0.90	○			丹波	○
B92	椀鉢	第2曲輪、西段曲輪	31.7	13.3	14.2		1/6	9~13		2.38	2.22	0.93				丹波	○
B93	椀鉢	西段曲輪	27.4	11.6	14.0		1/6	8~14		2.36	1.95	0.83				丹波	
B94	椀鉢	西段曲輪	31.2	13.5	13.3		1/3	9~15		2.32	2.35	1.01				丹波	
B95	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪	32.4	15.4	14.4		2/3	10~18		2.10	2.25	1.07	○			丹波	○
B96	椀鉢	第1曲輪			12.2		1/6	~17		—	—	—			底	丹波	
B97	椀鉢	第2曲輪	32.0	13.2	15.2		1/6	11~19		2.42	2.11	0.87	○			丹波	○
B98	椀鉢	第2曲輪、北壇切	31.2	13.3	12.5		1/2	9~17		2.35	2.50	1.06				丹波	○
B99	椀鉢	西段曲輪	26.6	11.1	11.9		1/3	8~14		2.39	2.23	0.93				丹波	
B100	椀鉢	東第1段曲輪			12.9		1/3	~17		—	—	—			底	丹波	
B101	椀鉢	第1曲輪、東第1段曲輪	32.2	15.3	14.7		1/2	8~13		2.10	2.19	1.04	○			丹波	○
B102	椀鉢	第2曲輪、土壇3、東第1段曲輪、西段曲輪	26.5	12.5	12.8		5/6	7~13		2.12	2.21	1.04	○			丹波	◎
B103	椀鉢	西段曲輪、土壇1	28.0				2/3	8~		—	—	—				丹波	
B104	椀鉢	東第1曲輪	27.1	13.9	12.6		5/6	9~15		1.95	2.15	1.10				丹波	
B105	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪、北壇切	31.2	14.8	14.0		1/2	8~18		2.10	2.33	1.06				丹波	◎
B106	椀鉢	第1曲輪(?)	31.4	13.3	13.8		1/6	6~17		2.36	2.28	0.96				丹波	
B107	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪	30.9	15.2	12.0		1/2	7~15		2.04	2.58	1.27				丹波	○
B108	椀鉢	第1曲輪、西段曲輪	27.4	—	—		1/6	8~		—	—	—				丹波	○
B109	椀鉢	東第1段曲輪	26.2	—	—		1/6	10~		—	—	—			○	丹波	
B110	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪	31.0	—	—		1/6	9~		—	—	—			○	丹波	
B111	椀鉢	第1曲輪、土壇3	29.4	—	—		1/6	8~		—	—	—			○	丹波	
B112	椀鉢	第1曲輪、第2曲輪	31.9	—	—		1/6	7~		—	—	—			○	丹波	○
B113	椀鉢	第1曲輪	—	—	—			11~		—	—	—			口縁	丹波	
B114	椀鉢	第2曲輪	—	—	—			9~		—	—	—			口縁	丹波	
B115	皿						1/6									中国白磁	
B116	盃	第2曲輪、西段曲輪	19.6	—	—		~	1/6	13~	—	—	—				丹波	◎
B117	盃	西段曲輪、土壇1	—	—	17.3		~	1/6	17~18	—	—	—			底	丹波	

面に灰釉が施され、削り高台で、体部もケズリがみられる。

天目茶碗は6点のうち、小振りで薄作りで口径約11.0cmのB69と厚作りで口縁が屈折してS状となり口径11.7～12.2cmとやや大きいB67・B68、B70～B72に分かれる。後者の5点の中でも、口縁端部のS字状の屈折が薄く作られるB68・B72はやや後出のものである。B67を除くと、底部は化粧掛されている。B69・B71は強く二次的な火を受けている。底部は右クロ削りがみられ、唯一器形が復原できる。B67は口径11.7cm、高6.0cm、底径3.8cmで底は削り内反り高台を作る。胎土はB72を除けば黄褐色である。美濃窯の編年によると、B69はI期後半、B67・B70・B71はII期前半、B68・B72はII期後半となり、I期後半は16世紀第1四半期、II期前半は16世紀第2四半期、II期後半は16世紀第3四半期を与えられている。

#### 中国産磁器 (図版50、挿図84)

白磁皿2点(B73・B74)と青花碗1点(B75)が出土している。B73は断面三角形高台で、疊付部の釉を削り取って、胴は丸く出し、端反りの口縁を作る。口径約13.2cmを復原し、16世紀代に通有の皿で、瀬戸・美濃焼16弁菊花押印文様皿B62などと共伴し、16世紀第2四半期のものである。他に底部が1点出土している。B74は口径口径約10.6cm、を復原する小皿で、釉がやや青味を呈し、端反部は薄く鋭い。B75は復原径約14.0cmで、口縁は内湾気味で内外面に呉須で界線を引き、底部は内外面とも釉を削り取っている。やや年代が下がるかもしれない。

#### 土師器 (挿図84)

B76は復原口径約9cmの小皿である。B77～B79は鍋の破片で、復原口径約21cmの口縁部と胴部(タタキ)片である。土師器の出土が極めて少なく、土師器から年代観を与えることは難しいが、16世紀代の土器である。

#### 註

- 1) 第4回貿易陶磁研究会発表要旨の中世城館遺跡出土土器の組成の比較検討を参考とし、中でも、日本産陶器の生産地近くの遺跡、例えば、越前焼の福井県一乗谷遺跡などを比較資料とする。小野正敏「中世城館遺跡出土土器の組成」『貿易陶器研究』VoL.4 1984
- 2) 近畿自動車道関連の発掘調査において中世城館遺跡として内場山城跡(多紀郡西紀町)、初田館跡(多紀郡丹南町)があるが、いずれも、土師器皿類の出土が多く、丹波焼壺・甕・播鉢とともに備前焼壺・甕・播鉢が出土している。
- 3) 1)に同じ
- 4) 一般的な中世陶器の器種分類は、壺・甕・播鉢を基本に初期に瓶・碗類などがあり、新しくは茶陶の影響化に器種の分化がみられる。
- 5) 中世丹波焼は、紐造りで、口造りのみ轆轤による仕上げをすることを基本にしている。整形時に、轆轤に粘土を底打ちするとき、灰をふるため、焼成時に窯変がみられる。また、底から紐造りするため、つなぎの部分削り、左轆轤で砂粒の動きが観察される。また、

どの器種も基本的には三段造りで分割の整形で、序々に紐造りするもので古相のものは算盤玉形、新しいものは描描手による調整を行い、丸く仕上げ、轆轤使いも上手に工夫をこらすようになる。

- 6) 中世丹波焼の器種分類は、従来、伝世品の型式学的編年から、壺は大小2種に分け、更に形から丸胴形、長胴形、偏平胴形、短頸壺、広口壺、肩衝壺、片口壺などに分ける。甕は3種で、1. 高さに対して胴径が大きい、2. 胴径が細い、3. 幅広い縁帯が内湾するものであり、更に口造りによるa. 丸口のもの、b. 二重口のもの、c. 口縁部に縁帯をもつものに分ける。播鉢は、伝世品は極めて少ないとされ、瓶類は徳利形のものがある。
- 7) 榎崎彰一『中世陶器シリーズ 丹波』1988 MOA美術館により、平安時代末期に比定されている。
- 8) 6)の文献により、丹波古陶館蔵のものである。
- 9) 中尾城跡発掘調査終了時に、岡山市史編さん室、伊藤 晃氏に備前焼についてご教示を戴いた。伊藤 晃「備前」『日本陶磁全集』10 1977 中央公論社を参考とした。また、徳利の編年観については岡山市教育委員会、根木 修氏には備前コレクションを実見させて戴き、年代を与えられる資料についてご教示を戴いた。
- 10) 愛知県陶磁資料館井上喜久男氏に、瀬戸・美濃焼についてご教示を戴いた。井上喜久男「美濃窯の研究(1)―15～16世紀の陶器生産―」『東洋陶磁』1985・86―88 Vol.15・16を参考とした。

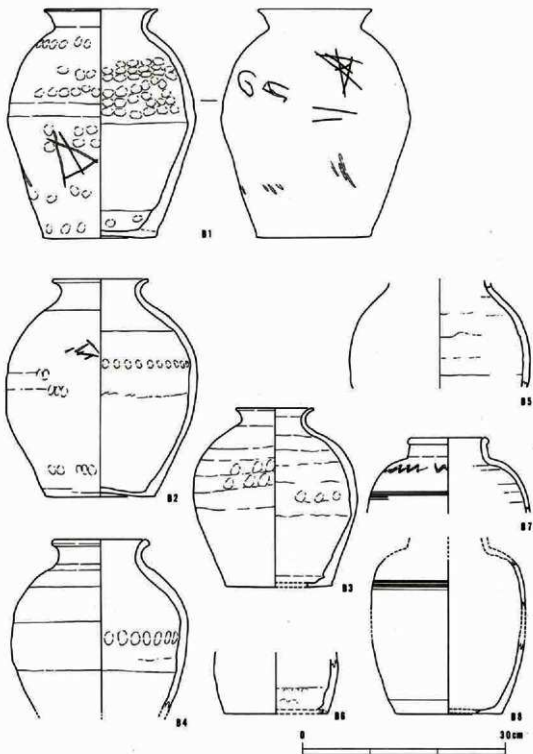


插图75 丹波·備前焼 壺



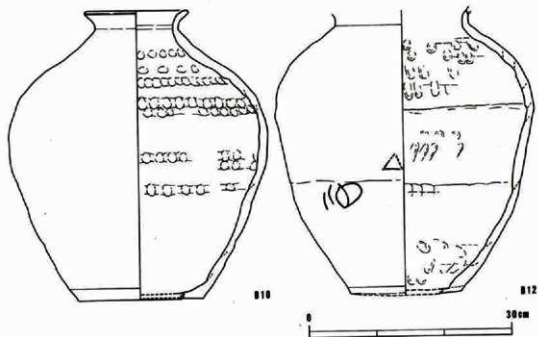
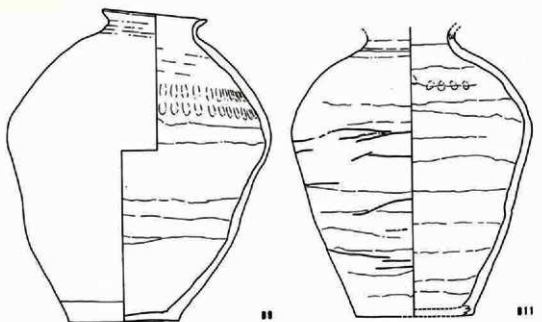


插图76 丹波烧 壺



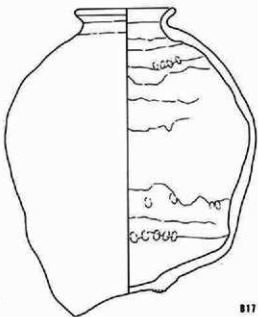
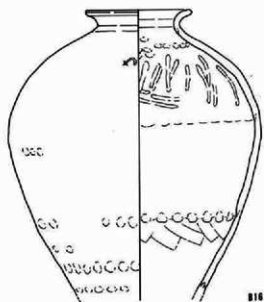
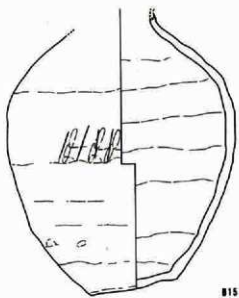
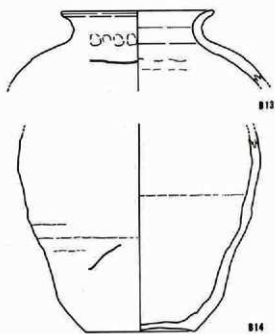


插图77 丹波烧 壺

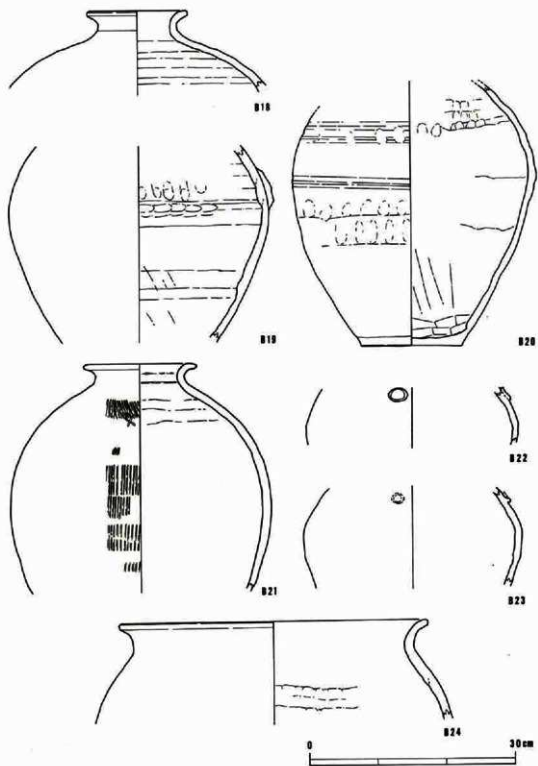
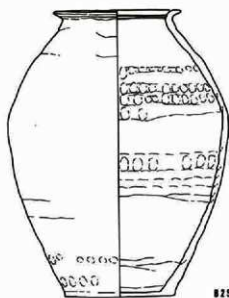
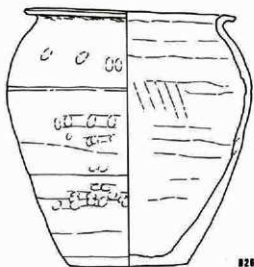


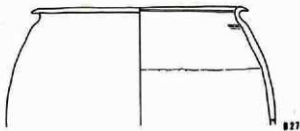
插图78 丹波·备前烧 壺



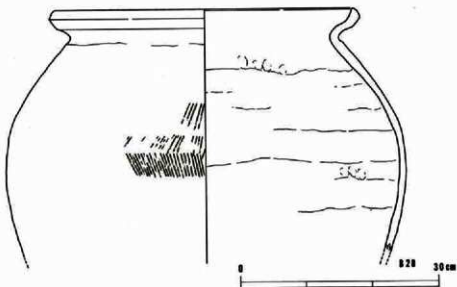
825



826

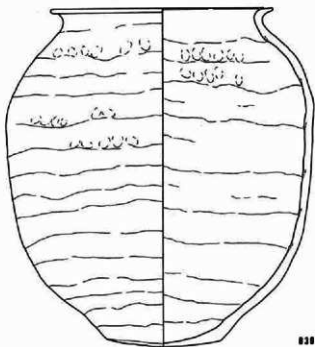
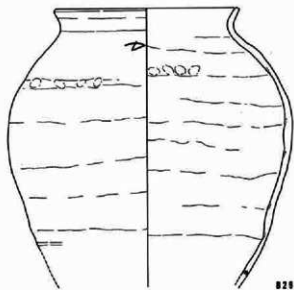


827

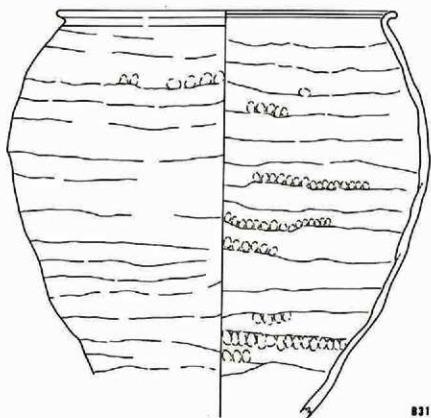


828 30 cm

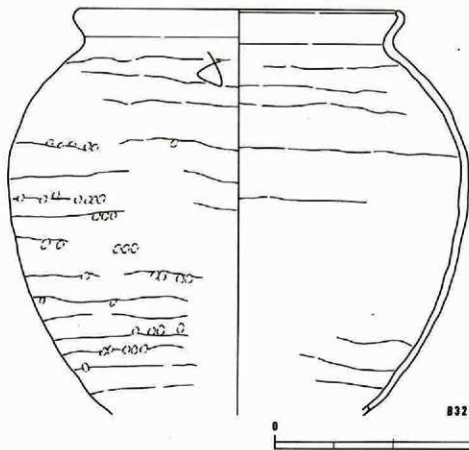
插图79 丹波烧 壺



神田80 丹波焼 壺



831



832

挿図01 丹波焼 壺

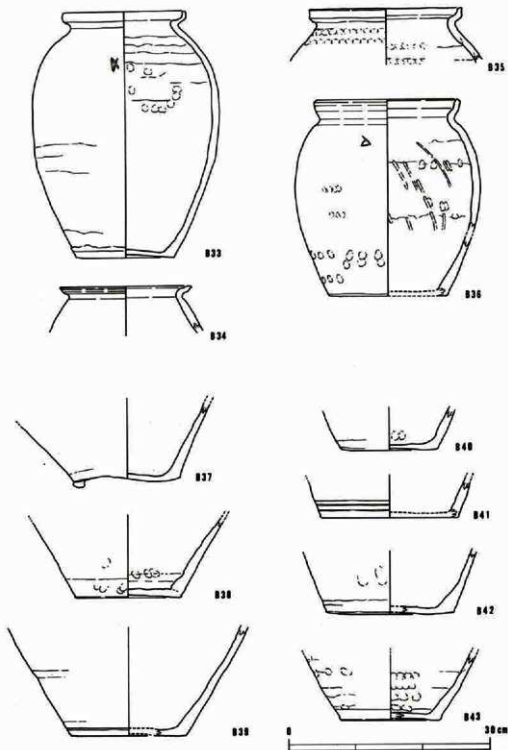


插图12 丹波烧 壶·钵

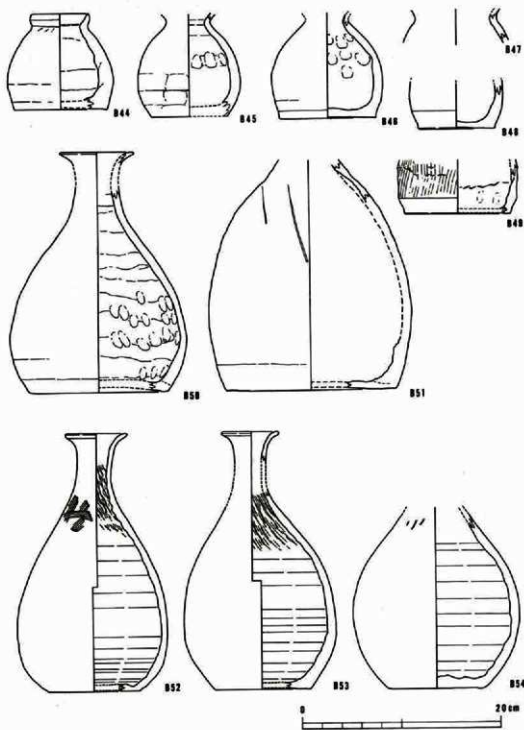


插图83 丹波·德前烧 小瓶·德利

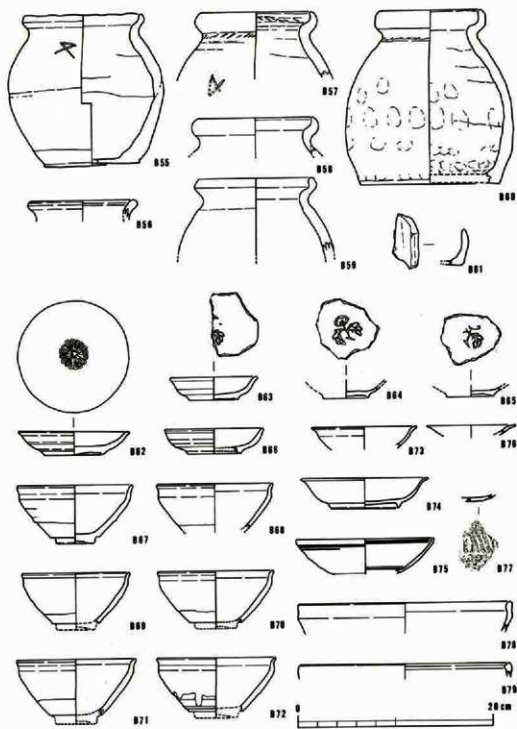


插图14 丹波烧, 瀬戸・美濃烧, 中国産磁器, 土器器 小甕・皿・天目茶碗・鍋他



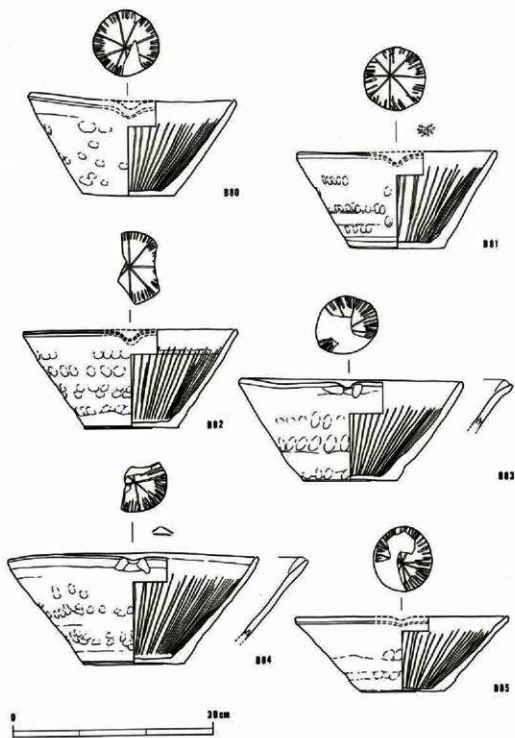


插图85 丹波烧 横鉢

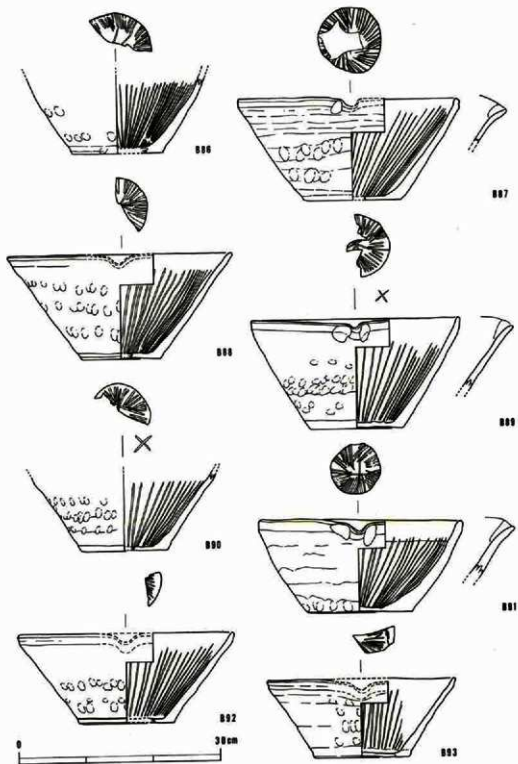


插图86 丹波碗 钵钵

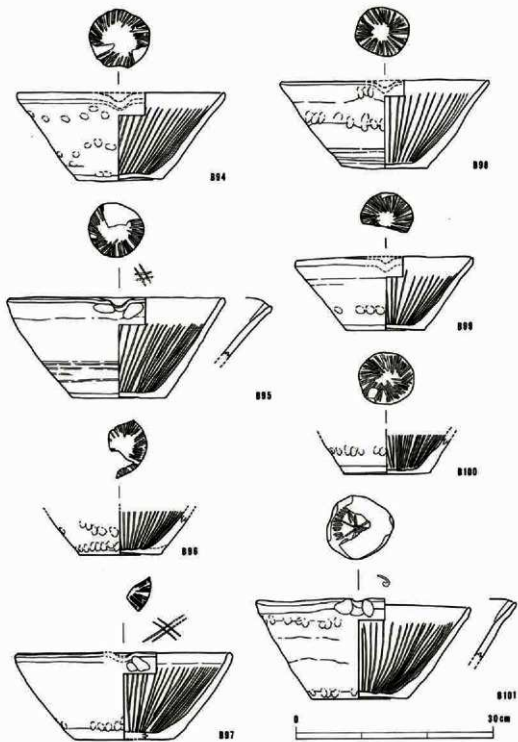
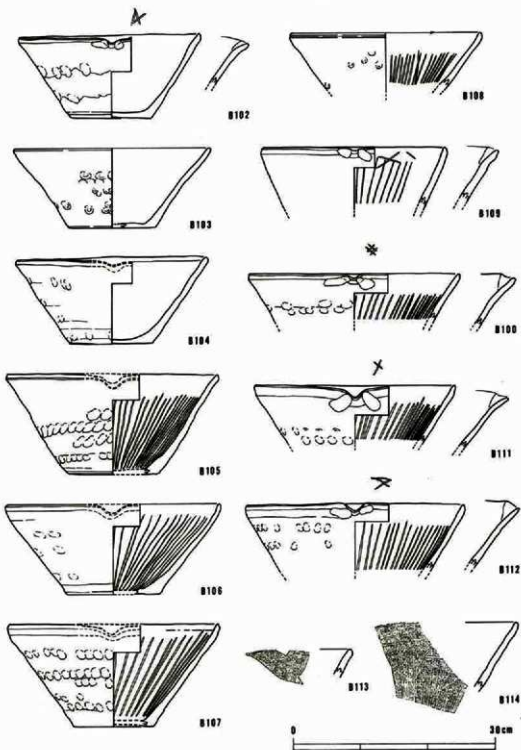


插图87 丹波桃 横鉢



神岡 丹波焼 摺鉢・摺鉢

## 2. 石製品 (挿図89~97・図版51~53)

山城に伴う時期の石器は石臼13点(破片数・うち粉挽き臼8点、茶磨3点)、砥石5点、碁石1点があり、この他に石製品として礎石1点もここで記述する。

以下、各器種ごとに検討を加える。

### (1)石臼(挿図89~94、第2・3表)

今回の調査では、比較的まとまった内容の石臼が出土した。これらは、その形態から粉挽き臼と茶磨(臼)の二者に分けられる。各部の名称については三輪茂雄氏の論考による。計測値は第1表に示した。

#### (a)粉挽き臼

粉挽き臼は、ほぼ全形が知り得る上臼・下臼各1点と上臼破片1点、下臼の破片が小片も含めて5点の合計8点出土した。

これらの分布をみると、まずS2とS3が、共に破砕された状態で西腰曲輪土壇1内から検出された。次に第2曲輪内で上臼片S4と下臼片S6とS7~9が比較的まとまって出土している。S5は、東第1腰曲輪斜面下方の表土から出土しており、原位置を遊離したものと考えられる。

次に個々の形態的記述を行なう。

粉挽き臼に使用されている石材は、全て花崗岩である。その原石産地は、石材鑑定により六甲山と推定されている。

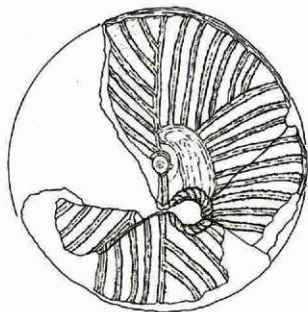
S2は、上臼で全体の約5分の1を欠失する。直径29.6cm、高さ12.4cm、ふくみ1.0cmを測る。溝の切り方は、8分画・6溝を基本とするが、「ものくぼり」周辺の溝に乱れが認められる。7溝ある区画がみられ、さらに、「ものくぼり」の外側では主溝が明確に作出されず、全ての溝がそのまま「ものくぼり」から延びている。上縁は、高さに比して幅が厚い。臼自体の高さは直径に比してかなり高く、また溝もあまり摩滅しておらず、供給口内の加工痕も明瞭に残ることから、使用開始から比較的短期間で廃棄されたと考えられる。

S3は、上面の一部を欠損するのみで完形に近い。直径29.7cm、高さ11.8cmで、S2と近似する。8分画・6溝だが、7溝の区画のみみられる。軸受け穴は加工痕が明瞭に残る。下底部は使用時の床擦れ痕が認められ、ノミ痕などの加工痕は観察されない。芯受け穴下部のえぐりは大きい。

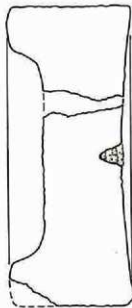
S2とS3は、直径・加工痕などの共通性から、一組の粉挽き臼を構成するものといえる。

S4は、上臼の約5分の1の破片である。復原直径は、29.2cmを測る。分画数・溝数は不明である。上縁は、高さ3.2cmに対して厚さ6.2cmとS2に比べてさらに厚い。臼自体の高さは9.2cmとうすく、溝も浅いことから、長い使用期間を経た後、廃棄されたと考えられる。

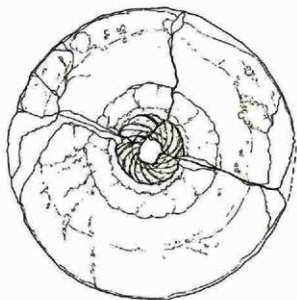
S5は、斜面から原位置を遊離して出土したためか、表面の風化が他に比して著しい。



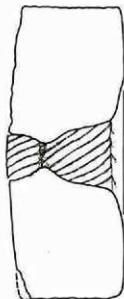
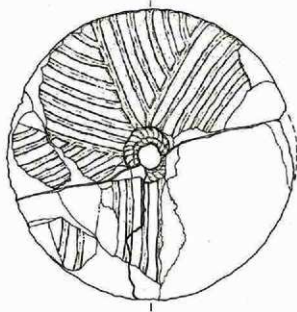
32



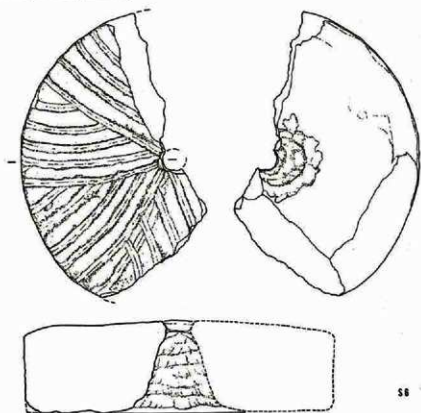
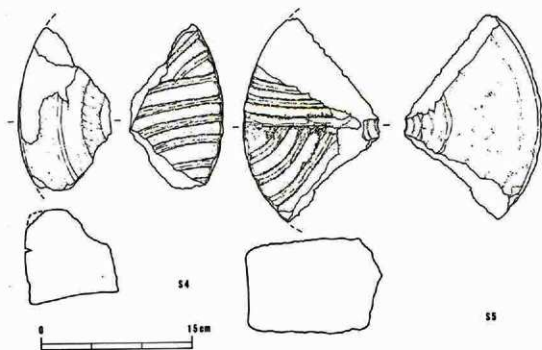
神岡 石臼(1)



33



神園 石白(2)



神園01 石臼(3)



第2表 石臼一覧表(単位はcm)

番号	種 類	出土位置	直径	高さ	ふくみ	分画/溝数	石 材	備 考
S 2	粉挽き臼 (上臼)	西腰曲輪 土壌1	29.6	12.4	1.0	8/6	花崗岩	ほぼ完形・受熱 S3とセット
S 3	粉挽き臼 (下臼)	西腰曲輪 土壌1	29.7	11.8	1.1	8/6	花崗岩	ほぼ完形・受熱
S 4	粉挽き臼 (上臼)	第2曲輪 G6区	復原直径 29.2	9.2	0.8	不 明	花崗岩	約1/5の破片
S 5	粉挽き臼 (下臼)	第2曲輪 東斜面	復原直径 27.0	9.4	1.1	不 明	花崗岩	約1/4の破片
S 6	粉挽き臼 (下臼)	第2曲輪 溝1	復原直径 30.6	9.0	1.0	8/6	花崗岩	約1/3の破片
S 7	粉挽き臼 (下臼)	第2曲輪 G7区	不 明	不明	0.8	不 明	花崗岩	上面小片
S 8	粉挽き臼 (下臼)	第2曲輪 G7区	不 明	不明	不明	不 明	花崗岩	下面小片
S 9	粉挽き臼 (下臼)	第2曲輪 G6区	不 明	不明	不明	不 明	花崗岩	下面小片
S10	茶 磨 (下臼)	第1曲輪 土壌3	復原直径 37.0	現存高 8.8	—	—	流紋岩質溶結 凝灰岩	はんざり部と台 部のみ・臼部欠
S11	茶 磨 (下臼)	第2曲輪 D5区	復原直径 36.0	現存高 10.0	—	—	流紋岩質溶結 凝灰岩	はんざり部と台 部のみ・臼部欠
S12	茶 磨 (下臼)	東第1腰 曲輪	復原直径 35.9	不 明	—	—	流紋岩質溶結 凝灰岩	はんざり部小片
S13	茶 磨 (下臼)	東第1腰 曲輪	復原直径 36.0	不 明	—	—	流紋岩質溶結 凝灰岩	はんざり部小片
S14	茶 磨 (下臼)	東第1腰 曲輪	復原直径 36.2	不 明	—	—	流紋岩質溶結 凝灰岩	はんざり部小片

S6は、下臼の約3分の1の破片である。復原直径30.6cm、高さ9.0cmを測る。この臼も8分画・6溝と思われるが、5溝の区画があるなど混乱が認められる。溝は摩滅のため浅く、溝を彫り直したためか、溝が重なっている箇所もみられる。また、高さが直径に比して低いことから、長時間使用されていたと考えられる。下部には床擦れ痕が残る。

S7～9は、いずれも下臼の小片である。7は溝が深いものの、高さはないことから、ある程度使用が進んだ段階で溝を新しく彫り直したものであろう。

#### (b)茶磨(茶臼)

茶磨片と考えられるのは、5点出土した。いずれも「はんぎり」と呼ばれる粉化された対象物を受ける部分と台部のみで、臼本体は検出されなかった。そのため、臼ではなく石製の盤であるとも考えられる。しかし、ここでは今回検出された部分と他の茶磨出土例との比較から茶葉の粉化を目的とする茶磨と確定し、記述する。

分布は偏りが見られ、最も残存状態のよいS10が第1曲輪土墳3から破砕された状態で出土している。S12～14は、東第1腰曲輪から一括して出土している。この曲輪はその位置から居住域とは考えられず、茶磨がここに存在することの意味は他の遺物との総合的な分析によって解釈されなければならない。これらはいずれも受熱していると思われる。

茶磨に使用されている石材は、すべて流紋岩質凝灰岩で、原石産地は加東郡社町三草山周辺が推定される。

S10は、はんぎり部と台部の約2分の1が残存している。外面には加工時のノミ痕が明瞭に認められ、文様としての効果を狙って意図的に残されたと考えられる。残存高8.8cm、「はんぎり」部復原直径36.0cm、台部高さ6.0cm、台部復原直径30.4cmを測る。

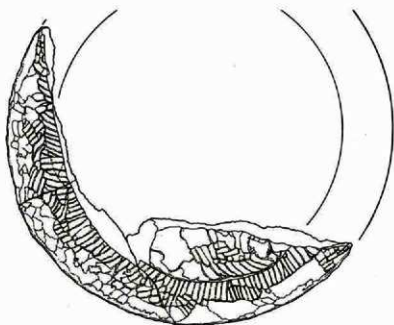
S12～14は、いずれもはんぎり部の破片である。復原直径は、共に約36.0cmを測り、また断面の形状からも、これらは同一個体であると考えられる。外面の加工痕は、受熱による剥落のため、3点で同様に観察されない。

次に粉化対象物との関係について考えてみたい。

付載(2)で詳述するように、今回の調査では人工遺物と共に多量の炭化種子が検出された。これらは石臼の粉化対象として考えられるものを含んでおり、以下にその相互関係を検討し、粉化対象を特定し、石臼の域内における用途を推定したい。

炭化種子の種類は、コメ・ムギ・ソバ・ヒエ・アワ・マメ・シコクビエ?・シソまたはエゴマが確認されている。このうち最も多量に検出されたのはコメで、9割以上を占める。次いでムギ・ソバの順に多く、ヒエ他はごく少量である(第10表参照)。

炭化種子を最も多量に出土した遺構は、西腰曲輪土墳1である。他にもごく少量を除いては西腰曲輪内から検出されている。同土墳内からは前述したように粉挽き臼1組(S2・3)が共に出土しており、同曲輪が本域域内において食物の調理や貯蔵に関する区画であったことが推



310

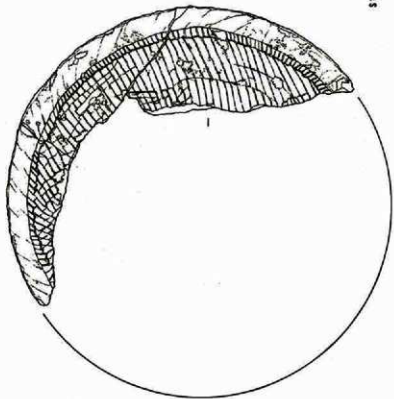
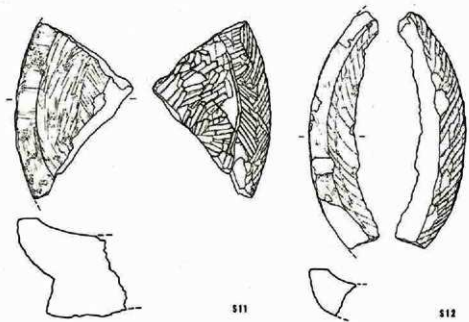
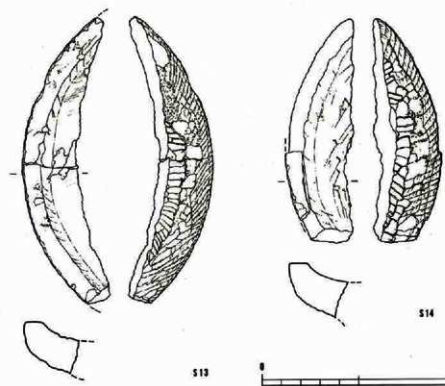


插图92 石臼(4)



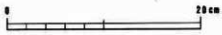
S11

S12



S13

S14



神岡03 石臼(S)

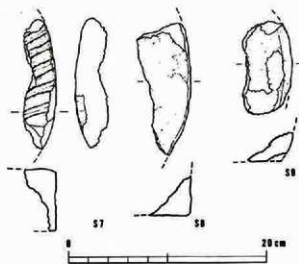


図94 石臼(S)

も2組が存在したと推定される。これらが同時に機能した場合、その粉化能力は今回検出されたソバの量に比してかなり上回ると考えられ、他の穀物も想定される。

戦国期城郭出土の石臼には、穀物の粉化以外の用途に火薬の製造が想定されているが推定の域を出ない研究段階である。中尾城の継続期間は土器編年の示す年代より鉄砲波及以前に廃絶したと考えられることから、今回出土した粉挽き臼は、全て穀物の粉化に使用されたものと評価され、本城内において、粉挽き臼を用いて粉化された穀物がかなり大量に消費される状態があったといえる。

茶磨(臼)とした資料は、2組あるが前述したように、いずれも下臼のみで、しかも臼部の破片は全く検出されなかった。全て破砕されているが、2例ともまとめて出土している。これらは、「はんざり」を有するいう形態的特徴から茶磨とするのが妥当であるならば、両者が検出された第1曲輪は、共に「茶の湯」に関係した区画であったと考えられる。特に第1曲輪は、検出された板壁や建物跡のあり方から、本城の中心的区画と考えられ、ここに茶磨が出土したことは、本城の城主が、当時武家の嗜みとして広がった「茶の湯」を、本来は戦闘用の山城である本城内においても催していたと想定する証左となる。

中世城郭出土の石臼については、形態記述のみに留まらず、以上みてきたように出土地点とその周辺の遺構・遺物の関係を有機的に分析することによって、出土地点を含む区画の城域内における用途を明確に出来ると考えられ、中世城郭分析のための重要な要素として評価できるものといえよう。

## (2) 砥石

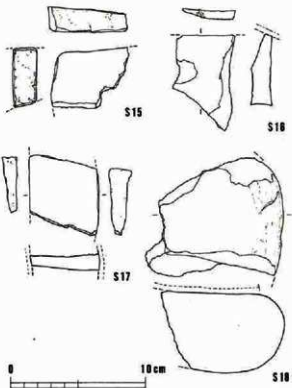
4点出土した。いずれも破片であり、全体の形状は知り得ない。S15~17は、共に破片の一部に僅かに砥面が残るもので、S16には線状擦痕が観察される。S18は、前3者よりも石質は

定される。

粉挽き臼との共伴が確実な同土壌出土の炭化種子から、粉化対象物を推定してみたい。西腰曲輪土壌1検出の炭化種子は、全体の傾向と同様にコメが主体を占め、他にムギ・ソバがほぼ同量ずつ出土し、ヒエもごく微量認められる。この4者はいずれも粉化して食用とする場合があるが、粉挽き臼を用いて粉化する対象としては、ソバを最も一般的に考えることが出来よう。ただ、粉挽き臼は、城域内において本土壌出土例以外に少なくとも

粗い。据え置いて使用されるものと考えられる。石材は、いずれも流紋岩凝灰岩である。

その石質の相違から研磨対象もしくは同一対象でも研磨段階が、S15~17とS18で異なると推定される。今回の調査で出土した鉄製品の内、砥石を用いて研磨したと考えられるものに、鎌・刀子・鍬が存在する。しかし、これらと砥石2者との対応関係は明確にし得ない。ただ、S18は西腰曲輪土壌1から出土しており、包丁など調理関係の鉄製品を研磨対象と



挿図95 砥石

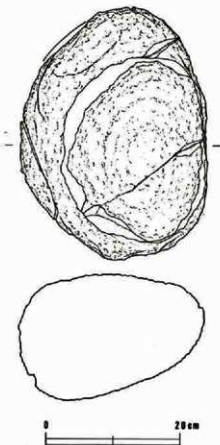
した可能性が高い。S17は腰曲輪遺構面より出土しており、他の2点は表土出土、斜面表採であり、原位置を遊離している。

(3) 礫石

花崗岩の自然小礫をそのまま利用している。平面形は、やや長楕円形である。黒石として使用されたと考えられ、黒褐色を呈する。1点のみ出土した。第2曲輪(G7区)表土出土。重さ4.4g。

(4) 礎石

大型自然楕円礫を使用する。礫の平坦部周辺を上面として、その周囲の節理面をそのまま利用し、柱座を作出している。表面は剥落が著しいことから、受熱している



挿図96 礎石



挿図97 礫石

第3表 石器石材一覧表

No	遺物名	図番号	歯輪名称	地区名	遺物名称	土層	日付	岩石名	産	地
1	石鏢	S1	第1歯輪	F-8	東斜面		860709	サマカイト	二上山?可能性大	
2	石臼(a)	S2	西側歯輪	H-6	土層1		860812	黒雲母花崗岩	六甲山・紅色の長石に特徴あり	
3	石臼(a)	S3	西側歯輪	H-6	土層1		860812	黒雲母花崗岩	六甲山・紅色の長石に特徴あり	
4	石臼(a)	S4	第2歯輪	G-6			860718	黒雲母花崗岩	六甲山	
5	石臼(a)	S5	東第1環歯輪	E-7	斜面		860724	黒雲母花崗岩	六甲山	
6	石臼(a)	S9	第2歯輪	G-6			860730	黒雲母花崗岩	六甲山	
7	石臼(a)	S7	第2歯輪	G-7			860718	黒雲母花崗岩	六甲山	
8	石臼(a)	S8	第2歯輪	G-7			860718	黒雲母花崗岩	六甲山	
9	石臼(a)	S6	第2歯輪	G-5	溝1		860817	黒雲母花崗岩	六甲山	
10	石臼(b)	S10	第1歯輪	H-7	土層3		860828	流紋岩溶結凝灰岩	産地不明, 加東郡社町東部の可能性大 (たとえは三草山など)	
11	石臼(b)	S12	東第1環歯輪	F-8			860714	流紋岩質溶結凝灰岩	産地不明, 多分社町東部付近のものと思う	
12	石臼(b)	S13	東第1環歯輪	F-8			860714	流紋岩質溶結凝灰岩	産地不明, 多分社町東部付近のものと思う	
13	石臼(b)	S14	東第1環歯輪	F-8			860714	流紋岩質溶結凝灰岩	産地不明, 多分社町東部付近のものと思う	
14	石臼(b)	S11		D-5		斜面、表土	860703	流紋岩質溶結凝灰岩	産地不明, 多分社町東部付近のものと思う	
15	砥石	S17	東第1環歯輪	F-8	遺構面		860711	流紋岩質凝灰岩	産地不明, 加東郡社町東部の可能性大 (たとえは三草山など)	
16	砥石	S16		E-7	斜面表土		860723	流紋岩質凝灰岩	産地不明, 加東郡社町東部の可能性大 (たとえは三草山など)	
17	砥石	S15	不明					流紋岩質凝灰岩	産地不明, 加東郡社町東部の可能性大 (たとえは三草山など)	
18	砥石	S18	西側歯輪	H-6	土層1		860812	流紋岩質凝灰岩	産地不明, 加東郡社町東部の可能性大 (たとえは三草山など)	
19	砥石	S19	第2歯輪	G-7		表土	860718	花崗岩(黒雲母花崗岩)	六甲山	

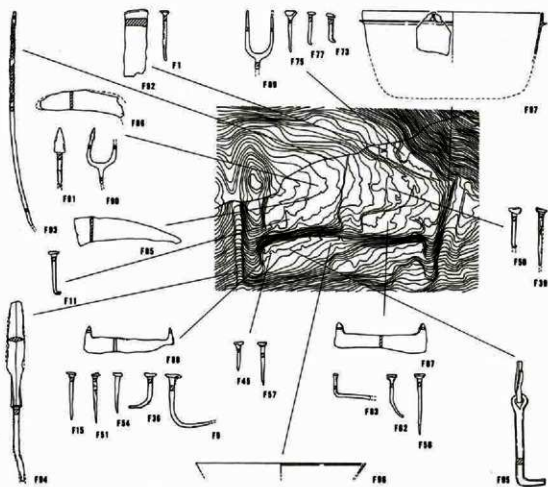
ものと思われる。

〈参考文献〉

- ・三輪茂雄 「白」もの人間の文化史25 法政大学出版局 1978年
- ・同 「粉の文化史—石臼からハイテクノロジーまで—」 新潮選書 1987年
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団編 『浜町屋敷内遺跡C地点 県営浜町住宅団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 198年
- ・東京都埋蔵文化財調査センター編 「No271・452遺跡」 『多摩ニュータウン遺跡発掘調査報告昭和62年度』 (第5分冊) 1987年

3. 鉄製品 (挿図98)

遺構に伴わない鉄製品も含めて計210数点出土している。いずれも中尾城跡に伴うものであ



挿図98 鉄製品出土状況



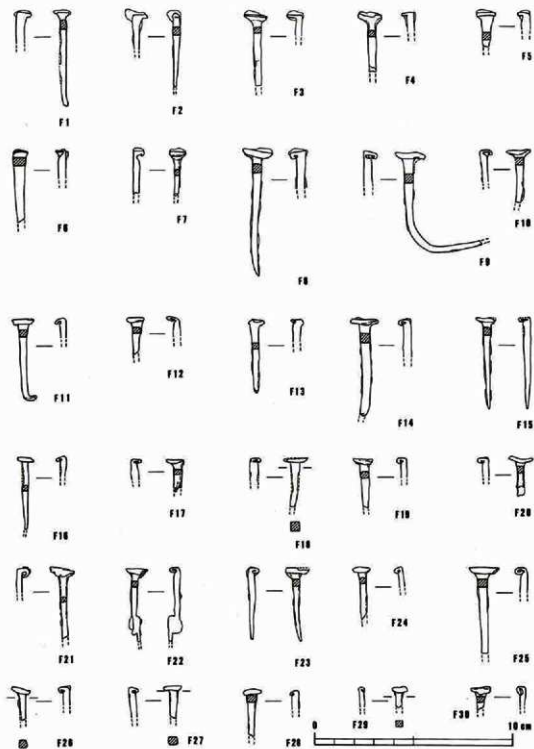


图98 箭头(1)

第4表 鉄釘一覧表(1)

No.	押込No.	図版No.	出土地点	分類	長さ(cm)	長さ(寸)	頭幅(cm)	幅×厚さ(cm)	備考
F 1	99	56-上	西腰曲輪		4.8	1.6	0.9	3.0×4.5	完形
F 2	"	56-上	東第1腰曲輪		(3.8)	—	0.7	4.0×4.0	
F 3	"		第1曲輪・土壇3		(3.75)	—	1.25	3.0×3.5	
F 4	"		東第1腰曲輪・土壇6		(3.0)	—	1.2	3.0×3.5	
F 5	"		第1トレンチ・F~G	①	(1.9)	—	1.0	4.0×3.5	
F 6	"		東第1腰曲輪	①	(3.7)	—	0.8	5.0×7.0	
F 7	"		第1曲輪・土壇3	①	(2.35)	—	0.9	3.0×3.0	
F 8	"	56-上	東第1腰曲輪	②	6.4	2.1	1.5	1.5×4.5	完形
F 9	"	56-上	東第1腰曲輪	②	(5.15)	—	1.6	4.5×4.5	屈曲
F 10	"		西腰曲輪	②	(2.7)	—	1.2	4.0×3.5	
F 11	"	56-上	第2曲輪・土壇1	②	4.1	1.35	1.1	4.0×3.5	先端部屈折
F 12	"		第1曲輪・土壇3	②	(1.9)	—	0.9	4.0×3.0	
F 13	"	56-上	第1曲輪・溝3	②	3.8	1.25	0.85	3.0×3.5	完形
F 14	"	56-上		②	(4.9)	—	1.45	5.0×4.5	
F 15	"	56-上	東第1腰曲輪	②	4.6	1.5	1.0	4.0×4.0	完形
F 16	"	56-上	第2曲輪	②	(3.6)	—	0.9	3.0×2.5	
F 17	"		第2曲輪	②	(1.6)	—	0.9	4.5×2.5	
F 18	"		G-6	②	(2.45)	—	1.2	4.4×4.5	
F 19	"		G-6	②	(2.45)	—	1.0	4.0×3.0	
F 20	"		西腰曲輪	②	(2.0)	—	1.2	3.5×3.5	
F 21	"	56-上	第2曲輪・第1トレンチ	②	(3.6)	—	1.25	3.5×2.5	
F 22	"		第2曲輪・第1トレンチ	②	(3.65)	—	1.15	3.5×3.0	
F 23	"		東第1腰曲輪	②	3.7	1.2	1.2	3.5×4.0	完形
F 24	"		第2曲輪	②	(2.6)	—	0.9	3.5×3.0	
F 25	"		第1曲輪・土壇3	②	(4.2)	—	1.6	4.5×4.0	
F 26	"		東第1腰曲輪	②	(1.7)	—	0.95	4.0×4.0	
F 27	"		東第1腰曲輪	②	(1.7)	—	0.9	3.5×5.0	
F 28	"		東第1腰曲輪	③	(2.4)	—	0.9	3.5×5.0	

\* ( ) 内の数値は残存長

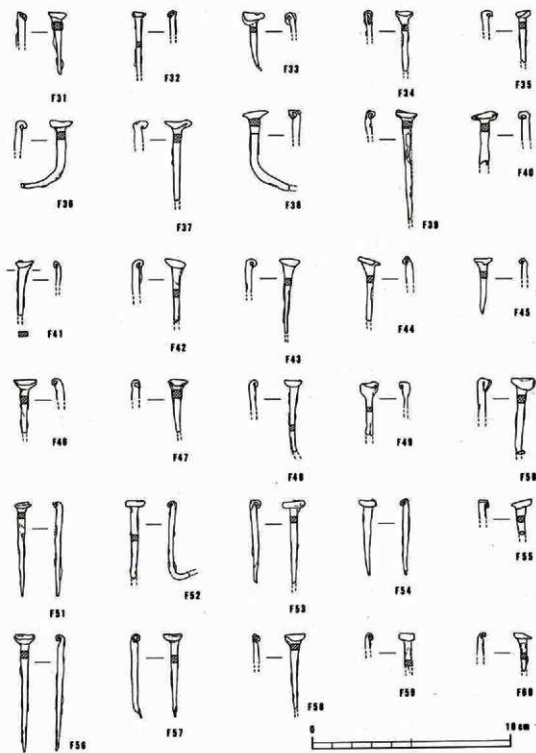


插图100 箭头(2)

第5表 鉄釘一覧表(2)

No.	押図No.	図版No.	出土地点	分類	長さ(cm)	長さ(寸)	頭幅(cm)	幅×厚さ(cm)	備考
F29	99		東第1腰曲輪・土壌6	②	(1.05)	—	0.75	3.5×3.0	
F30	"		東第1腰曲輪・土壌6	③	(1.2)	—	1.0	3.0×4.0	
F31	100	56—上	東第1腰曲輪	②	3.1	1.0	0.9	4.0×4.0	完形
F32	"		第2曲輪	③	(3.05)	—	0.7	2.5×2.5	
F33	"		東第1腰曲輪	③	(2.8)	—	1.1	2.5×3.0	
F34	"		第1曲輪	③	(3.05)	—	0.9	3.0×3.0	
F35	"		東第1腰曲輪	②	(2.1)	—	0.75	3.0×3.0	
F36	"	56—上	東第1腰曲輪	②	(7.1)	—	1.15	3.5×4.0	屈曲
F37	"	56—上	第1曲輪・土壌3	②	(4.0)	—	1.4	4.0×4.0	
F38	"		西腰曲輪・土壌1	②	(4.0)	—	1.3	4.0×4.5	屈曲
F39	"	56—上	G—6	②	(5.6)	—	1.05	3.0×5.0	
F40	"		西腰曲輪・土壌1	②	(2.75)	—	1.3	4.0×4.0	
F41	"		G—6	②	(2.7)	—	0.9	4.5×2.0	
F42	"		東第1腰曲輪	②	(3.15)	—	1.1	3.0×3.5	
F43	"	56—上	東第1腰曲輪	②	(3.8)	—	1.05	3.0×3.5	
F44	"		第1曲輪・土壌3	②	(3.2)	—	1.1	3.5×3.5	
F45	"	56—上	東第1腰曲輪・土壌6	②	2.7	0.9	0.95	3.0×3.5	完形
F46	"		東第1腰曲輪	②	(2.15)	—	1.15	3.5×3.5	
F47	"		西腰曲輪・土壌1	③	(2.6)	—	1.0	4.0×5.0	
F48	"		東第1腰曲輪・土壌2	②	(3.5)	—	0.9	3.0×3.0	屈曲
F49	"		東第1腰曲輪・土壌2	②	(2.65)	—	0.95	3.0×2.0	
F50	"		第2曲輪	②	(3.8)	—	1.25	4.0×3.5	
F51	"	56—下	東第1腰曲輪	②	4.7	1.55	0.85	3.0×3.5	完形
F52	"		第2曲輪・第1トレンチ	②	(3.9)	—	1.0	3.0×3.5	屈曲
F53	"	56—下	第2曲輪・第1トレンチ	②	(4.2)	—	1.15	3.0×3.5	
F54	"		東第1腰曲輪	②	3.8	1.25	0.9	3.5×4.0	完形
F55	"		東第1腰曲輪・土壌2	②	(1.8)	—	1.05	3.0×4.0	
F56	"	56—下	第2曲輪・第1トレンチ	②	5.9	1.95	1.0	3.5×4.0	完形

※ ( ) 内の数値は残存長

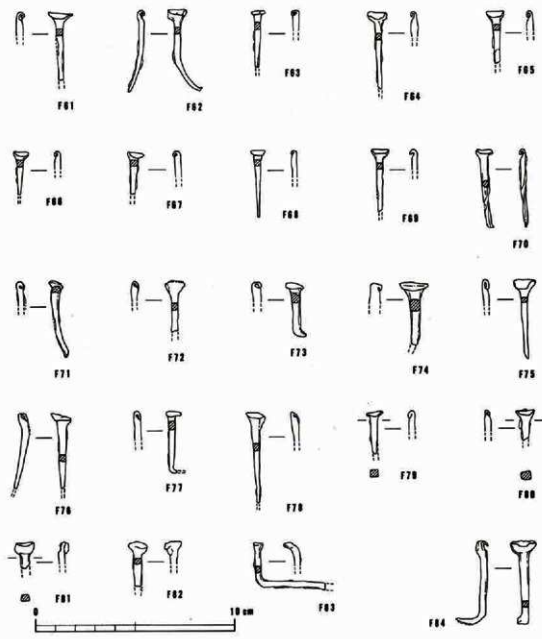
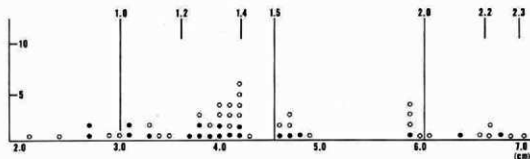


插图101 铁钉(3)

第6表 鉄釘一覽表(3)

Na	挿図No	図版No	出土地点	分類	長さ(cm)	長さ(寸)	頭幅(cm)	幅×厚さ(cm)	備考
F57	100	56一下	東第1腰曲輪・土壌6	③	4.2	1.4	0.95	3.5×3.5	定形
F58	"	56一下	東第1腰曲輪	③	(4.7)	—	1.1	3.0×5.0	
F59	"		東第1腰曲輪	③	(1.8)	—	0.75	3.0×4.0	
F60	"		東第1腰曲輪	③	(1.9)	—	0.9	3.0×3.0	
F61	101	56一下	第1曲輪・東斜面	③	(3.35)	—	1.25	3.0×3.5	
F62	"	56一下	第2曲輪・第1トレンチ	③	4.0	1.3	1.0	3.0×3.0	完形・屈曲
F63	"		東第1腰曲輪	③	(2.8)	—	0.7	3.0×3.5	
F64	"	56一下	第2曲輪・第1トレンチ	④	(3.8)	—	1.0	3.0×4.5	
F65	"		第2曲輪・第1トレンチ	④	(2.2)	—	0.9	3.0×4.0	
F66	"		東第1腰曲輪	④	(2.2)	—	0.8	3.5×3.0	
F67	"		東第1腰曲輪	④	(2.2)	—	0.85	3.0×4.0	
F68	"	56一下	西腰曲輪・土壌1	④	3.3	1.1	0.7	3.0×3.0	完形
F69	"	56一下	西腰曲輪・土壌1	④	(2.6)	—	0.9	3.0×3.0	
F70	"	56一下	第1曲輪・土壌3	③	3.9	1.3	0.85	3.0×3.5	完形
F71	"		東第1腰曲輪・土壌1	③	(3.8)	—	0.7	3.0×5.0	
F72	"		西腰曲輪	③	(2.6)	—	1.0	3.5×3.5	
F73	"	56一下	西腰曲輪・土壌1	③	2.7	0.9	0.9	4.5×5.0	完形
F74	"		第2曲輪	③	(3.2)	—	1.4	5.0×5.5	
F75	"	56一下	西腰曲輪・土壌1	③	3.95	1.3	1.1	2.0×3.0	完形
F76	"	56一下	第1曲輪・土壌3	④	(3.8)	—	1.0	3.5×3.5	
F77	"		西腰曲輪・土壌1	④	(3.1)	—	0.8	4.0×4.0	先端部屈折
F78	"	56一下	東第1腰曲輪	④	(4.5)	—	0.95	3.5×3.0	
F79	"		東第1腰曲輪	④	(2.15)	—	0.85	3.5×4.0	
F80	"		第2曲輪	④	(1.6)	—	0.95	4.0×5.0	
F81	"		東第1腰曲輪		(1.9)	—	1.0	3.0×4.5	
F82	"		東第1腰曲輪・土壌6		(2.25)	—	0.95	3.0×4.0	
F83	"		第2曲輪・第1トレンチ		(6.0)	—	0.5	3.0×3.0	切釘?
F84	"	56一下	第1曲輪・土壌3		4.2	1.4	1.3	3.0×3.5	完形・屈折

※ ( ) 内の数値は残存長



第7表 鉄釘の測量 ○完形 ●完形に近いもの

る。これらの鉄製品は、その用途から、建築具・生活用具・農工具・武器・その他に分類できる。以下、この分類に従って説明していくことにする。

#### (1) 建築具

釘と<sup>ナボシ</sup>止が出土している。

釘 中尾城跡出土鉄製品の中で最も出土点数が多いものである。小片のものも含めて、総計約180本出土している。各曲輪から出土が認められたが、特に東第1腰曲輪からの出土点数が、遺構外出土のものも含めると46本と最も多い。

中尾城跡出土の釘は、全ていわゆる和釘で断面方形ないし長方形の角釘である。断面長方形のものについても方形に近いものである。長さは、完形のものに限ると、2.7cm(9分一挿図101 F73・挿図100 F45)が最小で、最大は6.8cm(約2寸3分)で、3.8cmから4.2cm(1寸2分~1寸4分)にかけてに集中している。(第7表)ただし、最大のものについては、完形ではないが東第1腰曲輪出土の7.1cm残存するもの(挿図100-F36)がある。

断面については、厚さ幅とも3mmから4mmに集中し、3.5×4mmの長方形のものが最も多い。最大では東第1腰曲輪出土のF6(挿図99)の5×7mmのものが出土している。

釘の頭部の形態については、安田氏・金箱氏の分類に従うと、頭巻釘がほとんどで、わずかに切釘1本(F83)が認められる。ただし、同じ頭巻釘に分類されるものであっても、以下のように頭部の形態について細分が可能である。ただし、打ち込まれる際に、形状が変化することが大いに予想されるため、以下の細分がどこまで有効であるかについては今後の課題といえよう。

①頭部を水平方向まで屈曲させ、端部を身側に若干巻き込むが、身部までは達しないもの。

側面からみて、巻き込み部は身部より突出する。

②頭部を水平方向に屈曲させるが、全体的に丸味を帯びるもの。身部まで巻き込み、側面からみて身部より突出する。

③頭部は丸味をもち、端部を身部まで巻き込むもの。側面からみて、頭部は身部より突出し

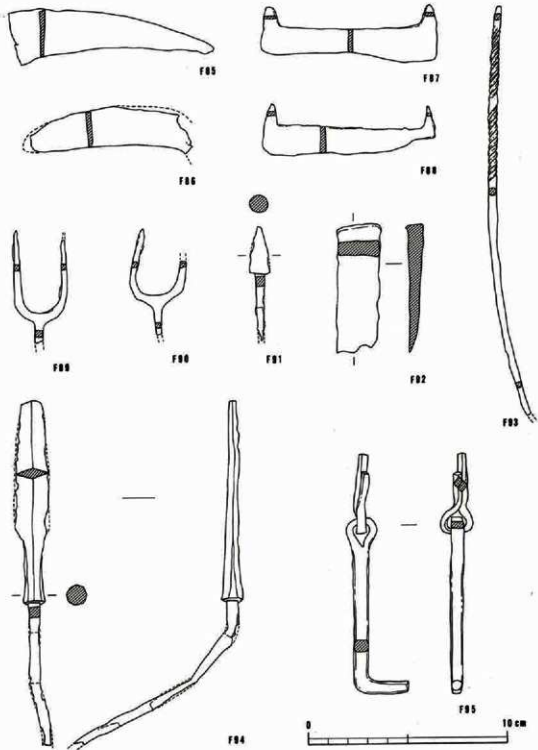


插图102 鏃・火打金・鏃・火簪・燧石他



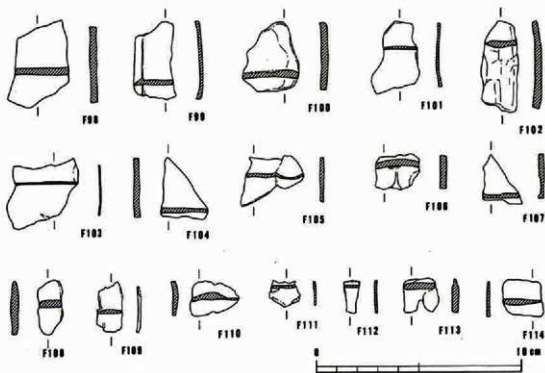
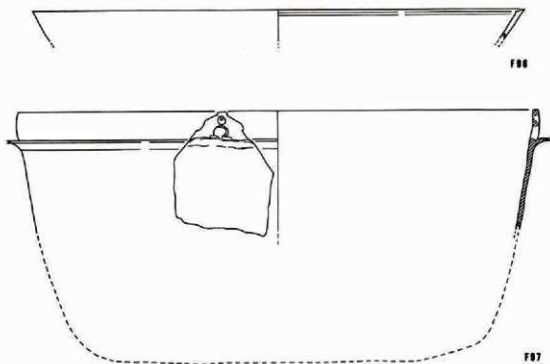


插图103 铜器

ない。

④頭部を打ち延ばし、上方に延ばした後、わずかに下方に屈曲させるもの。側面からみて、頭部は身部より突出しない。

また、一見折釘とみられる釘（F1～F4—挿図99）については、打ち込まれた際に頭部が叩き潰されたことによるものと考えられる。

以上、中尾城跡出土の鉄釘については、長さが3.8～4.2cmと比較的短いものが大半で、頭部の形態についても頭巻に分類されるものがほとんどである2点が特徴として指摘できる。釘の長さが短いことは、柱と柱の接合には不向きであることを意味する。また、頭部の形態についても頭巻であるということは、強い打撃によるものではないことを物語っている。このような頭部形態が安田氏のいわれるように装飾性を帯びているという点などを加味すると、中尾城跡出土の鉄釘の大半は、板材を打ち付けるためのものであったといえるのではないだろうか。さらに、憶測を加えるならば、5寸・7寸といった長い釘を用いるということは、上部構造についてもそれなりの建築物であったものと想定される。

堀止 東第1腰曲輪覆土から1点出土している。

L字状に屈曲し頭部が環状となるものと、この環状部に鎖状に繋がる2つの部分からなる。前者は、環状部から屈曲部までの長さ8.8cm、屈曲部の長さ3.1cmを測り、断面は0.6mm×0.7mmとほぼ方形に近いもので、若干の面取りが施され、全体的に丸味を帯びている。環状部は、1.5×1.5cmで、断面は0.6cm×0.3cmの長方形である。面取りは施されていない。

後者は、断面0.3cm×0.4cmの長方形の棒状のものを、前者の環状部に鎖状に繋がるように環状部を形成する割りピン状のものである。環状部以下については、若干のひねりが加えられている。環状部の長さ1.5cm、幅1.65cmを測る。環状部以下の長さは、2.6cm、1.6cmと長さを違えている。

類例としては、晋正寺遺跡（石川県金沢市）・朝倉氏遺跡（福井県福井市）などで出土しており、大きさについてもほぼ同じである。特に朝倉氏遺跡出土のものは、形態的にまた大きさの点においても最も近い特徴を示している。

## (2)生活用具

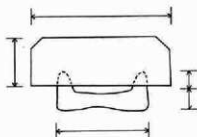
鉄鍋・火箸・火打金が出土している。

鉄鍋 北土壘北斜面（F97）と東第1腰曲輪北西隅（F96）から各1点づつ出土している。

F96は小片での出土である。体部の立ち上がりは直線的であるが、F97に比べて外傾が顕著である。復原される口径は24.0cmである。口縁端部は上端面をもち、内側にわずかに断面三角形状に肥厚気味である。上端面の幅は4.5mm、口縁部の厚さは2.5mmである。

F97もF96同様、小片から復原したため若干誤差を考慮に入れる必要があるが、口径25.3cmと復原される。口縁部端部は上端面をもち、その厚さは3mmである。口縁部部下1.4cmに鈎が付

くが、端部は欠損している。残存幅は6mmで厚さは1mmである。この鉤と口縁端部の間には鉤穴2穴が縦列に穿たれている。上方の穴は、内側ほど狭くなる円錐形をなし、外面で径3~4mm、内面で1mmである。下方の穴は、内外面とも同規模に穿たれ、径は7mmである。



挿図104 かすがい形(口縁) 細部各称

体部については、口縁端部から5.8cm残存するのみで、全体の一部しか復原できない。残存部のみに関していうと、体部の立ち上がりは直線的である。体部の厚さは2mmである。

この他、後述するように、その他として報告する鉄片(F98~F114—挿図103)についても、多くは鉄鍋の一部となるものと考えられる。

火箸(F93) 第1曲輪柱穴24から1点出土している。下端部が欠損しているがほぼ完形に近いもの

のと推定され、残存長20.3cmを測り、わずかに反り気味である。断面は円形をなし、径は3~4mmである。上部部0.5cmから0.8cmは、握り部で左方向の捻じりが施されている。

火打金(F87・F88) 第2曲輪建物4(F87)と東第1腰曲輪(F88)から各1点ずつ出土している。

F87・F88ともほぼ同じ形をなすものである。平面形は鋭形をなすが、打撃部の断面形が厚さ2mm長さ15~18cmの板状を呈する点において、鋭と大きく異なる。また、打撃部は一定の厚みを持ち刃部をもたない点において、鉄製鋸あるいは手鎌とも異なる。そして、これらの特徴は近世の民俗資料として一般的な「かすがい形」火打金と類似することから、これら2点についても火打金と判断した。

F87は、打撃部の長さ1.85cm(最大)、幅8.9cmを測り、打撃部中央は発火の際の打撃により大きく抉られている。打撃部中央における厚さは2mmである。打ち込み部は平面三角形をなし、長さは1cmである。厚さは、打撃部と同じである。

F88についても、F87とほぼ同様な大きさを測り、打撃部長1.5cm(最大)、打撃部幅8.65cm、厚さ2mmである。そして打ち込み部の長さは1.0cmで、厚さは打撃部同様2mmである。

なお、火打金とセットとなるべき火打石については確認できなかった。この「かすがい形」火打金が、16世紀前半と考えられる中尾城跡から出土していることは、大きな意味をもつのであることから、第7章で改めて検討を加える予定である。

### (3)農工具

鎌・鋳が出土している。

鎌(F86) 第1曲輪遺構面から出土している。刃部が残存するのみで、先端部および基部については欠損している。全体的に小型のもので、残存長8.1cmを測る。刃部幅は中央部で1.

9cmを測り、厚さは2.5mmである。

型 (F85) 西腰曲輪から出土している。平面長方形をなし、長さは6.4cmで、片刃造りとなっている。刃幅は一部欠損するか2.3cmを測る。頭部は打撃痕が顕著で、扁平で内側端部は外方に肥大している。頭部の幅は2.2cm、厚さは2.5mmである。

その他 第1曲輪溝から出土している。形態的には鎌とはほぼ同形であるが、断面を観察すると刃部が形成されておらず、鎌と断定することは困難である。平面形は湾曲気味の鋭角三角形をなし、長さは10.3cm、基部の幅は2.8cmを測り、厚さは2.5mm～3mmである。

#### (4)武器

鉄鏃が4本出土している。出土地点は、第1曲輪からF91とF90が、根部のみの残存で、残存長は5.45cmである。根部はU字形をなすが一方は欠損し、残存長は3.5cmである。他方は完存し、その長さは4.0cmである。先端部付近における両者の幅は2.1cmである。断面は、2.5mmから3.0mmの方形で、先端は丸みを帯びて細くなっている。

F90もF89と同じタイプの鉄鏃であるが、F89に対して歪みが顕著であるとともに欠損も著しい。残存長は5.25cmである。断面形もF89と同じく2.5mm×3.0mmの方形である。枝部の完存する方の長さは3.1cmである。この歪みは、使用によるものかについては判断できない。

F91は、いわゆる尖根鏃で残存長は5.65cmである。根部は円錐形をなし、闊部での径1.0cm、根の長さ2.3cmを測る。茎は断面5×5mmの方形をなす。

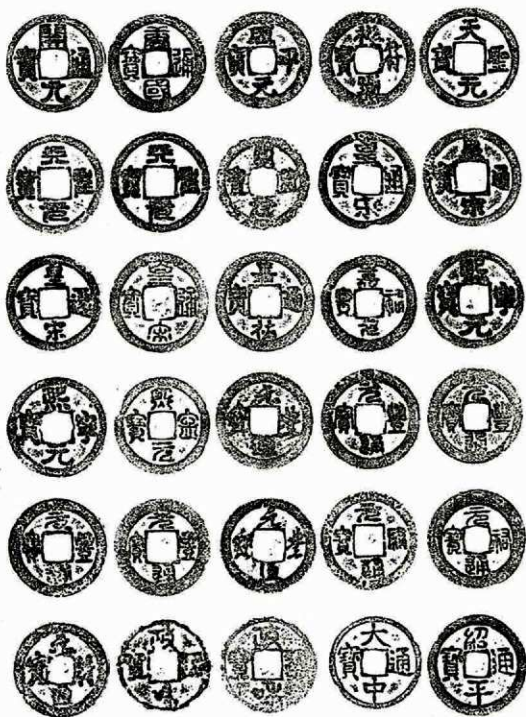
F94は、いわゆる平根鏃に分類されるものである。根部は断面菱形をなし、鏃をもつ。鏃部での厚さは4～5mmである。身部の長さは中尾城跡出土の鉄鏃のなかで最も長く10.0cmを測る。また基部の残存長は11.1cmを測り、全体の残存長は21.1cmである。茎部の断面は5.0mm×5.5mmとはほぼ方形である。闊部は8面に面取りされており、その径は1.0cmである。

闊部から1.4cm下の箇所できく屈曲している。加えて、根部の先端部が欠損している。これらの状況は、鉄鏃が打ち込まれた際の衝撃によるものとも考えられる。

これらの鉄鏃のなかで雁又鏃に属すると分類されたF89・F90であるが、一般の同型式のものとは特徴を異にする。1つは、U字形をなすことであり、もう一つは扁平ではなく棒状であることである。類別としては初田館跡（兵庫県多紀郡丹南町）出土例を知るのみである。

#### (5)その他 (F98～F114)

鉄片が17片出土している。いずれも約4cm以下の小片で、厚さも4～2mm以下と薄いものである。小片のためその製品名は判断できないが、薄い板状の破片であることから、幾片かは先述したように鉄鍋の一部と考えられる。



挿圖105 銅錢

## 5. 炭化遺物

第1曲輪、第2曲輪、東第1曲輪曲輪、西腰曲輪から炭化種実と炭化材が出土し、遺物ドットマップ作製時に炭化物として扱い、ドットを当初打っていたが、遺構に集中することや数があまりにも多く、作業が困難となりドットを中止し、ブロックとして取り上げた。

炭化物は、土壌ブロックとして現地に取り上げ、現場事務所にて水洗選別を行い、炭化種実と炭化材に分けた。

炭化種実については、炭化米塊を除くと39, 829点を数え、整理作業時に米、麦、ソバ、その他に分類し、米は形状から仮に長粒米、短粒米、そして半粒以下の米に細分した。細分の基準は肉眼的に粒長と粒幅の比較し、より細長いものを長粒とし、短く丸いものを短粒とした。分類基準はあいまいで感覚的なものではあるが、第9表炭化米分量表に西腰曲輪土壌1出土の一つのブロックサンプルを取り上げ、データを提示し、あいまいとした分類基準の傾向を示し、補完を意図するものである。この中で、短粒米も、成長が悪く細いものが長粒米と数えたものがあり、佐藤敏也氏の基準データ※の1. 粒長、2. 粒幅、3. 粒幅/粒長、4. 面積=粒長×粒幅の4要素をグラフとし、その傾向を示した。短粒米は、1. 粒長3.2~5.1mm, 2. 粒幅1.6~5.0mm, 3. 粒長/粒幅~2.2, 4. 面積5~16mm<sup>2</sup>となり、長粒米は、1. 粒長3.6~6.0mm, 2. 粒幅1.4~3.7mm, 3. 粒長/粒幅1.6~2.9, 4. 面積5.0~14.3mm<sup>2</sup>となる。

なお、整理作業時に分類したサンプルと一覧表を持参し、笠原安夫先生に炭化種実の同定を依頼し、報告を載せ、付載として本書に掲載している。その報告によると、炭化種実のうち、炭化米を長粒(大唐米)、短粒、普通粒、コゴメに分類し、コムギ、ソバ、マメ(大・小)、そしてヒエ、アワ、シコクビエの雑穀類とシソまたはエゴマに分類同定されている。持参したサンプルが少ないため、統計処理としては不十分なものであるが、その傾向は第10表に示すデータに近いものと考えられる。炭化米の多くは、西腰曲輪土壌1から出土しているが、第1・2曲輪、東第1腰曲輪の土壌や建物3から出土しており、ムギのみ西腰曲輪に集中している。

西腰曲輪土壌1では貯蔵用大甕B31と共存しており、土壌1に米貯蔵用大甕が控っていたことになる。又、石臼が投げ捨てられ、ソバや麦も共存しており、捏鉢や搗鉢を使用した食の復原作業の一助と成りうる。山城の食文化の復原である。

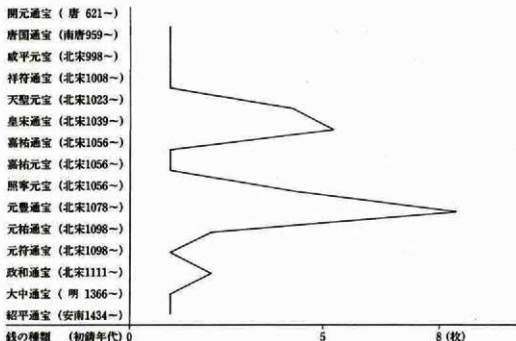
一方、炭化材は41サンプル、338点の樹種同定を嶋倉巳三郎先生に依頼した。水洗選別した炭化物で、炭化種実と分類されたものと、遺物ドットマップ時にブロックで取り上げられたものがあり、第1曲輪の土壌3、西腰曲輪土壌1、東第1腰曲輪の茶磨出土付近に集中している。鹿城前の炭化材と考えられ、例えば、東第1曲輪の周溝にマツ材の板片があり、茶臼付近には、戸板の堀止めの鉄製品も出土しており、板壁の建物が復原される。また、建築材の復原とともに、中尾城内の植生復原に参与するもので、付載を参照されたい。

※参考文献 佐藤敏也『日本の古代米』

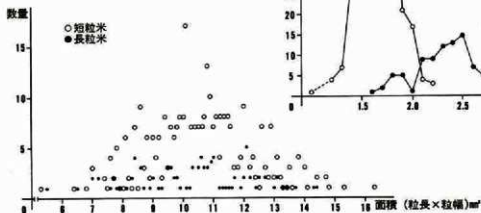
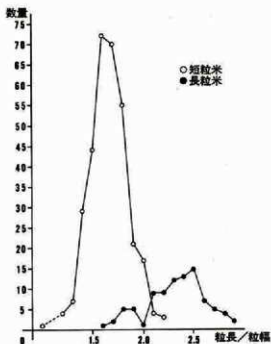
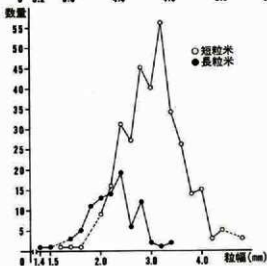
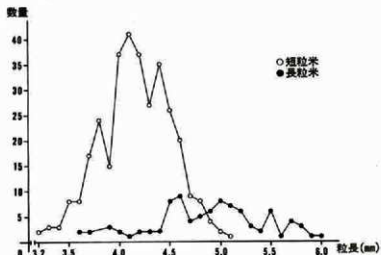
#### 4. 銅銭（押図105）

銅銭はいずれも中尾城跡に伴うもので、計34枚出土している。いずれも第1曲輪および第1曲輪覆土層からの出土である。特に第1曲輪においては、完全ではないがさしの状態での出土状況が確認された。このような出土状況は、中尾城が攻め込まれた際に蓄積されていたものが破壊され、廃棄された状況をしめすものである。

銅銭の種類としては、開元通宝・唐国通宝・咸平元宝・祥符通宝・天聖元宝・皇宋通宝・嘉祐元宝・照寧元宝・元豊通宝・元祐通宝・祐平通宝・元符通宝・政和通宝・大中通宝・紹平通宝の15種があり、元豊通宝が8枚と最も多い（第8表）。また、初鑄年代に注目すると、古いものでは621年の開元通宝から1434年の紹平通宝までと、約800年の時期幅が認められるが、11世紀のものが27枚と約8割を占めている。いずれも北宋時代のものである。



第8表 銅銭の種類と頻度



第9表 炭化米の法量



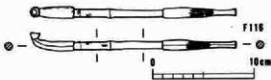
第10表 炭化種実一覧表

番号	曲輪名称	地区名	遺構名称	土層名称	日付	炭化種実					
						米(込)	米(ぬ)	米(ぬ)印	麦	ソバ	その他
1	第1曲輪		土壌1		860804	4	8				
2	第1曲輪		土壌3		860828						米の塊り
3	第1曲輪		溝3		860804	2	14	1			
4	第2曲輪	G-5			860729						米の塊り
5	第2曲輪	G-5	斜面		860723						米の塊り
6	第2曲輪	G-6	建物3西周溝		860818	20	1,121	253		191	
7	第2曲輪	G-6			860715	1	1				
8	第2曲輪	F-6	第1トレンチ		860708						米の塊り
9	東第1腰曲輪		土壌4	2~3層	860804	11	113	9		2	
10	西腰曲輪		土壌1	土壌サンプル	860816 860818	4,399	21,761	5,656	445	489	12(ヒエ), 46(その他), 米の塊り
11	西腰曲輪		土壌1	北側精査	860818	251	732	403	28	1	
12	西腰曲輪		土壌1		860812						米の塊り
13	西腰曲輪		土壌3		860812	31	372	179	31	35	
14	西腰曲輪		土壌4		860812	363	1,587	402	65	2	
15	西腰曲輪		土壌4	セクション内	860819	9				1	
16	西腰曲輪		柱穴1		860811	37	189	43	15	31	2(その他), 米の塊り
17	西腰曲輪		ピット3	埋土	860812	59	250	86	13		
18	西腰曲輪	H-6			860818	13	40				米の塊り
					合計	5,200	26,188	7,032	597	752	12(ヒエ), 48(その他), 米の塊り

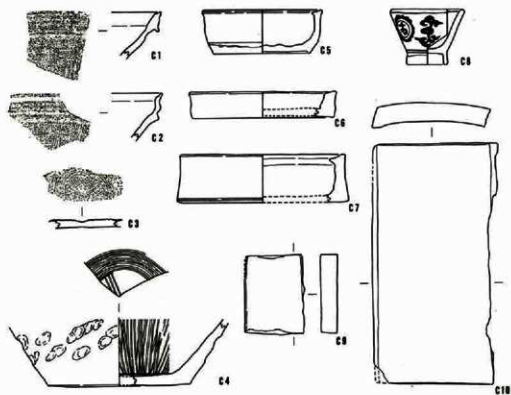
## 第4節 中世以後の遺物

今回の調査では、丹波焼の播鉢、竈道具（匣）・染付け猪口・瓦・キセルなどの近・現代遺物も城跡及び斜面などから検出された。

るC1・C2・C3・C4は丹波焼きの播鉢である。何れも口径・器高は細片のために復原することはできなかった。C1は口縁端部に面を持ち、口縁を三角形状に肥厚させている。口縁外面は縁帯状に成形し下部を小さく垂下させている。縁帯には2条の横ナテを施している。櫛目は8本以上を単位とする。器面全体を覆うのでは無く、櫛目と櫛目の間は空間がある。C2は口縁外面に縁帯を持つ意識が見られ2度強く撫でている。内面は外面のナテに対応してナテられ全体に断面は屈曲している。櫛目は12本以上を単位として施されている。C3は播鉢の底部の破片である。十字に櫛目を入れた後、円形に櫛目を施している。C4はやはり底部の破片である。底の直径は14.5cmである。外面の体部には幾つかの指頭痕跡が観察できる。内面の櫛目は7本以上を単位とする。直線的に上に伸ばすのではなくやや角度を持って施されている。C5・C6・C7は丹波焼の竈で使用されていたと思われる。C5は、口径11.6cm器高4.3cmである。体部はやや内湾ぎみに立ち上がるものである。C6は口径14.2cm、器高2.6cmである。器高の割に低いものである。口縁部に端面をもつが、これに刻目を施している。焼成時の軸着を防ぐためと思われる。C6は口径16.6cm、器高4.8cmである。口径の最も大きいもので口縁部の端面はやや内側を向いている。端面にはやはり刻目が施されている。C8は磁器で猪口である、口径6.8cm、器高5.4cm、円形の境線をさらに装飾した模様の内側に1字づつ「万」「古」と書かれている。その間を松などの植物模様で埋めている。色調は淡黄色を呈しており、釉には細かい貫入が見られた。C9・C10は平瓦片である。何れも前述の炭焼窯から出土したものである。最大辺がC9は7.7cm、C10は23.7cmである。C10は1枚の平瓦が半割れしたもので端面を3面残す。キセル（F116）は雁首・ラウ・吸口と一式が残るもので、長さ20.4cm、雁首の口径1.0cm、吸い口の口径は0.7cmである。雁首・吸口は銅製の物で、継ぎ目がそれぞれ観察できる。ラウは竹製のもので、節をもっている。C11・C12・C13・C14は下相野釜屋窯から出土された丹波焼の播鉢である。口縁部には何れも縁帯を持ち、縁帯の外面は凹線状に横ナテが施されている。櫛目は全体に施していない。口径はC11の39.6cmから、C13の35.5cmと大きいものである。



挿図100 キセル



挿図107 中世以後の土器、土製品

## 第7章 まとめ

### 第1節 丹波焼について

#### 1. 中世丹波焼

中世丹波焼についての定義は、多紀郡今田町周辺で生産される焼締陶である。その丹波焼については、文献のとおり、研究が進められているが、大正から昭和初期にかけて、柳宗悦の“日本民芸運動”に呼応して、丹波地方において中西幸一、守田種夫他が衰退していた丹波焼を見直し、古陶の収集を通じ、丹波焼の再評価への糸口を探る。戦後、人文研究の一貫として、篠内清他が『立杭窯の研究』を著し、丹波焼陶工集団の基礎的な総合研究を行う。また、杉本捷夫は、はじめに『丹波の古窯』を著し、兵庫県陶芸館の事業と併せ『改訂丹波の古窯』を完成させ、丹波焼の復興の糸口となる。中西 通は、父幸一の遺志を受け継ぎ、丹波古陶館開館時に『古丹波』をまとめる。陶芸館・古陶館両館の活動が、丹波焼の美術史的評価を受ける原動力となる。

昭和40年代後半宝塚市堂坂遺跡の蓄銭壺の発見を契機とし、昭和50年代に『陶磁大系』、『日本のやきもの』、『兵庫のやきもの』、『世界陶磁全集』、『日本陶磁全集』の発刊に伴い、美術史的価値を確立するとともに、楢崎彰一の「伝世品による型式学的研究」が確立した。丹波の大槻 伸の作業もその流れにある。更に、三本峠北窯の灰原・物原の調査などを経て、丹波窯が愛知県常滑窯・渥美窯のいわゆる陶器系窯の影響を受け成立することが理解されるに至った。一方、昭和60年代に入り、近世考古学の分野から、遺跡出土の丹波焼の編年の研究も序々に進められ、中世の領域に遡上してきつつある。今、中世考古学、特に調査例が増加するに至り、遺跡からの中世丹波焼研究が待たれている。

#### 2. 器種と法量

中尾城跡出土の丹波焼のうち、口径・底径・器高の相関関係を土器造りの作業工程と考えていく上で、各々の値を計測できるものを図化及びグラフ化を行ったものが、器種形態表及び法量表である。法量については表でcm単位で示しているが、ここでは、中世大工尺の曲尺(1尺=30.3cm)に換算し、作陶の物指を考えることにする。

はじめに器種形態表(第11表)をみると、器高については、器種分類が可能で4寸(12cm)を小瓶、5・6寸(15.18cm)を小甕、壺は9寸(27cm)から1尺2寸(36cm)と1尺4寸(42cm)を超える2種、甕は1尺~1尺4寸(30~42cm)と2尺(6cm)を超える大甕に分かれる。底径は3寸(9cm)から6寸(18cm)の幅であり、土器造りの一番の基準となる寸法で、小物

(小瓶・小甕)は3寸(9cm)、壺・甕類は6寸(18cm)をめどに、粘土円板の底打ちを口径は、壺・甕は4寸～1尺(12cm～30cm)、1尺4寸(42cm)、1尺8寸(54cm)と規格を2寸(6cm)毎にみとめる。

法量を見直すと、器高については、壺が7・8寸、1尺1寸、1尺4.5寸、甕が9寸、1尺1寸、1尺7寸、播鉢が4・5寸、捏鉢が4寸となる。底径については、壺が4.5～6.5寸、甕が5～6.5寸、小瓶が2.5～3.5寸、徳利が4.5寸、小甕が4.5～5寸。播鉢が4・5寸、捏鉢が4寸となる。口径については、壺が3.5寸、4.5～5.5寸、7.5寸、甕が5.5～7寸、9寸～1尺1尺4.5寸、1尺8寸、小甕が3.5～4寸、播鉢が8.5～1尺2寸、捏鉢が9寸となる。壺・小甕について第12表法量表をみると、器高/底径は1～2が小甕、壺・甕、2～2.5が壺・小甕に分かれる。口径/底径は0.5～1.0が小甕、1.0前後が壺、1.5が甕を示す。胴径は、資料が少ないが、0.4～0.8に壺・甕が分かれ、0.6以上のものを甕と呼ぶ。前述の器種分類模式図となる。中でも、播鉢については、底径4～5寸にとり、口径は8寸、9寸、1尺、1尺1寸、1尺2寸と分かれ、1尺1寸のものが多し。播鉢の作陶については、丹波立杭窯では丹波焼播鉢の規格について8寸、尺、尺2寸と口径で区別しているようで、丹波の作陶技術が残っている。また、底径：器高：口径＝1：1：2～2.5の比率を示している(表13)。法量は、第1に底打ちにより規定される5分刻みの底径があり、壺、甕、播鉢にそれぞれ準で示した規格を持たせ、乾燥時の縮みを経験の上で計算し、窯内の炎の変化を経て仕上げる。

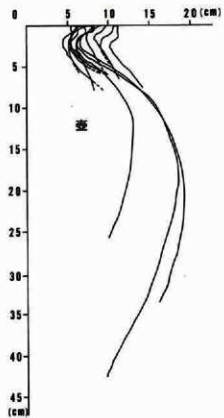
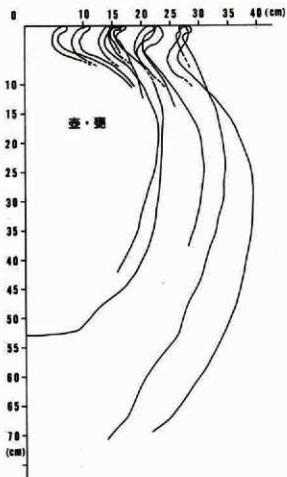
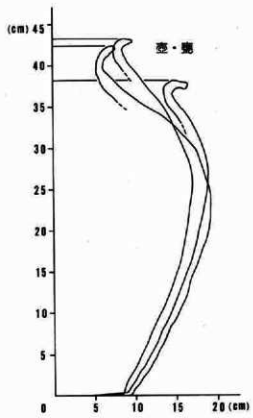
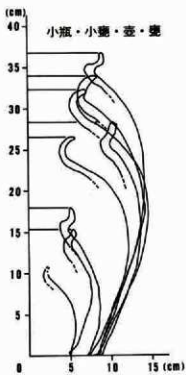
### 3. 編年

中世丹波焼は、他の中世陶の研究と異り、窯跡の調査研究が進まず、わずかに三本峠北窯原のみの調査例と、既発見の窯場出土の少い資料を基本とし、丹波焼が東海の甕器系窯の化に成立することを、三本峠北窯出土の秋草文、三筋文、連弧文等の製品や、西脇市緑屋窯構造・分焰柱や製品から類推するに及び、常滑・渥美窯の調査研究における型式学的に主導する橋崎は、伝世品による丹波の型式学的研究を確立している。

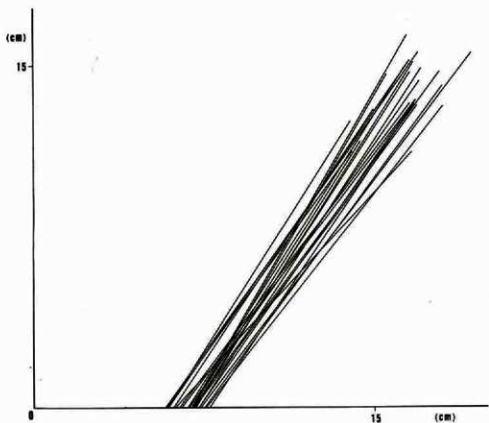
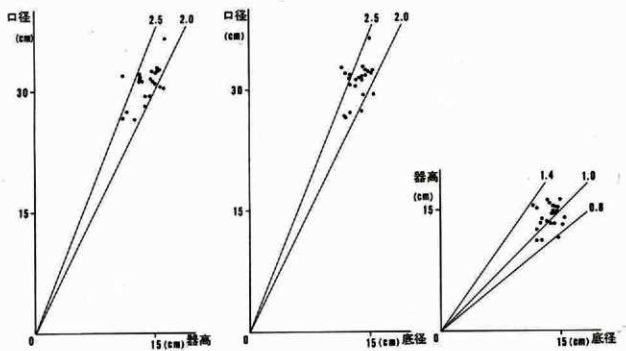
その研究から、6時期に分類された時期区分のIV・V期(室町時代)については、生産窯がいまもって、不明であるが、伝世する製品が多く、中尾城跡ははじめ中世城館出土の品が多い。

ここで、IV期・V期の基準資料の操作を行うことが必要となるが、遺跡単位の土器組成分析する資料を検出する遺跡が少なく、ここでは、時代毎に大まかに、壺・甕・鉢の分類の配置した丹波焼集成図をみることにする。

中世陶の器種として壺・甕・播鉢のセットの成立が論じられる中で、中世丹波の成立は甕器系窯の影響を受け、壺、瓶、甕類や碗・鉢類などが窯で生産されており、播鉢の生産



第11表 丹波焼器種形態表



第13表 丹波焼 摺鉢法量法

桃山時代を経て、江戸時代初期に茶陶が盛行することになり、器種の多様化を生むとされてきた。

ここで、遺跡出土の丹波焼の集成を試みるに、中尾城跡を中心に室町時代に主眼におき、若干の古い資料を入れ、器形変化を念頭に入れた。中尾城跡で伝世した土器と考えられる壺・甕があり、15世紀前半の時期に比定するB25とB9がある。甕では鎌倉時代大内城(27)、福井遺跡(33)、南北朝時代沢ノ浦坪古墳群(23)といった算盤玉状の形態とは一線を画するものであるが、15世紀後半の内場山城跡(22)に近い口縁の形態をとる。壺は内場山城跡、笑路城(32)、堂坂遺跡(12)の形態と似ており、前代南北朝時代の喜多中世墓(26)、高川古墳群(2)、堂坂遺跡(12)、福井遺跡の口縁の形態が外反する変化ととらえより後出のものである。

15世紀後半は壺B1・B10があり、口縁の外反度が強くなり、笑路城と似た形態をとる。16世紀前半は、甕B27・B30・B24、壺B2・B3・B17・B16、小甕B33・B60・B55・B57~59、小瓶B45、控鉢B102・B104、播鉢B80・B81・B84・B87・B96・B99といった器種が多様化する。小甕や鉢類では細分が可能である。甕では福井遺跡、壺では釜屋城(7)などの資料と比較でき、口縁端部が丸くなる。16世紀前半は、大甕の出現を特徴としB31、B2と甕B26、B29がある。壺はB4、B21があり、器形が丸味を帯び、猫掻手が残る。小甕B36も、丸い器形で安定した形態をとり、洗練されている。小瓶B44、B46と徳利B50が、おそらく備前焼徳利の影響化で、器種が生み出される初めのものとなる。鉢類はB91、B97、B101の播鉢があり、卸目一本引きの手抜き作業がみられ、ここにも、備前焼の櫛目の影響を受けている。この時代では、有岡城(13)、福井遺跡の壺や、上林城(30)の小瓶に似た器形を求める。

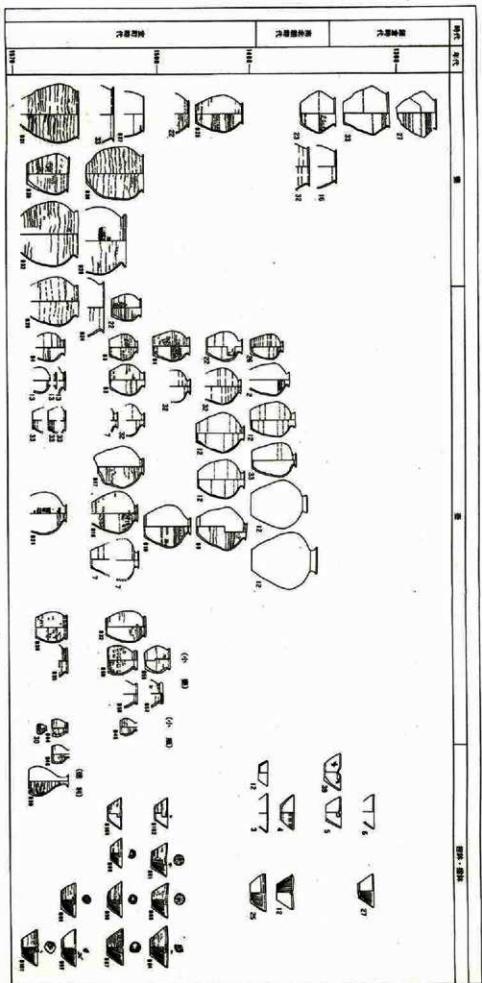
ところで、播鉢についてであるが、陶器系の碗や鉢の流れをくみ、丹波隣国の東播磨の須恵器控鉢の影響を受け、早くから控鉢が三本峠北窯では生産されていた。鎌倉時代から南北朝時代にかけて、平井遺跡(6)、塩田遺跡(39)、八木ノ谷中世墓(5)、南台遺跡(4)、堂坂遺跡、井ノ方遺跡(3)の多くで、蔵骨器や蓄銭壺の蓋として転用される控鉢がある。播鉢は堂坂遺跡のものが古いとされ、手印が大きい国領遺跡(25)がある。ただし、大内城跡の播鉢は、実見しえないが、鎌倉時代の甕と共伴するもので、年代を上げて載せているが、今後の検討の余地がある(挿図108)。

以上、概略的に器種毎の器形変化を配置し、共伴の備前焼、瀬戸・美濃焼の年代観をもって、時代を分けたもので、今後、遺跡単位の検討を加え、集合作業を通じ丹波焼の組成を中心に編年を確立する作業を続けたい。

#### 4. 陶土・胎土

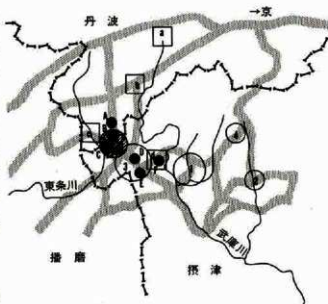
丹波焼の陶土に関する研究は福井県窯業試験場の分析(文献12)や京都大学清水芳裕(文献18)の胎土分析及び本報告付載の三辻先生の分析があるが、丹波焼窯跡の陶土採土地については、古く文禄3年(1594)、元和6年(1620)、宝永3年(1706)銘の土取場絵図が残っている。





仰光文化 陶器

押図109は中世丹波焼の生産地である三本峠周辺の古代から中世までの窯跡群と文禄3年土取場絵図などにみられる陶土採土地を示している。丹波隣国摂津(現三田市域)は、1. 末窯跡群(5世紀後半~10世紀)、2. 木器窯跡群(8世紀~10世紀)、3. 相野窯跡群(9世紀末~10世紀末)、4. 見比窯跡群(12~13世紀)の須恵器生産地帯がある。一方、三本峠を中心に中世丹波焼窯跡群があり、桃山時代を経てA. 上立杭、B. 下立杭、C. 釜屋、D. 萬ノ尾、E. 相野、F. 四辻など近世の丹波焼窯が丹波地方から隣国摂津国へ拡散する。桃山時代以降の土取場絵図であるが、陶土採土地と



押図109 窯跡群と粘土採掘地

○須恵器窯 古代~中世 ●中世丹波窯 ●近世丹波窯 □粘土採掘地

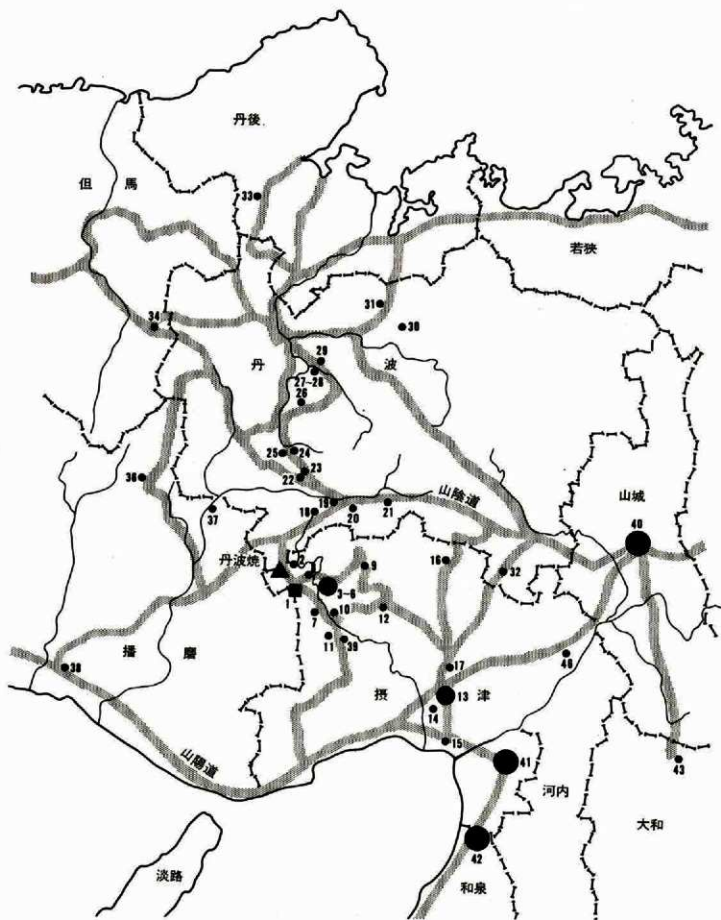
してa. 弁天、b. 古市、c. 木津、d. 四辻と窯場を離れた土地での採土が行なわれ、現在では四辻が、窯場付近以外として大きな採土地として操業されている。

中尾城跡出土の中世丹波焼について生産された窯が同定できない状態がある。一方、檜崎彰一は、丹波焼の変遷を平安末期から桃山時代まで6期に分けており、I期平安時代後期~鎌倉時代前期(三本峠北窯)、II期鎌倉時代中~後期(太郎三郎窯、源兵衛山窯、床谷窯)、III期鎌倉時代末期~南北朝時代(稲荷山窯)とし、IV期室町時代前~中期およびV期室町時代中期末~後期の2時期については、古窯跡は知られていないが伝世品が多いとされている。VI期は丹波における窯業最後の桃山時代(釜屋窯)である。中尾城跡出土の丹波焼はIV~V期のものが中心で、窯場の特定には至っていない。また、付載の三辻先生の胎土分析では、陶土に2系統がみとめられ、窯場周辺と四辻周辺となる近世下相野釜屋釜に近い胎土を示しており、中世でも古い時期の三本峠、大南の山土のみを陶土としていた様相とは異なり、土取場絵図に近い状況を示していると思われる。

## 5. 消費

丹波焼の流通については、四方を山に囲まれ、河川も小さいという地理的な条件から、商圏の狭さがかつて述べられてきたが、中世遺跡出土の丹波焼についてみると押図110と第14表の通りとなる。

鎌倉時代は、墓地出土の蔵骨器としての出土例が多く、京都府福井遺跡、大内城跡の甕や鉢がある。丹波、丹後、(北)摂津に分布をみる。南北朝時代は、やはり蔵骨器としての出土例が多いが、兵庫県堂坂遺跡などにみられる蓄銭に使われ、丹波や(北)摂津の集落跡に多くみら



挿図110 丹波焼の消費地

れるようになる。室町時代になると、山城、館、集落などからの出土が多く、地域は、丹波、丹後、播磨、摂津、山城、河内、和泉、大和、紀伊などに散見されるようになり、室町時代後半になると畿内の消費都市京や石山本願寺（大阪）や摂津で丹波攻めの拠点となる城郭に出土している。出土量は少ないが、（北）摂津の現三田市や神戸市北区の集落跡には当然出土例が多く、壺、甕、播鉢といった器種が中心で、他は稀れである。

丹波焼の流通の背景には、他の流通圏を確保している生産地があり、そのすき間を縫うように出土している。西は備前焼の生産地の隣国播磨では、わずかに御着城や中世の交通要所であった福田片岡遺跡に散見され、東播磨の西脇や多可郡の山城や産銅遺跡に出土する。摂津も城郭の調査が進んでいるが、備前焼が主体で、瀬戸・美濃焼の占有率より低い出土状況にある。北の但馬、丹後は、備前焼が入りこむが、越前焼の勢力圏にあり、但馬では、山陰道沿いの栗賀駅の近くで出土をみるにとどまる。地元丹波においても、小物の秀品については備前焼が主となり、播鉢でも城館では使用されている状況で、丹波（南の産地近く）、北摂津（現三田山城、神戸市北区）の集落跡でようやく、土器組成の主体をなすのである。戦国時代、京の隣接の丹波を占拠する軍による軍略で、畿内周辺の勢力が丹波攻めを行うことにより、逆に丹波焼が各地に流通していくようである。後に、桃山時代以降には茶陶を介して、流通の勢いを増す状況と似ている。

遺跡出土の丹波焼の組成を抽出しようとするにも一遺跡で、中尾城跡ほど各器種が出土する例がなく、挿図108に、壺、甕、鉢に分けて時代幅で配置するにとどまる。

ただし、近畿自動車道舞鶴線関連の内場山城跡<sup>122)</sup>、初田館跡<sup>123)</sup>では、丹波焼の各器種と備前焼、瀬戸・美濃焼、中国産磁器や土師器との共件があり、組成については、次回において詳述することになる。組成の検討により、丹波焼研究においても進展する状況にあることを述べるにとどめる。

#### 参考文献

1. 藪内 清他『立杭窯の研究—技術・生活・人間』恒星社 1955
2. 杉本捷夫『丹波の古窯』神戸新聞社 1957
3. 杉本捷夫『改訂 丹波の古窯』兵庫県陶芸館 1969
4. 中西 通『古丹波』丹波古陶館 1971
5. 高井徳三郎他『堂坂遺跡発掘調査報告書』宝塚市教育委員会 1971
6. 河原正彦『丹波』『陶磁大系』第9巻 平凡社 1975
7. 中西・通他『丹波の窯業—今田町立杭を中心に—』兵庫県教育委員会 1975
8. 中西 通『丹波』『日本のやきもの』7 講談社 1976
9. 青木重雄『ひょうご百科 兵庫のやきもの』神戸新聞出版センター 1976
10. 河原正彦『丹波』『世界陶磁全集4 桃山(一)』小学館 1977

第14表 中世遺跡出土 丹波焼一覽表

番号	種別	遺跡名	所在	発跡の位置	時代	出土品	丹波焼	小瓶	小皿	徳利	その他	出土品	参考文獻・備考
1	野原	中尾遺跡	高槻市二田町下野原	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	本書報告 1968年 「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
2	○	高山古墳跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
3	○	井ノ方遺跡	○	古墳	室町	△	△	△	△	△	△	△	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
4	○	熊谷遺跡	○	古墳	室町	△	△	△	△	△	△	△	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
5	○	八木ノ谷中世遺	○	古墳	室町	△	△	△	△	△	△	△	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
6	○	新井遺跡	○	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
7	○	野原遺跡	○	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
8	○	田中ノ所遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
9	○	川原ノ所遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
10	○	川原ノ所遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
11	○	志保遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
12	○	常盤遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
13	○	有田遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
14	○	富太郎遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
15	○	尾崎遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
16	○	船場遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
17	○	船場遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
18	野原	高槻三ノ丸跡	○	山城	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
19	○	船場遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
20	○	八上遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
21	○	安藤遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
22	○	内福山遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
23	○	沢渡阿古遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
24	○	河津遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
25	○	加藤遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
26	○	曾中遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
27	○	大内遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
28	○	二田古墳跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
29	○	上林遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
30	○	平山遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
31	○	寛井遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
32	○	福井遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
33	○	外池	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
34	○	石原	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
35	○	藤原	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
36	○	多田ノ野八遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
37	○	近藤寺	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
38	○	野原遺跡	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
39	○	平野寺	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
40	○	新井	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
41	○	新井	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
42	○	新井	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
43	○	大和	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
44	○	船場	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968
45	○	阿波	○	古墳	室町	○	○	○	○	○	○	○	「丹波中尾遺跡文化財調査報告(昭和40年)」1968

○ △は附録

11. 大槻 伸「丹波」『世界陶磁全集3 日本中世3』小学館 1977
12. 楢崎彰一「丹波」『日本陶磁全集』11 中央公論社 1977
13. 中西 通「古丹波」丹波古陶館 1978
14. 大村敬通「三本峠北窯発掘調査報告書」遺物写真篇 兵庫県教育委員会 1980
15. 大槻 伸「丹波とその周辺」『日本やきもの集成7 近畿II』平凡社 1981
16. 長谷川真他「掘りだされた城下町姫路」兵庫県立歴史博物館 1985
17. 広瀬和雄他「能勢町における埋蔵文化財の調査1—大阪府能勢町所在塩山7号墳・姫墓遺跡の発掘と古代・中世土器の研究—」能勢町教育委員会他 1985
18. 清水芳裕「胎土分析による窯跡出土須恵器の分類」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和58年度 京都大学埋蔵文化財センター 1986
19. 楢崎彰一「大丹波焼展」図録 大丹波焼展と現代に生きる六古窯展実行委員会 1988
20. 楢崎彰一「中世陶器シリーズ「丹波」」MOA美術館 1988
21. 長谷川 真「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会 1988
22. 楢崎彰一「日本の陶器に描かれた絵画」『日本陶磁巻—やきものに刻まれた絵画』愛知県陶磁資料館・五島美術館 1988

## 追 記

脱稿後、但馬生野銀山関連遺跡や播磨多可郡八千代町野々山城跡などから16世紀後半の丹波焼出土が増えている。中でも丹波窯の位置する小野原庄城内の井根口遺跡では、13世紀、14世紀代の丹波焼、壺、甕、播鉢が出土し、注目をひくものである。

最後になりましたが、大槻 伸氏には、播鉢の分類などにおいて発掘現場において多くのご教示を戴いていたが、十分に消化したとはいえず、改めて稿を起し、丹波焼研究の先学の業績を活かせるよう努力したいものである。

## 第2節 火打金について

中尾城跡の調査の結果、多種にわたる鉄製品が出土した。これらの鉄製品は、当時の鉄器生産さらには日常生活を復原していく上で多くの示唆を与えてくれるものである。なかでも、火打金については、その形態的特徴から新たな問題を与えてくれるものと考えられる。そこで、この火打金について若干の検討を加えてみたい。

### 1. 火打金について

古代以来の発火法としては、火鑽ヒカサに代表される「摩擦式」と「火花式」に大別される<sup>1)</sup>。後者の「火花式」とは鋼鉄に火打石（石英）を打撃することによって火花を散らせ、この火花を「火口ヒカ」に火種をつくらせるもので、この鋼鉄がいわゆる「火打金」である。近世以前においては、火打金と火打石・火口はセットで火打袋に入れられ、携帯されていたようである。「火打鎌」とも称するが、これは一般に東日本に多く、逆に「火打金」と称するものは西日本に多いようである<sup>2)</sup>。本報告においては、とりあえず「火打金」と呼称していくことにする。

### 2. 文献資料の検討

火打金については、古代以来いくつかの文献資料においても認められる。まず「古事記」中巻景行天皇段<sup>3)</sup>に

爾其国造、火著其野。故、知見欺而、解開其 倭比賣命之所給囊口而見者、火打有其囊。

於是先以其御刀薙換草、以其火打而打出火、著向火而燒退、還出皆切滅其国造等、即著火燒。……

という記事がある。倭建命が東征途中の相模国において、国造に欺かれて野に火を付けられたが、逆に倭建命が火打道具を袋から取り出して火を付け、付けられた火を退けたという内容の記事である。この記事から、「古事記」が著された時代にはすでに火打道具を用いての火花式発火法が存在しており、その火打道具は火打袋の中に入れられて携帯されていた様子が理解できる。そして、この火打道具は、おそらく火打金であり、袋に入れられていた様子から、後で述べるA類の火打金と考えられる。またこの記事の内容から、火打金が呪術的要素を備えていることが理解できる。

さらに、平安時代になると「延喜式」大蔵省式賜蕃客例条に、大唐皇（唐の皇帝）への献上品のリストのなかに「出火鉄十具」という記載がある。この「出火鉄」は、東野治之氏も指摘されているように、火打金とみて間違いないであろう。ただし、この火打金の形態等については不明である。しかし、唐の皇帝に対する献上品であったということは、唐の皇帝にとってそ



れなりの価値を有する品であったことを意味するものである。つまりその裏付けとして、少なくともその生産量は別にして、当時の日本には決して鎌を再利用<sup>9</sup>するような形ではなく、1つの製品としての火打金及びそれを造る確固たる技術が存在していたことがよみとれる。

同じく『延喜式』大学寮式にも

……大炊寮取明火於陽燧。……

と、火打金を使用している記載がみられる。

このほか、『元亨釈書』(巻第四)<sup>10</sup>・『栄華物語』(巻第十五)<sup>11</sup>・『御堂閔白記』(寛弘二年十月)<sup>12</sup>などにおいても、火打金を使用する場面がえがかれている。

『元亨釈書』においては、

天慶九年。藤原師輔於栴嚴院宮法華三昧堂。集衆擊火燧而誓曰。若因三昧力光榮家族。所擊之火不過三。便擊之。塵手火星迸出。不至于再。僕射便手以此火點長明燈。于今不滅。及以此字屬源之法華矣。爾來藤葉益昌。

とある。これは、天慶九年に、藤原師輔が比叡山栴嚴院で法華三昧堂を営んだ際、「火燧」をもって燈明を点火し、不滅の法燈としたものである。

また『栄華物語』・『御堂閔白記』は、ほぼ同じ場面を示すものである。つまり、藤原道長が、先祖及び今後の死者の極樂往生を願って「火打」によって香に火を付けたという場面である。そして、この「火打」に際して、火が消えないために一度目で点火することを願いそれがなかったことを、見聞していた僧侶達が感涙している。

これら3つの文献資料および「古事記」は、いずれも日常の場面とは言い難いものである。しかも、火打金によって点火する行為が呪術的な場を生み出す作用となっている。石部氏は平安時代を中心とする文学作品の記事から、当時においては、火鉢法のみでなく火打ちによる発火法が完全に普及していたと理解されている<sup>9</sup>。しかし、以上の文献資料を通して確実にいえるのは、当時火打ち法による発火技術が確実に存在していたということである。また、火打金=祭祀に用いられたものとする考えは、これらの文献資料をみる限りある程度肯定できるものである。しかし、特に文献資料の内容は、その対象が貴族社会、しかも特別の場合に限られたものであって、「文献」資料のみをもって、どの程度まで普及していたのかについての言及はわずかしいのではないだろうか。そこで、次に平安時代以降の絵画資料の検討をおこない、この疑問にせまってみよう。

### 3. 絵画資料の検討

絵画資料(絵巻物)<sup>13</sup>に描かれている火打金に関する資料を挙げたのが第15表である。時代的には、平安時代後半から室町時代前半にかけてである。ただし、これらの資料に描かれているのは火打金そのものではなく、火打石と火口を入れる火打袋である。したがって、火打金その



第15表 中世絵画資料にみる火打金

No.	絵画資料名	巻	撰写時代	携帯人物・場面	携帯箇所	大きさ	色
1	伴大納言絵詞		12世紀	檢非違使の下部	左腰	大	
2	鳥獸戯画	丙巻	鎌倉初期	家司?	左腰刀	小	
3	北野天神縁起		承久元年(13c前)	家司?	左腰	小	
4	北野天神縁起		承久元年(13c前)	菅原道真		中	
5	一瀬上人絵伝	6巻	元弘元年(14c前)	胸を担ぐ人(力者)	左腰	中	灰色
6	一瀬上人絵伝	12巻	元弘元年(14c前)	職者	左腰	中	茶色
7	一瀬上人絵伝	1巻	元弘元年(14c前)	小坊主	左腰	小~中	白
8	一瀬上人絵伝	5巻	元弘元年(14c前)	庶民	左腰	中	茶色
9	一瀬上人絵伝	6巻	元弘元年(14c前)	付き人	左腰/刀	小	茶色
10	一瀬上人絵伝	4巻	元弘元年(14c前)	商人	左小刀	大	褐色
11	一瀬上人絵伝	8巻	元弘元年(14c前)	庶民	左腰刀	大	淡褐色
12	般若寺縁起		鎌倉初期	庶民	左腰刀	中	
13	当麻寺曼荼羅縁起	上巻3段	鎌倉初期	大工	左腰刀?	大	
14	当麻寺曼荼羅縁起	上巻3段	鎌倉初期	大工	左腰刀	中	
15	当麻寺曼荼羅縁起		鎌倉初期	職人(農民?)一井戸掘り	袂腰刀	中	
16	当麻寺曼荼羅縁起		鎌倉初期	農民?	左腰刀	中~大	
17	男衾三郎絵詞		13c末	下級武士	左腰刀	中	
18	天狗草紙		13c末	荷物持ち	左腰	小	
19	石山寺縁起	5巻	正中年間(14c間)	藤原国徳の妻の供(供の最中)	左腰刀	小	淡褐色
20	石山寺縁起	1巻	正中年間(14c前)	土方人夫(作業中)	左腰	小	暗茶色
21	石山寺縁起	5巻	正中年間(14c前)	庶民(乗馬中)	袂腰刀	大	暗茶色
22	石山寺縁起	6巻	正中年間(14c前)	供の武士(出発準備)	左腰刀	中	赤茶色
23	石山寺縁起		正中年間(14c前)	土工(作業中)	左腰刀	中	黄褐色
24	絵師草紙		鎌倉末	使者	左腰刀	大	淡褐色
25	絵師草紙		鎌倉末	絵師	左腰刀	中	黄褐色
26	春日権現験記		延慶二年(1309)	番匠の棟梁(作業中)	左腰刀	中~大	
27	春日権現験記		延慶二年(1309)	通行人(庶民)	左腰	中	
28	春日権現験記		延慶二年(1309)	旅人	左腰刀	中	
29	春日権現験記		延慶二年(1309)	庶民?	左腰	中	
30	福高草紙		室町初期	庶民(頭をまるめた男)	左腰刀	中~大	
31	福高草紙		室町初期	店の櫃(売物)			
32	法然上人絵伝	33巻	徳治二年(1307)~十年	庶民(処刑の見物)	左腰刀	大	
33	法然上人絵伝	38巻	徳治二年(1307)~十年	庶民(法然の廟所への群参)	やや後腰	大	
34	法然上人絵伝	4巻	徳治二年(1307)~十年	僧(住生をみるための願付け)	左腰	大	
35	法然上人絵伝	34巻	徳治二年(1307)~十年	庶民	左腰刀?	中~大	
36	法然上人絵伝	33巻	徳治二年(1307)~十年	行商人	左腰刀	大	
37	喜母絵詞	7巻	観応二年(1351)	庶民(下層)	左腰刀	大	
38	喜母絵詞	7巻	観応二年(1351)	庶民(やや上の身分)	左大刀	中~大	
39	喜母絵詞	10巻	観応二年(1351)	公家の下部	左腰刀	大	
40	藤通念仏縁起	下巻9段	応永三十年(1423)	武士	左腰刀	中	

ものの形態・大きさなどについての検討はできない。

まずこれらの資料を通して気付いた点は、以下の5点である。

- ①火打袋を携帯している人物は、上は武士から下は農民・商人・一般庶民・職人・僧侶にいたる多岐にわたる階層の人々である。
- ②火打袋を携帯している様子を見ると、いずれの人物も左側の腰に携えている。その携え方は明確に判断出来ないものもあるが、判断できたものに限ると、腰刀に吊るしているものと、腰紐に吊るしているものとの2形態が認められる。
- ③絵画に描かれている状況は、日常の生活の場面であり、祭祀的な場面のものは認められない。また、屋外での場面が大半で、屋内での場面はほとんど認められない。
- ④絵画に描かれている具体的な場面を観察すると、その場面の前後も含めて、特に火打金を必要としない場面が多い。このことは、火打袋を携帯することは当時においては一般的に習慣化していたことによるものと理解できる。ただし、それぞれの場面において、必ずしもそこに描かれている人全員が携帯しているわけできない。したがって、習慣化といってもすべての人に対してとは言い切れないようである。
- ⑤絵画に描かれている火打袋の携えている人物の腰との相対的な大きさをみると、主観もはいる曖昧な面もあるが、その大きさは大・中・小の三種類に分けられる。この火打袋の相対的な大きさについては、各絵画の絵師の癖とも考えられるが、『一遍上人絵伝』・『石山寺縁起』のように同じ絵師によるものについても大きさの差が明確に判断できる。したがって、火打袋そのものには幾種類かの大きさがあったものと考えられる。そしてこの火打袋の大きさを規定しているのは、いうまでもなく火打金そのものと考えられる。このことは、後に紹介する出土火打金に大きさによるいくつかの分布領域の存在と対応するものと考えられる。

以上、絵画資料を通して火打金がどのように表現されているかを観察してみた。これらの観察結果からすると、当時の火打金は常時携帯されるものであり、文献資料には表れない階層においても携帯・使用されていた様子が明らかとなった。また、祭祀との関連を認めることはできなかった。このように、文献資料・絵画資料を検討した段階では、祭祀的なものであったのかどうかは、簡単には結論付けられない状況である。そこで次に、今までに出土した考古資料の検討を行ってみたい。

#### 4. 考古資料の検討

##### (1) はじめに

火打金そのものに対する認識は、今日においても一般化しているとは言えない。このため火打金についての考古学的な検討は、わずかに数える程度である。古いものでは、『日光男体山』<sup>11</sup>において、42点におよぶ出土資料をもとに、若干の検討がなされている。このなかで、火打金

を形態から山形のものと同形の二形態の存在を指摘し、前者を旅行携帯用、後者を厨房備付用に用いられたとの見通しをされ、時期的に前者の方が古いものとされている。そして、日光男体山出土の火打金について、宗教儀式に使用された儀式具の性格をもっていたとの見解を示されている。また、『山田水呑遺跡』の報告<sup>12</sup>においても、火打金は一般的に祭祀に使用されたとみなされている。

このような状況下で、小川貴司は青森県碓ヶ関村古館遺跡出土の金属製品をまとめるなかで、火打金についての若干の検討をおこなっている<sup>13</sup>。まず、近世までの火打金を鑑形と山形(A類)とに大別し、A類をさらに、上端を切り出して2本の腕をつくりそれを頂部で合わせるもの(I類)と二等辺三角形のもの(II類)に分類されている。また、II類については、両端に突起のあるもの(IIa)とないもの(IIb類)と細分されている。そして火打金の起源について、『記紀』の記事<sup>14</sup>をもとに5世紀代に大陸からもたらされたものであると考えられているが、この起源については根拠を欠くものであり、認めることはできない。

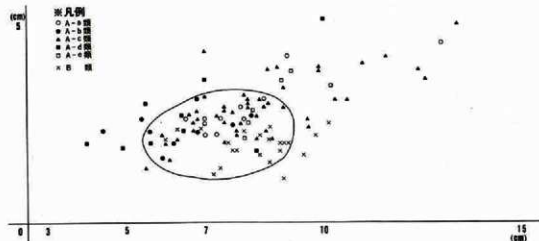
一方高嶋幸男は、技術史的観点から火打金を発火具の一部として、遺跡出土資料をも加味して検討をおこなっている<sup>15</sup>。

ただし、これらの研究段階においては、「カスガイ型」火打金についてその出現を近世以降と捉えていたが、今回の中尾城跡の資料は先述したように16世紀前半までは遡ることが明らかとなり、再検討の必要がでてきた。そこで、小川・高嶋両氏の研究をもとに、特に「カスガイ型」を中心に出土した火打金についての再検討をおこなってみたい。

## (2) 火打金について

まず、火打金と判断する要素を確認しておきたい。

①打撃部が一定の厚み(2~6mm)をもち、刃部をもたない。打撃による抉れ(使用痕)の



第18図 火打金の大きさ

明確なものが多い。(要素1)

②打撃部の幅は6～8cmのものが多い。(要素2)

③形態は、「山形(A類)」、「カスガイ形(B類)」、「短冊形(C類)」の3形態を基本とする。

(要素3)

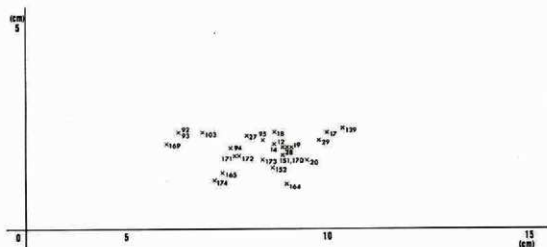
A類は、基本的に紐穴ないしそれに準ずる機能を備え、主に携帯用としての機能をもつものである。C類についても、同様の機能をもつものである。これに対してB類は、木質の握部に打ち込んで使用するものである。日本あかりの博物館館長金箱正美氏によると、使用方法としては、火打金を左手に火打石を右手に持ち、火打金に火打石を斜め上方から打撃することによって火花を散らせ、火口に点火させるものである。基本的に各家に1つのセット(火打金・火打石・火口)を火打箱に入れて常備し、主に屋内で使用したようである。そして、携帯用のA類・C類とは使い分けられたようである。

そこでまず、B類の検討からはじめたい。

### (3) B類の検討

B類については、古くは秋田県七館跡出土のものを「日光男体山」においては火打金と指摘されていたのであるが、高嶋氏は考古資料としては動坂遺跡(東京都文京区)、一橋高校遺跡(東京都小平市)出土例といずれも近世のものに限られ、七館遺跡・浪岡城跡など近世以前の資料については後述するように「芋引金」として否定されていた。

ところが、今回報告した中尾城跡出土資料は16世紀前半まで遡るものであり、その出現が少なくとも約50年～100年は古くなることが明らかとなった。このようなB類火打金については、近世を遡るものに限ると「火打金」として報告された例はみあたらない。しかし、中尾城跡例を基準に類例を探してみるといくつかの出土例を確認することができる。



第17表 B類火打金の大きさ

なお、ここで前もって確認しておかなければならない問題がある。それは、先にも触れた浪岡城跡・根城跡などの報告において盛んに報告されている「芋引金（芋引鋸）」との違いについてである。「芋引金」は、麻や芋の繊維を取り出すときに使用する道具であるが、平面形・大きさは火打金と全く同じである。また中央部に使用底



(縮尺1/4)

挿図111 見近島城跡出土火打金

としての挟りが認められることも同じである。大きく両者を区別するのは、高嶋氏も明言されておられる<sup>16</sup>ように、その断面形である。つまり、使用部ほど厚くなるのが「火打金」であり、逆に薄くなり刃をなすのが「芋引金」である。しかし、報告書に掲載された実測図、特にその断面形を中心にみると「芋引金」とされている<sup>17</sup>ものの中に、火打金とすべきではないかと思われるものが認められる。したがって、以下の検討においてその可能性が強いものについても、火打金として論を勧めていきたい。

主なB類火打金の出土遺跡としては、青森県南津軽郡浪岡町浪岡城跡<sup>18</sup>、秋田県鹿角郡柴平村七館遺跡<sup>19</sup>、長野県茅野市御社宮司遺跡<sup>20</sup>、新潟県南蒲原郡中之島村杉之森遺跡<sup>21</sup>、愛媛県越智郡宮窪町見近島城跡<sup>22</sup>、広島県三次市加井妻城跡<sup>23</sup>である。

まず浪岡城跡出土のものであるか、当初の報告においては「火打金」として報告されているながら「浪岡城跡発掘調査報告書Ⅲ」<sup>24</sup>以降「芋引金」として報告されているものが9点ある。これらの報告書に掲載された実測図の特に断面形に注意してみると、刃部を形成しているものは認められず、3～5mmの厚みをもっている。このことは、先に確認した諸要素のなかの要素1をみたすものである。また、要素2・3については問題ないことから、これらの資料については、B類火打金と判断できるものと考えられる。井戸・竪穴状遺構・包含層から出土してお

No.	遺跡名	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	備考
12	浪岡城跡									——			他に7個体(13~20)
27	七館										——		他に2個体(28,29)
82	敷原											——	
102	下宿内山											——	
121	御社宮司						——	——	——	——	——	——	
139	杉之森											——	
151	中尾城											——	他に1個体(152)
164	加井妻城											——	
165	見近島城									——		——	他に10個体(166~174)

Noは一覧表の番号と一致

—— 時期について確実ないし妥当性の高いもの

———— 時期について確実性に欠くもの

第10表 B類火打金消長表

り、いずれも15世紀後半から16世紀にかけてのものである。

七館遺跡出土例については、報告書においては「鍛先形鉄器」と報告されているもので計3点出土している。「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ」あるいは高嶋氏は、この資料を「芋引金」とされている。しかし、「日光男体山」で火打金とされているように、形態および大きさが中尾城跡例とはほぼ同じであること（要素2・3）、打撃部ほど2～3mmと厚みもち刃部をもたないこと（要素1）などの点から火打金と判断して大過ないものと考えられる。第4館住居跡からの出土で室町時代から桃山時代の時期とされている。

御社宮司遺跡出土例については「不明鉄製品」として報告されているものである。打撃部の幅（残存長）6.1cmと中尾城跡例と比較してやや短い傾向にあるが、打ち込み部の形状が中尾城跡例に類似している点、刃部をもたない点（要素1）などから火打金と判断される。13世紀から近世と時期幅をもつ包含層からの出土であるため、時期を特定することはできない。

杉之森遺跡出土例は、「かすがい」として報告されているが、要素1・2をみたまのみであり、B類火打金とみて間違いなであろう。ただし本遺跡出土例についても、10～17世紀の包含層からの出土であり、時期は特定できない。

見近島城跡出土例（挿図111）では「鍛形鉄製品」と報告されているが、形態・規模（要素1・2）において中尾城跡例のものと酷似しており、火打金とみて間違いなものである。計10個体の出土が報告されている<sup>26</sup>。出土遺構としては、建物跡という居住空間から出土しており、B類の性格を考える上で重要である。各遺構の時期は明らかにされていないが、遺跡としては、15世紀前半から16世紀の後半と幅をもっており、火打金についてもこの時期内におさまるものと考えられる。また、B類とは別に山形火打金A-d類3点も出土している。

加井妻城跡出土例は、「かすがい」として報告されているものである。打撃部から打ち込み部にかけてやや丸みを帯びている点において、他のB類火打金と異なる。しかし、このような形態は民俗資料としての火打金にはみられるものであり、打撃部幅9.0cmと中尾城跡例と同じ大きさであり（要素2）、打撃部が一定の厚み（3mm）をもつ点（要素1）においてB類火打金と考えられる。出土遺構は明らかではないが当遺跡に伴うものであり、当城跡の存続時期は15世紀後半から16世紀前半にかけてに比定されている。

以上、近世を遡ると考えられるB類の出土例は、中尾城跡のみではないことが明らかとなった。これらの資料の多くは、確実な時期・出土状態を確認できないものであるが、16世紀前半まで遡ることは確実のようである。さらに、浪岡城跡・加井妻城跡・見近島城跡例から15世紀代まで遡る可能性が高い。したがって、B類は少なくとも中世後期には確実に出現していたものとみてまちがいないであろう。

次に注目したいのは、出土遺構の明らかな七館遺跡・見近島城跡出土例をみると、いずれも住居跡ないし建物跡から出土していることである。また、中尾城跡についても、第2曲輪建物

4と東第1腰曲輪といずれも一定期間の居住を前提とした建物の存在が想定される地点から出土している。この事実は、B類火打金を近世においては屋内における常備用であったことと関連するものと考えられる。つまり、近世における常備用としての使用法が、出現期においてすでに確立していたものとみることができよう。

また、資料的に点数が少ないため明確なことはいえないが、地域的に偏在する傾向は認められないようである<sup>27</sup>。

#### (4) A類の検討

まず小川氏の分類（以下、小川分類）を参考としながら「山型」火打金を、その形態的・技法的特徴を基準に分類してみたい。特に、小川分類と大きく異なるのは、すかしのある火打金を一つの型式として設定した点である。また、II B類とII A類との中間型式のものを一つの型式として設定してみた。結果として5型式となった（挿図111）。

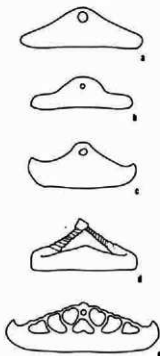
a類—平面二等辺三角形をなし頂部に紐穴を穿つもの。  
小川分類のII B類に相当する。

b類—紐孔部分のみが突出し、凸形をなすもの

c類—三角形の両底角が上方に反りあがり、打撃部が弧状ないしその傾向にあるもの。小川分類のII A類に相当する。

d類—c類の反りあがりさがさらに発達し、頂部まで達するもの。いわゆる「ねじり鎌」も含まれる。  
A類のなかでは全体的に小型である。小川分類のI類に相当する。

e類—全体にすかしを施すもの。基本形態としてはc類と同じものが多い。

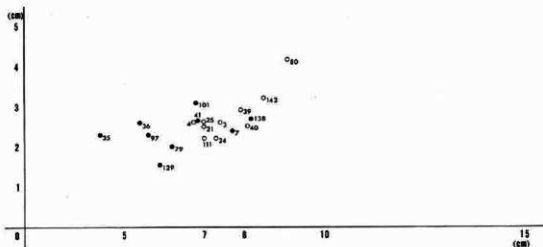


挿図112 火打金A類細分型式

次に、上記の分類をもとに大きさの分布（第19表～第21表）・出土火打金一覧表（第27表）を参考として、若干の検討をおこなっていきたい。

まずa類は、形式的にも最も単純形であり、火打金の原初型式と考えられる。このことは、大きさの分布において、a類がほぼ標準領域<sup>28</sup>内におさまっていることから認められるようである。しかし、出土例は少なく、確実に時期を特定できるのは、日光男体山山頂遺跡出土例の12世紀～13世紀初頭のものである。また、山田水呑遺跡例についても9世紀後半とされる住居跡から出土しているが、埋土中からの出土でありこの出土例をもって確実な出土例とまでみなせるかどうかについては、現段階では保留したい。さらに向原遺跡例についても、10世紀代





第19表 A-a・b類の火打金の大きさ

であることは間違いないようであるが、保存処理（X線透過試験・銷落しなど）の結果によってはc類となる可能性も残されている。

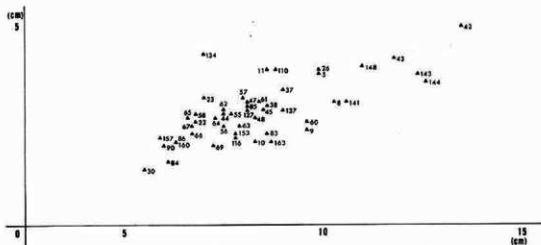
b類についても、出土例は少なく、時期を特定できる最古のものとしては、12世紀末～13世紀初頭の日光男体山山頂出土のものである。また、浪岡城跡・柳田館・武蔵岡遺跡出土例から16・17世紀代においても確実に存続している。

大きさについても、資料数が少ないこともあるが、大方標準領域内に収まっている。

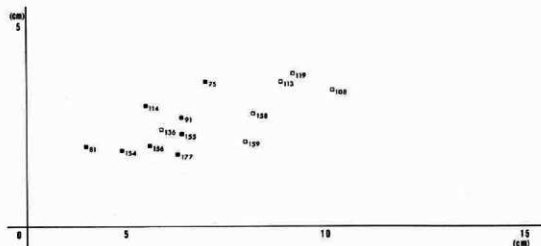
c類は打撃部が弧状をなす。これは打撃部が強調された結果と考えたい。c類についても、時期を特定できる出土例は、12世紀末～13世紀初頭の日光男体山山頂遺跡跡と11～12世紀とされる古館遺跡出土例である。この他高嶋幸男は、戸坂1号墳例をもって古墳時代後期まで遡る資料と位置付けているが、この資料は工事による破壊を受けてからの二次的に埋められた資料であり、古墳時代以降の再利用によるものとも考えられることなどから、当資料をもってこの時代のものとみることが危険である。村上込の内遺跡出土例についても、高嶋幸男氏は奈良時代とされているが、報告書においては時期を明確にされておらず、時期を判断することはできない。以上のことから、確実に存在していたとみることのできるのは12世紀代以降である。

c類については、大きさの分布をみると明らかなように、大きく4グループに分類できる。特に、大型のものが際立っている。この大型のものについては、当型式が基本的に打撃部を強調した形態であり、大型のものはさらにこの特徴を誇大したものであると考えられることから、





第20表 A-C類の火打金の大きさ



第21表 A-d・d類の火打金の大きさ

常時使用するものではなく使用しても稀に使う程度のもの、例えば儀式用ないし祭祀用のものと考えられる。特に、33個体まとまって出土した日光男体山山頂遺跡例はその典型例と考えられる。

d類は、底角の反りが頂部の上で接合することによって、a-b類に認められる紐穴の代用となるものである。ある種の装飾的意味合いも兼ねているものと考えられる。このことは、特に近世においては埋葬遺構出土のものが多いことから背首されよう。

本型式の出土例は少ない。確実な資料としては、山田水呑遺跡・日光男体山山頂遺跡があげられる。山田水呑遺跡は、8世紀中頃に位置付けられる121号住居跡床面より出土しており、この時期まで遡るようである。また、日秀西遺跡については、鬼高期の住居跡から出土している

No.	遺跡名	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18c	備考
3	浪岡城跡												他に2個体(4・6)
21	尻八館												
22	横城												
23	横城												
39	日光野跡山山頂												他に1個体(40)
80	山田水番												
88	大友館址												
111	向原												他に1個体(112)
123	杉の木平												他に1個体(132)
142	鶴岡町白山												

第22表 火打金A-a類清長表

No.	遺跡名	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18c	備考
7	浪岡城跡												
35	柳田館												他に1個体(36)
41	日光野跡山山頂												
79	谷津												
87	大塚												
97	武蔵岡												
88	八王子城												他に1個体(101)
102	下壺内山												中世?
129	杉の木平												
130	野道内												

第23表 火打金A-b類清長表

ようであるが、流れ込み層からの出土であり必ずしも鬼高期とは限定できない。新しい時期になると、いわゆる「ねじり鎌」は認められなくなるようである。また大きさの分布をみると、標準領域より小さい領域に分布が集中している。

e類は、装飾性に富むものである。短冊形の火打金による発火を試みた経験<sup>27</sup>から、打撃の際火打金自身がしっかりしていないと、頻度の高い使用には耐ええなことが判明した。したがって、当型式の火打金は、c類とは別の意味で頻度の高い使用を目的としたものではないつまり非実用的なものと考えられる。このことは、経塚に埋納された火打金の大半が当型式であることから背骨できるものと考えられる。また、経塚出土遺物でc類としたものの多くは錆化がひどいため、X線透過試験等の結果によってはe類となる可能性が大いに予想される。

さらに、この考えは、火打金を用いて火をおこす原理からも認められる。その原理とは、火打石(石英)の角があたることによって鋼鉄が剝離し、この剝離の過程において鉄片が瞬時に変形され、この変形にともない高温が生じ、空中の酸素と化合して酸化し発火して火種となるというものである<sup>30</sup>。つまり、火打金を使用するという事は徐々に剝離していくものであり、当然のことながら抉れが大きいほど使用の回数が多いことを意味する。このような観点で改めてe類をみると、抉れがほとんど認められないか、認められてもわずかである。

そして、当型式の多くが経塚に埋納されたものであることから、遺構の性格上時期を特定する上で大いに参考となる。つまり、12世紀代には確実に存在したことは明らかである。さらに

No.	遺跡名	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18c	備考
1	古野遺跡					—							他に1個体(2)
8	淡河城跡									—			他に4個体(8~11)
22	横城										—		
23	横城										—		
26	横城								—				
30	塚の下						—						
31	柳澤館山館									—			
32	飛鳥大地Ⅰ												他に1個体(34)
37	日光男体山						—						他に34個体(32,42,74)
83	村上込の内	—											
84	高沢	—											他に1個体(86)
85	高沢	—											
90	河原塚・古井戸	—											
104	本郷			—									他に1個体(105)
110	衣笠城跡					—							
116	城の原									—			他に1個体(117)
122	杉の水平												
127	杉の水平												
128	杉の水平												
134	杉の水平	—											
135	吉田向井										—		
137	飯堂経塚					—							
140	菅正寺								—				
141	鶴来町白山												
142	新倉氏										—		他に1個体(144)
145	深山寺経塚												
148	金崎山経塚					—							
149	那智経塚					—							
150	宮												
153	国領										—		
157	藤塚近世墓											—	
160	福田片岡								—				
162	戸塚Ⅰ号墳	—											
163	高戸千軒町								—				

第24表 火打金A-c類消長表

10世紀前半とされる野呂原遺跡住居跡出土のものがあり、この時期まで遡る可能性がある。しかし、この火打金は紐穴が拡大したもので必ずしもすかしとはいいきれず、一般的なe類とはみなせるかどうかは疑問である。したがって、現段階では経塚出土遺物を根拠として12世紀を一応の目安と考えたい。

また大きさの分布をみると、e類についてはd類とは逆に標準領域より1ランク大きな領域での分布が認められ、火打金としては大型の部類に属するようである。先に記した非実用性とも関連するものと考えられる。

以上、A類の各型式ごとにその特徴を検討してきた。まず大きさに注目すると、各型式間においてその分布域が異なり、c類においてはいくつかのグループに分けられることが明らかとなった。これらのことは、先に絵画資料の検討において指摘したような、火打金の大・中・小の存在を立証するものといえよう。

No.	遺跡名	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18c	備考
75	日光男侍山山頂												
81	山田水呑												
82	日秀西												
81	大久保山 I												
114	白下邸												
154	鎌倉近世墓												他に2個併(155,156)
175	見近島城												他に2個併(176,177)

第25表 火打金A-d類消長表

No.	遺跡名	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18c	備考
76	日光男侍山山頂												他に1個併(77)
106	長勝寺												他に2個併(107,108)
109	堀江邸跡												
113	野島原												
115	霊地寺跡塚												
116	北ノ城												
119	南羽農場												
124	杉の木平												鎌倉・室町時代
125	杉の木平												他に1個併(126)
133	杉の木平												
136	田圃射山												
159	福田片岡												

第26表 火打金A-e類消長表

しかし、多くの資料は遺構に伴うものではなく、明確に時期を特定できる資料が少ないことから、現段階では各型式ごとの時期的変遷を辿ることはできない。ただ、型式上のみからその見通しを述べると、基本的にa類からe類へ分化していくものと考えている。つまり、a類の三角形を基本形態とみると、次に底角の反りが発達しc類となり、さらにその反りが発達してd類となる。そして、d類の装飾性とc類の大型化との影響のもとにe類が出現するというものである。e類ないしd類については、平安時代には確実に出現していたことから、火打金そのものの出現は明確ではないが、火打金出現時に近い頃より分化がなされていたようである。このことの是非については、今後の資料の増加をまつことにしたい。

その一方で、火打金の出現から近世にかけての大半の時期は、各タイプが共存していたものと考えられる。そして、その共存のなかにおいてa類・c類(小型)・d類については実用的、c類(大型)・e類については非実用的と考えられることから、日常用と非日常用との使い分けがなされていた可能性も考えられる。

#### (5) A類とB類の関係

出土資料からみる限りA類がB類に先行することは確実である<sup>31</sup>。形式的にも、高嶋氏も指摘されている<sup>32</sup>ように、A類の三角形の頂点が低くなる一方で底角がはねあがることによってB類へと変化するものと考えられる。

そして、少なくともB類の出現する15ないし16世紀以降については、A類とB類は併存することとなる。先に述べたように、B類火打金はその出現当初より屋内における常備を意図され

ていたものと考えられる。したがってこのような使い分けは、B類の出現する16世紀ないし15世紀代まで遡るものと考えられる。

ところが近世になるとA類は比較的少なくなり、A類の大半は装飾的・非実用的なA-e類のようである。このことは、近世になると、携帯用の火打金については、A類からC類へとその主流が変わっていったのではないだろうか。ただしC類については、考古資料としてはほとんど明らかとなっていない現段階においては、全くの推測にすぎない。

## 5. まとめ

以上、文献資料・絵画資料・考古資料を通して火打金についての検討をおこなってきた。そこで、最後にこれまでの検討を総合して、大方の見通しを述べてみたい。

**古代** この時期は、文献資料から火打金が存在していたことは確実である。しかし、具体的にどの時期までさかのぼるかについては、明確な時期をおさえられる資料がなく不明である。「古事記」の記載などから、少なくとも奈良時代までは遡りえるものと考えられる。ただし、この時期においては、量的には少なかったものと推定される。

**中世（～15世紀）** この時期の火打金については、絵画資料を観察すると、比較的多くの火打袋が描かれており、古代に比べてかなり一般化したものと考えられる。なかでも、多くの階層の人物が携帯している点が注目される。また、いずれも腰に紐で吊り下げていることから、出土資料をも考慮に入ると、この時代の火打金はA類であったことは明らかである。ただし、当該期の考古資料としては、量的に多いとはいえない。これは、当時の火打金は全て携帯用つまりたえず身につけているものであったために、遺跡ないし遺構内に残りにくいという性格も一因となっているものと考えられる。

また、文献資料に関しても、火打金についての記載のある資料は大変限られている。11世紀に藤原明衡によって著された往来物の『新猿蓑記』<sup>23</sup>の中に、当時の鉄製品が多数列挙されているが、この中に火打金についてはあげられていないことも、当時の社会における位置を何らかの形で反映しているのではないだろうか。したがって、当該期においては、具体的にどの程度まで普及・一般化していたのかは明確にしない。

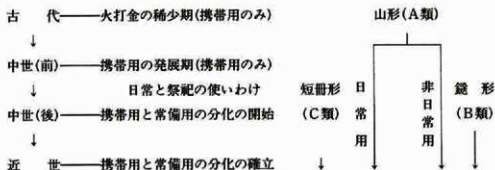
また、絵巻物資料でも明らかのように、火打金は祭祀用と一言で片づけられるものでは決してなく、日常用と明確に使い分けられていたことは明らかである。

**中世（15世紀～）** この時期になるとB類が出現してくる。しかし、出土資料からみる限り量的には少ないようである。B類とA-d類が出土した見近島城跡に代表されるように、携帯用と常備用の使用が開始された点で、大きな画期をなすものである。

なお、この時期の開始期については出土資料の増加によって、さらに遡る可能性が十分に考えられることであって、便宜上の時期設定である。

近世 前時期においてその開始が認められた携帯用と常備用との分化の確立期と考えられる。ただし携帯用に関しては、A類にかわってC類が主流となっていくものと推定される。

以上のことをまとめると、以下のようになる。



このように、B類の出現は火打金の携帯用と常備用の使い分けの開始を意味するものであり、中尾城跡の出土資料はその転換期のものと位置付けられる。したがって、中尾城跡でB類火打金が出土していることは、火打金を中心にみると、臨時的ではなくある程度長期の居住を物語るものといえるのではないだろうか。

次に火打金の日常性について触れておきたい。

古代以来、火は暖房・調理・照明など日常生活において欠くことのできないものつまり日常性そのものである。このため、火を絶やさないようにする「火留め」の技術が女性に要求されていた。しかし、火を象徴とした日常性も穢れや厄災におびやかされたり、日々の繰り返しによる情性からその秩序が衰退していく。このため、古い秩序を新たな秩序に再生させることが必要となり、絶やさぬようにされてきた火を一端完全に消し改めて新たな火を火打金で打ち直したそうである<sup>24</sup>。このような意味で、火打金は日常性を更新する原動力＝日々の生活の活性化剤、つまり日常性の真の象徴とみることができよう。また一方で、日常性の更新という面からみると、火打金は儀礼的さらには祭祀的要素の強いものとみることができる。特に『御堂関白記』・『栄華物語』などに如実に表現されている。したがって、これまで本論で使用してきた「日常性」そのものについても再検討が必要である。今後民俗学的な検討も必要と考えられる。

以上火打金について概観してきたが、時期を確実に把握できる資料が少ないため、細かな分析・検討はできなかった。しかし、火打金ひとつとってもその形式差によってその機能・使用方法が異なり、それらを使い分けていたことが明らかとなった。

最後に今後の課題を列記しておきたい。

- ①出現期がいつであるのか。そしてその起源が日本国内に求められるのか、国外に求められるのか。

- ②各細分型式の妥当性の再検討・再分類。および各型式の機能の明確化。
- ③祭祀用と日常用としてはその成分に差があるのか。(例えば日常用の方が丈夫であり、発火しやすいのでは。あるいは、日常用は鍛造であり祭祀用は鋳造であるといった違いが認められないか。)
- ④鉄器生産の発展・商品流通の中における位置付け。(例えば、中世の財産目録には火打金は記載されていないが、これは単なる偶然なのか。何らかの意味を有するものなのか)
- ⑤短冊型(C類)の実体の解明。(考古資料の発掘・出現期の検討)
- ⑥文献資料の検討

## 註

1. 高鳴幸男著「火の道具」柏書房 1985
2. 宮本馨太郎「燈火—種類と変遷—」1964
3. 岩波古典文学体系本「古事記」による。
4. 東野治之著「正倉院」岩波新書 1988
5. 前掲 注2
6. 「新訂増補 国史体系」第三十一巻1930 による
7. 「日本古典文学大系75 栄華物語上」岩波書店1964による
8. 「大日本古記録 御堂関白記上」による
9. 石部正志「王朝文学の火—特に照明と暖房について—」『権原考古学研究所論集 第十巻』権原考古学研究所編 1988
10. 辻澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編「日本常民生活絵引」・中央公論社編「日本の絵巻」による
11. 文献18
12. 文献19
13. 文献2
14. 中巻 景行天皇段
15. 文献1
16. 文献1
17. 『史跡根城発掘調査報告書Ⅲ』において、根城跡以外の類別として、七館遺跡(秋田県鹿角郡柴平村)、湯瀬館跡(秋田県鹿角郡八幡平)、新斗米館跡(秋田県鹿角市)、館(秋田県比内町谷地中)、田中4遺跡(岩手県二戸郡一戸町)、浪岡城跡(青森県青森市南津軽郡浪岡町)をあげている。このなかで、七館・浪岡城跡については検討を加える予定である。しかし、他の遺跡については、報告書を確認できなかった。なお、根城跡出土例に関して

は、実測図から判断する限り「芋引金」とみて間違いないようである。

18. 文献5、7、8
19. 文献13
20. 文献36
21. 文献42
22. 文献55
23. 文献54
24. 文献5
25. 浪岡城跡の出土資料について、浪岡町教育委員会の工藤清泰氏にお伺いしたところ、山形（A類）の火打金が建物跡から出土するのに対して「芋引金」とされるものは工房跡的な竪穴状遺構から出土すること、中央部が挟られており芋を引いた際の使用痕と考えられること、青森県など北国の民俗例では「鋸形」をしたものはすべて芋引金であることなどの理由から、「芋引金」とする方がより妥当との見解を示され、見解の一致をみることはできなかった。しかし、中尾城跡例などにも同様な挟れが認められる点、刃部が厚みをもつ点などについては火打金とみる可能性も残されている。ただし、浪岡城跡出土資料を実見していないこともあり、本論においては火打金の可能性があるという意味で掲げさせていただきたい。その当否については今後の課題としたい。
26. 愛媛県越智郡宮窪町教育委員会矢野哲男氏のご厚意により実見させていただいた。また出土火打金の一個体（挿図111）について再実測をさせていただいた。
27. ただし、今回の集成においては、九州地方からの出土例を確認することはできなかった。
28. A類の火打金すべてについて、幅と長さをドットし、その分布が特に密な分布域を標準領域として設定した。
29. 京都で市販されている火打金（短冊型）を用いて、発火を試みたところ、火打石を火打金に打撃する際、火打金に相当の力が加わることがわかった。このため、火打金自体がかなりしっかりしていないと、すぐに破損するのではないかと感じられた。
30. 朝岡康二「火に関わる職業」『歴史公論』11-10 1985・10
31. ただし、長野県大室古墳群出土資料については、報告書で確認できなかったため、見解を保留させていただきたい。
32. 文献1
33. 「新叢書」『古代・中世社会思想史』岩波書店
34. 飯島吉晴「家と火ーカマド・イロリと火ー」『歴史公論』11-10 1985・10  
清水昭俊「火の民俗学」『日本古代文化の探求 火』大林太良編 社会思想社 1974



第27表 古代・中世火打金出土遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	形態	幅×長さ×厚さ	時期	出土遺構	備考	文献
1	古館遺跡	青森県南津軽郡陸ヶ岡村	A-C類	85 × (22) × 5	11-12C	43号型穴・床面	第153図-6・火打石片等	2
2	古館遺跡	青森県南津軽郡陸ヶ岡村	A-C類	85 × (19) × 5	11-12C	包含層	第153図-8	2
3	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-A類	74 × 26 × 8	15C後~16C	北館 SE 63	57年度調査・欠損	3
4	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-A類	65 × 26 × 3	15C後~16C	北館 包含層	57年度調査・欠損	3
5	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-C類	99 × 38 × 4	15C後~16C	北館 包含層	57年度調査・完形	3
6	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-A類	80 × 26 × 4	15C後~16C	北館 包含層	58年度調査	4
7	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-B類	77 × 24 × 3	15C後~16C	北館 包含層	58年度調査	4
8	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-C類	103 × 31 × 4	15C後~16C	北館 SE 10	54年度調査・199・完形	5
9	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-C類	96 × 24 × 4	15C後~16C	北館 包含層	54年度調査・198・完形	5
10	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-C類	83 × 21 × 4	15C後~16C	内館 SX 244	59年度調査	6
11	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	A-C類	86 × 39 × 4	15C後~16C	内館 SE 127	60年度調査	7
12	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	89 × 20 × 4	15C後~16C	北館 表土層	54年度調査・200・手引金	5
13	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	77 × ? × 5	15C後~16C	北館 ST 31深部	54年度調査・201・手引金	5
14	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	87 × 21 × 3	15C後~16C	北館 ST 11土上	54年度調査・202・手引金	5
15	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	(77) × 19 × 3	15C後~16C	北館 包含層	54年度調査・208・手引金	5
16	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	85 × 7 × 3	15C後~16C	内館 SE 28	58年度調査・278・手引金	8
17	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	100 × 24 × 2	15C後~16C	内館 SX 48	55年度調査・279・手引金	8
18	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	87 × 24 × 3	15C後~16C	内館 SE 28	56年度調査・280・手引金	8
19	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	91 × 20 × 2.4	15C後~16C	内館 SE 118	60年度調査・233	7
20	浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町	B類	95 × 17 × 3	15C後~16C	内館 SX 288	60年度調査・234	7
21	民八館	青森県青森市大津後湯	A-A類	70 × 25 × 3	15C	II郭 北3隅部	火打石出土(石炭)	9
22	根城跡	青森県八戸市大字根城	A-C類	68 × 26 × 3	17C以前	SK 148	56・57年度調査	10
23	根城跡	青森県八戸市大字根城	A-C類	70 × 32 × 3	15-16C		26・29年度調査	10
24	根城跡	青森県八戸市大字根城	A-A類	73 × 22 × 4	16C末~17C初	SB86(堀端柱建物)	58年度調査	11
25	根城跡	青森県八戸市大字根城	A-A類	70 × 26 × 5			58年度調査	11
26	根城跡	青森県八戸市大字根城	A-C類	99 × 39 × 4	14C後以降	SI286(堀穴遺構)	62年度調査	12
27	七館	秋田県鹿角郡保平村	B類	80 × 23 × 2	室町~桃山	第4館 住居跡	「兼光形鉄器」として報告	13
28	七館	秋田県鹿角郡保平村	B類	90 × 20 × 3	室町~桃山	第4館 住居跡	「兼光形鉄器」として報告	13
29	七館	秋田県鹿角郡保平村	B類	98 × 22 × 3	室町~桃山	第4館 住居跡	「兼光形鉄器」として報告	13
30	堀の下	秋田県大館市大滝内	A-C類	55 × 14 × 6	12C以降	6号型穴	住居跡	14
31	新津龍山館	宮城県本吉郡津山町新津	A-C類	(76) × 32 × 2	15-16C後半	覆土		15
32	鴫島台地I	岩手県二戸郡浄法寺町	A-C類	(62) × 25 × 4	平安~中世	包含層	1809	16
33	鴫島台地I	岩手県二戸郡浄法寺町	A-C類	(52) × 24 × 4	平安~中世	包含層	1810	16
34	鴫島台地I	岩手県二戸郡浄法寺町	A-C類	(45) × 26 × 3.5	平安~中世	表層	1811	16
35	梅田館	岩手県紫波郡紫波町片寄	A-B類	44 × 23 × 4	16C後~17C初	III-18削平地	第200図298	17
36	梅田館	岩手県紫波郡紫波町片寄	A-B類	54 × 26 × 4	16C後~17C初	III-18削平地	第200図338	17

No.	遺跡名	所在地	形態	幅×長さ×厚さ	時期	出土遺構	備考	文献
37	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	90 × 34 × 6	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図23	18
38	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	86 × 80 × 5.5	12C末-13C初	Jトレンチ	第71・72図24	18
39	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-a類	79 × 29 × 6.5	12C末-13C初	Dトレンチ	第71・72図26	18
40	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-a類	81 × 25 × 5	12C末-13C初	Iトレンチ	第71・72図27	18
41	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-b類	68 × 23 × 4.5	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図42	18
42	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	135 × 50 × 3.5	12C末-13C初	B地区	第71・72図1	18
43	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	118 × 24 × 3.5	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図2	18
44	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	75 × 28 × 5	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図3	18
45	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	85 × 29 × 5	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図4	18
46	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	68 × (22) × 2.3	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図5	18
47	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	81 × 31 × 4	12C末-13C初	Dトレンチ	第71・72図6	18
48	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	83 × 27 × 3.5	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図7	18
49	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(78) × 26 × 7	12C末-13C初	Dトレンチ	第71・72図8	18
50	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(60) × 28 × 6	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図9	18
51	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(65) × 24 × 4	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図10	18
52	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(59) × (26) × 4	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図11	18
53	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(63) × 25 × 6	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図12	18
54	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(64) × 30 × 6	12C末-13C初	Dトレンチ	第71・72図13	18
55	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	77 × 28 × 4	12C末-13C初	Dトレンチ	第71・72図14	18
56	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	75 × 25 × 5	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図15	18
57	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	80 × 32 × 7	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図16	18
58	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	68 × 28 × 7	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図17	18
59	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(52) × 23 × 4.5	12C末-13C初	Jトレンチ	第71・72図19	18
60	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	96 × 26 × 3	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図20	18
61	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	84 × 31 × 4	12C末-13C初	Iトレンチ	第71・72図21	18
62	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	75 × 29 × 7	12C末-13C初	Jトレンチ	第71・72図22	18
63	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	79 × 25 × 5	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図25	18
64	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	73 × 27 × 4.5	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図28	18
65	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	66 × 27 × 4	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図29	18
66	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	67 × 23 × 5.5	12C末-13C初	Jトレンチ	第71・72図30	18
67	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	67 × 25 × 3.5	12C末-13C初	Dトレンチ	第71・72図31	18
68	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	75 × (15) × 5	12C末-13C初	Jトレンチ	第71・72図32	18
69	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	75 × 20 × 2	12C末-13C初	Iトレンチ	第71・72図33	18
70	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(61) × 28 × 5.5	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図34	18
71	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(60) × 27 × 5	12C末-13C初	A地区	第71・72図35	18
72	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(76) × 34 × 5	12C末-13C初	Gトレンチ	第71・72図36	18
73	日光男体山	栃木県日光市男体山頂	A-c類	(83) × (27) × 7	12C末-13C初	Cトレンチ	第71・72図37	18

No	遺跡名	所在地	形態	幅×長さ×厚さ	時期	出土遺構	備考	文献
74	日光跡山	栃木県日光市	A-c類	68) × 22 × 5	12C末~13C初	Gトレンチ	第71・72図38	18
75	日光跡山	栃木県日光市	A-d類	70 × 36 × 6	12C末~13C初	Dトレンチ	第71・72図43	18
76	日光跡山	栃木県日光市	A-e類	68) × (25) × 3	12C末~13C初	Jトレンチ	第71・72図40	18
77	日光跡山	栃木県日光市	A-e類	(72) × (27) × 3	12C末~13C初	Cトレンチ	第71・72図41	18
78	日光跡山	栃木県日光市	A類	(70) × 41 × 2	12C末~13C初	Iトレンチ	第71・72図44	18
79	谷津	千葉県千葉市	A-b類	62 × 20 × 5	11C以後	21号住居ピット	c類?	1
80	山田水谷	千葉県東金市大字山田	A-a類	91 × 41.5 × 3.5	9C後	113号住居 埋土		19
81	山田水谷	千葉県東金市大字山田	A-d類	40 × 20 × 3.5	8C中	113号住居 床面遺構		19
82	日秀西	千葉県我孫子市	A-d類	51 × (16) × 3	7C	027B住居 流石込み		20
83	村上込の内	千葉県八千代市村上	A-c類	86 × 23 × 4	古墳~歴史時代	160号墳 墓穴住居		21
84	高沢	千葉県	A-c類	61 × 16 × 2	奈良	161号住居跡		1
85	高沢	千葉県	A-c類	61 × 30 × 3	平安	90号住居跡		1
86	高沢	千葉県	A-c類	63 × 21 × 2	奈良	228号住居跡		1
87	大進	千葉県千葉市生実町	A-b類	80 × (30) × 4	平安	038号住居跡		22
88	大友館址	群馬県利根郡月夜野町	A-a類	13 × 45.5 × 6	近世	近世土壌墓	欠損・c類の可能性あり	23
89	大友館址	群馬県利根郡月夜野町	A-d類	11 × 51 × 4	近世	近世土壌墓	欠損・他型式の可能性あり	23
90	神奈保・古骨戸	埼玉県本庄市典家	A-c類	60 × 20 × 4	7C末~8C前	H-97号住居		24
91	大久保山1	埼玉県本庄市	A-d類	64 × 27 × 5	9C~11C?	勾倉層	ぬじりが片方のみ	25
92	駒坂	東京都	B類	63 × 24 × 4	18C		ほぼ完形	1
93	一橋高校	東京都	B類	63 × 24 × 4	18C		欠損	1
94	一橋高校	東京都	B類	76 × 20 × 4	18C		欠損	1
95	一橋高校	東京都	B類	84 × 22 × 5	18C			1
96	一橋高校	東京都	B類	—————	18C			1
97	武蔵岡	東京都町田市相原町	A-b類	56 × 23 × 2	16C後~17C中	2号溝		26
98	多摩川・フクシマ	東京都多摩市乞田久保谷	A類	(67) × 21 × 5	奈良~平安?			27
99	八王子城	東京都八王子市元八王子	A-b類	—————	16C後		敷出土のうちの1点	28
100	八王子城	東京都八王子市元八王子	A類	—————	16C後		断面型式は不明・d類か	28
101	八王子城	東京都八王子市元八王子	A-b類	63 × 31 × 3	16C後			29
102	下宿内山	東京都清瀬市	A-b類	(90) × 26 × 4	中世?	I 7 (井戸)	井戸構築後の埋戻し土砂中	30
103	下宿内山	東京都清瀬市	B類	69 × 24 × 4	近世			30
104	本郷	神奈川県	A-c類	—————	10C	14号柱		1
105	本郷	神奈川県	A-c類	—————	10C			1
106	長勝寺	神奈川県鎌倉市	A-e類	—————	14中	土間	欠損	1
107	長勝寺	神奈川県鎌倉市	A-e類	(90) × 31 × 3	14中		欠損	1
108	長勝寺	神奈川県鎌倉市	A-e類	10.2 × 34 × 4	14中		完形	1
109	堀江跡跡	神奈川県	A-e類	—————	14C			1
110	衣笠城跡	神奈川県横浜市中区衣笠町	A-c類	88 × 39 ×	12C	竪塚	e類の可能性あり	31

No	遺跡名	所在地	形態	幅×長さ×厚さ	時期	出土遺構	備考	文献
111	向原	神奈川県平塚市上古沢	A-a類	70 × 22 × 3	10C中～後	59号住居跡	c類の可能性あり	33
112	向原	神奈川県平塚市上古沢	A-a類	(38) × (22) × 2	10C中～後	82号住居跡	c類の可能性あり	33
113	野呂原	山梨県東八代郡一宮町	A-e類	89 × 36 × 4	10前	14号住居		34
114	日下部	山梨県東山梨郡日下部町	A-d類	55 × 30 × 4	10C		ねじり縄?	1,40
115	雲峰寺経塚	山梨県塩山市上萩塚	A-e類	75 × ? × ?	12C	経塚		31
116	城の腰	長野県伊那市西春近	A-e類	78 × 22 × 3	15C～16C	第1号竪穴 覆土層	完形	32
117	城の腰	長野県伊那市西春近	A-c類	(50) × 26 × 3	15C～16C	2号住居跡 床面	欠損	32
118	北ノ城	長野県下伊那郡松川町元大島	A-e類	48 × (15) × 3	16C	本郭内	火打石出土	35
119	南宮羽場	長野県下伊那郡飯島町	A-e類	92 × 38 × 3	12C末	3号竪穴		1
120	御土宮司	長野県茅野市	A類	67 × 28 × 4	15C前～15C中	竪穴状遺構		36
121	御土宮司	長野県茅野市	B類	(61) × 15 × 3	13C～近世	包含層		36
122	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-c類	(70) × 46 × 5	鎌倉・室町	柱穴群2	第256図30	37
123	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-a類	(77) × 27 × 4	鎌倉・室町	柱穴群2	第256図31	37
124	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-e類	95 × (23) × 5	鎌倉・室町	柱穴群2	第256図32・「かすがい」	37
125	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-e類	(36) × (14) × 2	近世	土壌1(墓塚)	第266図6	37
126	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-e類	(52) × (24) × 4	近世	土壌2(墓塚)	第266図7	37
127	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-c類	81 × 29 × 6	平安末	炭層4分の1	第266図14・完形	37
128	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-c類	(72) × 32 × 3	近世	包含層	第266図28	37
129	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-b類	59 × 16 × 5	近世	包含層	第266図32	37
130	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A類	(52) × (34) × 3	近世	包含層	第266図29	37
131	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A類	(40) × 23 × 2	中・近世	包含層	第266図65	37
132	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-a類	(53) × 25 × 3	平安	包含層	第266図102	37
133	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-e類	(73) × (19) × 2	平安	包含層	第266図103	37
134	杉の水平	長野県下伊那郡阿智村	A-c類	70 × 43 × 5	平安	包含層	第276図1・ほぼ完形	37
135	古田向井	長野県塩山市大字弘正吉田	A-c類	66 × (10) × 4	中・近世			38
136	田御射山	長野県清霧ヶ峰田御射山	A-e類	64 × 24 × ?	鎌倉	段状遺構	祭祀遺構	39
137	板堂経塚	岐阜県瑞浪市土岐町養山	A-c類	90 × 29 × ?	12C	経塚		40
138	野里内	三重県伊勢市上地町	A-b類	82 × 27 × 8	平安時代前半	SK18		41
139	杉の森	新潟県南蒲原郡中之島村	B類	104 × 25 × 4	16C後?	包含層	「かすがい」	42
140	普正寺	石川県金沢市普正寺町	A-c類	85 × (25) × 3	14C後～15C中			43
141	龍泉町白山	石川県石川郡龍泉町白山町	A-c類	106 × 31 × 5	12C末～			44
142	龍泉町白山	石川県石川郡龍泉町白山町	A-a類	85 × 32 × 4.5	12C末～			44
143	新倉氏	福井県越前市内町	A-c類	124 × 38 × 2	16C後		第49次調査	45
144	新倉氏	福井県越前市内町	A-c類	126 × 36 × 1.5	16C後		第46次調査	46
145	深山寺経塚	福井県敦賀市深山寺	A-c類	? × 34 × ?		経塚	e類の可能性あり	47
146	下湯谷経塚	福井県大野市下湯谷				経塚		47
147	松原	福井県敦賀市龍川町・松原町	A類		8C末～10C前		祭祀的色彩が強い	48

No	遺跡名	所在地	形態	幅×長さ×厚さ	時期	出土遺構	備考	文献
148	釜淵山跡	奈良県吉野郡大川村	A-c類	110 × 40 × 6	12C	経塚	大正12年出土遺物・e類?	49
149	那智経塚	和歌山県東牟婁郡那智郡阿武町	A-c類	81 × ? × ?	12C	経塚	e類の可能性あり	50
150	宮	京都府福知山市宇宮	A-c類	(78) × 23 × 5	13C初	S D01		51
151	中尾城	兵庫県三田市下祖野	B類	89 × 18.5 × 2	16C前	第2曲輪	神園102F87	
152	中尾城	兵庫県三田市下祖野	B類	86.5 × 15 × 2	16C前	東第1環曲輪	神園102F88	
153	国領	兵庫県水上郡春日町国領	A-c類	78 × 23 × ?	近世	近世墓	実見	
154	善導近世墓	兵庫県多紀郡西紀町	A-d類	49 × 19 × ?	近世	近世墓	実見	
155	善導近世墓	兵庫県多紀郡西紀町	A-d類	64 × 23 × ?	近世	近世墓	実見	
156	善導近世墓	兵庫県多紀郡西紀町	A-d類	56 × 20 × ?	近世	近世墓	実見	
157	善導近世墓	兵庫県多紀郡西紀町	A-c類	59 × 22 × ?	近世	近世墓	b類に近い 実見	
158	エノ田	兵庫県豊岡市エノ田	A-e類	82 × 28 × 3.5			実見	
159	福田片岡	兵庫県電野市養田町	A-e類	80 × 21 × 5	15C		実見	
160	福田片岡	兵庫県電野市養田町	A-c類	63 × 21 × ?	15C		実見	
161	福田片岡	兵庫県電野市養田町	A-e類	74 × (21) × ?	15C		実見	
162	戸塚1号墳	岡山県真庭郡落合町	A-c類	(88) × 31 × 2.5	7C?		古墳再利用では?	52
163	草戸平軒	広島県福山市(芦田川)	A-c類	87 × 21 × 3	14C前/鎌倉本	S G350(池)	実見	53
164	加寿寺城	広島県三次市翠福町上村	B類	90 × 11 × 3	15C後-16C前			54
165	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	74 × 14 × 3	15C中-16C後	1号土器跡	第142図4・実見	55
166	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	90 × 31 × 3	15C中-16C後	2号溝状遺構	第142図5・実見	55
167	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	(42) × 15 × 4	15C中-16C後	3号土器跡	第142図6・実見	55
168	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	75 × 15 × 3	15C中-16C後	6号建物跡	第142図7・実見	55
169	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	60 × 21 × 3	15C中-16C後	4号土器跡	第142図8・実見	55
170	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	89 × 18 × 3	15C中-16C後	16号建物跡	第142図9・実見	55
171	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	77 × 18 × 3	15C中-16C後	16号建物跡	第142図10・実見	55
172	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	78 × 18 × 3	15C中-16C後	16号建物跡	第142図11・実見	55
173	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	84 × 17 × 3	15C中-16C後	14号建物跡	第142図12・実見	55
174	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	B類	72 × 12 × 3	15C中-16C後	14号建物跡	第142図13・実見	55
175	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	A-d類	80 × (12) × 3	15C中-16C後	2号溝状遺構	第143図1・実見	55
176	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	A-d類	65 × (27) × 3	15C中-16C後	6号建物跡	第143図2・実見	55
177	見近鳥城	愛媛県越智郡宮窪町見近鳥	A-d類	63 × 18 × 3	15C中-16C後		第143図3・実見	55

※この一覧表に掲載されている大打金は、報告者が固あるいは写真で確認したものに限り、このための報告書などで類別として挙げられながらその報告書等を確認できなかったものについては割愛させていただいた。

※A類の長さは三角形の「高さ」に相当、幅はそこに直交する最大長。B類は計測法は神園104による。単位はmである。

※下線付の数値は、実測図等より再測したもの

※( )内の数値は残存長

※上記以外の数値は、報告書などによる数値である。

※備考内の図版Noなどはその報告書に掲載されたNoである。

## 参考文献

1. 高嶋幸男『火の道具』柏書房 1985
2. 小川貴司他『碓ヶ関村 古館遺跡』青森県教育委員会 1979
3. 工藤清泰『昭和57年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡VI』浪岡町教育委員会 1984
4. 工藤清泰他『昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡VII』浪岡町教育委員会 1985
5. 工藤清泰他『昭和54年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡III』浪岡町教育委員会 1981
6. 工藤清泰他『昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡VIII』浪岡町教育委員会 1986
7. 工藤清泰『昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡IX』浪岡町教育委員会 1988
8. 工藤清泰他『昭和55年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡IV』浪岡町教育委員会 1982
9. 大橋康二・岩本義雄『尻八館調査報告書』(青森県立郷土館調査報告書第9集) 青森県立郷土館 1981
10. 工藤清泰・佐々木浩一『史跡根城跡発掘調査報告書V (昭和56・57年度)』(八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集) 青森県八戸市教育委員会 1983
11. 小林和彦・佐々木浩一他『史跡根城跡発掘調査報告書VII (昭和58年度)』(八戸市埋蔵文化財調査報告書第14集) 青森県八戸市教育委員会 1985
12. 小林和彦・佐々木浩一他『史跡根城跡発掘調査報告書X (昭和62年度)』(八戸市埋蔵文化財調査報告書第12集) 青森県八戸市教育委員会 1988
13. 江上波夫・桜井清彦・関野雄『秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡』『館址—東北地方における集落址の研究—』1958
14. 富樫泰時・田村栄地『塚の下遺跡発掘調査報告書』(秋田県文化財調査報告書第61集) 秋田県教育委員会 1979・3
15. 阿部恵他『柳津館山館跡—東北地建バイパス関係遺跡調査報告書—』(宮城県文化財調査報告書第102集) 宮城県教育委員会・東北地建仙台工事事務所 1984・3
16. 三浦謙一『飛鳥台地I遺跡発掘調査報告書—東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査—』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988
17. 石川長喜・昆野晴『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IV (柳田館)』(岩手県文化財調査報告書第53集) 岩手県教育委員会・日本道路公団 1980
18. 斎藤忠・佐野大和・亀井正道・三宅敏之・永峯光一『日光男体山—山頂遺跡発掘調査報告書—』1963
19. 松村恵司他『山田水呑遺跡—上総国山邊郡山口郷推定遺跡の発掘調査報告書—』日本道路公団・山田遺跡調査会 1977
20. 堀部昭夫・清藤一順・上野純司『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県教育



委員会・財団法人 千葉県文化財センター 1980

21. 天野努他『八千代市村上遺跡群』日本住宅公団東京支所・財団法人 千葉県都市公社 1974
22. 白石浩・榊原弘二『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』千葉県土地開発公社財団法人 千葉県文化財センター 1983
23. 中村富雄・間庭稔・三宅郭気『大友館址一関越自動車道(新潟線)地域文化財発掘調査報告書』K. C. VIII 月夜野町教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 1986
24. 赤熊浩一・富田和夫他『特監塚・古井戸—歴史時代編II 児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書IV—』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集)財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988
25. 荒川正夫他『大久保山I—早稲田大学本庄校地文化財調査報告書1—』早稲田大学本庄校地文化財調査室編 1980
26. 倉田芳郎『東京都町田市武蔵岡遺跡—1981年度調査—』武蔵岡遺跡調査会 1982. 8
27. 千野裕道・飯塚武司他『多摩ニュータウン遺跡—Na769遺跡 奈良・平安時代編—』(東京都埋蔵文化財センター調査報告 第6集) (財団法人 東京都埋蔵文化財センター 1985. 8)
28. 八王子市教育委員会『八王子城』 1983
29. 八王子市教育委員会・八王子城跡調査会『八王子城跡 IV—1983年度確認調査概報—』 1984
30. 東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会・東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査団『下宿内山遺跡』 1986
31. 東京国立博物館『特別展観 経塚—関東とその周辺—』 1986
32. 飯塚政美他『鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡』伊那市教育委員会 1983
33. 市川正史・伊丹徹・中田英『向井原遺跡—県企業庁平塚配水池建設に伴う平塚市上吉沢所在遺跡の調査—』(神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1)神奈川県教育委員会 1983. 3
34. 長沢宏昌『釈迦堂III 山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』(山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集)山梨県教育委員会・日本道路公団 1987
35. 宮沢恒之他『家の前・北ノ城遺跡 縄紋中期・弥生後期集落址と中世城郭址 一国道153号線改良工事松川町元大島地区昭和46年度 緊急発掘調査報告書—』長野県松川町教育委員会・建設省飯田工事事務所 1972
36. 小林秀夫他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市 その5 昭和52・53年度—』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1982
37. 大沢和夫・今村善典他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡阿智村 斜坑広場その1—』日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会 1972

38. 唐木孝雄・原 明芳他『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 2—塩尻市内その1—』（財団法人 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 2）日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 1988
39. 金井典美『旧御射山遺跡』『長野県史 考古資料編 全1巻(3)主要遺跡（南信）』1983
40. 奈良国立博物館編『経塚遺宝』 1977
41. 下村登良男他『昭和48年度県営園場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県教育委員会・三重県文化財連盟 1979・12
42. 戸根与八郎・駒形敏郎・家田順一郎『北陸高速自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書—焼屋敷遺跡・杉之森遺跡—』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第8）新潟県教育委員会 1976
43. 垣内光次郎・芝田悟『晋正寺遺跡—健民海浜公園野鳥飼育園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』石川県立埋蔵文化財センター 1984
44. 垣内光次郎・西野秀和『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（Ⅱ）——般国道157号改良事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』石川県立埋蔵文化財センター 1985
45. 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XVI—昭和59年度発掘調査整備事業概報—』 1985
46. 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XV—昭和58年度発掘調査整備事業概報—』 1984
47. 福井県立博物館『第5回特別展 古鏡の美—出土鏡を中心に—』 1986
48. 福井県立博物館『第3回特別展 遺跡は語る ここ20年の発掘成果から』 1985
49. 石田茂作『金峯山経塚遺物の研究』（帝室博物館学報第八番）帝室博物館 1979
50. 東京国立博物館編『那智経塚遺宝』 1985
51. 辻本和美他『4. 宮遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報（1981—2）』京都府教育委員会
52. 橋本惣司・新東晃一・山磨康平『美作落合町古見戸坂1号墳』『岡山県埋蔵文化財報告 3』岡山県教育委員会 1973
53. 松下正司他『草戸千軒町遺跡—第9・10次発掘調査概要—』広島県教育委員会 1973
54. 是光吉基『加井妻城跡』『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』広島県教育委員会 1979・3
55. 野口光比古・中島博文『瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ（見近島城跡）』財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1983



### 第3節 中尾城跡の復原について

中尾城跡については、曲輪の配置・曲輪の遺構の配置などから、城の空間構成の復原がある程度可能と考えられる。そこで、以下中尾城跡の空間構成の復原を試みてみたい。

まず、各曲輪単位に遺構の配置及びそれらの企画性を主眼に復原していくことにする。

**第1曲輪** 溝・土塀・柱穴から構成される。なかでも、土塀・溝については、その主軸方向が同一ないしその直交方向を示している。この方向は、南側の土塀の主軸方向・北側の第2曲輪との段差のラインおよび東側の東第1腰曲輪への傾斜変換部のラインと一致するものである。また、柱穴については、礎石を伴う建物を構成するものと推定される。その平面企画の復原が困難な状況であるが、溝が建物に伴う雨落溝と考えられることから、上記の企画（方向性）に合致するものと考えられる。さらに、この柱穴と溝との関係において、柱穴が溝を挟んだ東西両側に存在することから、少なくとも2棟の建物（建物1・建物2）が存在したものと推定される。

また、土塀1・2は溝より東側に想定される建物跡（建物2）に伴うものと位置づけられる。

さらに、第1曲輪においては、曲輪の東側の東腰曲輪の変換ラインに並行する幅約2.0mの箇所、および北側の第2曲輪との段差のラインに並行する幅約2.0mの箇所について、遺構が全く確認できなかった。まず東側の空白部については、第1曲輪東南隅において南土塀から小壘状のものが北へ向かって約4.5m程派生していることに注目すると、この東側の空白部は、小土塀状のものあるいはそれに類するもの（櫓等）が築かれていたものと推定される。

さらに北側の空白部については、南北に走る雨落溝が第2曲輪との段差の手前約2.0mで終結しているのは単なる偶然ではなく、建物の配置において、北側に通路のような空間を前提としていたものと考えられる。

**第2曲輪** 当曲輪は建物4・土塀・建物3から構成される。これらの遺構は、その主軸方向が同一ないしその直交方向を示しており、この主軸方向は、第1曲輪との段差のライン、東第2腰曲輪との変換部のライン及び北側の堀切・土塀の主軸ラインと同一の企画によるものである。なお、西腰曲輪との変換ラインは、上記の方向性とは異なるが、これは地形の影響によるものと考えられる。

まず建物4については、建物跡と推定できることは前述した通りである（第5章2節）。また、建物3についても建物4に比較すると小規模であるものの同様な構造の建物と考えられる。つまり、第2曲輪においても建物3と建物4の2つの建物が復原できる。さらに、土塀1・土塀2についても、建物に伴う施設（貯蔵穴等）と推定される。

また、以上の土塀および建物跡の遺構群の南側、つまり第1曲輪とラインと並行する幅約5.

0mにわたっては、遺構の存在しない空白部となっている。この空白部は、東側のスロープの延長上にあたる。そして、このスロープが虎口と考えられていることから、虎口から続くある種の通路としての機能をなしていたのではないだろうか。さらに検測を加えるならば、この通路はおそらく西腰曲輪との連絡機能もなしていたのではないだろうか。

なお、第2曲輪の西側の西腰曲輪との境界部については、建物3の西側が狭いことから、小土塁の想定は困難であり、板塀・槽状のものが想定される。さらに、建物4の東側についても空白地帯の存在を指摘でき、板塀・槽の存在が想定される。特に、建物4南東部において溝がコーナーを形成していることが、この蓋然性を高めるものである。

**東第1腰曲輪** 遺構としては土壌6基と周溝が検出されている。出土遺物の内容を検討すると、丹波焼の各器種・備前焼・石臼・鉄鍋など日常性を帯びた遺物が多く認められたことなどから、一定期間日常の生活空間として機能していたと考えられ、それに伴う建物の存在が想定される。そしてこの建物は、釘が多数出土していること、掘り止めが出土していることから、それなりの構築物であったと推定される。

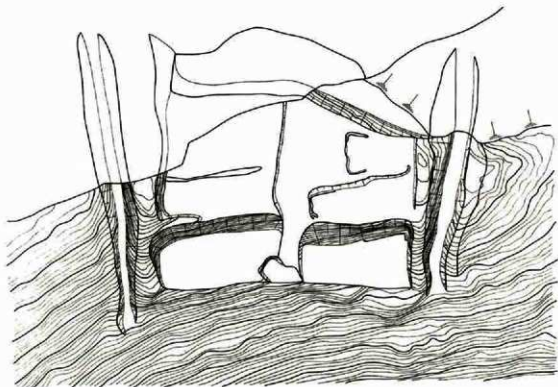
また、これらの土壌は曲輪のなかでも全体的に西側に偏る傾向が認められ、東側約2.0mは空白地帯となっている。この空白地帯の幅はやや広いためすべてではないが、一定の幅については第1曲輪・第2曲輪の東側空白部について想定したような構築物の存在が考えられる。

**東第2曲輪** 当曲輪については、柱穴状の遺構を1つ検出したにすぎない。このため、この曲輪についての空間復原は困難である。ただし東側斜面との変換部については、東第1曲輪同様、槽が存在したのと考えたい。

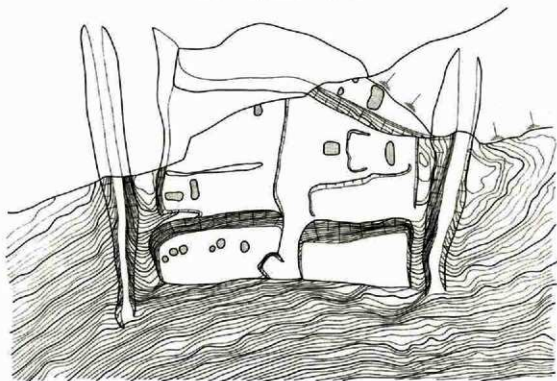
**西腰曲輪** 曲輪の一部が崩落したこともあるが、総じて面積の狭い曲輪である。これは、東側に比べて西側斜面の方が急であるという技術的なことにも起因するものと考えられる。他の曲輪と異なり平面形は地形の影響を受け不整形であるが、当曲輪の主要遺構である土壌1の主軸方向は、第2曲輪との段差のラインとほぼ直交しており、企画性が認められる。

ところで、この土壌の存在は当曲輪の性格を考える上で参考となる。つまり、第5章第5節においても述べたように、土壌1内においては大塚および炭化種子類が出土しており、貯蔵機能を有する土壌と推定される。したがって、当曲輪の面積が狭いことも、技術的な問題ばかりでなく、築造当初より住空間としてではなく、貯蔵空間を前提としていたことによるものとも考えられる。このことは、中尾城跡のなかでも裏側にあたる場所に位置することからも肯定できるものと考えられる。さらに、東腰曲輪との段差に比べて比高がわずかであることも、第1曲輪・第2曲輪に直接に付属する曲輪（貯蔵用の曲輪）であることによるものとも考えられる。ただし、建物といった上部構造については、これを想定する材料を欠いている。

以上、各曲輪単位に遺構の配置および平面構成について検討をおこなってきた。この結果、各曲輪の主な遺構は、それぞれの主軸方向を基準として配置されていることが明らかとなった。



挿図113 透構配置図1 (溝・段)



挿図114 透構配置図2 (土境)

そして、各曲輪も尾根稜線方向と堀切・土塁の主軸方向とを基準に配されている。したがって、個々の曲輪内の遺構の配置についても、この主軸線を基準としており、建物跡・土塙・溝といった遺構は、いずれもこの方向に規定されていることが理解できる。

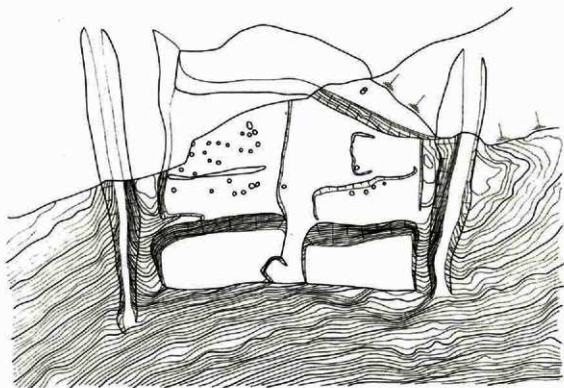
さらに、これらの各曲輪の配置において、ある程度の割り付け方法を復原することができる。まず、東腰曲輪において、南北長が第1腰曲輪で15m、第2腰曲輪で13.5mと、約1.5m前者のほうが長い、ほぼ同規模といえる。そして、この中間に幅約2.5m（法尻の幅は約3m）のスロープが存在する。この幅を西側の第2曲輪に延長すると、この部分は前述した通路と想定した部分に相当する。そして、この通路想定部の幅4.0mを差し引いた第2曲輪の南北長と第1曲輪の南北長は、13.0mと13.5mとなりほぼ同規模である。つまり、南側と北側の堀切・土塁に挟まれた空間の中間部にまず約3～4m幅の通路部分を設定し、その後この通路部分を挟むように稜線部においては第1曲輪と第2曲輪を、その東側斜面においては第1曲輪と第2曲輪をほぼ同規模に配置していることが理解できる。逆に、このことによって西腰曲輪においても、東腰曲輪と同様2つの曲輪からなる蓋然性が高いものと考えられる。

また、5つの曲輪が南と北の堀切・土塁によって防御されているだけでなく、各曲輪単位で東側ないし西側に小土塁状ないし柵状のものを構築し防御を固めている。

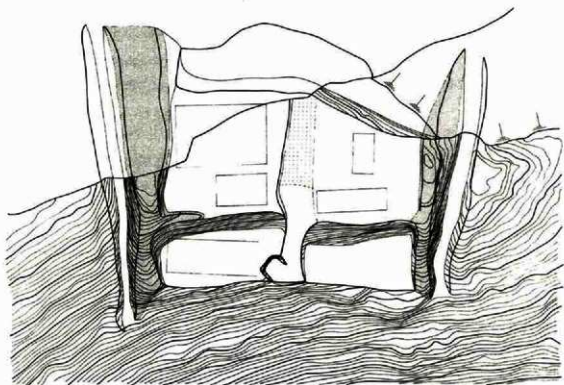
次に各曲輪ないし建物跡の機能についてであるが、第2曲輪および東第1腰曲輪の建物については、出土遺物を中心とした検討から、日常の生活の場として利用されていたことが理解できる。次に、第1曲輪について検討してみたい。ここで注目されるのが、第1曲輪の建物が2棟とも礎石を伴う建物と推定されるのに対して、第2曲輪および東第1腰曲輪の建物は周溝の存在・焼土面の存在などの状況から、堅穴式住居あるいは平地式住居に類する構造の建物と推定される点である。礎石を伴う建物はより強固な建物を想定させるものである。さらに、平面的にみると、虎口から第2曲輪の通路を通り、第1曲輪にいたるよう、つまり第1曲輪を最も奥かつ高所に配置するような平面構成となっており、面積的にも中尾城跡のなかで最も広い面積となっている。以上のことから、第1曲輪が中尾城跡のなかで最も重要な位置を占める曲輪と考えられる。このことから、第1曲輪の建物は中尾城跡のなかで最も主要な構造物であったといえよう。

さらに、同じ第一曲輪内においては、雨落溝を境とした西と東では西側の面積がひろくなっており、より大きな建物であったと考えられる。したがって、西側の建物（建物1）が主で、東側の建物（建物2）は建物1に次ぐものであったと考えられるのではないだろうか。

最後に、中尾城跡の建物のありかた、遺物の内容からすると、臨時的ではない＝ある程度の期間を前提としたものであったことが予想される。このことは、これまでの山城のイメージを一新するものである。ところで、藤木久志によると、在地領主の城や戦国大名の支城が、それぞれの領域における一般の百姓や町人たちの非難場所の役割を果たしており、彼らは、妻子・



挿図115 遺構配置図3 (柱穴)



挿図116 中尾城跡建物遺構復原図

道具・食物とともに城籠りしたようである。また、戦禍等から避けるための村人の隠物（預け物）の預け先ともなったそうである。したがって、中尾城跡についても今後、このような面からの検討も必要ではないだろうか。

参考文献 藤木久志「村の隠物・預物」『ことばの文化史中世Ⅰ』網野善彦・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一編 平凡社 1988

## 第4節 山城の構造について

### 1. 山城研究について

最近の城郭研究は16世紀後半の城郭を中心として、活発な研究が行われ成果をあげている<sup>1)</sup>。しかしこれは現地に残る遺構から縄張り（防御施設の形態）を読み取ることによって、城郭を比較して成果を挙げているもので、現地の遺構に何ら特徴のない城郭の研究については、まだ積極的な研究が行われていないのが現状である。

このような縄張りに特徴のある城郭は天正年間前後から登場するもので、複雑な縄張り構造や大きな曲輪・土塁・堀切、発達したものでは石垣を持つのが特徴である。

これに対して、それ以前の城郭は中尾城跡をみてもわかるように、横堀・欖状縦堀・枡形、などといった発達した防御施設はともなわず、大半が曲輪を重ねたものや、堀切・土塁を持つだけの小規模な城郭である。

現在の山城研究もこの流れに沿っており、天正年間前後の遺構が中心となっている。まだ、中尾城跡などのような特徴のない城郭をどう扱うかについては明確な方法が確立していないのが現状である。これに対して、各地で行われる城郭の発掘調査はかなりの数に登っており、大半がこの特徴のない遺構である。そして、数多くの調査報告書も刊行され資料は整いつつある。しかし、これらをまとめる機運は未だに活発とはいえない。

16世紀前半前後の山城については「在地性の強い山城、国人領主の所領支配の中核として機能する城郭、平時の居館に対して戦時に立て籠もる山城という根古屋式城郭の時代<sup>2)</sup>」・「里に近い里山に立地するようになる<sup>3)</sup>。」といわれている。南北朝時代の城郭が奥深い山々に小曲輪を点々と築きゲリラ戦法で戦ったのに対して<sup>4)</sup>、応仁・文明の乱以降の城郭は、より在地性が強く領域内を見渡せる小高い山の上に山城を築いたというものである。ここでは、中尾城跡を検討するとによって、16世紀前半の在地性の強い城郭の様相について検討してみたい。

### 2. 中尾城跡の構造

今回の中尾城跡の調査では、以下ことが判明した。

中尾城跡は5つの曲輪と各々2本の堀切・土塁からなる。曲輪は尾根線上の2つの曲輪（第1曲輪・第2曲輪）が中心的な位置を占め、この両側斜面に3つの腰曲輪（東第1曲輪・東第2曲輪・西腰曲輪）が配されている。土塁・堀切（北土塁・北堀切・南土塁・南堀切）は、この尾根線の前後に設けられ、城内への通行を防いでいる。その他、第2曲輪から東第2腰曲輪へ下りる部分で虎口遺構が検出された。

曲輪内からは、建物（礎石）・溝・土壌が検出された。建物は礎石や柱穴などが検出されていないが、段状遺構・雨落ち溝の存在から5棟が想定復原できた。このうち、第1曲輪の建物が



最も大きく立地などからも中心的なものであると考えられた。第2曲輪の建物は小規模なものが多く、第1曲輪の建物に從属するものと考えられる。東第1腰曲輪のものは、茶磨（茶臼）や天目茶碗の遺物の出土状況から、公的な場所と考えられる。

曲輪の構築は切土と盛土によって行われ、尾根続き方向に軸線を整え、すべてのものが南北方向に近いこの軸に並行か、または直行する形で構築されていた。

曲輪内の空間構成の復原から、第1曲輪と第2曲輪はほぼ対称な方形を意識して構成され、建物の復原は位置からすると建物方向も軸線に合せていること、第1曲輪と第2曲輪との間に通路状の空間が想定できる事がわかった。また、両側斜面のうち、東斜面は、軸線の統一も徹底し曲輪と腰曲輪との段差も1.6mと大きくなっている。さらに虎口遺構も設けられ、城の表側であったことが想定できた。東斜面は傾斜もやや緩く谷底を歩き城の下から登って城内に入ってきたものと考えられる。残念ながら城郭に直接入る虎口を検出出来なかったため、東腰曲輪のどの部分から入ったかは復原出来なかった。

これと逆に、西斜面側は腰曲輪の段が低く、平面図をみてもわかるように、曲輪の縁辺部は軸線が守られていない。地形の制約を受けて軸線を整えることが出来なかったものだが、東側の曲輪のような努力が見られないことは、それほど見栄えの影響しなかった部分であることを窺わせる。東斜面が城郭の表部分となり、西側は裏に相当すると考えられる。

また、西腰曲輪は、土庫の甕や穀物の出土状況から貯蔵庫的な機能を果たした曲輪と考えられる。

遺物は、これまでの山城の例に無く非常に豊富で、曲輪や斜面などのいたるところで出土した。但し、両端の堀切やこれに続くそれぞれの尾根続きからは山城関係のものはあまり出土していない。そして、遺物の出土地点や接合関係をみると、かなり離れて接合したり、遺構・曲輪内や斜面などに関係なく接合しており、これらの遺物が無作為に土砂や廃材と共に曲輪から両側の斜面に捨てたり、土庫などの遺構を埋めるのに用いられており、中尾城跡が最終段階で破却（破壊）されたことが窺えた。

また、山城の機能した時期はこれらの遺物から16世紀前半に位置づけることができた。

そして茶磨（茶臼）・天目茶碗・白磁等の出土、火打金の形態から城の中で日常的な生活を行っていたことが窺え、ある一定期間城郭内で人々が生活したことがわかった。

中尾城跡は前後の堀切の配置や軸線（ライン）の統一などかなり企画性を持った山城であることが読み取れ、防衛の部分と中心の曲輪部分が分化した山城であるといえよう。以上のことが調査の結果判明した。

このことから中尾城跡の特徴を列記してみると次のようになる。

- ①. 堀切・土塁、曲輪面積は小規模なものである。
- ②. 堀切は第1曲輪のみに止まらず腰曲輪部分も覆っている。これに沿うように土塁も構築さ



れた。

- ③. 居住空間と防御空間を分化させた、一定の企画のもとに構築されている。
- ④. 一定の企画は、防御施設の曲輪構築にのみ動いているのではなく、曲輪や建物群の軸線の統一という城郭全体のバランス（縄張配置）といったことにも動いている。
- ⑤. 虎口は折れ・空間などの工夫は見られないが、簡単な防御施設を伴うものである。
- ⑥. 縄張りからみると居住空間と防御空間を分化させた、一定の企画がみられるが、実際の面の利用では、防御空間を居住空間や食料の貯蔵空間に用いるなどかなり緩やかな使用方法がとられている。
- ⑦. 構築に際しては、切り土・盛り土を多用した土木工事が行われ、大まかな曲輪構築が行われた後、建物など普請部分の平面を確保する細かい造りが行われている。
- ⑧. 遺物の出土量が非常に豊富で多い事などから、戦時のみに応急に旧拵えで築城されたのではなく、一定期間の居住が考えられる。
- ⑨. 立地が尾根の頂きではなく、中腹であること。しかもなだらかに続いている尾根の全く起伏の無い部分に、人工的に堀切・土塁などを作り尾根を遮断している。
- ⑩. 城内への通行が谷底を通過して行われていること。しかも背後の尾根続きを遮断していることから築城意図としては南尾根続きの丘陵の傾きからの眺望をあまり意識しない。
- ⑪. 遺物の分布状況から、廃城時に破却していること。

①は付近でいえば笠屋城の曲輪面積や、大原城の土塁・堀切に比べ小規模である。特に、土塁・堀切の規模が大きく異なっている。

②のような堀切の構造は堀切とそれに続く整堀として、紹介されていることが多いが、堀切が一定の幅と構造で連なっており途中で断絶が無いことから、中尾城跡の例は実際には一連の堀切として捉えてもよいものと考えられる。

③・④はこの時期の城郭が既に、全体を意識しながら構築していたことを表しており注目される。村田修三氏の上狭川城の考察や地域の小城郭の研究などから、この時期の城郭の縄張りについても若干の考察が行われてきた。中尾城跡では、さらに細かく曲輪内の位置を复原することによって築城者が曲輪構築に当たってどの程度まで意識していたかを解明することが出来た。中尾城跡は虎口構造などに目新しいものもなく、構造としては単純である。しかし築城にあたっては尾根を無作為に削平して建物を建てた城郭ではなく、防御施設と居住空間をはっきりと分けており、そこに確保される空間も意識されたものであった。縄張りとしては面白みのないものであるが、縄張りの工夫が盛んになる依然の城郭として評価すべき遺構である。

さらに、⑤の虎口の存在は、後の発達した構造のものではないが、既に簡単な防御を施した虎口が作られている。腰曲輪の幅の制約によってどうしても一度、折れて上の曲輪に登ること

になるが、意図したことではないと考えられるので1形式<sup>9)</sup>の中で捉えられる。

さらに、⑥のように、はっきりとした防御施設と居住空間の分化という築城意図に反して、使用時のゆるやかな使われ方もこの時期の城郭の特徴であろう。

⑦については、後述するのでここでは詳しく述べないが、この構築の加工の度合いが、土木量に反映するため、城郭の特徴を表すのに重要な要素となると考えられる。

⑧～⑩は今のところ、中尾城跡特有の特徴と考えられる。⑧のように、遺物の出土量が豊富であること、立地も本来見晴らしの良い場所で、敵の動きを素早く察知できるような場所でないこと、⑨尾根道を通らず谷底を利用していたこと、⑩破却<sup>10)</sup>していることである。

山城に一定期間、居住していた痕跡が中尾城跡に認められたことは、この時期の山城では珍しいことである。16世紀の後半の山城では界内でも、感状山城<sup>7)</sup>・置塩城<sup>8)</sup>などでは確実に城内を住居としおり、珍しいものではない。遺物量が多いことや出土遺物の検討から、家財道具を持って山に立て籠ったものと考えられ、城の破却と合せてこの城が戦闘に関わったものと考えられる。そして城郭構造が一定の企画に基づいてしっかりと築城されていることから、ある程度戦闘に入る以前に余裕を持って築城する期間があったと考えられる。

また、この山城が谷底道を利用して城内に入っていることは麓の集落や居館（現在場所は不明である。）との結びつきの強いものであったことが窺われる。里に近い里山に立地するといった村田氏の意見の通り、中尾城跡にも麓に居館を持つ根子屋式城郭の1例である可能性が高い。また、立地している尾根が何の変哲もなく、見晴らしが利かない場所である点も、麓の集落や居館から離れた場所を敬遠したために起こった可能性が考えられる。周辺をみても250m～300mの長さで小さな尾根が何本も派生し、麓までだらだらと続く地形である。丘陵の傾きは、当時の人々にとって麓からはやや離れ過ぎた距離であったと考えられ、この地域の城郭と居館・集落との距離を考えるのに貴重な知見と思われる。

中尾城跡で得られたこれらの事柄は、天正年間以前の城郭を把握する上で、これまでの概念をさらに具体的にする意味で重要である。単純な構造・小規模といった説明から一歩進んだ説明が可能である。また、現段階では可能性であるが、この城が麓の居館や集落に密接に結びついていた可能性が認められたことも大きい成果であった。

### 3. 城主について

中尾城跡について、記載された文献は今の所、見つかっていない。中世の文書は勿論のこと、江戸時代に書かれた地誌類の中にも記載した物は見当らない。従って、中尾城跡について直接城主や城の歴史を語ることは文献の上からは全くできない。そこで、ここでは中尾城跡が存在した当時、北摂津地域の状況はどのようなものであったか少し記しておきたい。

北摂津地域は室町時代の初期から足利幕府より有馬赤松家に拝領され領地を支配<sup>11)</sup>した。有馬赤松家は有馬姓を名乗り三田の車瀬城（後の三田城）本拠とした。しかし、有馬氏は赤松満祐

が起こした嘉吉の乱や、赤松家が政則を擁立して再興された時も行動を別にしていた。応仁・文明の乱には、元家が將軍に義視を擁立しようとした隙で抹殺されるなど、独自に足利家と結びつき行動したようである。

応仁・文明の乱後、守護大名の中で畿内では特に細川氏の「力」が有力になるが、永正4年(1507)から享祿4年(1531)の25年間細川政元の相続争いに始まった細川家の対立と呼ばれる騒乱が続くことになる。この騒乱に有馬氏も巻き込まれたことは確実で、天文23年(1555)には、三好長慶・有馬重則が、別所就治を攻め、逆に大打撃を蒙っている。これは細川家の対立を引き継いだ三好長慶と細川晴元の勢力争いの中で行われたもので、もともと、別所氏は細川晴元派でこれを三好長慶方が攻めたものである。後には別所氏は三好氏の側に付く勢力となり摂津から東播磨にかけては三好氏の勢力が浸透してゆく。有馬氏もこの勢力と無関係では無かったと思われる。

さらに摂津国と北で境を接する丹波国については、永正5年以降、波多野氏が入部し、丹波大山荘に乱入するなど勢力を拡大した。さらに、郡奉行の難波氏を追い高城山に八上城を築くなどして地歩をかためていた。波多野氏は元々は細川晴元についていたため、天文23年(1554)三好長慶は波多野氏を八上城に攻めている。摂津の北部を領する有馬氏は三好長慶方であるため、三田北部に所在する中尾城跡も波多野氏と有馬氏の関係の中で16世紀前半から中頃にかけて摂津と丹波の国境は互いに厳しい情勢になっていたと思われる。前述のような中尾城跡の破却はこの争いの中で行われたものと思われる。

中世の相野地区についてはもともと、守護職領藍荘の存在が知られ(下野皆川文書・森本氏文書)、藍岡山城(藍本字丸山・字城ノ越)の城主、赤松満祐の孫康則が藍姓を名乗り代々荘官となったようである。守護職領ということで有馬氏と森鼻氏の関係はかなり深かったことが窺える。

藍荘の範囲は良く判っていないが、相野という地名からすると、中尾城の所在したこの付近まで一帯を指していたと思われる。

中尾城跡については、丹波焼の出土比率から、廃城時まで、多紀郡今田町を政治的に支配していた勢力、もしくはこれに関わる勢力であると考えられる。先に守護領藍荘の荘城に相野一帯が含まれるとしたが、中尾城跡はこの意味で、丹波焼の流通に深く関わったとされる森鼻氏と深く関わった城であると言えるだろう。後述するが三田の相野周辺一帯には、藍岡山城を中心として山城が非常に分布しており16世紀前半の紛争時に森鼻氏が築いた城郭群であると思われる。

#### 4. 三田市内の城郭

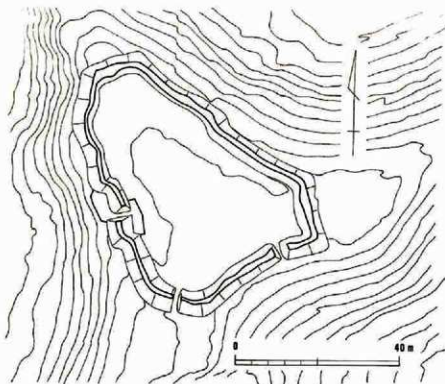
現在、三田市域には41<sup>10)</sup>の中世の城館が知られる。この内、山城が18、城館が16城、不明7である。ほぼ市内全域に分布しているが、やはり三田盆地周辺に集中するようである。

この内、現状で遺構の概要が判るものや、調査で遺構を確認しているものは、山城では桑原城・大原城・内神城・釜屋城・下井沢城（分布図16）・藍岡山城・青野城・森本城・十倉城・東野上城などがある。館では、稲田城・溝口城・赤松城・赤松氏居館などがある。この他、三田市周辺にある茶臼山城や車瀬城も中世城館としては良い資料であったと思われるが、茶臼山城の遺構は現在は失われて無く、車瀬城も三田陣屋の築城に伴って遺構は消滅した。

このように、三田市内の城郭は最終的には、車瀬城を改修して築城された、九鬼藩の三田城のみが陣屋として近世まで残される。ではそれ以前の中世城郭はどのようなものだったのだろうか。ここでは構造上の特徴から山城について概要を述べて見たい。構造上の特徴と言うのは縄張りの所で述べたとうり、城郭の大型化が16世紀後半から始まると言うことをとらえて、曲輪・堀切・土塁の規模、防御上の構造などがこれに伴って発達してくると言うことである。三田の城がこの発展段階にどのような経過を辿るかは、現段階では調査例も少なく不明な部分が多いが、ここでは中尾城跡との位置付けから整理してみたい。

①三田市内の山城を概観して特徴的なことは、城域全体を囲む意識の有る遺構の存在が挙げられる。代表的なものは、釜屋城は周囲を土塁で囲み曲輪内部の削平は不である。逆に内神城は周囲を土塁と堀で囲み、内部は小区画の曲輪群が存在する。しかし、内神城は中世の城郭をそのまま取り込んだ構造と考えれば、釜屋城と同一の意図で改修されたものと推定される。

②次のタイプは大原城に代表されるものである。やや広い曲輪とこれを防御する大規模な堀

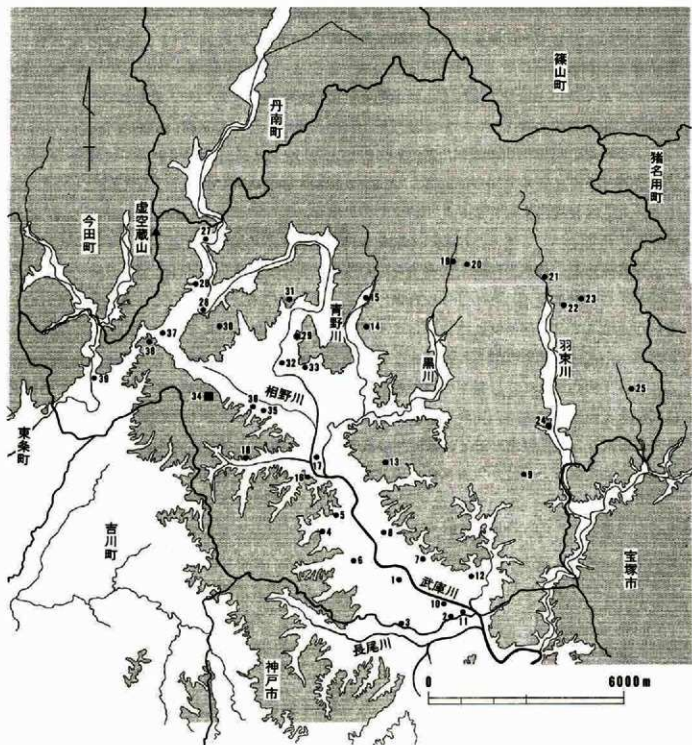


挿図117 釜屋城（三田市貴志）

切、そしてこれとセットになる大きな土塁からなる山城である。このタイプの山城は、市内では、大原城のみであるが、付近には板井城<sup>111</sup>（多紀郡西紀町）・松原城（神戸市北区道場町）の例がある。

③最後のタイプが中尾城跡に当てはまるもので、曲輪や堀切・土塁が小規模で、構造の単純なものである。

また、曲輪が大きくても元々の地形から広いもので、周囲に顕著な防御施設を持たない中西山砦・藍岡山城・青野城・下井沢城・森本城・十倉城・東野上城などがある。この山城の形態は、ばらばらなものが多く統一がとれていない。しかし、土塁

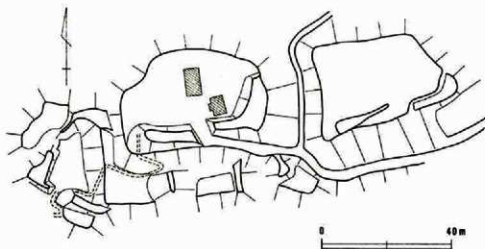


- |           |           |          |             |          |
|-----------|-----------|----------|-------------|----------|
| 1. 車城     | 2. 立石城    | 3. 横山城   | 4. 釜屋城      | 5. 前中屋敷  |
| 6. 稲田城    | 7. 白山城    | 8. 大原城   | 9. 香野城      | 10. 下町居館 |
| 11. 山崎城   | 12. 茶桑城   | 13. 東野上城 | 14. 青野原城    | 15. 大田居館 |
| 16. 下井沢城  | 17. 下井沢城  | 18. 内神城  | 19. 乙原城     | 20. 増田居館 |
| 21. 高平田中城 | 22. 十倉城   | 23. 十倉城  | 24. 木器城     | 25. 北畠居館 |
| 26. 藍岡山城  | 27. 藍丸山城  | 28. 曲り城  | 29. 森本城     | 30. 穴口城  |
| 31. 本庄丸山城 | 32. 鳥山城   | 33. 赤松居館 | 34. 中尾城     | 35. 殿元城  |
| 36. 溝口城   | 37. 相野丸山城 | 38. 古城   | 39. 一長右衛門屋敷 |          |

挿図118 三田市城の中世城館の分布



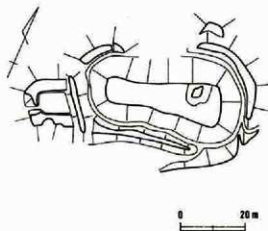
は1m前後、堀切は幅3～4m、深さ2m未満のもので、曲輪の広さも中尾城跡の第1曲輪までのものが主体である。その他、城全体を囲むようなプランも存在しない遺構である。これらの山城は城郭の大型化・防御施設の発達・居住空間よりも軍事的側面の優先といった16世紀後半の城郭の意識からは外れており、タイプとしては古い物と考えられる。



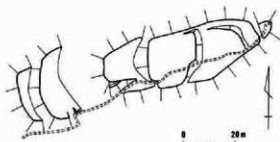
挿図119 大原城（三田市川除）

①と②のタイプの山城は三田盆地及びその周辺に集中している。車瀬城時代も中世段階では①か②タイプに含まれる山城であったと考えられる。

③のタイプは市内全域に分布している。しかし特に、山城は相野周辺の撰津・丹波国境にやや集中が見られる。藍岡山城を初め、藍丸山砦・曲り城・穴口城・相野丸山砦・古城砦・中尾城跡である。これらの城郭の構造は調査例がないため中尾城跡以外は不明であるが、藍岡山城などの曲輪の構造を見ると中尾城跡に近いものである。残念ながら現状では防御構造と居住空間の分化が明確に意図された城郭であったかどうかは不明であるが、小曲輪構造・小規模な堀切などから③タイプの城郭と捉える事が出来る。③タイプは他に三田盆地にも桑原城・東野上城・下井沢城、そして木器城・十倉城・森本城・青野城・本庄丸山砦などが市内を深く入った谷に点在して分布している。これらの山城の中で、桑原城（三田市桑原）は規模が大きく三田盆地を東から睨む丘陵上に立地する。3つの曲輪を2本の浅い堀切で分断した構造で部分的に腰曲輪を残している。北側尾根続きは一旦低くなり、馬の鞍状を呈しており桑原城は独立丘陵に選地した格好となっている。曲輪の面積は中尾城跡より少し広く、広さからいえば大原城に近いものがある。しかし、堀切の規模または防御施設の発達が見られないことから③に分類できる。そして、規模からいえば中尾城跡や藍岡城よ



挿図120 森本城（三田市東本庄）

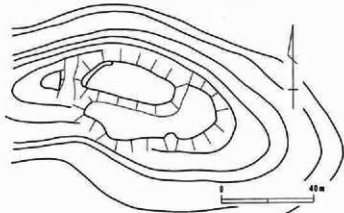


挿図121 東野上城（三田市東野上）

時期は不明である。十倉城・青野城・木器城・本庄丸山砦などの山城はこれらのものよりさらに小規模な山城である。また、先程紹介した相野周辺の山城でも中尾城跡や藍岡山城を除いたものはこの小規模なグループに入ると思われる。この城郭の1つ、十倉城では長さ10m、幅7～8m程度の曲輪が頂に築城され、非常に小さい堀切が尾根続きに1本設けられていた。他の構造も大体よく似た程度である。このように③の山城は16世紀前半の遺構で、3つの規模に別れるようである。これらの多くは藍岡山城・十倉城・森本城などのように麓に居館を設けており、それぞれの土壕の階層を示す可能性もある。但し、相野周辺の曲り城・藍丸山砦などは砦の名が示すとうり丹波に備える臨時的な城の可能性もある。又、今回中尾城跡が分布調査によって発見されたように遺構が増える可能性もある。従って城郭の数が土壕の数を反映していない。

以上のように、三田の山城は巨大なものではなく、①・②・③に分類される。

③については三田市内で3つの規模に別れ、そしてこれらの山城は16世紀後半に①・②のグループに集約され、近世に到って三田城に統一されると考えられる。最終的には三田の山城は③→②・①を経て三田城に統一された。



挿図122 藍岡山城（三田市藍本）

り上の権力が作ったもので赤松家に関連した城郭であろうか。東野上城・下井沢城は三田盆地の西の外れにあって、武庫川のそれぞれ右岸と左岸に立地している。中尾城程度の曲輪を何段か重ねた構造に下井沢城は堀切を組み合わせている。森本城は頂上に細長い曲輪と前面に一段曲輪を配した構造である。

周囲を環状のものが囲むがこの構造の

## 5. 兵庫県の山城発掘調査例

兵庫県内でも開発が近年山間部に及ぶことが多く、山城の調査例が増加している。しかし、発掘調査は部分的なものが多く、その遺構全体について明確にできる調査例は限られており、資料はまだまだ少ないのが現状である。これらの調査の中でも、調査面積が広く、顕著な実績が上がっているのは、備後衆山砦<sup>13)</sup>（藍岡

市・尼城<sup>13</sup>（豊岡市）・釜屋城<sup>14</sup>（三田市）・福西砦<sup>15</sup>（村岡町）・感状山城（相生市）などと限られている。

さらに、発掘調査が行われているものの内、構造や遺物から時期のわかる山城についても限られている。天正年間前後の遺構は備後衆山砦・釜屋城・感状山城（相生市）、そして三木城の付城と言われる君ヶ峰城<sup>16</sup>（三木市）、同じく三木城の砦である、鷹ノ尾砦<sup>10</sup>（同左）などがある。

ここで問題としている、16世紀前半の中尾城跡の時期に近いものは福西砦・衣笠山城<sup>17</sup>（豊岡市）・亀ヶ崎城（同左）<sup>18</sup>・内場山城<sup>20</sup>（西紀町）・網掛城<sup>21</sup>（丹南町）・水尾城<sup>22</sup>（西脇市）・鷹尾城<sup>23</sup>（芦屋市）などが考えられる。

検出されている遺構を概観すると、曲輪構造では備後衆山砦で堀切、そして堀切に架けられていた橋の足場の遺構が検出された。また土塁の曲輪内側に列石が使用されていた。堀切の規模も幅8m、深さ1.75mと大きい。

堀切は福西砦・亀ヶ崎城・軽部城<sup>24</sup>（美父町）・中西山砦<sup>25</sup>（三田市）などで検出されている。

しかし幅は3～4m前後のもので深さも1m未満のものが多く、中尾城跡でも土塁を取り払った比高差は1m前後と考えられる。中西山砦では堀切とこれにともなって堀切に沿って土塁が検出された。堀切の底はややU字である。

虎口遺構の検出は、釜屋城と尼城でそれぞれ1例づつ検出されている。釜屋城は1つの曲輪全体を土塁が囲んだ構造であるが、土塁の3か所が開口しているが東側のものに横矢掛かりが見られ当時の虎口と考えられる。尼城のものは曲輪の中央部分を横断する形で通路を設けたもので虎口構造としては珍しいものである。

曲輪内部の構造については、芦屋城（浜坂町）・亀ヶ崎城・備後衆山砦・尼城・鷹尾城（調査は山麓部分である）で掘立柱建物、福西砦・君ヶ峰城・感状山城などで礎石建物が検出されている。さらに尼城では堅穴状遺構も検出され、通常の掘立柱建物と堅穴を掘ってその上に小屋掛けした構造の建物の2種類が検出された。鷹尾城と備後衆山砦の掘立柱建物は山城の斜面や山下から検出されたもので山城と関連すると考えられる建物である。

礎石建物では、感状山城での検出例のほか、君ヶ峰城でも簡単な河原石を用いた礎石建物が検出されている。16世紀前半のものでは、福西砦で検出されている。2間×6間の規模の建物が検出されており、焼けた礎石に残った柱痕跡から直径20～30cm前後の柱を使った建物であることが復原できた。この時期の山城では大阪府泉南郡岬町の井山城<sup>26</sup>でも礎石建物が検出されており、掘立柱建物と礎石建物が共存していた時代であるといえる。

また、山城全体の様相がわかる調査例は、釜屋城と福西砦そして中尾城跡の3例がある。釜屋城は全体を土塁で囲み、曲輪内部をほとんど加工していないものである。福西砦は逆に瘦尾



根上を3本の層切で遮断し、小さな曲輪に幅一杯の建物を建てる構造の山城である。このように個々の遺構については類例が著積されつつある。しかし、山城調査では、曲輪内部の調査に重点が置かれ、斜面や、更に築城段階の調査の断ち割りを行っていないものが多い。このために曲輪内の遺構については報告されているが、曲輪周辺にどの程度の加工が行われているか明確になっていない調査が多い。現状では曲輪内部のみの遺構の比較や外面的な規模の比較しか行えない。

第28表 兵庫県山城発掘調査一覧表

No	城名	所在地	調査年度	調査組織
1	福西砦	美方郡村岡町村岡	1978	兵庫県教育委員会
2	衣笠山城	豊岡市三宅、河谷、中の谷	1975	豊岡市教育委員会
3	亀ヶ崎城	豊岡市	1981	豊岡市教育委員会
4	備後衆山砦	豊岡市日徳	1977	豊岡市教育委員会
5	尾城	豊岡市岩井	1987	豊岡市教育委員会
6	芦屋城	美方郡浜坂町芦屋	1982	浜坂町教育委員会
7	軽部城	養父郡養父町上野	1986	養父町教育委員会
8	田和城	養父郡大塚町	1984	大塚町教育委員会
9	高城	豊岡市気比	1987	豊岡市教育委員会
10	和田山I P	和田山町	1981	兵庫県教育委員会
11	綱掛城	多紀郡丹南町綱掛	1986	丹南町教育委員会
12	内場山城	多紀郡西紀町下坂井	1985	兵庫県教育委員会
13	中尾城	三田市下相野字中尾	1986	兵庫県教育委員会
14	釜屋城	三田市食志	1982	兵庫県教育委員会
15	中西山城	三田市西野上	1982	兵庫県教育委員会
16	中道子山城	加古川市志方町岡	1988～	加古川市教育委員会
17	水尾城	西脇市	1988	西脇市教育委員会
18	感状山城	相生市矢野町森感状山	1984～	相生市教育委員会
19	鷹尾山城	芦屋市城山	1982	芦屋市教育委員会
20	鷹ノ尾砦	三木市鷹の尾	1985	三木市教育委員会
21	君ヶ峰城	三木市君ヶ峰	1987	三木市教育委員会

## 6. 総括

以上、中尾城跡の構造と、周辺の山城、県内の発掘調査などについて概括したが、最後に簡単に中尾城跡について総括してみたい。

中尾城跡の性格については、次のようなことが考えられる。

①全周性のある縄張りを持ち、防御機能と住居空間が分離しているなど、天正年間前後に登場する遺構の性格を持ちながら、城内の使用にあたっては必ずしも二者を分離した使用はしていない。

②曲輪構造や堀切・土塁などは非常に小規模である。そして曲輪を建物などの段造成のためにさらに細かく区画している。

③麓の集落や居館と密接に結びついて、谷底道を利用したり、尾根続きの中腹に立地するなどの特徴が見られた。

山城の時代ごとの変遷に従えば、南北朝時代の城郭は里から離れ、奥深い山の中に点々と小曲輪を築くものが多いという。このタイプの城郭は少なくとも嘉吉の乱で赤松満祐が立て籠った城山城の時期、15世紀中頃までは存在している。この時期の山城も概念的な捉えられ方しかしていないが、明らかに中尾城跡はこの時期の構造とは異なっている。

そして、16世紀後半の天生年間前後以降の城郭とも、いろいろ述べてきたように大きく異なった構造である。

その構造はこれまで漠然とはあるが述べられてきた、16世紀前半の山城についての構造である。そして、中尾城跡の調査は時期を明確にできたことによってこの漠然としたイメージを補足して説明する材料を提供したと考えている。

註1) 現地の城郭遺構の縄張りを読み取り、城郭を通して当時の地域の政治構造を解明しようとする動きで、村田修三氏・北垣聡一郎氏・中世城郭談話会・中世城郭研究会などを中心とした人々の研究によっている。

2) 村田修三「中世の城館」『講座 日本技術の社会史 土木 第六巻』日本評論社1984

3) 同上文献による。

4) 村田修三「戦国期の城郭」『国立民族博物館研究報告 第8集 共同研究「中世の地方政治都市」』国立民族博物館1984

5) 千田嘉博「織豊系城郭の構造」『史林』第巻号 京都大学文学部史学1987の編年案による。

6) 破却は、後には城割りと呼ぶ。意識的に城郭を破壊するもので、代表的なものは、徳川幕府による一国一城令である。戦国時代にも一般的に行われており、落城後敵兵が破壊するものや、城兵が城を捨てる場合に破壊する例がある。戦国時代は何れも戦乱に関わった城郭で行われている。

7) 『感状山城跡』・『感状山城跡II』相生市教育委員会 1984・86

8) 『置塩城』夢崎町教育委員会 1986

9) この項目の歴史上の事柄については、『兵庫県史 第3巻 中世編』兵庫県史編纂委員会 1978によった。

10) この項の文章に登場する城郭は原則として、『兵庫県の戦国城跡』兵庫県教育委員会1982によっている。但し、釜屋城は『北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告II』兵庫県教育委員会 1983、下井沢城の山城については北摂津ニュータウンの分布調査に

よって発見されたものである。中尾城跡については前述のとおりである。尚、川除城・松下城・四ツ塚城については紹介されているが所在が不明なため分布地図からは省いている。

- 11) 同上『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』による。
- 12) 『日撫・備後衆山砦』豊岡市教育委員会 1987
- 13) 『本井墳墓群・尼城址』豊岡市教育委員会 1988
- 14) 『北摂ニュータウン内遺跡発掘調査報告Ⅱ』兵庫県教育委員会 1983
- 15) 『福西砦跡現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1977
- 16) 宮田逸民氏の教示による。
- 17) 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育委員会 1986
- 18) 『シンポジウム但馬の城 資料 山城とその時代』但馬此隅山の保存を進める会・但馬史研究会・但馬考古学研究会 1987
- 19) 同上文献による。
- 20) 『内場山城跡現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1986
- 21) 西紀・丹南町教育委員会 芦田 茂氏・西田辰博氏の御教示による。
- 22) 西脇市教育委員会 岸本一郎氏の御教示による。
- 23) 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会 1985。『城山南麓A地点』の調査成果による。
- 24) 『井山城跡』大阪府埋蔵文化財協会 1988

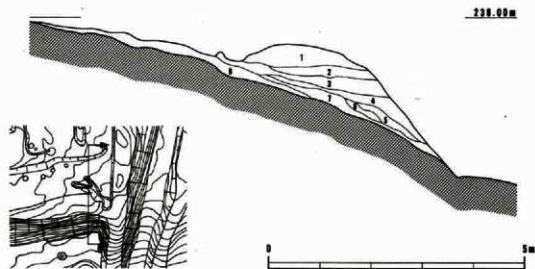
## 第5節 展 望

### 1. 中尾城跡の構築過程

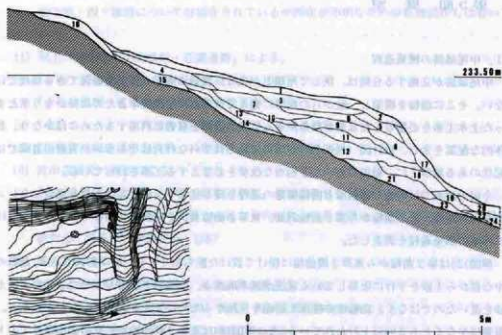
中尾城跡が立地する丘陵は、決して尾根上が広く、充分に曲輪の広さを確保できる場所ではない。そこに曲輪を構築し、敵からの攻撃に備えて防衛施設を構築するためにはかなりまとまった土木工事を必要としたと思われる。さらに狭い面積を有効に利用するためにはかなり、具体的な配置を含む、設計図（縄張り）が既に用意されていなければならない。実際の遺構では起伏のある地形上に、軸線の統一など相当な改変を必要とする工事を行っている。

今回の調査では旧地形の復原と曲輪構築の過程を探る意味で、南と北の土塁と堀切にトレンチを入れた他、第2曲輪から第2曲輪斜面、東第2曲輪及びその斜面にかけてトレンチを設けて山城の構築過程を調査した。

挿図123は第2曲輪から東第2腰曲輪に掛けて設けた断ち割りトレンチの断面である。曲輪の中心部から土砂を平行に版築している状況が読み取れる。旧地形を削平してそのまま斜面上に土砂を置いたのではなく、曲輪面の確保と斜面を保持するために工夫されていたことがわかる。版築は少なくとも3回以上行われている。次に挿図124は東第2腰曲輪から東斜面にかけてのトレンチである。第16層の東側が調査では地山に平坦に削平され、東側は後世の崩れであるが少なくとも1.6mを版築によって盛土している。堀切・土塁部分についても前述したとおり版築が行われ、少なくとも数回以上、土砂を衝き固められていた。大規模な土木作業であったと思わ



挿図123 第2曲輪斜面断面図



挿図124 東第2層曲輪断面図

れる。

土砂の盛り切りと版築工法を用いて中尾城跡がどのような順序で構築されたか挿図125・126を参照しながら紹介してゆきたい。

①旧地形の立地を見て選地を行う。中尾城跡の構造から見て、曲輪の大きさ・配置などが大体この時決定される。②選地が終わった段階で城の広さを考えながら、北と南の堀切を掘りその土砂を城内と城外の両側に盛っている。(城外に土を盛っていることは北堀切で確認できた。)特に内側に高く盛り土塁としている。堀切は底を平らに掘り土塁側を急傾斜に仕上げている。③次に曲輪部分を削り、空間を確保するために削った土を曲輪縁辺部の両側に盛る。さらに下段の腰曲輪についても同様に尾根側を削り斜面側にこの土砂を盛土している。(平面図のスクリーン部分が土を盛って構築された部分である。残りの曲輪部分は総て地山を削って平面を作っている部分である。)曲輪及び腰曲輪に盛られた土砂は図の様に斜面側に盛られる。斜面側は急傾斜に仕上げ、斜面に対して防御の役割をすると共に、曲輪の空間を確保する役割をしている。中尾城跡の場合はこれまで記述してきたように、防御的側面よりも、曲輪空間の確保・曲輪の軸(ライン)の統一が主要な目的であったと思われる。広島県の恵下山城・三ツ城などでもこのように尾根地形を利用して曲輪空間を確保するのにやはり土砂を曲輪縁辺部に盛っている。そして、部分的に石組みを用いて曲輪の地盤強化に努めており、山城の構築では土砂の

切り盛りは通常の構築方法であったと考えられる。④曲輪の空間確保と防衛施設が整った段階で次に曲輪内の建物などを構築する。これに伴って先に粗く造成されたと思われる曲輪内に建物など内部施設の配置に伴って、細かい手直しがおこなわれている。この時、土木作業で補えなかった防衛箇所も、槽などを利用して補われたと考えられる。

このような、切り盛りの構築は山城が立地する、尾根という場所から考えて、一般的に行われていたと考えられる。そしてこのような、切り盛りは、山城の遷地段階で、まとまった縄張りや、全体的に軸線の統一をとるなど城郭全体のバランスを考えた築城を行う場合、かなりの労力を費やさなければならない。このことを思うと、発達した城郭・大規模な城郭ほど小規模の遺構に比べ加工度が増大してゆくことは明白である。堀切や土塁の大きさ、石垣の規模から、加工度や土量は比較できる。しかし、前述したように特徴のない各地の山城を厳密に比較するには曲輪自体の加工度を精密に比較してゆく必要がある。これらの山城では、遺物も少なく、曲輪や堀切・土塁などはあっても、曲輪内に遺構が検出されないことが多く比較研究が表面的にはなかなか困難である。そして比較の材料が少なく研究の課題が城郭の細かな観察からそれてしまうきらいがある。また天正年間前後の城郭との比較に置いても、単に規模が小さく、単純な遺構というだけでなく具体的な労力の差を比較できるはずである。

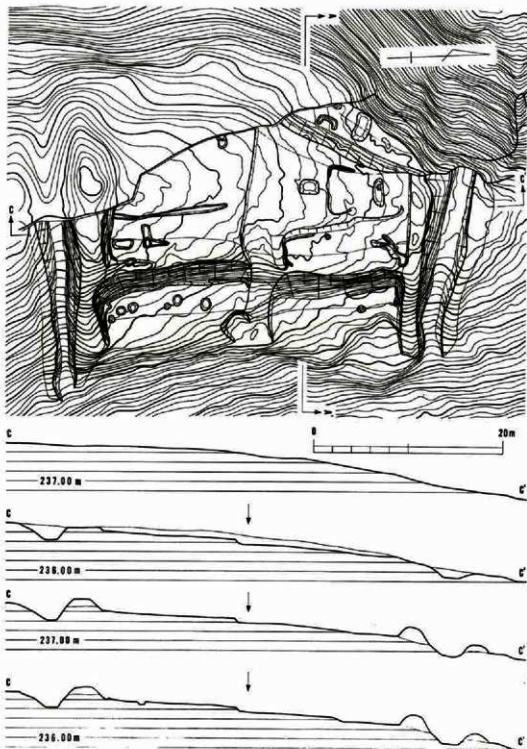
また、発掘調査においても、曲輪内部の遺構検出が中心となって、曲輪周辺や構築順序を復原している調査は少ない。このような傾向がさらに発展して、曲輪内部のみを調査して何も検出されないため、特色がなく小規模な山城として簡単に片づけられている遺構すらある。

果内で土塁・堀切や曲輪の遺構を検証できた山城は、同じ三田市内の釜屋城の調査がある。この城では、土塁を盛るのに曲輪内側の土砂を使用している事が、土塁の断ち割りからわかっている。この城は前述のように天正年間に近い時期の遺構と考えられるが、中尾城跡と異なって、曲輪内部の面確保には重点を置かず、外郭を囲む、障壁的な構造の城郭である。

この他には前述したとおり、広島県などで曲輪の地盤確保や建物の造成などに、小礫を使用し土留程度であるが石組みを構築していた。

しかし、曲輪の平坦面を構築するためにどの部分からどの部分をどの程度加工したかについて言及した報告はほとんど見当たらない。中尾城跡の場合も第1曲輪斜面・東第1曲輪斜面など断ち割りが不十分であった点が反省される。また、検出された遺構の斜面は盛り土するのであるから急斜面となるはずである。この斜面は下が曲輪の場合は変換点がしっかりとつかめるが、城外と接する斜面についても急地形の傾斜のうえに乗るのであるからはっきりと復原すればその変換点が見えてくるはずである。復原図でいえば、断面の盛り土と地山の斜面側の境から曲輪面にかけてである。今後はこのような視点の復原も行って行く必要がある。

さらに斜面の傾斜角度や、曲輪間の比高差の比較も今後は検討しなければならない。



挿圖125 中尾城跡築城過程（縦断面）

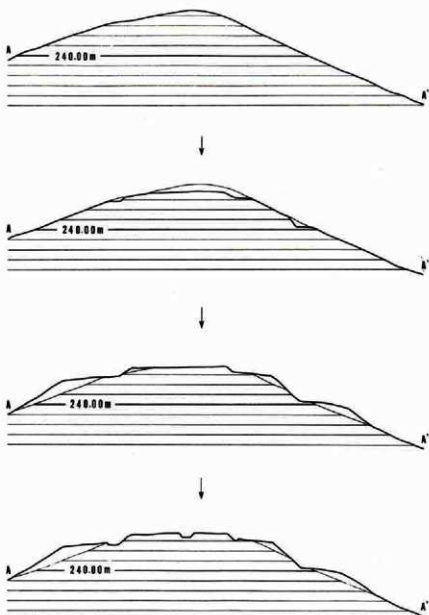


插图126 中尾城跡築城過程 (断面図)



## 2. 山城研究へ

われわれが“山城を掘る”にあたって、何を掘るかについて、色々の調査方法があり、そして結果を導き出せるのである。

近畿自動車道舞鶴線において内場山城跡、中尾城跡を掘ることとなったのであるが、今までの調査諸例などの検討、山城研究の沿革史的検討、山城をどういう範囲で考古学の調査研究の対象とするのか、遺構をどう掘り、どう理解するのか、出土遺物は稀少であり、生活様式の復原や用途論には至らないものとされ、むしろ考古学的知見から得るものより、軍学的な山城研究や縄張り論などの近世城郭研究から型上する観点からの中世山城研究が主流であった。

われわれの前にある中尾城跡は、こういった観点から一歩進め、新しい山城研究の可能性を示す歴史資料を提示してくれた。山城の約 $\frac{1}{5}$ を掘ることができ、曲輪・堀切・土塁の区画を明確にし、土壌・建物跡・溝の種々の遺構と遺物の総合から空間の復原を試みた。ただし、建物跡の詳細については、礎石建物を主としたものであろうかと復原するにとどまる。

また、旧来の山城研究の中心であった歴史的背景に迫る文献の検索ができず、山城と館・村落との関係についても、周辺のはげ整備事業等に伴う遺跡発掘調査が進展する中で、同時代性を示す遺跡の報告はなく、中尾城跡のみが孤立している状況である。

とにかく、今後、兵庫県下の山城研究に果す役割、特に山城考古学研究に負うところ大であるとともに、丹波境などにみる地域研究をすすめるなど、報告書刊行後の文書、絵図等の文献研究などの補完に務め、地域史に根づいた山城考古学的研究の確立をめざしたい。

ところで、展望の1で述べられた山城構築方法についての論点も、山城土木工事についての復原作業を通じて、山城構築史の中での位置付けを行い、その山城変遷史を検討することとなり、山城考古学研究の一視点となりうるもので、古い山城から新しい山城(大土塁→石垣積み)への過渡期的なもの位置付けができる。土木技術の進歩から導き出されたもので、空間的には、曲輪間の空間使用の相違性の強まる、新しい山城への前段階となる。

山城を掘る考古学的な視点から、新しい山城研究の展開を期待するもので、われわれとしても、次に報告予定の内場山城跡、初田館跡といった近畿自動車道舞鶴線関連の中世城跡発掘調査報告に反映させていきたいものである。

## 付 載

1. 中尾城跡出土中・近世陶器の胎土分析と産地推定

……三 辻 利 一

2. 中尾城跡から出土した炭化種実の同定

……笠 原 安 夫・藤 沢 浅

3. 中尾城跡から出土した植物炭化物の種類

……嶋 倉 巳三郎

# 1. 中尾城跡出土中・近世陶器の胎土分析と産地推定

奈良教育大学

三辻利一

## 1) はじめに

筆者が中・近世陶器を蛍光X線分析するのははじめてである。しかし、窯跡が残っている限り、須恵器と同様にして産地推定はできるものと考えられる。そのため、中尾城周辺にある三本峠北窯（中世）、下相野釜屋（近世）から出土した中・近世陶器片を分析し、その相互識別の可能性を検討することから始めることにした。引き続き、中尾城跡出土中世陶器が地元のどちらの窯に対応するかを調べた。

## 2) 分析方法

須恵器の場合と同様、まず、試料の表面を研磨したのち、200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は15トンの圧力を加えてプレスし、厚さ3～5mmのコイン状の蛍光X線分析用試料を調製した。分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1の分析値で標準化した値で表示した。

## 3) 分析結果

図1には下相野釜屋窯土近世陶器の、また、図2には三本峠北窯出土中世陶器のRb-Sr分布図を示す。両窯ともそれぞれまとまって分布しているが、三本峠北窯のものはRb量がやや多いことがわかる。両窯の相互識別の可能性を検討するため、K、Ca、Rb、Srの4因子を使用し、両群の重心からのマハラノビスの汎距離を計算し、 $D_{(1)}^2-D_{(2)}^2$ 分布図を作成したのが図3である。 $D_{(1)}$ 、 $D_{(2)}$ はそれぞれ下相野釜屋窯、三本峠北窯の重心からのマハラノビスの汎距離である。筆者の方法では $D_{(1)}^2 < 10$ 、 $D_{(2)}^2 > 10$ が下相野釜屋領域であり、 $D_{(1)}^2 > 10$ 、 $D_{(2)}^2 < 10$ が三本峠北領域である。そして、 $D_{(1)}^2 < 10$ 、 $D_{(2)}^2 < 10$ は両者の相互識別が難しい不明領域である。図3より下相野釜屋窯のものの過半数が下相野釜屋領域に分布するものの、三本峠北窯のものの過半数は不明領域内に分布し、両者の相互識別は不完全であることを示している。もっとも、このことは図1、2のRb-Sr分布図からも予想されることである。しかし、三本峠北窯のものの中で、下相野釜屋領域に分布しているものはなく、相互識別は不完全ながらもできる場合があることを示している。

図4には中尾城跡から出土した中・近世陶器のRb-Sr分布図を示す。過半数のものは下相野釜屋領域に分布し、残りの大部分は両領域が重複する領域に分布した。これらがいずれの群に帰属するかを決めるためには、判別分析を適用しなければならない。K、Ca、Rb、Srの4因子を使って両群の重心からのマハラノビスの汎距離を計算し、作成した $D_{(1)}^2-D_{(2)}^2$ 分

図1 下相野釜屋窟出土近世陶器のRb-Sr分布図

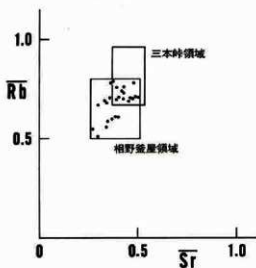


図2 三本峠北窟出土中世陶器のRb-Sr分布図

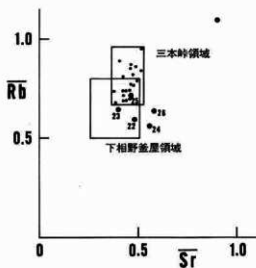


図3 三本峠北窟と下相野釜屋窟の中・近世陶器の相互識別

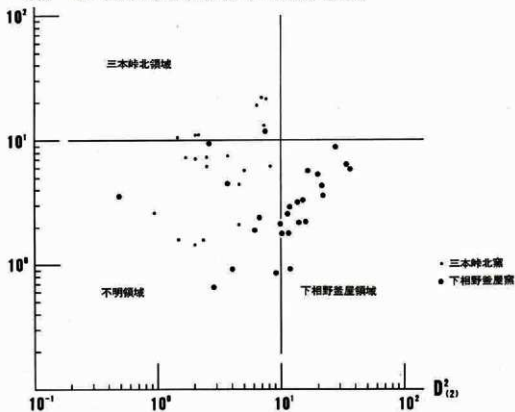


図4 中尾城跡出土中・近世陶器のRb-Sr分布図

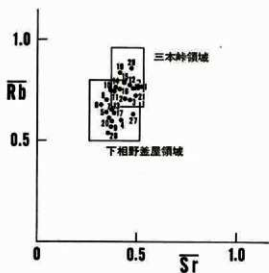
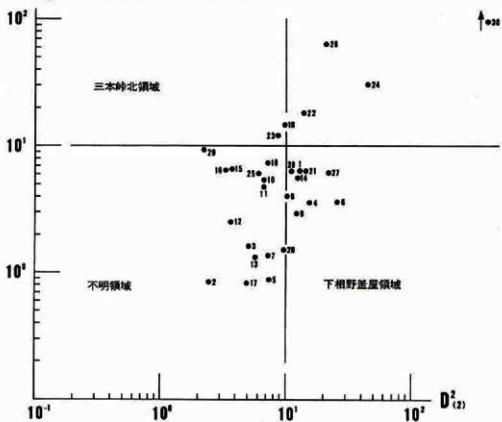


図5 中尾城跡出土中・近世陶器の産地推定



布図を図5に示す。この結果、下相野釜屋領域に分布するNo1、4、6、8、9、14、20、21、27、28、の10点は下相野釜屋窯産と推定される。また、No2、3、5、7、13、17の6点も図3と比較すると、下相野釜屋窯産の可能性が大きいと考えられる。一方、No10、11、15、16、18、19、23、29の8点は三本峠北窯産の可能性をもつ。No12は地元産であることは間違いないが、いずれに帰属するかは判別できない。No22、24、26、30の4点は地元産ではなく外部からの搬入品と推定される。No22、23、24、25、26の4点は考古学的器形観察から備前焼と推定されているものである。これらのRb-Sr分布図は図2に示してある。No24、26の2点は明やかに両領域をすれるが、No22、23、25の3点は一応、両領域内に分布している。あるいは備前焼片を多数分析すると、この領域にまで拡がって分布するのかもしれない。ここでは備前焼の分析データが十分に出ていないので、統計計算はしなかった。

No30は高川古墳群出土の丹波焼（中世）であり、これは明らかに胎土は異なる。年代的には下相野釜屋窯や三本峠北窯とは異なるので、それ以外に産地を求めなければならない。しかし、その産地は目下のところ特定できない。

以上の結果、高川古墳群の中世陶器と備前焼と考古学的に推定されるものを除く他のすての中・近世陶器は下相野釜屋窯産か、三本峠北窯産の地元産ということになる。しかし、その詳細については、今後、この地域にある他の窯跡出土丹波焼（中、近世）の胎土分析の結果をまとめなければならない。今後の問題である。今回の分析については、表1にまとめておく。

胎土分析による中世陶器の産地推定法は目下、試運転中であり、方法としては未確立である。ここで推定された結果は考古学的にも再度、吟味することが必要である。

中尾城出土 中近世丹波焼の分析結果

試料番号	図番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
1	B91	播鉢	0.575	0.229	1.28	0.772	0.521	下相野釜屋窯
2	B95	播鉢	0.554	0.198	1.22	0.705	0.436	下相野釜屋窯 (?)
3	B28	甕	0.553	0.210	1.22	0.699	0.460	下相野釜屋窯 (?)
4	B10	壺	0.540	0.175	1.02	0.596	0.419	下相野釜屋窯
5	B21	壺	0.511	0.142	1.18	0.643	0.354	下相野釜屋窯 (?)
6	B11	壺	0.593	0.105	1.50	0.683	0.319	下相野釜屋窯
7	B50	徳利	0.505	0.162	1.09	0.621	0.360	下相野釜屋窯 (?)
8	B32	甕	0.548	0.106	1.12	0.700	0.345	下相野釜屋窯
9	B97	播鉢	0.491	0.140	1.13	0.567	0.367	下相野釜屋窯
10	B82	播鉢	0.545	0.126	1.33	0.746	0.365	三本峠北窯
11	B88	播鉢	0.572	0.124	1.38	0.754	0.375	三本峠北窯
12	B105	播鉢	0.593	0.193	1.22	0.775	0.461	三本峠北窯 or 下相野釜屋窯
13	B106	播鉢	0.500	0.155	1.30	0.646	0.368	下相野釜屋窯 (?)
14	B103	控鉢	0.615	0.123	1.26	0.759	0.394	下相野釜屋窯
15	B58	小甕	0.576	0.163	1.12	0.786	0.444	三本峠北窯
16	B6	壺	0.544	0.150	1.12	0.758	0.413	三本峠北窯
17	B117	壺	0.512	0.167	1.71	0.643	0.379	下相野釜屋窯 (?)
18	B13	壺	0.526	0.219	1.41	0.760	0.483	三本峠北窯
19	B34	小甕	0.538	0.187	1.68	0.836	0.408	三本峠北窯
20	B24	甕	0.512	0.144	1.17	0.600	0.371	下相野釜屋窯
21	B18	甕	0.536	0.207	1.21	0.720	0.493	下相野釜屋窯
27		播鉢	0.559	0.220	1.68	0.627	0.483	下相野釜屋窯
28		播鉢	0.484	0.182	2.41	0.544	0.362	下相野釜屋窯
29	C2	播鉢	0.612	0.242	1.56	0.857	0.474	三本峠北窯
30	高川古墳群	壺	0.625	0.073	2.21	1.49	0.608	産地不明

(分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で示す)

2.と3.は公開していません



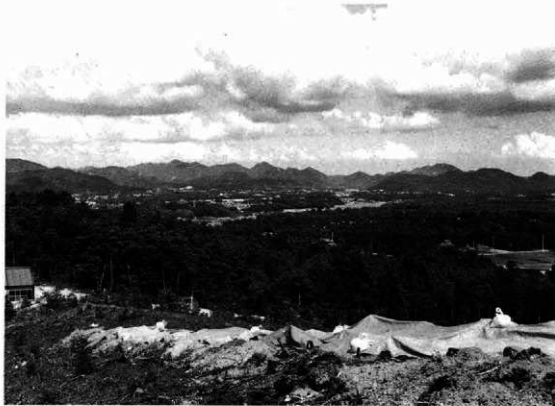
# 圖 版



(上、北から 中、東から 下、南から)



(上、北から 中、東から 下、南から)



三田市街への眺望



相野への眺望



(上、遺構検出 中、土壌を掘る 下、土壘断削)



トレンチと土層



3 T 土層



I Tの中世土器・鉄製品



I Tの銅銭

図版七 曲輪全景



南から



東谷底から





第1曲輪 第2曲輪



東第1層曲輪・東第2層曲輪



第2曲輪・第1曲輪



東第2腰曲輪・東第1腰曲輪

図版一〇 第一曲輪溝





土壇 1、2



土壇 1 の土層

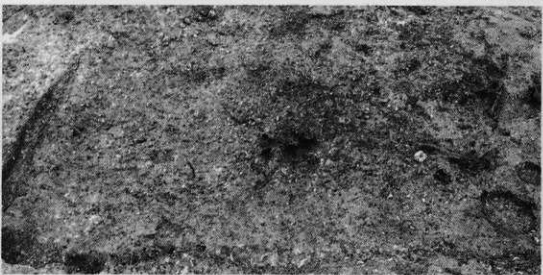


土壇 1 の遺物



上、土壇3上層  
中、柱穴  
下、同鉄

上、土壇3下層  
中、溝  
下、火竈



上、遺物出土狀況 中、遺物 下、遺構細部



上、土層と遺物 中、遺物 下、遺構の細部



建物 4



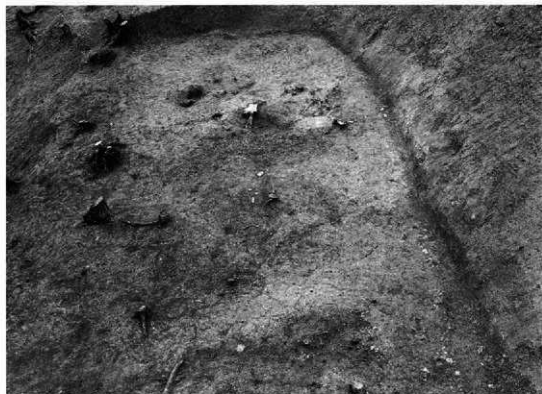
溝と石臼



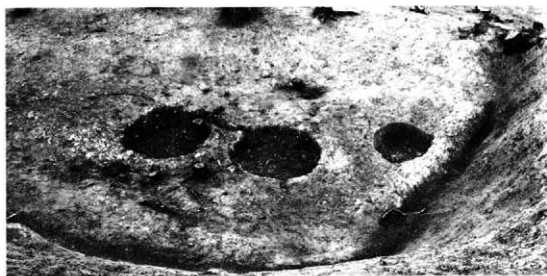
図版一六 虎口と礎石



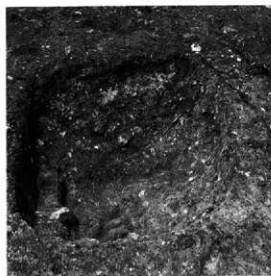
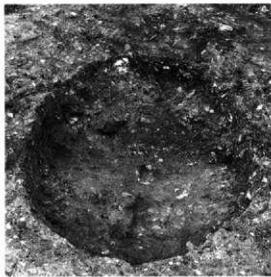
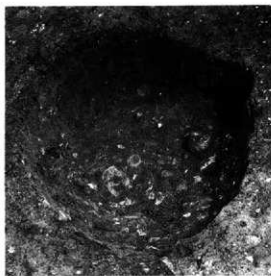
図版一七 東第一腰曲輪検出状況



茶甕と丹波焼



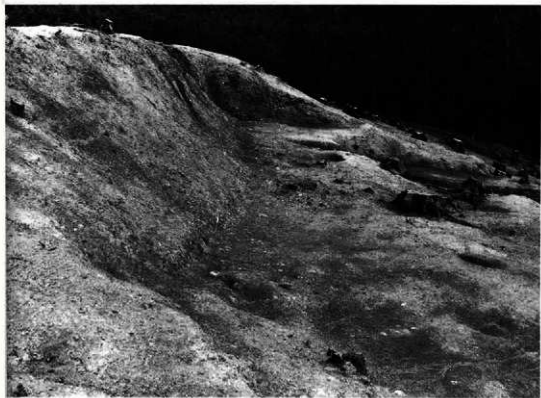
上、周溝と土壇群 中、土壇6の土層 下、周溝の土層



上左右、土壌1 中左右、土壌5 下左、土壌4 下右、土壌6



虎口



東第二腰曲輪



上、全景 中、土壇3上層と遺物 下、土壇3



土層



遺物出土状況



遺物出土状況



土壇 I





下から



上から



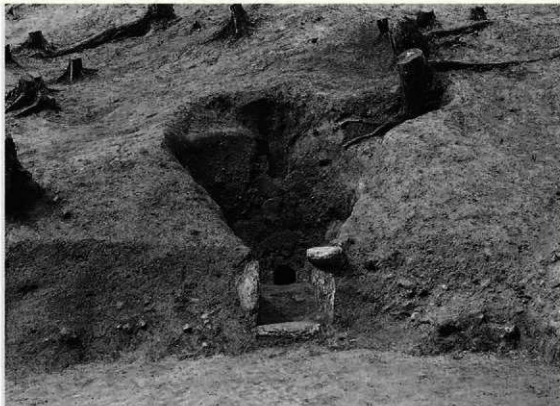
上、南堀切と土壘 中、土壘の積み土 下、堀切の土層



上、北堀切と土塁 中、堀切を下から望む 下、土塁の積み土



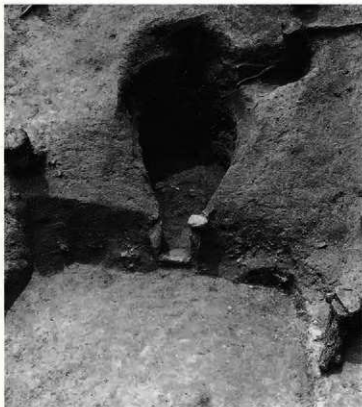
上・中、第2曲輪 下、東第2腰曲輪



焚口部からの全景



煙道部からの全景



窯体と前庭部



焚口部細部



丹波焼 播鉢・德利・小壺、小瓶、備前焼 德利



丹波焼 壺・甕















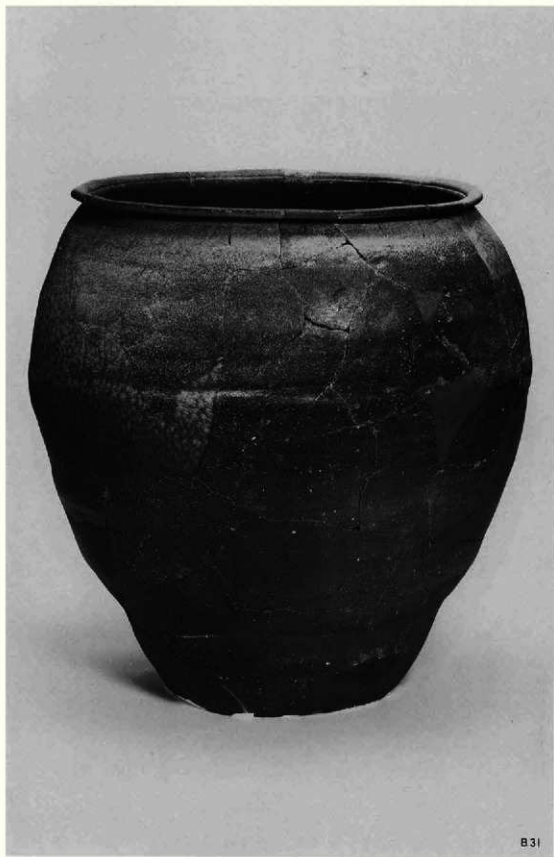




B 24



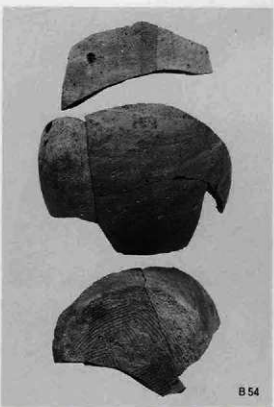
B 27



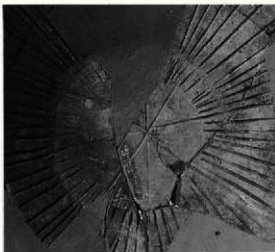








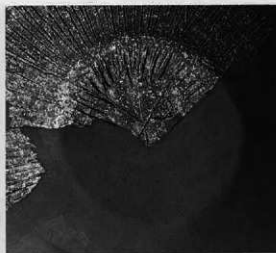




B 80



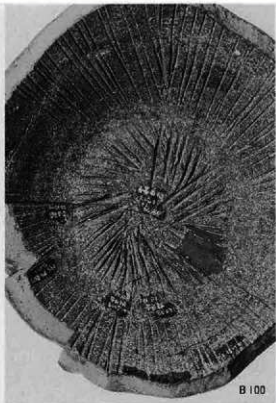
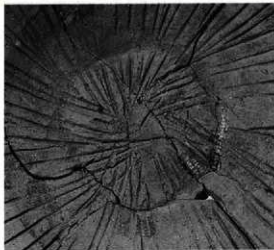
B 82



B 81



B 84



B 91

B 100

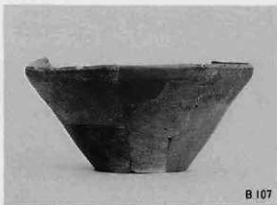
撞鉢 B 91・B 100



B 102

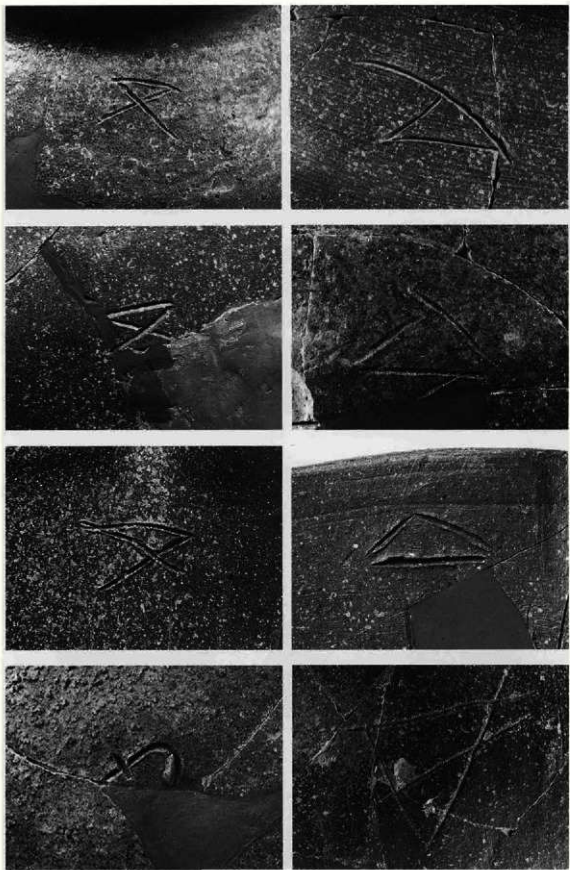


捏鉢 B 102





B 89	B 110
B 111	B 97
B 90	B 91
B 109	



左上から B 55、B 33、B 112、B 16  
右上から B 29、B 2、B 84、B 1





B 67



B 68



B 70



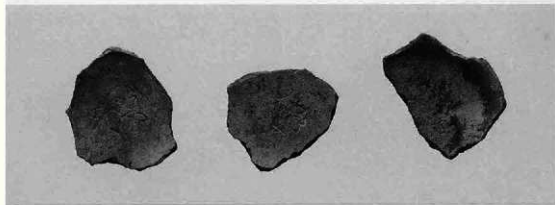
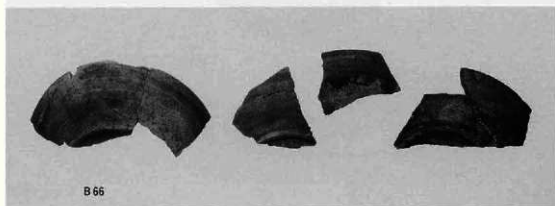
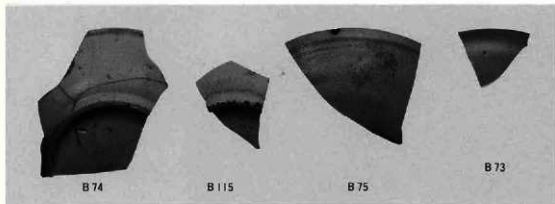
B 72

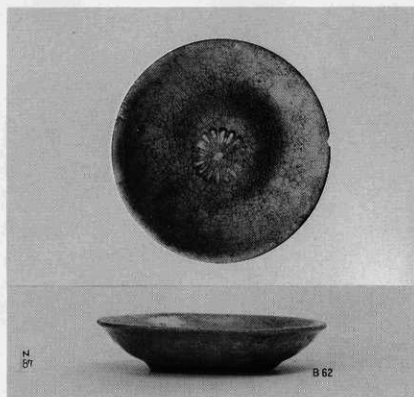


B 71

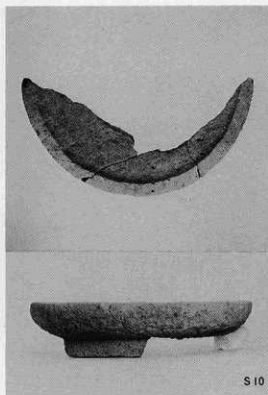


B 69

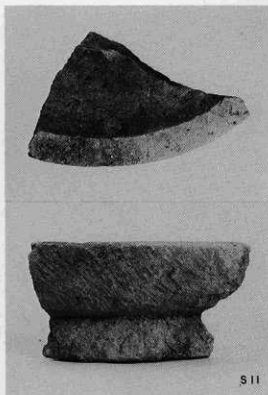


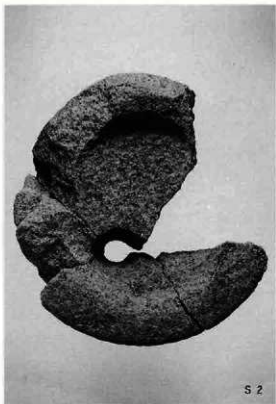


瀬戸・美濃焼 皿

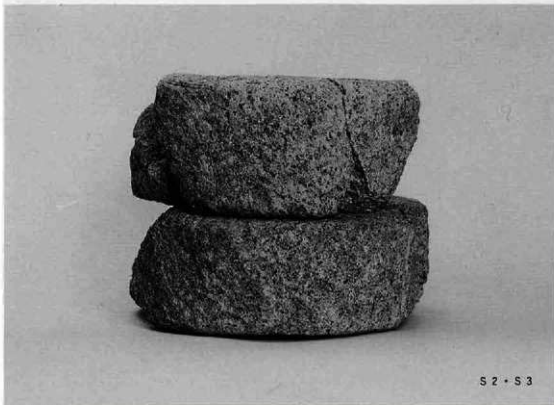


茶磨

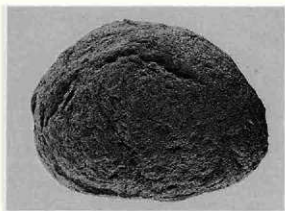




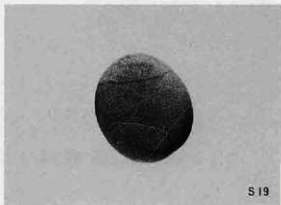
石臼



石臼組合せ



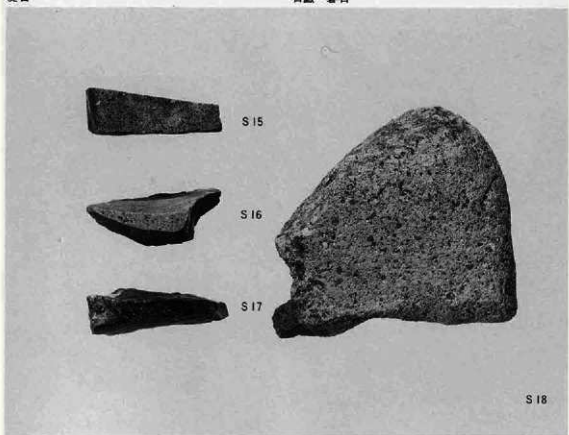
S 1



S 19

礮石

石鏃・蕃石

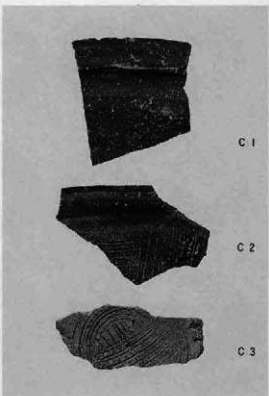
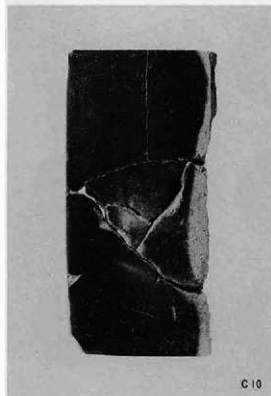


S 18

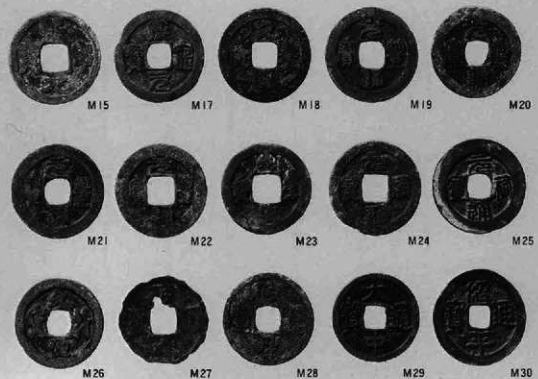
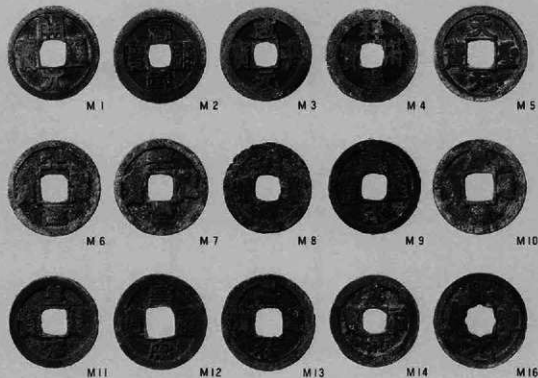
砥石・石皿

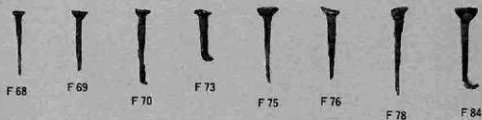
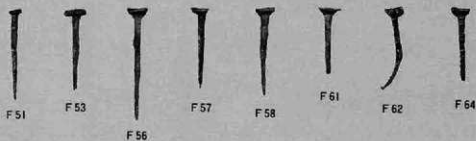
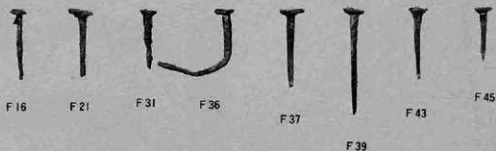


須恵器、甌、猪口、キセル

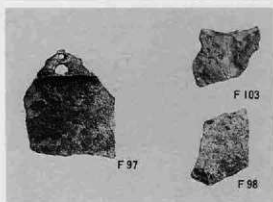
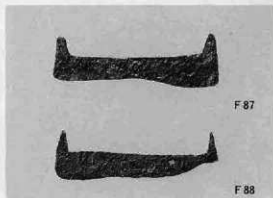
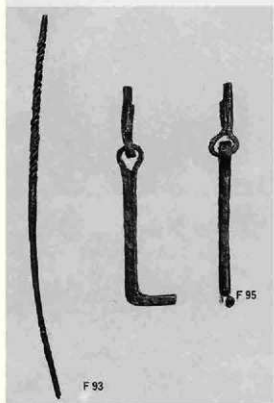
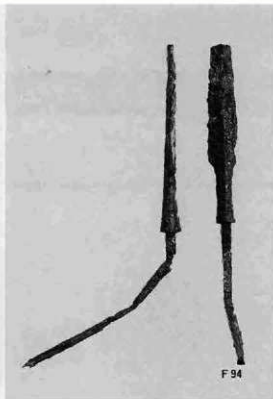
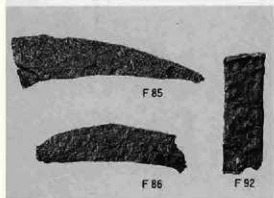
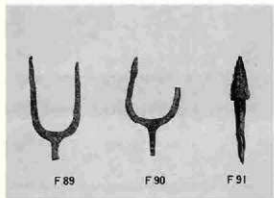


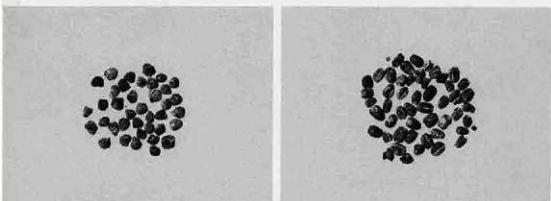
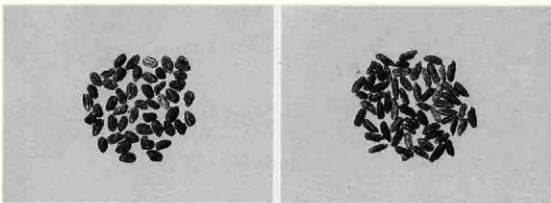
瓦、摺鉢



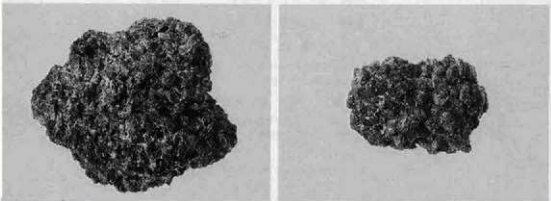
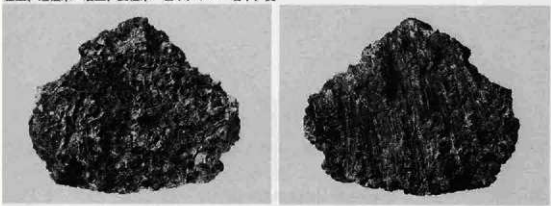








左上、短粒米 右上、長粒米 左下、ソバ 右下、麦



炭化米粒塊

兵庫県文化財調査報告書 第67冊

中尾城跡

—近畿自動車道舞鶴線開保埋蔵文化財調査報告書Ⅴ—

平成元年 3月20日 印刷

平成元年 3月31日 発行

編集・発行 兵庫教育委員会

神戸市中央区下山手通5丁目10-1  
〒650 TEL(078)341-7711

印刷・製本 菱三印刷株式会社

神戸市兵庫区大開通2丁目2-11  
〒652 TEL(078)576-3961